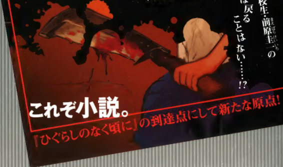
ISBN978-4-06-283637-1
C0093 ¥980E (0)
9784062836371
1920093009805
定価：本体980円(税別)
講談社

かつてない恐怖、そして来るべき未来の物語の可能性を斬新に詰め込み、
あらゆるメディアを席捲したゼロ年代の記念碑的一大ムーブメント、
『ひぐらしのなく頃に』の最終形態は、今ここに
「小説」として結晶する——。

昭和五十八年。
のどかな雛見沢村に伝わる秘祭・綿流しに潜む
決して犯してはならなかった禁忌に触れたとき、転校生・前原圭一の
〝日常〟は〝非日常〟に一瞬にして染まり、二度とは戻る
ことはない……!?



これぞ小説。
『ひぐらしのなく頃に』の到達点にして新たな原点!

KODANSHA BOX
ひぐらしのなく頃に
第一話～鬼隠し編～(上)
竜騎士07
KODANSHA
UA-01

KODANSHA BOX
第一話～鬼隠し編～(上)



ひぐらしのなく頃に
07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa.
"WHEN THEY CRY."
竜騎士07
Illustration／ともひ

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に

第一話～鬼隠し編～（上）

竜騎士07

Illustration／ともひ

どうか嘆かないで。

世界があなたを許さなくても、私はあなたを許します。

どうか嘆かないで。

あなたが世界を許さなくても、私はあなたを許します。

だから教えてください。

あなたはどうしたら、私を許してくれますか？

Frederica Bernkastel

■贈る花束

どうせ引き裂かれるなら、身を引き裂かれる方がはるかにマシだと思った。
信じてた。
……いや、信じてる。
今この瞬間だって、信じてる。
でも……薄々は気付いてる。
信じたいのは、認めたくないだけだからだ。
自分に言い聞かせるような、そんな涙声が…もうたまらなく馬鹿馬鹿しくて……。さらなる涙が…顔をもっとぐしゃぐしゃぐしゃにする…。

機械的に繰り返されていたそれはようやく収まり、とても静かになった。
ひぐらしの声だけが…いやに騒がしい。
なのに、…彼女のそれはまだ聞こえる気がする。
…聞こえるはずはない。

彼女はもう、言うのをやめているのだから。

泣いているのは俺だけだった。

彼女は泣きもしなかった。

彼女がそれを繰り返し口にしていた時も、表情どころか感情もなかった。

彼女に、俺のために流す涙がないのなら、俺にだって。…彼女らのために流す涙はいらないはずなのだ。

それなのに……痛み、目を潤ませてしまうのは……どうして？

それでも引き裂かれてないと、……信じていたいから。

もう充分だろ？

内なる、もうひとりの自分がやさしく語りかける…。

俺はもう充分に心を痛めたさ。…そして何度も、その痛む心を捨てるべきかどうか迷ったんだ。

だけど俺は…頑なに、捨てることを拒んだんじゃないか。

捨てれば…もっと心が楽になれる…。それを知りながらも、俺は信じることを選んだんじゃ

ないか。
その辛かった苦労は、きっと俺にしかわからないし、俺にしかねぎらえない。
なぁ俺。…俺は充分に頑張った。……俺がそれを認めてやる。だから。……もう楽になってもいいんじゃないか……？
それに……捨てるんじゃない。
彼女と一緒に、置いていくんだ。…花を手向けるように。
さぁ。……心を落ち着けて…。もう右腕が痺れているだろうけど。……頑張って振り上げよう。

そして、ひとつ振る度に忘れるんだ。

親切が、うれしかった。
愛らしい笑顔がうれしかった。
頭を撫でるのが、好きだった。
そんな君がはにかむのが、好きだった。

これで最後だから。これを振り下ろせば忘れてしまうのだから。

君に贈(おく)る、…………俺からの、最初で最後の花束。

ひょっとすると、…俺は君の事が、

………………………好きだった。

その言葉と共に、もう一度だけ振り下ろす。

…そして俺は、真っ赤に滴(したた)る金属バットを床に落とした……。

第一話～鬼隠し編～（上）

ひぐらしのなく頃に

07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa
WHEN THEY CRY

KODANSHA BOX

竜騎士07
Illustration ともひ

■昭和五十八年　初夏

…誰かが、ずっと謝っている気がした。
彼女は何を謝っているのだろう。
それに聞き耳を立てるのは悪い気がしたので、意識的に聞かないようにする。

親類の葬儀のために戻った、久しぶりの都会だった。
つい先月まで住んでいたにもかかわらず、都会の賑やかさに圧倒された。
高層ビルに何車線もの道路。歌うように騒がしい横断歩道のメロディ。駅前での騒々しい選挙演説すらも今では懐かしかった。
だが、今、住んでいる土地にはそんな賑やかなものはない。
あるのはセミの声と清流のせせらぎ。そして、ひぐらしの声。そんな静けさに寂しさでなく、安らぎを感じ始めたのは最近だ。
確かに今住む土地には何もない。
気の利いたハンバーガー屋はおろか、自動販売機すらない。レコード屋もないし、レストラ

ンもないし、ゲームセンターもない。アイスクリーム屋なんてもってのほかだ。最寄りの町まで行けばあるにはあるが、自転車で一時間もかかる。

だが、考えてみればそれに不便を感じる必要はなかった。

前の町には確かにレコード屋もゲームセンターもアイスクリーム屋もあったが、別にそれらを頻繁に利用していたわけじゃない。アイスクリーム屋に至っては、十年も住みながらついに一度も入ることはなかったのだから。…一度くらいは食べに行けばよかった。今更ながらちょっと後悔。

…誰かが、まだ謝り続けている。

彼女は誰に謝っているのだろう。これだけ謝っているのだから、もう許してやればいいのに。彼女だって、こんなにも謝り続けることはないはずだ。いつまでも彼女を許そうとしない誰かに、俺は少し苛立ちを覚えた。

どんな過ちだって、許されないことはないはずだ。取り返せないミスなんかない。次から気をつければいい。

…それでも彼女は謝り続けている。

では…取り返しのつかない過ちを犯してしまったのだろうか？

一体彼女が何を犯したのか知らないが、取り返しがつかないものなら、なおのこと許してや

るべきだ。彼女がいくら謝ったって、起コッテシマッタコトはどうにもならないのだから…。

それでも彼女は、こんなにもみじめな声で謝り続けている…。

なあ、彼女に謝られている誰かさんよ。もういい加減に彼女を許してやれよ。こんなにも…みじめな声で謝っているんだから……。

「圭一、そろそろ着くぞ。起きなさい。」

親父に小突かれ、俺はようやくまどろみから目を覚ます。列車は速度を落とし始めていて、車内の旅客たちは網棚の上から各自の荷物を下ろし始めていた。

どうやら、列車が終点に着いたようだった。

新幹線やら電車やらを乗り継ぎ数時間。

窓の外の風景は、半日前までいた都会と同じ国であることを、いや、同じ時代であることすら疑わせる。

ここからさらに自家用車に乗り換えて三十分。そこが今の俺の住む土地、雛見沢だ。


昭和58年
水無月
6 JUNE
1 2 3 4
5 6 7 8 9 10 11
12 13 14 15 16 17 18
19 20 21 22 23 24 25
26 27 28 29 30
注意一秒　火事一生
出かける前の　火の元点検
興富石油店 電話 (X)XXXX




6月10日(金)

夏を迎えても、雛見沢の朝の空気は切るように冷たい。その代わり、肺の底まで存分に吸いこめるくらい澄んでいた。

窓をがらりと開ければそこは一面の緑。木々以外何もない。お隣さんの家だってずーっと向こうだ。だからきっとこの風景と朝の空気は俺だけのひとり占め。

もう一度大きく吸いこんで、肺いっぱいに満たしてみる。空気にも味があることを、この雛見沢に来て初めて知った。

手早く登校の準備を済ませ、朝食のために階下へ降りる。お袋のみで親父の姿はなかった。おそらく、朝方まで仕事に精を出していたのだろう。

親父は画家などという風変わりな職業をやっている。これが何とも呑気な商売なのだ。好きな時に起き、好きな時に寝、好きな時に仕事をしている。

その気楽さがうらやましくて小学校の時、将来なりたい職業に画家と書いたら父は大層喜んだ。…もちろんラクそうだったから、なんてのは内緒だが。

お袋が食卓に朝食を並べてくれる。

6月10日（金）

食卓には、ノリに漬物に生卵に焼鮭。我が母ながら恐ろしい。完璧な、一分の隙もない典型的な日本人の朝食だった。スケジュールという言葉と無縁な親父とは逆に、お袋はソツがない。押えるべきものは確実に押えてくれる。

「こっちに引っ越してきてから、圭一が早起きになって嬉しいわね。」

「早起きしないと朝飯を食いそびれるんだよ。」

よい子ぶりを褒められ、ちょっと悪い子ぶった言い方をする自分がかわいかった。

「ご飯はいっぱい？　それとも半分くらいでいい？」

「山盛り。」

湯気を立てるご飯を、まずはノリで味わう。それからとき卵をぶっ掛ける。喉ごしのよくなったご飯の合間に、漬物の歯ごたえを味わう。うん、今日も朝食がうまい。そして今日も体調は絶好調のようだ。

「こっちに引っ越してきてから、圭一が朝食を欠かさないんで嬉しいわね。」

お袋は俺の見事な食いっぷりを見ながら柔らかに微笑んでいた。朝飯を食べるだけで微笑まれてはくすぐったいことこの上ない。…だが、かつてのことを思えば、お袋がこの程度のことで感慨深くなるのも納得できなくはない。

都会に住んでいた頃は朝の寝起きは悪かった。遅刻ぎりぎりまで寝ていたし、朝食だってほ

とんど取らなかった。
それは、本当に下らないささやかな反抗。
塾通いを強要する親に対し、毎朝用意してくれる朝食をボイコットすることだけが、自分にできる無言の反抗のつもりだったのかもしれない。
…今にして思えば、それは青臭い反抗期というやつだったのだろう。
毎朝早起きして作ってくれる朝飯を、一瞥すらせずないがしろにする昔の俺。同じ家に住んでたらひっぱたいているだろうな…！
お袋が時計を気にすると、にやにやと笑って俺を急かした。
「そろそろレナちゃんと待ち合わせの時間じゃない？　急いで急いで。」
お袋は息子が女の子と登校するというシチュエーションを楽しんでいるらしい。俺としては、いい年をした男が女の子と一緒に登校なんてのは照れ臭いだけなのだが…。
でも、確かに毎日毎日、律儀に待っていてくれるクラスメートを無闇に待たせるのも悪い。
…ってゆーか、レナのヤツ、毎朝何時からあそこで待ってるんだ…？
最後に味噌汁をがーっと喉の奥へ流しこみ、玄関へ駆けていく。
「レナちゃんにお漬物ありがとうって伝えてね～！」
そういや、市販の漬物じゃなかったよな。なるほど、レナの家からのもらい物だったか。

「あいよ！　伝えとくぜ！」

■竜宮レナ

「圭一く〜ん！　おっはよ〜ぅ！」
朝の爽やかさそのままの快活な挨拶が響いてきた。
主人を見つけた犬が尻尾を振るみたいに、上機嫌にぶんぶん腕を振って挨拶してくれる彼女がレナだ。
「相変わらず早えなー。たまにはのんびり朝寝坊したっていいんだぜ。」
「お寝坊したら圭一くんを待たせちゃうじゃない。」
「そん時ゃ置いてく。」
「け、圭一くん冷たい。いつも待っててあげてるのにー…。」
「さくさく置いてく。きりきり置いてく。」
「どうして冷たいんだろ。…だろ？」
レナがちょっぴり困った表情をする。人の言葉に、いちいち一喜一憂する本当に楽しいヤツだ。

「嘘。ちゃんと待ってるよ。」
その一言に、レナは全身の緊張を解いたようだった。顔が一気に紅潮する。
「…わ、…あ、ありがと…。」
「レナが来るまでずーっと待ってる。いつまでも。」
「……わわ、わ……ず、ずーっと……。」
レナが真っ赤になって頭から湯気をあげ思考をショートさせている。
こいつはこっち系のネタにとにかく弱いのだ。これだけからかい甲斐のあるヤツもめずらしい。
「レナはロマンスものの文庫本は読んだことあるか…？」
「…え……あ、…ないよ。よ、読んだ事ない。」
その反応から察するに、興味は津々なのだが恥ずかしくて買えない、ということか。読んだら大変だ。赤面して卒倒するんだろうな。
「そうそう、お袋から伝言。漬物サンキューでしたって。」
「う、うぅん、どういたしまして〜。どうだった？　しょっぱくなかったかな？」
「…その前に聞きたい。あの漬物を漬けたのはレナか？　レナのお母さんか？」
「え？　…え？　何で聞くんだろ？　しょ、しょっぱかった…？」

21

６月１０日（金）

今度は一転、おろおろわたわたする。その反応が面白くて、ついついからかってしまう。

「レナか？　レナのお母さんか？」

「…な、何で作った人、聞くんだろ？　…だろ⁉」

「どっちが作ったかで感想が著しく変わる。」

「……え、ええ…⁉」

調理過程を思い返し、あせあせと指を折りながら塩の分量を思い出しているようだった。もうその仕草だけで作ったのがレナ本人であることがわかる。

漬け方をどこかで致命的に間違ってしまったのだろうか？　どこだろうか、あそこだろうかとうろたえる姿がとても微笑ましくて、ついついからかってしまうのだ。

別にいじめているつもりはないのだが…。可愛い子についつい意地悪をしてみたくなる男心というヤツだろうか。

レナは何度か声を飲みこんでからおずおずと口を開けた。

「……レ、レナだけど…。」

「うまかった。」

「え？」

「前回に続きなかなかだったぜ。飯との相性は最高だった。」

また赤面する。ぽーっとした感じで。
つくづく、本当にからかい甲斐のあるヤツだ。…レナが悪い男にだまされないことを願わずにはいられない。がんばれよレナ。俺が人並みに鍛え上げてやるからな！　…そう勝手に決心する。
俺は、まだ漬物に自信が持てずにいるレナに、もう一度うまかったと念を押してやる。それでようやくレナは、ちょっとからかわれただけであることに気付くのだった。
「それより、早く行こうぜ！　魅音を待たせるとあいつ、うるさいぞ。」
「は、はぅ！　そうだね。早く行こ！」
この、すぐ真っ赤になってぽーっとするヘンなヤツは竜宮レナ。
まだ知り合ってひと月も経っていないが、変わっているのは名前だけじゃないことはよくわかると思う。

■園崎魅音

「魅ぃちゃ～ん！　おっはよ～ぅ！」
次の待ち合わせ場所で俺たちを待つ人影が見えた。向こうも気付き手を振ってくる。

「お、来た来た。遅いよ二人とも～！」

「いつも遅いのはお前の方だろ！」

レナの律儀さとは逆にマイペースなヤツ。こいつは園崎魅音。一応、上級生でクラスのリーダー役だ。

レナが女の子らしく振舞おうと努力していることに比べると、魅音はまさに正反対。髪こそ長くしているが、性格はだいぶ男勝りだった。

もっと言ってしまっていいなら、長髪をまとめたポニーテールと、女であることを主張するわがままなバスト以外に女の子らしい要素は皆無とまで言い切れる。そんなヤツだった。

「おはようレナ。そして圭ちゃんお久しぶり！　何年ぶりだっけぇ？」

「二日しか休んでねえよ！」

「あっはは！　そうだっけか。前に会った時はあんなに可愛かったのになぁ！」

魅音の下品な目線が俺の胸元からつーっと下がって行き、下腹部に集まり始める。

「そうだよ立派になったぞ。驚くぞ。」

「たくましくなっちゃった上にヒゲまで生やしちゃってさぁ～☆」

「毎朝、元気全開で大変なんだ。今度見せてやるから挨拶してみろ。」

「今度なんて言わないで今がいいなぁ。朝の新鮮な空気を吸わせてあげたらぁ？」

「よしわかった。大公開だ。後悔するなよ…ッ⁉⁉」

俺がジッパーに手をかけたところで、レナが慌てふためきながらまくし立てた。

「…ね、ねぇねぇ…、何の話？　何の話だろ何の話だろ…ッ‼」

赤面しておろおろしながら無知を装うレナだが、がっちりと会話についてこれてるのは間違いない。

「どうだった？　久しぶりの都会はさ。」

魅音は下品モードから復帰し、ようやく朝の爽やかさに相応しい話題に転換してくれた。

「葬式で行っただけだぜ。慌しいだけだったよ。」

「でさ！　探しといてくれたぁ？　頼んどいたヤツ！」

「お前、人の話、聞いてないだろ。俺は葬式で帰っただけだぜ！　おもちゃ屋巡りをしてる余裕なんかなかったんだよ！」

「ちっちっち。おもちゃ屋とホビーショップは全然違うよ？　特に洋モノこっちじゃなかなか手に入らないからねぇ。」

「魅ぃちゃん、またゲームの話？」

レナがくすりと笑うと、魅音は得意げに頷いてみせた。

「そ！　圭ちゃんに洋ゲーのカタログを持ってきてもらいたかったんだけどねぇ。」

「そんなのまた通販で取り寄せりゃいいじゃねえか。」
「ま、そうするかなぁ。またプレイングの熱いゲームを入荷するからねぇ！」
「…こ、今度は、私にもわかり易いゲームがいいなぁ…。」
魅音はカードゲームやらボードゲームやらの愛好家で、様々なゲームを収集しているらしい。なんでも、レナの話によると、魅音の部屋は国内外のゲームの博物館のような状態になっているという。
「俺にもわかりそうなゲームがあったらやらせてくれよ。」
「へぇ…いいよ！　圭ちゃんさえ良ければね。でもウチらのレベルは高いよぅ？」
「上等じゃねえか。俺だって遊び百般、遅れを取るつもりはないぜ！」
「…わぁ…。じゃあ今度は圭一くんも仲間に加わるのかな。…かな！」
レナが全身で喜びを表現しながら、俺と魅音の顔をきょろきょろと見比べる。魅音が肯定を意味するウィンクを送ると、レナは一層表情を明るくした。
「男の子ってきっと外で遊ぶ方が好きだと思ってたから…ダメかと思ってたよ。」
「んなことはないぜ。男だって雨が降りゃ屋根の下で遊ぶぜ？　トランプもするし野球盤なんかメチャクチャ盛り上がるぞ！」
「あははは、そっか。ならよかったかな、かな！」

レナはやたらとうれしそうに笑った。
これだけ親しそうに話をしていても、実際にはここに転校してきてまだひと月も経っていない。転校生の俺が溶け込めるよう、色々と気を遣ってくれているに違いなかった。
だから俺もこれ以上、気を遣わせないよう、早く溶け込む努力をしなければならない。
自分でも少々馴れ馴れしいかな、と思うくらいの方が、きっとこの場には相応しいのだ。

■北条沙都子と古手梨花

ここ、雛見沢は小さな村で、学校どころかクラスもひとつしかない。
しかもクラス内は、年齢学年ばらばらだ。その上、人数も二十人ちょっとしかいないのだ。
これだけでも雛見沢の寒村ぶりがよくわかる。
「…ん〜？　おやおや、これはこれは。くっくっく！」
それまで俺たちの先頭を歩いていた魅音が不意に笑うと、俺に先頭を譲った。
教室の引き戸の前で、うやうやしい仕草をしながら、俺に引き戸を開けさせて先頭で教室に入らせようとする。
ふ…。残念だが、もうひっかからない。

「…ここで先頭を譲るとはな。お手並み拝見ってことかよ。」
魅音は不敵ににやりと笑った。
「ど、どうしたの…二人とも…？」
「下がってろレナ。危ないぞ。……ヤツだ！」
「えぇ…？　じゃあ…沙都子ちゃんが…!?」
当人が登場する前だが、先にヤツの名を紹介しておこう。ヤツの名は北条沙都子。年下のくせに年齢をわきまえないクソ生意気なガキンチョだ。
口調も腹立たしいが、それくらいで腹を立てては年長者として大人気ない。
問題なのは…こっちだ。
「…見え見えのワナだな。引き戸の上に挟んだ黒板消し。…見え見えだぜ！　沙都子！」
引き戸の奥でくぐもった笑いが聞こえた。
見事仕掛けられたワナを看破した俺を、魅音が口笛を吹いて称える。
「お見事、圭ちゃん！　…こりゃあ今回は勝負あったかな？」
「…いや、相手は沙都子だ。これだけとは思えない…！」
転校初日から壮絶なトラップコンボを見舞われた俺だからこそ、慎重になれる。
複数のワナを多彩に組み合わせ、本命のワナへ誘う誘導や、連続でヒットさせる連鎖系トラ

ップなどなど。この数週間でも、まだヤツは手の内の全てを明かそうとはしない！
「見たところ、黒板消しは普通。石とかは入れてないみたいだな。」
初日に食らったのは黒板消しに石が入れてある強力なものだった。あれ、三日はコブになって残ったぞ…！
「じゃあさじゃあさ、ガラガラって開けて落としちゃえばいいんじゃないかな…？」
「それだ！」
沙都子の狙いはそれだ。俺の注意を上に引き付け、引き戸に手をかけさせ…。そう、そこにこそ本命を仕掛けるのだ！
引き戸の手をかける部分にガムテープと画鋲で、恐ろしいワナが仕掛けられていた。攻撃力抜群の恐るべきワナだ。上に気を取られたまま手を掛けていたら、飛び上がることになっただろう！　上の黒板消しは、このワナを隠蔽するための陽動なのだ！
「見事なコンボだ沙都子！　だが所詮はガキの浅知恵だったな！」
俺は勝利を確信し、画鋲の仕掛けられていない部分に手を掛けてガラリと扉を開く。そして眼前を黒板消しが落ちるのを見届けてから、教室に飛び込む！
その時、足首に違和感。それはなわとびを足に引っ掛けた時の感触によく似ていた。
やられた…と思った時にはもう遅い！　余りにも美しい角度で転んでいく俺…。

「圭ちゃん、避けてッ!!」
魅音の鋭い声に、俺は反射的に身をひねって床に倒れこんだ。
「……いてて…てッ!?」
俺の転ぶ予定地点に墨汁の満たされたすずりが置かれている…！　クリティカルヒット時の惨状を思い浮かべ、俺はぞっとした。咄嗟に身をひねらなかったら、今頃、俺の顔面の魚拓が取れているって寸法だ！
「あらあらこれはこれは。おはようございますですわ圭一さん。朝から賑やかですわねー！」
無様な格好で倒れている俺を、小馬鹿にするような声が迎えた。
「一段とスペシャルなトラップワークになったじゃねえか、沙都子!!」
「あらあら。私、何のことかわかりませんわよ。朝からついてませんわねぇ。」
「てンめぇええええ〜…!!　…いててて…。」
不覚にも、転んだ時に腰をひねったらしかった。妙な角度で転んだからな。
すると、すっと俺の頭に小さい手が載り、やさしく撫でてくれた。
「……圭一の痛いの痛いの、飛んで行けです。」
「あ…あぁ、ありがとな。梨花ちゃんのおかげで痛みが引いてきたぜ。」
「わぁ〜…梨花ちゃん、おっはよ〜ぅ！」

「…レナにおはようございます。みんなにもおはようございますです。」
梨花ちゃんはぺこり、ぺこりと可愛らしい仕草で頭を下げて挨拶した。
つられて、俺もレナも魅音もぺこりぺこり。
「梨花ちゃんはいい子だよなぁ…。それに比べて沙都子…!!」
ぎょろりと睨み付けると、沙都子は口笛を吹きながらわざとらしく目線を逸らす。
「沙都子はいい子でございますのことよ?」
「いい子はこんな凶悪なワナは仕掛けないぞ!」
「言い掛かりでございますわぁ！　何の証拠があって…ふわッ!」
俺は沙都子の後ろえりを摑み上げる。こうするとしつけの悪い猫みたいだな。でも猫はワナなんか仕掛けないぞ。…もっと始末が悪い!!
「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イって言ってみな。言わないならぁ……!」
俺は右手でデコピンを作り、ぶるぶると震わせながら沙都子のおでこに近付ける。
「ぼぅ、暴力反対ですのー!!　証拠がどこにあるんでございますのー!!」
「言っとくが俺のデコピンは凄く痛い！　ベニヤくらいなら割る!」
「ひぃいいいぃいぃ…!!!　やめて寄らないで、けだもの〜!!!」
「人様が聞いたら誤解するような言い方をするんじゃねぇえぇえ!!」

今まさに、俺のマグナムデコピンが炸裂しようという時、小さな手が、くいと俺のすそを引っ張った。梨花ちゃんだった。

「……沙都子は圭一が二日間もお休みしたから寂しかったのですよ。」

「む……、そ、そうか…。」

「だからこのトラップは、圭一がお休みした二日分、遊んで欲しかったのですよ。みー…。」

…本当に梨花ちゃんって子は。こういう言い方をされたらこれ以上何ができるってんだ。

この子の名前は古手梨花。沙都子と同い年で無二の親友でもある。

梨花ちゃんは沙都子と正反対で、年長者への礼儀をちゃんと弁える模範的な少女だ。

沙都子が活発なイメージを感じさせる短い髪型なのとは逆に、梨花ちゃんは切り揃えられた前髪と長くて綺麗な髪。まるでお人形さんそのものだった。

俺の名前を呼びすてにしているが、それは誰に対してもであるらしく、しかもとても可愛らしく呼んでくれるので、不快に感じる者はいない。

梨花ちゃんに諭され、半べそをかきながらいつ来るとも知れぬデコピンに耐えるべく、きゅっと目をつぶった沙都子を俺はそっと解放した。

「ふ、ふわぁあぁあぁあ…ん!!　悔しくなんかないもん!!　ふわぁあぁあぁあん!」

「……泣いちゃだめです沙都子。ファイト、おーです。」

いたずら盛りの友人の頭を梨花ちゃんはそっと撫でる。この二人が同い年とは到底思えなかった。沙都子は梨花ちゃんの爪の垢を煎じて一リットルくらい飲むべきだ。
「今度はもっともっとすごいワナで、圭一を返り討ちなのですよ、にぱ〜。」
…ちょっと待てぃ。
その光景を見て、レナが恍惚の表情でうっとりとしていた。
「…はぅ…沙都子ちゃん泣いてる……かぁいいよぅ……。」
「持ち帰っちゃダメだからね。」
「…ひぅ！　…だってだって…こんなにかぁいいよぅ？」
「どんなにかぁいいくてもダメなの。」
「でも…ちょっとくらいなら……だめかな？　だめかな？　ちょっとお家にお持ち帰りしてしまっちゃうだけだよーぅ。」
「それ、世間様じゃ誘拐って言うらしいぞ。犯罪だって知ってるかー？」
「はぅぅ、かぁいいのに、こんなにかぁいいのにぃ！　お持ち帰りしたい〜！」
魅音の話によると、レナは可愛いものにめっぽう弱いらしく、しかもそれらを何でもお持ち帰りしようとしてしまうらしい。物でも人でも…！
「とにかく諦めろ。誘拐は営利が付かなくてもかなりの重罪だぞ…。」

「じゃあ見てるだけ。見てるだけだよ…。それならいいよね。よね？」

「…む、…確かに昭和五十八年にストーカー条例とかはないな。…な、ならいいのか、な…？」

悔し泣きする沙都子にうっとりするレナ。

もしもこの雛見沢で幼女(ようじょ)誘拐事件が起こったら、俺はレナのことを通報しなければならないだろう。許せよレナ。ちゃんと差し入れは持って行ってやるからな…！

「ほら、先生来たよ。早く片付ける！　沙都子、すずりあんたのでしょ！」

魅音の一声で一気に場の空気が戻った。

すずりもまずいが引き戸の画鋲はもっとまずい！　俺は刺(さ)さらないように気をつけながらガムテープごと引き剝(は)がす。仕掛けたのは沙都子でも、後片付けはみんなでだ。

先生が教室に入ってきたときには、つい今あった光景は綺麗に片付けられていた。

「あははは、間に合ったね！」

「何で被害者の俺まで沙都子のワナの証拠隠滅(いんめつ)に付き合わなきゃならねぇんだ！」

「ほらほら、先生が来ましたわよ。私語は慎(つつし)みなさいませー！」

「きりーっ、きょーつけー！」

クラス委員長の魅音が号令をかけた。

この学年もばらばらなクラスで先生がひとりというのは大変だった。
ひとりひとりに違うことを教えなければならない。しかも、低学年の子にはより丁寧(ていねい)に教えなければならず、必然的に先生は小さい子の世話にかかりきりになる。
そのため、上級生の魅音やレナはほとんど自習状態。
それどころか先生といっしょに下級生たちの勉強を見ることもあるので、とても自分の勉強までは手が回っていないようだった。
実際、彼女らの勉強の進行度は俺に大きく遅れを取っていた。その結果、俺は先生に代わってレナや魅音の勉強を見るはめになったのだった。
「圭一くんはお勉強教えるのうまいね。わかりやすいよ。」
レナはチェック箇所(かしょ)をマーカーで塗(ぬ)り終えると一息ついた。真面目(まじめ)なレナは、本当に教え甲斐がある。然(しか)るべき塾へ通い、然るべき勉強量をこなせば、きっと都会でもかなりいい偏差値(へんさち)を出せるに違いない。
「教える端(はな)から自信がなくなるよ。自分の理解の浅さがわかるなぁ。」

「人に教えるには三倍理解してなければならない、って言うしね。圭ちゃんもうちらに教えながら、同時に復習も出来てるわけなんだよ。うんうん。教えてるつもりが教えられてもいるわけだね！」
「魅音さ、他人事じゃないぞ。真剣にやんないとまずいぜ。お前、今年受験だろ⁉　こんなんじゃ、相当痛い目を見るぞ…。」
　レナに比べると魅音はちゃらんぽらん。雑学の知識は大したものだが、成績に結びつくような知識はからっきし。しかも、そもそも勉強する気がないときてる。
「別に進学校を目指すわけでもないし。受験に必要なそこそこが出来てりゃ充分充分！」
　開き直りの潔(いさぎよ)さだけは天下一品だな…。魅音らしいといえば魅音らしい。
「魅ぃちゃん、圭一くんががんばって教えてくれてるんだからさ。私たちも頑張ろうよ。」
「レナは素直ないい子だなぁ…。先生がきっといい学校に進学させてやるからな。」
「…わ、わぁ……あ、ありがとう……。」
「レナには特に教えてやるからな。二人きりでプライベートレッスンだぞ。」
「…ぷ、…ぷらいべと……れ、れっすん……。」
　レナの頭からポン、と音がして丸い輪(わ)っかの煙が上がっていく。
　一体、どんなプライベートレッスンを想像したらあんなに赤面できるんだろう…？　今度ぜ

ひ声に出して実況してもらいたいものだ。
「都会じゃさ。こんなに勉強しなきゃいけないわけ～？」
魅音が単語帳をぺらぺらといじりながら投げやりに聞いてくる。勉強に飽きたので、雑談に持ち込んで時間を潰そうという魂胆が見え見えだった。
「決まってるだろ。この程度の成績じゃ進学できないぜ。」
「進学できないから勉強するわけ？」
「まぁ。平たく言えばそうなるな。…将来、役に立たないのは承知で。」
「都会じゃそうだろうけどさ。こっちじゃあさ、出席日数が足りてりゃみんな進学できるんだよ。」
「…そ、そうなのか…⁉」
勉強イコール受験という万有引力の法則並の常識をあっさり否定され、さしもの俺も狼狽する。
「そうかもね。試験で振り落とさなきゃならないほど、人もいないし。」
「誰でも進学できるならさ、そんなにガリガリとやることもないんじゃない？」
「…まぁそうだけど…、でも一般常識程度にはできた方が…、」
「おじさんはそんな無駄な勉強に時間をかけるよりさ、この思春期の貴重な時間をもっと有

意義に過ごすために使うべきじゃないかなぁ、と考えるわけよ。」
笑い飛ばすには含蓄（がんちく）のある言葉だった。もっとも魅音のことだからそこまで深い意味はないのだろうけど。
チャイムの代わりに校長先生の振る振鈴（しんれい）の音が聞こえてくる。
「圭ちゃん、おしまいおしまい！　さぁ楽しいランチタ〜イム！」
さっきまでの消極的な態度とは一変。魅音がクラスに号令をかける。
「…圭一くん、お昼にしよ！」
難しそうな顔をしていたのかもしれない。レナはやけに明るく笑ってくれた。
「うっしゃ！　飯にするか！」

仲良しグループとお昼

年齢も学年もばらばらのこのクラスでも、やっぱりグループがある。それはお昼の時間を見れば一目瞭然（いちもくりょうぜん）だった。
都会の学校でなら、班分けに従ってお昼を取るが、ここではそんなルールもない。仲良しグループ同士で席を寄せ合い、わいわいと賑やかに食事にするのだ。

もちろん、俺にも一緒に食事をする仲良しグループがあった。

レナと魅音が互いに机を向かい合わせにする。そこに沙都子と梨花ちゃんが自分たちの机をよたよたと運んでくる。

「圭一くん、早く早く！」

レナが行儀悪く箸を振りまわしながら俺を急かす。

全員揃わなきゃ弁当箱のフタも開けないらしい。

朝、一緒に登校したレナと魅音。そしてワナで出迎えてくれた沙都子と梨花ちゃん。そして俺の五人が一緒にお昼を取るグループだった。

「圭一さんのお弁当はきっと貧乏臭くパンの耳に決まってますわ～！　さぁ恥ずかしがらずにお見せなさいな！　ほらほら！」

憎まれ口を叩く沙都子でも、俺が揃うまでは弁当箱を開けない。

俺は手早く弁当箱を引っ張り出すと、イスを引っ張って彼女らの輪に加わっていった。

「おう、お待たせ！」

「…では魅ぃ委員長の号令でいただきますなのです。」

始めは、女の子しかいないグループでとても恥ずかしかったが、そんなのはすぐに薄れた。

今では、この年齢も性別も違うグループが俺の居場所であるとはっきり自覚できる。きっと俺

も、この中の誰が遅れても弁当箱を開けないだろう。
年齢も性別も違う。でも、仲間だった。
「いっただきま～す!!」
五人の綺麗な合唱が教室に響き渡った。

無言で食事に勤しむ男に比べると、女の食事は賑やかだ。だから、俺以外が全て女のこのグループの食事はいつも大変賑やかだった。
本来なら、俺は男子たちのグループに所属するべきだったろう。だが、たまたま他の男子たちの学年が大きく離れていたため、彼らと接点を持てなかったのだ。
このくらいの歳の男子にとって年上の男は怖く見えるもんだ。そこへ行くと女子、少なくとも彼女らはその辺をまったく気にしない。
最初に俺に声を掛けてくれたのが彼女らで、色々親しくしてくれたのも彼女ら。そして一緒にお昼を食べようと誘ってくれたのも彼女ら。だから、俺が彼女らのグループの一員であることを自覚するのは当然だった。
おかずを中央に集め、みんなで自由に突っつく。
こういうのって結構、女の子は気にするんじゃないかな、と思ってドギマギしていたが、そ

れを魅音に見透かされずいぶんと囃したてられたものだ。
努力（？）の結果、今では誰の弁当箱のおかずであれ、箸を伸ばすことができるようになっていた。
「あらあら、圭一さんのお弁当は今日は大奮発ではございませんことー？」
「あらあら、沙都子さんのお弁当こそ大奮発ですこと。煮物がシックでイイ感じですわぁ。」
沙都子の売り言葉に買い言葉で返し、互いにクロスカウンター状態で箸を相手の弁当箱に突っ込む。箸を刺したのと同じ速度で戻し、口に放りこむ。
「あら美味！」
「お、里芋がイイ感じだぞ。煮物は冷めててもうまいよなぁ！」
俺の笑顔を確認すると梨花ちゃんが表情をちょっぴりほころばせた。どうもこの煮物は梨花ちゃんの作らしい。
「……昨夜のお夕食の煮物を少し取っておきましたのですよ。」
「なるほどな。一晩たってダシがさらによく染み込んだってわけだな！　うまいのも納得だぜ。」
「をっほっほっほ！　そうでございましょう？　梨花は煮物が大の得意なんですのよ！」
「……もちろん、煮物以外のお料理も大得意なのです。」

沙都子と梨花ちゃんが微笑ましく笑い合いながら、煮物を突っつき合う。
ちなみに、梨花ちゃんと沙都子のお弁当はいつも同じなのだ。どうも梨花ちゃんが毎日作ってきてあげているらしい。
梨花ちゃんの料理の腕前は年齢に似合わずかなりのもの。こんな腕前なら、俺の弁当もついでに作ってもらいたいくらいだった。
「こっちの煮物も梨花ちゃんが作ったのかい？　…こいつはお袋の味クラスだよなぁ！」
素直に感心する。このニンジンで作った花型は型じゃなく、包丁によるものだ。
「梨花ちゃんって何気にそーゆうの得意なんだよねぇ。」
「お料理だけじゃなく、お裁縫とかお洗濯とかも上手なの。すごいよね。すごいよね！」
「梨花はいろいろとすごいんですのよ。をーっほっほっほ！」
「お前が威張ることじゃねえ！」
「…ボクより、レナの方がお料理は上手です。」
「……え、あ、…その……ね☆」
思わぬタイミングで話を振られたらしく、レナは言葉を詰まらせ赤面した。
確かにレナの弁当箱はこの食卓の花だった。
見た目にもうまそうで、実際にうまい！

みんなもレナの弁当箱には進んで箸を伸ばす。
「これ、前に評判良かったからいっぱい作ってみたの。…おいしいかな？　…かな？」
「かなり合格点！　あ、魅音、お前取り過ぎだよ！」
魅音の箸を払い、俺の分を確保しようと身を乗り出すと、沙都子と梨花ちゃんも一斉に身を乗り出してきて大変なことになった。
みんな口々にうまいうまいと言いながら、あっという間にレナの弁当箱を空にしてしまう。
誰もレナの分を残してやろうとは思わない辺りが恐ろしい。
でも、それを見てレナはすごく満足そうだった。
「いかがかしら。レナさんもとてもお料理が上手ですことよ？　圭一さんとは大違いですの！」
「だからお前が威張ることじゃねーだろ！」
「沙都子だって圭ちゃんと変わらないじゃんよ。あんた、ブロッコリーとカリフラワーの区別、付くようになったわけ〜？」
沙都子の顔色がさっと変わる。…どうやら、沙都子の弱点のひとつらしかった。
「…おいおい、ブロッコリーとカリフラワーの違いなら俺だってわかるぜぇ？」
「わ、わわわ、わかりますもの！　…わかるもん！」

つくづく嘘のつけないヤツだ。言い繕えば言い繕うほど、見分けがつかないと公言していることに気付かないらしい…。
久々に沙都子に対して優位に立てることに気付き、俺はにま～と笑うとさらに沙都子を追い詰めることにする。
「圭一くん、ど、どっちでも茹でてマヨネーズかけるとおいしいじゃない？　いじめちゃかわいそうだよ…。魅ぃちゃんも！」
「まぁまぁ家庭科の授業ってことで。…んじゃ沙都子、これはぁ？」
魅音が箸でひょいと摘み上げる、ベーコンに巻かれた緑の断面。
「…でもそれ、アスパラ…むぐっ、」
魅音のアイコンタクトを受け、俺はコンマ三秒で梨花ちゃんの口を塞いだ。
アスパラのベーコン巻きをもって二択を迫るとは…。恐ろしいヤツ。
「えーと、その！　えーと…！　黄色がカリフラワー、うぅん、緑がカリフラ……、」
「さぁどっちだ！　うぅん!?」
「多分、黄色がぶろっこりで青がかりふらわで……でも緑は……その……あぅ……、」
「本当にどっちかわかってるぅ～？　降参した方がよくない～？」
さすがクラス委員長。最年長。魅音のいびり方、追い詰め方は年季が違う。何の根拠もない

が、園崎家に婿入りしたら大変なんだろうなぁ…。
「わかりますもの…！　わかるもん!!」
「じゃあ答えなよぅ！」
「…わかるもん……わかるもん……ぅわぁあぁあぁあん!!」
とうとう堪えきれず、泣き出してしまった。こうなると沙都子も歳相応だ。
「…は、はぅ〜…か、かぁいいよぅ…。」
悔し泣きの沙都子にレナは狂喜している。
胸に飛び込んでくる沙都子の頭を抱え込むと、撫でながら頬擦りをし幸せの限りを満喫している。…この状況下なら、きっとレナはドスでお腹を刺されても気付かないだろう。
「レナレナ〜！　魅音さんがいじめるんですのー！　わぁあぁあぁあん!!」
「かぁいいかぁいい…！　大丈夫だよ、レナお姉ちゃんが悪い人たちはやっつけちゃうからね！」
すぱぱーん!!
稲妻が閃いたように感じた。気付けば、俺と魅音は二人して大の字になって天井を仰いでいる…。

「……今、……一体……何が……？」
顔面が痛い。ダウンしている。レナから何かの攻撃を食らった。…それしかわからなかった。
「…圭ちゃんは食らうの初めてだよね。…今日のはまだ…甘い方…。」
そこまで言い、俺も魅音も同時にガクッと頭を垂れる。
「ほぅら紗都子ちゃん、やっつけちゃったよ〜。……あぁん、かぁいい〜！　お持ち帰りしたい〜!!」
レナから見えないよう、沙都子が俺たちを一瞥し舌を出す。ち、畜生〜、レナを上手に使いやがってぇぇぇ！！！
梨花ちゃんは無言で、それでいて満足そうに笑いながら俺たちの顔面のアザを撫でてくれていた…。

■下校

どんなに起伏ある遠路でも、下校時だけは短く感じる。俺たち三人の影が長い。
「ねぇ圭一くん、今度の日曜日はさ、何か予定とか、あるかな？　…かな？」
「え…？」

レナにしてはかなりの積極的なアプローチに思わず赤面した。そういう聞かれ方をしたら、普通はデートのお誘いだと思うよな。
しばし言葉を失う俺を見て、レナはどういう風に誤解されたか気付き、勝手に赤くなる。
「…え、…あ、…ち、違うの、…そーゆうのじゃなくて…その…！」
「なぁんだ、…そーゆうのじゃ、…ないのかよ…。」
「え…⁉ ええ⁉」
俺は大袈裟に肩を落としてがっくりしてみせる。
「……け、圭一くん、何でがっかりしてるんだろ？ だろ⁉ …魅ぃちゃぁん！」
「…ぷ、あーっはっはっはっはっは！！！」
堪えきれなくなった魅音が俺の背中をばしばし叩く。
「そっかぁ！ そーゆう攻め方はおじさん知らなかったわ。わーっはっはっは！！！」
「…え？ …え？ なに？ なに⁉ 何なの⁉」
腹を抱えて転げまわる魅音に、状況が飲みこめずわたわたするレナ。
俺もつられてげらげらと笑いながら、ちょっぴりの罪悪感と共にレナの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。
「うそごめん冗談。…悪かったよ。」

つくづくかわいいヤツめ。
「……え、…え？　……冗談って？　どこからだろ！　どこからだろ⁉」
「え、ぁ…途中から。」
「…途中からぁ？　ってことは圭ちゃん、最初の真っ赤になったのはあれ演技じゃないんだ？」
「…え…？　…そ、それって……？」
一瞬の心の隙だった。魅音がこんなおいしい揚げ足を取らないわけがない…！
「え、いやその……」
二の句もまずい…。迂闊な狼狽がますます俺を不利にして行く。その後、俺はたっぷりと魅音におちょくられることとなった…。
「……んで、日曜がヒマだと何なんだよ。レナ。」
「え…？　と、…何の話だっけ…？」
切り出した本人が忘れるほどの間、俺は魅音におちょくられていたらしい。魅音は、くっくっくと笑うと、本題に戻してくれた。
「圭ちゃんさ、まだこの雛見沢、ひとりじゃ回れないでしょ。」
確かにそう。魅音の言う通りだった。

転校してきてひと月も経たない俺は、まだ雛見沢の地理について、お世辞にも理解しているとは言い難かった。
スイカ割りのように目隠しをされて、三回ぐるぐる回されたらもう、そこがどこかわからない自信はかなりある。
「…そうだなぁ。町へ行くのと学校へ行く以外はまだ自信ないな。」
「そうそう。それでね、明後日ね、魅ぃちゃんとレナでお散歩しながら圭一くんに雛見沢を案内してあげようよってことになって…。」
まさに渡りに船。率直にこの申し出をうれしく思った。
「もちろん行くでしょ？」
「ヒマならな。」
「女の子が誘ってんじゃ〜ん⁉」
「ヒマならな。」
魅音の有無を言わせなさそうな口調に敢えて反抗する俺。渡りに船とか思いながら、素直に歓迎できない自分がかわいい。
「…圭一くん、…ヒマじゃないのかな？　……かな？」
魅音との不毛なやりとりに、レナがおずおずと俺を覗きこんできた。

さっきは少々いじめ過ぎたと思ったから、今回はレナのペースに合わせてやることにする。
「……すまん、許せごめん。ヒマだ。」
「よかったぁ！」
屈託なくレナが破顔した。
「おうおう！　魅音さんとレナさんじゃぁあずいぶんと温度差がありますじゃーん!?」
「行こうレナ。日曜は二人っきりで出かけような。嫌味な魅音は置いてって。」
ぷーっと頬を膨らます魅音を置いて行くように足を速めた。
「……え、わ…、…圭一くんが…それでいいなら……。」
「案内しようって提案したのは私〜!!　シカトすんな前原圭一ーッ!!」
「二人きりでピクニック嬉しいなぁ！　弁当は持ってくかレナ。」
「……お、お弁当いるなら…レナ、…作っちゃおうかな……かな！」
「レナもシカトすんなー！　二人がホテル街へ消えたって回覧す、………。」
魅音が何か下品なことを言おうとした瞬間、魅音の顔面に見えぬ何かが叩き込まれ卒倒する。
「じゃあじゃあ！　レナ、張り切ってお弁当の準備するね…！　日曜日が楽しみ！　圭一くんに魅ぃちゃん！　さようならぁ！」
まるで月面を跳ねるかのような足取りで、レナは駆けて行った。

砂塵が消え、あとに残される俺と、大の字になって横たわる魅音。顔面にはアザ。
「……大丈夫か…？　魅音とレナの立ち位置、二メートルは離れてたはずだぞ…。」
「……あ……あんたが来て以来、キレ味は増す一方…。おじさん、身が持たないわ…。」
「挫けるなよ魅音。レナのジャブを見切れるのはお前しかいない！」
「……私は膝じゃないかと思ってんだけどね……。」
俺と魅音はレナの必殺技攻略への決意を新たにするのだった…。

■うちって学年混在？

「……レナってさ、俺と同い年だったよな？」
「うん。そうだよ？　干支もおんなじだよね。」
おいおい、年が同じで干支が違ったらおかしいだろうが…。
「そんなことないよ。誕生日の違いがあれば、年齢が同じでも干支が違うこともありえるって。」
「あれ？　あ、そーか。魅音、頭いいじゃねぇか！」
「あはははははは。ところで圭一くんは何月生まれなのかな？　レナは七月なんだよ！」
レナがえっへんと胸を張る。…おいおい、そりゃどういう意味だよ。
まさか、俺よりちょっとでも誕生日が早かったら威張ろうってつもりじゃないだろうな…。
「…ふ！　だが諦めろ。俺に誕生日で挑もうったって無駄なことだ‼　……何ならひと月差ごとに百円の賭けをしてもいいぜー！」
「え？　え⁉　なんでだろ？　なんでだろ⁉」

突然、賭けにされて狼狽するレナ。…うろたえ具合から今月の小遣いは残り少ないと断定する。
しかし…、たかだか誕生日程度でこうもうろたえてくれると、楽しくて仕方がないぞ。
「ってことは圭ちゃん、ひょっとして四月生まれ？」
「そーゆうこったな！　残念だなレナ！　俺、もーとっくにレナより年上なんだよ。」
「へぇー！　そうなんだ！　じゃあ魅ぃちゃんと同い年なんだね！」
「まぁ、ほんの何ヵ月かはね～！　すぐにまた差を開いてあげるけどさ！」
魅音が鼻でヘヘンと笑う。…おいおい、威張ることじゃねーぞ…。って俺のことか。
「……そう言えば…、魅音って上級生なんだよなぁ。」
「下級生の方が萌えるってんなら、今日から下級生ってことでもいいけどー？」
「魅ぃちゃん、よくわかんないこと言ってる……。」
レナの赤面具合を見れば、ばっちり理解できてることがわかるんだけどな…。
「んで、沙都子と梨花ちゃんが下級生と。……どころか学校が違うくらいの下級生だよな？」
「け……圭一くんは、ちょっと好みの年齢が低すぎると思うな…。思うな……。」
レナこそよくわかんないこと言ってるぞ…。とりあえず、頭部を鷲掴みにして、ぐし

やぐしゃと乱暴に撫でる。

「はぅ～～～!!　やーめーてーー……!」

「前から思ってたんだけどさ。なんでこの学校って、クラスが学年混在なんだ?」

「教室の数が足りないからだよ。仕方ないじゃん?　営林署の建物を間借りしてんだからさー。」

…そう言えばそうだよな。うちの学校って前々から変だと思ってた。

校庭は砂利だし、学校とは無関係な部屋はあるし、変な建設重機みたいのは止まってるし。

「何で借りてるんだよ。本当の学校はどうしちゃったんだよ?」

「戦前からずーっと建ってたらしいからねぇ…。老朽化でね。廃校ってわけよ。」

それは…さぞや趣のある渋い校舎だったんだろうな。

「まーそれで、生徒は町の学校に通うことになったんだけどさ、遠いでしょ?」

「どこの学校だったの?」

「興宮の駅前通りを抜けて病院を曲がって、小児科の向かいに学校あるのわかる?」

「え、えーーーーーーッ!?!?　と、遠いよぅ…!」

地理的なものはさっぱりだが、レナの驚きようからかなり遠いことがわかる。

「まぁ、そんなわけでさ。興宮の学校に通いたくない連中は、こうして営林署の建物を間借りした仮校舎に通ってるってわけさ。」
「雛見沢の子供の半分くらいかな？　朝早くに自転車で通ってる子たちも結構いるよ。」
「まぁ、こんなハチャメチャな学校に通ってたら、進学校とかはちょっと無理だろうからねぇ。」
「そんなことないよ魅ぃちゃん。ちゃんと頑張ればどこでだってお勉強はできるよ。」
「お、そうだぞそうだぞ！　レナとは意見が一致したな！」
「うん、そうだね。そうだね！　がんばろ！」
「せーぜー頑張って下さいな。おじさんはささやかに応援しとりますわ。」
「俺たちがじゃないぞ、魅音がだぞ！　お前、受験生だろ⁉　こんな成績じゃお先真っ暗だぞ⁉」
「いーもんいーもん。路頭に迷ったら永久就職して圭ちゃんに食わせてもらうから☆」
「え、え、永久就職って何だろ⁉　何だろ⁉」
「こら！　そこ、うるさいですよ！　自習は静かに！」
三人そろってばっさりと先生に怒られる。いやまったく申し訳ない…。
それを見て沙都子がケタケタと笑う。それに俺はあかんべー、と舌を出して応えてや

る。

……確かに魅音の言うとおりだな。この学校は進学とは無縁だ。

その代わり、どこの学校にもない貴重なものがたくさんあるのだろうけど。

■うちって制服自由？

まだ六月だってのに…暑い。

外ではセミがミンミンと鳴き、夜は蚊まで出る。…これって完全に夏だよなぁ。…朝だけは涼しいのが救いか。

「暑いでございますわねぇ！」

沙都子が気だるそうにスカートをバタバタさせている。

「…はしたないぞ、おい。…ガキンチョとは言え、一応女の子なんだからさぁ。」

「圭一さんはワイシャツ一枚で涼しそうですわねぇ…。羨ましいですわ。」

「俺から見りゃ、スカートの沙都子の方が涼しそうだよ。この時期のズボンの股座がどれだけ蒸すか、女のお前にゃわかるまい！」

「……む、…蒸すんだ………、はぅ……。」

小耳を挟んでいたレナが勝手に赤面する。またこの娘は、いかがわしい想像をたくましくさせてるな…。
「レナの夏服は涼しそうな色合いがいいよな。見てるこっちも涼しくなる。」
「あはははは。ありがと！　本当に涼しいんだよ。」
「私もレナさんみたいな涼しい夏服がよかったですわねぇ。」
「でも沙都子ちゃんの夏服、ワンピースですっごい可愛いし！　レナは沙都子ちゃんの夏服、着てみたいな！☆」
「これ、結構蒸しますわよ？　絶対にレナさんの方が涼しいですわぁ。」
「でもかぁいい服の方がきっと楽しいよ。……はぅ！」
……レナと沙都子では根本的に価値観が違う気がするぞ。
「そう言えば…、この学校って指定の制服とかないんだよな。」
「うん。ないよ。相応しい服であれば私服でも大丈夫なんだよ。」
私服の生徒は確かに多い。制服を着ている生徒もいるが、みんなデザインは同じ、地味なものだ。しかし俺の仲間たちはみんなそれぞれ違う制服を着ている。
「…他の連中が着てる制服は何なんだよ。みんなお揃いだよな。」
「あれは町の学校の制服なんですのよ。別に決まってるわけじゃないですけど、みんな

着てますわね。」
「そこへ行くと、俺らの仲間はみんないろいろな制服を着てるよな。…わざわざどこから取り寄せたのか?」
「えぇ。魅音さんが調達して下さいますの。」
「魅ぃちゃんの親類で、古着商をやってる人がいて、全国の学校の制服を格安で仕入れてるんですって。」
「んで、その親類に頼んで、いろいろ個性的な制服を取り寄せてもらってるわけか。魅音のヤツ、仲間を着せ替え人形にして楽しんでるな、絶対。」
……しかし変な古着屋だよな。古着全般はわかるとして、全国の学校の制服を仕入れてる? …よくわからん古着屋だ。遠くの知らない学校の制服など、何の役にも立たないんじゃないのか??
「…うん。それはレナも思うよ。他にも体操服とかスクール水着のお古とかも扱ってるの。…そういうのお古はちょっと嫌だよねぇ。」
「あんまり儲かってなさそうな商売だな。……きっと少しでも儲けさせるために、魅音が一肌脱いでやってるんだろうな。」
「……でも、いつも魅音さんが自信満々に言いますのよ? 今にきっと大ブレイクして

すごい商売になる‼　って。」

……学校制服の古着屋が大ブレイクねぇ？　…わからん。


6月12日(日)

そして、日曜日。俺は彼女らと合流し、冗談では済まない何かが起こってしまったことを知るのだった。

結局、レナは本当に弁当を作ってきてしまったのだ。しかも、超特大で！

「圭ちゃん、あのあとレナ、大張り切りだったらしいよ⁉」

「べ、別に俺がけしかけたわけじゃないだろ…！　確かに弁当の話はしたが、あれはその、話の流れと言うか、ちょっとした冗談みたいなもんで…。」

「…そ、そんな、…大変じゃなかったから…気にしないでよ……ね☆　は、はぅ〜！」

「昨夜から今朝まであのテンションらしいよ⁉　責任取れんの？　全部食べきれるの⁉」

「わ、わかった…。俺も男だ。責任は…取る！」

「……え、……せ、せ…責任って…⁉　何だろ！　何だろ！」

俺と魅音はゆっくりとレナに振り返り、そしてやたらと重たそうなボストンバッグに目線を落とす。

あのバッグの迫力ある中身が弁当箱とは、常識なら考え難（がた）い。…だが相手はレナなのだ！

「……二キロくらい…かな？」

「レナね、荷物持つときよっこらしょ、って言ってた。……五キロ。」

「…そ、それはオーバー！　圭一くん、男の子だから！　きっといっぱい食べるだろうと思って…たくさん…ね☆　……あはは…もう行こ！　…よっこらしょっと！」

　レナの持ち上げ方は、とてもその中身が弁当とは考えられないものだった。

「…訂正。俺も五キロ…。」

「手伝いはするけど。…全部食べるんだからね！　レナを悲しませたら許さないよ⁉」

　俺に今できる努力は、少しでも運動してお腹を空かせることのようだった…。

　とりあえず、超特大弁当を完食できるかどうかという問題は保留し、俺たちは当初予定の、雛見沢大散歩大会に出発する。

　雛見沢は近代化とは程遠い寒村で、あちこちに合掌造りの古めかしい家が建っている。他にあるのは電柱と畑と山と森。案内してもらえばもらうほど、なーんにもない田舎であることが身に染みてわかった。

　だが、その何にもない、飾り気のないところがむしろ雛見沢のいいところなのだ。…全てがのんびりしていて、誰も物事を急かさない。そのことを、俺はほんの二日だけ戻った都会であ

れほどに教えられたじゃないか。
前の町に、こうして散歩に誘ってくれる友人なんていなかった。
まだ雛見沢に溶け込めていない俺を気遣ってくれる彼女らの心遣いが、とても温かで嬉しかった。
「あ、こんにちはー。」
「こんにちは。あら、そちらは……確か…前原くんだったかしら？」
いくら雛見沢が寒村でも、道を歩けば色んな村人にすれ違うのだった。レナと魅音は人とすれ違う度にあいさつする。みんな顔見知りのようだった。…しかもすれ違う人はみんな俺の名前を知っているのだ。
「なんで俺ってこんなに有名人なんだ⁉」
さっきから計三人にすれ違い、三人とも俺の名を即答したとなると、さすがに怪訝に思わずにはいられない。
「あはは、悲しいかなぁ、雛見沢は人が少ないからね。みーんな顔見知りなんだよね。」
「つまりなんだ。知らない顔が歩いてれば、それは自動的に新しく引っ越してきた前原さん家のお坊ちゃん、てことになるわけか。」
「うん。そういうことになるね。圭一くんの家が引っ越してくるのは、回覧板で回ってたから

村中が知ってると思うよ。」

…寒村、侮り難し。

今度からは一層、素行に気をつけねばなるまい。うかつに書店でHグラビアでも眺めてた日にゃ、その目撃情報が瞬く間に回覧板で広がって、次の日には村人全員からスケベ男のレッテルを貼られているに違いない…!!　恐るべし、雛見沢…！

しかも恐怖はまだ続く。

「じゃあ、レナたちはさっきすれ違った人たちの名前とかもみんなわかるわけか？」

「もちろんわかるよ。最初に会ったのが牧野輪店の竹蔵おじさん。趣味は盆栽と尺八なんだよ。」

「次が乾物屋の次男の大介くん。趣味は狙撃で将来の夢は超Ａ級スナイパーだとか。」

「それで、今の人は入江診療所の看護婦の三四さん。趣味は野鳥の観察と写真だって。」

「……すれ違った全員の名前までわかるのかよ…。プロフィールまで⁉」

顔見知りではあっても名前までは知らない。それが都会の限界だ。…それが、名前どころか趣味やプロフィールまでわかっているとは…。濃密な田舎の地縁を驚かずにはいられない。

俺のその様子に、レナと魅音は顔を見合わせクスリと笑い合った。

「まぁねぇ。ここいらは都会みたいにご近所付き合いが希薄じゃないからねぇ。」

「試しに聞いてみよう。今ここにいる俺は誰だ？」
「あははは。前原圭一く〜ん。いじわるなこと言うけど本当はやさしい照れ屋さん。」
「転校してきてようやく二週間。趣味は昼寝。最近、トランクス派に転向。…したよね？」
「もういいもういい‼」
「……と、とらんくす……。」
「それもいい！」
何で俺が町で下着を買い物したことまでバレてるんだ⁉　ここでは一切の隠し事はできないらしい。あぁ、恐るべし…雛見沢‼

「これじゃあさ、俺のための案内ってより、俺のお披露目みたいだな…。」
「そうだね。」
「うちらさ、これだけ賑やかに練り歩いてたからね。みんな思うんじゃない？　圭ちゃんも雛見沢に馴染んでくれたんだーって！」
「雛見沢は過疎だから。村の人たちは、新しい人が仲間に加わってくれるのを、みんな大歓迎してるんだよ。」
過疎、…か。

確かに、人がすでにいなくなり朽ちるに任せた家も少なからずあった。放置され休耕状態の畑にも出くわす。
都会的尺度から見れば、何でこんな不自由な村にみんなが住み続けるのか大いに疑問だろう。人が出て行きこそすれ、新しく入ってくることはない。…それが過疎というものだった。
だからこそ、ウチのような逆に転入してくる人間は貴重なのかもしれない。…さっきから出会う人たちがみんな俺の名前を知っていて、しかも温かく挨拶をしてくれるのは、…そういう意味もあるのかもしれない。
再び誰かとすれ違った。そして、やはり同じように声をかけられる。
「あぁらこんにちは。仲良しそうでいいわねぇ！」
「藤嶋さんちのおばさんだよ。こんにちは〜！」
「あぁら前原くん、両手に花でいいわねぇ！　どう？　生活はもう慣れた？」
人が次々と出て行き寂しくなっていく村に、新しい仲間がやって来た…。それが我が前原家なら、少しでも早く村に馴染んでほしいとみんな考えるに違いない。名も知らぬおばさんが尋ねる、生活はもう慣れた？　という言葉の意味がよくわかった。
だから俺は、都会的な社交儀礼的な言葉をぐっと飲みこみ、強く頷いて返事をした。
おばさんは元気がよくていいわね、とにこやかに笑ってくれた。

「グッド！　いい返事だね圭ちゃん。それいいんだよ。」
振り返ると魅音がウィンクをしてくれた。今日の散歩の意味が、ようやく俺にもわかるのだった。
「…で、ね☆　そろそろお昼にしないかな？　…かな？」
レナが最高の笑顔と共に、魅音と二人して忘れようとしていた時間の訪れを告げた。
俺と魅音は顔を見合わせる…。
「……俺も男だ。努力はする。…だが量が多過ぎる！」
「…よし圭ちゃん、ここはおじさんに任せなさい。援軍を呼ぼう！」
…魅音がこれほど頼もしく見えたことはない。さすがはクラス委員長！
「レナ、どうせ食べるならさ、見晴らしのいいところで食べない？」
「……わぁあ……うん！　それいい。賛成〜！」
魅音の提案はすぐに了承され、俺たちはその、見晴らしのいいところへさっそく移動することになった。

古手神社でお弁当

石造りの階段を登りきると、そこは想像した通りの感じの神社だった。
年季が入った様子ながらも、小綺麗に落ち葉が清掃されていて清潔感があった。
「ここはね古手神社って言うの。多分、見晴らしが一番いいところかな！」
「ここの場所、よく覚えといてね！　次の休みにはここでお祭りがあるんだから。」
「へぇ。祭りにしちゃちょっと早いシーズンだよな？」
「綿流(わたなが)しは夏祭りじゃなくてね、冬の終わりを喜ぶお祭りなの。」
お祭りは夏にやるものと決めてかかった自分の都会かぶれが恥ずかしい。
「さて、…弁当を広げて………と………」
色とりどりの弁当箱がシートの上に次々と並べられて行く。
美味(うま)そうな匂いは認める。レナの手作りだ。絶対美味いに決まってる。
…だが完食は本当に可能なのだろうか⁉　次々と並べられていく弁当箱やタッパー、重箱。
…それぞれにおせち料理並みにぎっしりとおかずが詰められている。
「お、おい魅音…、援軍ってのはどうなってんだ！　俺たちだけでこの量を食おうってのは無(む)

謀に過ぎる…！」
「もうちょっと待って！　もうじき来てくれるから！」
「…こんにちはです。」
可愛らしい声と共に現れたのは梨花ちゃんと沙都子だった。…どうしてここに⁉
魅音が俺ににやっと笑ってみせる。
そ、そうか、彼女らが魅音の言う援軍なのか…！
なるほど、育ち盛りのお年頃は、食うとなればまさに一騎当千！　三人では勝ち目のない戦いでも五人になれば話は別だぜ！
「何やら騒がしいから来てみれば……これは何事ですのーッ⁉」
「見りゃわかるだろ。これからランチタイムだ。ビュッフェスタイルだ。レナの手作り弁当に舌鼓だ。」
「そんなの見ればわかるでございますわぁ‼　どうして人様の庭でゴザなんか広げてますのー⁉⁉」
「神社は公共の場所だぞ。勝手に独占するな。」
「……圭一の言う通りですよ。みんなのお庭にしますです。」
「くぅ〜…やっぱり梨花ちゃんはいい子だなぁ…‼　座りなそこ！　一緒に食べよう！」

梨花ちゃんに場所を空けると、俺はさっさと沙都子に背を向けた。…その挑発的仕草に、沙都子はちゃあんと乗ってくれる。
「ちょーっとお待ちなさいな！　私はどこに座ればいいんですのー!?」
「お前に座る場所はないし、食べる分もない！」
「…だ、大丈夫だよ、…沙都子ちゃんの分もちゃんとあるから…、」
「ない！　沙都子の分も俺がいただく!!」
「そんなことは許せませんのー！！　梨花ぁ！」
「……はいお箸です。」
沙都子と俺は争うように弁当箱に飛びかかった。

「いやはや…。圭ちゃんは人を乗せるのがうまいわホント。…妙な才能、あるのかもしれないね！」
「はいお皿。魅ぃちゃんも梨花ちゃんも。」
レナが紙皿とお箸をひょいひょいと差し出す。…ということは、最初から五人で食べる準備がしてあったということだ。
「…ボクたちもがんばらないと、沙都子と圭一にみんな食べられてなくなってしまうです。」

「そうだね。よし！　おじさんたちも参戦といくかな⁉」
「いっぱい食べてね！　ちゃんとみんなの分、あるから☆」
「をーっほっほっほ！　そのハンバーグは渡しませんわぁぁあ‼」
「げはッ‼　肘は反則だろ沙都子‼」
「えッ、襟首を摑むのも反則でございますわよー！」
激しい戦いは、豊富な運動量と肘によるブロックで序盤、沙都子が優位に立つかに見えたが、箸さばきの致命的な差が形勢を一気にひっくり返す！
「あぁぁー！　最後のミートボールぅぅうぅぅぅ！！！」
「北条沙都子ッ敗れたりぃいいぃいいぃいいぃ！！！　うほッ、このミートボールのジュ～シィな味わいったら素敵ですことー！」
「なら私はこっちの卵焼きの最後の一個をいただきですわー‼　あぁぁ、とろけそうですことよー‼」
…そんな食べ方では喉に詰まらせて当然だ。俺と沙都子は仲良く同時に喉を詰まらせて窒息、ひっくり返ってもがく。
喉に詰まったにもかかわらず、頭を撫でて介抱する梨花ちゃん。レナはそれを見て、わたわたと興奮し赤面して恍惚の表情を浮かべている。そのレナの犯罪性の高い表情をいさめる魅音。

それはいつもと同じ食事の光景だ。

これからもこれと同じ光景が続くなら。…俺はどんな努力も厭（いと）わないだろう。

激しい戦いもひとまず落ち着き、ようやくみんなにも会話をするゆとりが生まれたようだった。

水筒（すいとう）からお茶をもらい、軽く一息をつく。

「日本語ってヤツはさ、どうしてこう味に対する賛辞（さんじ）が少ないんだろうな！」

「食事中の団欒（だんらん）って考えがそもそも近代に入ってからだからじゃない？」

「昔の人は無言で食事を済ませたそうだし。…作る人もちょっぴり寂しかったろうね。」

「きっと昔の人は食べるのに忙しくて、味を褒める暇もなかったのですわ！」

そりゃーお前だ！　そう言いながら沙都子とちょっかいを出し合う。

「でもね、おいしいの一言だけでもうれしいよ。…苦労の甲斐があったかな、って。」

レナはそう言って、ぽ、と頬を紅潮させる。

「……おいしいです。」

実に絶妙なタイミングで、梨花ちゃんの「賛辞」がレナを直撃する。…真（ま）っ直（す）ぐな瞳（ひとみ）。レナを悩殺（のうさつ）する無垢（むく）な表情。

「……は、」
「…は？」
意味不明な発声のあと、レナの頭からぽん！　と音がして煙の輪っかが上った。
「はぅ〜!!　…り、…りり…梨花ちゃん、お、お持ち帰り…じゃなくて！　ありがと〜！！！！」
「……本当においしかったですよ。」
レナは真っ赤になって興奮しながら、梨花ちゃんを抱きしめるとぎゅいぎゅいと音がするくらい頬擦りをしている。
「り、梨花ちゃんには褒めてもらったお礼に…じゃ〜ん！　これをサービスね！」
りんごのうさぎさんにさく！　と楊枝を刺すと、びし！　と梨花ちゃんに差し出した。
梨花ちゃんがそれを受け取ると急激に場のムードがおかしな方向に転がり始める。
「…なんだよ沙都子。その挑戦的な目は。」
「皆さんにはレナさんのりんごを獲得できるだけの賛辞が用意できまして？」
「ほほーぅ、強気じゃんよ。ボキャ貧のあんたにどんな賛辞が思い付くってぇの？」
魅音がその挑発に乗り、ニヤリと笑うと、沙都子も同じくニヤリを返した。
「ほほほ…では。ごらんあそばせ。」

沙都子は不敵な笑みから一度咳払いをすると、妙チクリンな声色を出しながらレナに言った。
「あ、…あのね！　……レナお姉ちゃんのお弁当、沙都子もおいしかったよ…。」
沙都子は上目遣いに舌っ足らずな口調ではにかんでみせた。
な！　…何が賛辞だ!!　こんなの泣き落としならぬ萌え落としじゃないか!?
だがレナには特効作用だ！　赤面して頭部をぐるんぐるんと回している…!!　だ、騙されるなレナぁあぁあ！！！！
「…は、…はぅ～ッ!!」
もちろん無理な話だ。レナは沙都子にがばっと抱き付くと頬擦りをしだす！
「かぁいいかぁいい!!　……沙都子ちゃんもかぁいい…よぅ…☆　……お持ち帰り…はぅ！」
すちゃ、さく！　びし！　沙都子にもりんごのうさぎさんが進呈される。
そのうさぎさんを頬張ると、沙都子は俺と魅音に再び挑戦的な眼差しを向けた。
レナ撃沈所要時間、わずか五秒。き…汚ねぇ！　そんな手ありなのか…ッ!!
「悔しければレナさんからご褒美がもらえるような賛辞をお考えあそばせ～！」
くっそぉおおおぉ!!　卑劣なワザを!!　第一それ、賛辞じゃねえし！！！
「沙都子。それで勝てたつもりとはね。あんたらの底の浅いワザとはわけが違うものを見せてあげようじゃない!?」

「そ、それは頼もしいぜ魅音！　そりゃあどんなワザなんだ!?」
「やるのは圭ちゃん。」「はあッ!?」
「ほっほっほ！　見せてもらおうではございませんかぁ。年増の足掻きをッ!!」
…魅音の提案する作戦は苛烈だった。だが沙都子に勝つにはこれしかない!!
俺はお茶をすすり終えると、とても自然に、和やかに切り出した。…完璧に。
「…本当においしいよな。…これってさ、全部手作りなのかい？」
「あ、うぅん。……実はね、これ…ほとんど冷凍ものなの…。」
「じゃあレナの手作りのって、どれだい？」
「……え…え？　……ぇぇと………その………は、恥ずかしいな……教えなきゃだめ？　………どうしても？」
レナは男の人と手作り弁当という相乗効果に、陶酔した表情になっていく。
「…………わかるよ。これ、でしょ？」
「え？　………ええ…!?　………はぅぅ……！」
レナはこれ以上ないくらいに赤面しながら、信じられない…という表情を浮かべる。
「な…なんでわかるかな…!?　…かな？　…はぅ……レ、レナの手作り……、」
もちろん、事前に魅音から聞いてあるからだ。…ここまでは完璧!!

ここで俺はちょっとはにかんだフリをしてから一心拍を置く。…次で…トドメだ。
「レナの、…匂いがしたから。」
場がシン、とする。
…レナは真っ赤になったまま、しばらくの間、身じろぎひとつできない。
ひぃ…と短く悲鳴をあげ沙都子も赤面する。もちろん俺もだ…。
「…レナの手作りの…りんごのうさぎさんが食べたいな……なんて…、」
いくら沙都子への対抗意識とは言え……俺は越えてはならない一線を軽く十メートルはオーバーしたように思う…。………と、その時。
どしゃぁあぁッ！！！　凄まじい音と共に叩きつけられたそれはタッパーいっぱいの、大量のりんごのうさぎさんだった。
「た、たたた食べてね圭一くん?!?　いいいい、いっぱいあるんだよいいい…ッ!!」
ぐはぁッ!?　俺は瞬時に、口に十数個のりんごを詰め込まれ卒倒する。
「はは、ははい、ぁ、あ～んしてぇえぇ…けけけ圭一くん……けけけけけ…☆」
俺はレナに捕獲されて強制膝枕状態にされ、口には次々りんごが押し込まれていく。というか、ふが、窒息して…死ぬぅ…。でもレナは許してくれなくて、奇声を発しながら次々とりんごを…俺の口に……次々………りん………ご………

「ほ、ほうははほほ…、ほへたひの…はひは……（どうだ沙都子。俺たちの勝ちだ）」
「圭ちゃん、殉職見事なり!!　どうよ沙都子!!　うちらの完全勝利だね!?!?」
「こんな手…信じられないですのー！！！　く、悔しくないもんッ！！！！」
がっはっは、どうだ沙都子、見てみろ。この圧倒的な量のりんご！　俺たちの完全勝利だな……と、口にしてやりたかったが、りんごで窒息中のため、心の中で言うしかない。俺は遠のく意識の中で自らの勝利を確信するのだった…。
…その時、ふっとレナが気付き、奇声をやめた。
「……梨花ちゃん、食べないの？　……塩水…強過ぎたかな…？　…かな？」
見ると、梨花ちゃんはりんごのうさぎさんから楊枝を抜き、両手で作ったお椀に載せ、途方に暮れている様子だった。
「……うさぎさんが…かわいそうです。……助けて、あげてほしいです。」
ぷッ！　………それはレナが鼻血を噴き出す音だった。
「……か、…かか…かぁいいよぅ〜……今夜こそ……絶対…お持ち帰りぃ………☆」
ぶるぶると痙攣しながら頭をぶるんぶるんと回し出す。
そして我に返るとしゅぱぱぱぱぱ！　と俺のまわりのりんごを回収し、お皿に盛り付けなおした。

「これでみんな寂しくないよね……！　これ、梨花ちゃんにあげる……ね……ね！」
うさぎさんのお皿を押しつけられた梨花ちゃんは唖然とする沙都子の手をレフェリーのように振り上げると、ぼそりと言った。
「……ボクたちが勝ちましたです。」
「……え、……えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ!?!?!?　逆転負けぇぇぇぇッ!?!?」
「……ほう…ほっひへもひぃひょ……（もう、どっちでもいいよ）」
こうして俺の死は、ただの無駄死にと決まったのだった。
食べ物で遊んじゃいけないよな…。でも、そのバチが俺だけに当たるのはすっごい理不尽な気がするぜ……。むぐぐぐぐ……。

■宝探しに行こう

神社でのお弁当バトルなど、今日全体の大騒ぎを思えば前哨戦。騒ぎに騒いだ一日だった。いつまでも永遠に続くかと思われた一日だったが、魅音がバイトの時間になったとかで、お開きになることになった。
「じゃあね、レナに圭ちゃん！　また明日ね～！」

「魅音、今日はありがとな。楽しかったぜ。」
「また明日ね～!! バイト、遅刻しないでね～！」
「じゃあ、ボクたちもここでお別れなのです。今日は二人でお買い物にいかなくてはなりませんのですよ。」
「そうでしたわ！ 今日はセブンスマートのお肉が安い日でございましてよ!? それでは圭一さん、レナさん！ また明日ですわー！」
魅音に沙都子に梨花ちゃんがいなくなり、俺とレナだけになった。
「じゃ、帰るか。」
「うん。そうだね。」
俺たちは今日の余韻を楽しみながら帰宅することにした。
五人ではしゃいでいた時は気付かなかったが、いつの間にかこんなにも影は長くなっていたのだった。
「…圭一くんも今日は付き合ってくれてありがとう。…楽しかった？」
「あぁ。楽しかった。まだ家に帰るのが惜しいくらいだぜ！」
「あ、……じゃあさ、ちょっとだけ寄り道しても…いいかな？ …かな？」
「寄り道？ 遠いのか？」

「ちょっと歩くけど…すぐ済むから！」
一日中歩いてはしゃいで、疲れたからだろうか。少し毒気を抜かれていた俺は、レナの揚げ足を取ることもなく、その申し出に頷いた。

細い道と斜面を越えると一気に視界が開ける。
そこは荒涼とした……、工事現場跡のように見えた。沢に臨む斜面に粗大ゴミの山がぶちまけられている。
きっと不法投棄だろう。問題になって新聞を賑わせたこともあった気がする。
「うっふふ！　今日は久しぶりだからぁ〜、何があるかな何があるかな…！」
「久しぶりって、…レナの用は、あの…ゴミの山かよ!?」
「ゴ、ゴミじゃないよ！　…レナにとっては宝の山だもん…。」
レナはすでにお約束のかぁぃぃモードになっていた。
レナにとってのどんなかぁぃぃものがここにあるって言うんだ??
「…わぁ…新しい山だ。……わくわく……わくわく…！」
粗大ゴミで作られた不安定な斜面をひょぃひょぃと降りていく。…さすがは田舎育ちだ。
「おい待てよ、今行くから……ぅわったたた……！」

都会育ちの俺はまったくもって情けない…。
「いいよ圭一くんはそこにいて〜！　すぐ済むからぁ！」
今日一日の疲れもあり、結局俺はここで待つことにする。
嬉々としたレナはそのまま粗大ゴミの山の向こうに姿を消していった。

……ひぐらしの声が空気をゆっくりと冷やしていく。ほどよい疲れが、ちょっとした眠気を誘うのがわかった。
その時、突然、砂利を踏む音と人の気配がし、俺は驚いて振り返る。
そこにはいかにもカメラマン風体の中年男が、俺に向けてカメラを覗いていた。
「おぉっと！　…びっくりした！」
「そ、それはこっちのセリフだぜ…。のんびり夕日を楽しんでるところを振り返ったら、見知らぬおっさんがカメラ構えてこっちをうかがってた、なんて言ったら普通ならこっちが飛び上がるところだぜ。」
「ごめんごめん。驚かすつもりはなかったんだ。君は雛見沢の人かい？」
その一言で、彼が雛見沢の人間でないことがわかった。
俺の名前を知らないだけで村人でないと断言できてしまうとは、やはりつくづく恐ろしいの

は雛見沢ってことか。
「僕は富竹。フリーのカメラマンさ。雛見沢にはたまに来るんだよ。何しろ、素晴らしい景色がたくさんで、何年通ってもフィルムに収め足りないんだよ。」
「しかし、写真ては被写体に断ってから撮るのが礼儀なんじゃないんすかね。」
別に俺は芸能人じゃないからな。写真を撮られて困るってこともないが、それでも黙って撮られたらちょっと嫌な気持ちになるよな。その胸中を、俺は口を尖らせてアピールする。
「ごめんごめん。メインは野鳥の撮影でね。断った例がないんだよ。あっははは！」
「ってことは何ですか。俺の扱いは鳥並というわけ？」
「いやいや、夕闇にたそがれる少年があまりにも絵になっていたんでね…。本人の許可を取らずにファインダーを覗いたことを謝るよ。」
大人は本当にうまい。程よくおだてられ、驚かされたことへの腹立たしさはすっかり引っ込んでしまった。
話の歯車はちっとも噛み合わないが、とりあえず悪い人ではないらしい。聞いてもない話や自己紹介などを勝手に続けている。その馴れ馴れしさには少し閉口しなくてはならなかった。
無論、この馴れ馴れしいおっさんに付き合う気はない。早くレナが戻ってきて欲しいものだ。
すると、粗大ゴミの斜面のはるか下にそびえるゴミ山の陰からレナが手を振っているのが見

えた。

「圭一く～ん！　待たせてごめんねぇ～！　もう終わりにするから～!!」

「おや、連れがいたのかい？　……彼女はあんなところで何をしているんだい？」

　富竹さんの疑問は非常にもっともなことだが、それはこっちが聞きたいくらいだ。…このゴミ山が宝の山とか言ってたけど、レナみたいな女の子が、この薄汚いゴミ山でどんな宝物を見つけられるって言うんだ？

　でもレナって可愛らしい普通の女の子に見えて、色々とぶっ飛んでるところとかあるからなぁ。かぁいいよお持ち帰りー！　って、健常な美的センスからはかけ離れたヘンな物をお宝として持って帰ろうとするのかもしれない。

　…この推理、案外当たってそうだな。俺はその想像にくぐもった笑いをしながら、富竹さんの問いに適当な返事をした。

「さぁねぇ。昔、殺して埋めたバラバラ死体でも確認してるんじゃないすか？」

「……え？」

　富竹さんの返事が一瞬戸惑った。

　…いけないいけない。つい昼間のみんなとのおふざけの延長で物騒なことを言ってしまった。

あぁ、今のは冗談ですよ…、そう言い繕おうとして富竹さんに振り返ったとき。…富竹さんは

さっきまで浮かべていた愛想笑いをすっかりなくした冷めた表情を浮かべて、ゴミ山に遠い目を向けていた。

「……嫌な事件だったね。…腕が一本、まだ見つかってないんだろ？」

「……え？」
今度は、俺が返事に戸惑った。
今、…富竹さんは何て言ったんだ……？
それを頭の中で整理しようとした時、背中を力強く叩かれた。
「あははは！　圭一くんお待たせ〜。待ったかな？　……かな？」
「やぁ、レナちゃんだったか！　ということは、あははは！　これはすまないねぇ！　馬に蹴られる前に退散するかな。驚かせてすまなかったね？　えっと、圭一くん！」
富竹さんは、勝手に何かを勘違いすると、現れた時と同じ愛想笑いを浮かべながら、去っていった。
…それは、とてもとてもあっという間のこと。
ついさっき富竹さんが口にしたナニカを問い質すため、自分の頭を整理する時間も与えられ

なかった。

「…圭一くん、怒ってる？　……どうしてだろ。……だろ？」

困惑する気持ちが表情に出ているのかもしれない。レナはそれを、ゴミ山の宝探しで待たせ過ぎたため、不機嫌になったと勘違いしたらしい。

別にレナは悪くないのだが、取りあえず叩いておくことにする。

富竹さんは、向こうに停めてあった自転車にまたがると、森の中に続く小道に消えていくのだった…。

「あ、…えっと、ごめんごめん！　で、どうだった？　掘り出し物は見つかったか？」

「うん聞いて聞いて！　あ、…あのね！　あったの！　ケンタくん人形ッ♪!!」

「ケンタくん人形⁉　…ってあれか、ケンタくんフライドチキンの店の前に必ず置いてある…あの等身大人形の？」

「…そう！　ケンタくん☆　……はぅ……かぁいい……お持ち帰りしたいぃ…☆」

レナのかぁいいものの定義がいまひとつ読めないが、取りあえず、本人は気に入っているらしい。

まぁ、取りあえず俺の読みはだいぶ当たったようだ。レナには常人とはちょいとズレた美的感覚があって、そのツボに入るお宝がよくこのゴミ山に紛(まぎ)れ込んでいるらしい。で、それを探

して掘り出すのを宝探しと呼んでるわけだ。
一見、普通の女の子っぽいレナの趣味だと考えると驚いてしまうが、半袖半ズボンで膝には絆創膏がいつも貼られているような悪ガキの趣味だったと考えたなら、そうおかしいものでもない。
人の趣味は色々だもんな。本人がこんなにうきうきして宝探しをしているのだから、それを否定しちゃ悪いだろう。俺はレナのゴミ漁り…、じゃない、宝探しの趣味を理解することにする。
「あれはゴミだろ？　だから所有者もいらないってことで捨ててるわけだし、お持ち帰りしたきゃしてもいいんだぜ？」
「うん。できるならさっそくお持ち帰りしたいけど…、他の山の下敷きになってるの。…簡単には掘り出せないし…。あそこ、灯りがないからすぐ暗くなっちゃうし…。」
レナはせっかく見付けたお宝を持ち帰れず、とても残念な様子だった。
「なら、明日また来てみるか。俺も手伝ってやるよ。今日のうまかった弁当の恩返しってことでさ。」
「…はぅ……あ、…ありがとう！」
ねぐらに向かう鳥たちが、夜の帳がすぐそこまで下りかかっていることを告げていた。

レナの言う通り、ここには街灯の類はないようだ。夕方だが、もうだいぶ薄暗くなってきているように思う。…さすがに今日はもう引き上げ時だ。

俺はもう一度、明日の宝探しの手伝いを約束してやると、もう帰ろうと提案するのだった。

「圭一くんが手伝ってくれる☆　…ケンタくんをお持ち帰りできる……はぅ…。」

立ち去る間際に、無人のゴミ山を振り返る。

…すると、さっき富竹さんが言い残した不気味な言葉が再び聞こえた気がした。

富竹さんの背中が見えない今、あの言葉は疲れた俺の聞き間違いではないかという気すらする。…でも、………聞き間違いなんかじゃない。確かに言った。

嫌な事件だったね。腕が一本、まだ見つかってないんだろ？

確かにそう言った。

…それが何を意味するにせよ、物騒な想像を掻き立てずにはいられなかった。

そして、その想像が、一日中、大はしゃぎで過ごした今日の雛見沢とどうしても相容れなくて…。……だから、あれが俺の聞き間違いであったとはっきり確認したかった。

「…なぁレナ。あそこで昔、なんかあったのか？」

「ダムの工事をやってたんだってね。詳しく知らないけど……はぅ…。」

レナは、さっき見つけたお宝、ケンタくん人形のことで頭がいっぱいらしくって、夢見心地

のような足取りのまま答えてくれた。

…そっか、あれはダムの工事現場跡だったのか。そう言えば、ゴミ山だけじゃなく、工事現場っぽい感じの資材置き場とか重機とかがあったような気がする。

「そのダムの工事現場でさ、何か起きなかったか？　…例えばさ、事故とか、」

「知らない。」

いやにはっきりした声だった。

それは返答というよりも、拒否に近い響きを含んでいるように聞こえた。

それは、……俺が今日までに知る竜宮レナからは一度も聞いたことのないような、凛とした声だった。

しばらくの間、俺は絶句する。するとレナは、俺を萎縮させてしまったのかと、すぐに表情を柔らかくしてくれた。

「実はね、レナは去年までよそに住んでたの。」

「え？　レナも転校生だったのか？　俺はてっきり…、」

「だからね、それ以前のことはよく知らないの。…ごめんね☆」

そう笑いながら、ぺろっと舌を出す。……その仕草は、俺のよく知る普段のレナだった。

だが、さっきの短い言葉には、はっきりとした意思が含まれていた。……よく知らないし、話題にもしたくない。そういう含みがはっきり感じられた。

考えてみれば当然だった。女の子にとって楽しい話題のわけがない。…腕が一本、未だ見付からないようなナニカなんて。

……腕が一本、未だ見付からないような、ナニカ。

…何だってんだ。……この温かで楽しい雛見沢に、ナニカって、何なんだ。

心の中で問い掛けようとも、答えてくれる誰かはいない。……いや、いるか。さっきからずっと聞こえてくる、ひぐらしたち。

雛見沢でナニカがあった。

ひぐらしたちだけが知っているような気がした。

■前原屋敷

「…圭ちゃんってさ、すごいお金持ちってわけでもないの？」
「何だよ、突然。…俺がいつリムジンで登校したよ？」
「月の小遣いはいくらもらってる？」
「千円。」
「あら。結構、小市民的ですのねぇ。」
「……お弁当のおかずも普通なのです。ボクはてっきり毎日うなぎの蒲焼弁当かと思っていたのです。」
「一体の何の話だ⁉　いきなり小遣いの額を聞かれ、それで小市民だの金持ちじゃないだの！」
「あはははは。ごめんねごめんね！」
俺の怪訝な表情を悟ったらしく、レナがカラカラと笑った。
「圭ちゃん家ってさ、すっごく大きいでしょ？　だから建築中から雛見沢中で前原屋敷って呼ばれて注目の的だったんだよ。」

「あんなに大きいお家だから、どんなお金持ちなのかなって、みんなで噂し合ってたの。」
あぁなるほど。納得。……確かに家は図体だけはでかいからな。そういう誤解もありえるな。
「私の推理では、お家を建てるのにお金をかけ過ぎて、貧乏になってしまったと考えてますのよ～！」
「……貧乏でかわいそかわいそです。」
…梨花ちゃんが哀れみながら俺の頭をなでなでしてくれる。金持ち扱いから瞬時に貧乏人扱いかよ…。
「あー、諸君らの楽しい想像をぶち壊すようで悪いが、うちは金持ちでも貧乏でもないぞ。極めて平均的な普通の家庭だ。」
「あれだけ大きな家は普通とは言わないって！　しかも玄関は立派で、門は大型車も入れるようになってるし‼　絶対、普通じゃないって！」
家のでかさが裕福さの尺度だとでも言わんばかりだな。
我が家がやたらとでかいのは、親父のアトリエを含むからだ。作業場はいくつもあるし、過去の作品があちこちに飾られ…。しかもサイズはどれもデカイ。
そんなこんなで、家族が生活する部分はせいぜい全体の三分の一ってところか。

将来、自宅で個展を開くことも考えての設計なので、人や車の出入りに気遣ったものになっているのだ。

……ちなみに魅音が立派な玄関と言ってるのはこのアトリエ側の玄関で、普段は締め切られている。実際に前原家が使用している玄関はごくごく平均的な、ささやかなものなのだ。見かけと中身は大違い、ってことだな。

「ぜひ今度、圭ちゃんの家を探検してみたいよなぁ。…お金持ちじゃないと主張しながらもあの邸宅(ていたく)!! 一体何が隠されているのか!!」

「か、かぁいいものが隠されてるといいなぁ! はぅ〜!」

「きっと家具を買うお金もなくなってて、殺風景(さっぷうけい)な部屋がいっぱいなのですわ!」

「……絨毯(じゅうたん)のお部屋なら、ぜひごろごろしてみたいですよ。」

「わぁぁ〜! それいいねそれいいね! レナもごろごろしたい〜!」

…なんか楽しそうに想像が膨らんでいってるな…。

でもまぁ。…遠くない将来、みんなを自宅に招待してもいいかもな。親父は女の子には甘いから、アトリエの見学を許してくれるかもしれない。

セミの声はいよいよにぎやかで、空はどこまでも高い。

暑いけど澄(す)んだ、初夏の匂いがした。

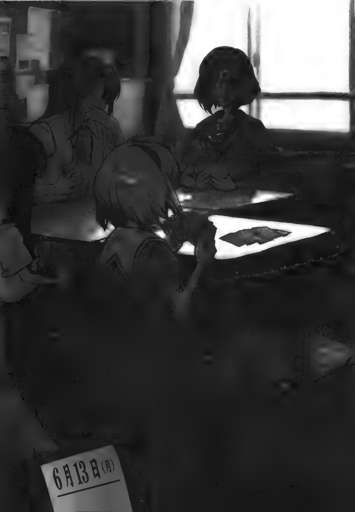
ダム現場のバラバラ殺人

鹿骨市興宮署はXX日深夜、建設作業員XXXX、XXX、XXXX、XXXX、XXXを殺人、死体損壊・遺棄の容疑で逮捕し、逃走中の主犯格XXXXを全国に指名手配した。調べによると、容疑者六人はXX日午後九時頃、雛見沢ダム建設現場内の作業事務所にて、現場監督のXXXXさんを集団で暴行して殺害、遺体を切断して遺棄した疑い。

XX日午前八時頃、鹿骨市内の病院から警察へ、「XXXXさんを殺害したことをほのめかす男性がいる」との通報があり、警察官が駆けつけ事情を聞いたところ、犯行を供述。供述通りの場所から遺体の一部が発見されたため、同日午後、殺人、死体損壊・遺棄の容疑で逮捕した。

他の容疑者も即日逮捕されたが、主犯格のXXXXは逃走中。警察は行方を追っている。

動機について「酒盛りをとがめられ口論になり、カッとなって殺した」などと供述しているが、それぞれの自供に食い違いも多く、さらに追及するという。


6月13日(月)

翌日の放課後、俺たち仲良しメンバーは放課後にもかかわらず、おしゃべりを続けていた。

普段ならみんなでぞろぞろ昇降口へ向かうのに、なぜ今日は残るのだろう？　レナがこっそり教えてくれるには何か面白いことが起こるらしい。

何が起こるやら見当もつかないが、とりあえずそれが起こるまで、俺たちは昼休みの延長のような時間を過ごすのだった。

「ケンタくん人形ー!?　あ～そりゃあレナのツボだわなぁ！」

「…レナが沙都子や梨花ちゃんをお持ち帰りしたくなるのはわかる。確かにかぁいいからなぁ！　だが、ケンタくん人形だけは理解できないぞ！　あんな眼鏡親父のどこがいいんだ！」

「そりゃーレナに直接聞けばいいじゃん？　どーせ『だってかぁいいんだもん☆』しか言わないだろうけどさ。あははは！」

レナのダム工事現場跡の宝探しは、仲間の誰もが知るもののようだった。

「レナはよくあそこ…ダム工事現場跡へ宝探しに行くのか？」

「……ちょくちょく見に行くって言ってましたです。」

「ふぅん。…年頃の女の子がゴミ漁りねぇ…。」
「…レナが楽しいなら、いいんだと思いますです。」
梨花ちゃんの言うのももっともだった。……いや、レナが何を趣味にしたって、人に迷惑さえ掛けなければ自由だろう。
それより、…俺が本当に聞きたいのは宝探しのことじゃなくて、あの宝探しの場所で何があったのか、だった。
「あそこは何だよ。ダムの工事か何かやってたのか？」
それは、言ってみれば昨夜から引っ掛かっている魚の小骨みたいなもの。我ながら些事にこだわっているとは思った。
「ははは！　まぁね、やってたよ、ダムの工事。何年か前に中止になっちゃったけどね。」
「……みんなで力を合わせて、戦いましたです。」
「戦った？　って、そりゃ何の話だ？」
「そうそう！　何しろとんでもない話だったんだよ！　雛見沢が丸ごとダム湖に沈むことに、一方的になってさ！」
…山奥の寒村が、ダムの建設に伴いダム湖に沈むことがあるという話は俺も聞いたことがある。どうも、そういう工事の計画がかつて雛見沢であったらしい。

で、梨花ちゃんの言う戦ったというのは、それに対する村人の抵抗運動のことを指すのだろう。…で、今ここに俺たちがいる、ってことはその抵抗運動が実ったわけだ。

そこへレナと沙都子がお手洗いから戻ってくる。

「ごめんねごめんね！　待たせちゃったかな？　…かな？」

「申し訳ありませんわね圭一さん。お化粧直しに時間をかけてしまいましたわー！」

「沙都子。便所には溜めてから行け。一気に出せて楽で早いぞ。」

「きゃ……きゃ…、花も恥らう乙女になんて口の利き方〜ッ!?!?」

誰が乙女だよ。沙都子が乙女なら絶対にしないリアクションで返してくる。

ドッタンバッタン！　あとはいつものノリだった。

■部活へのお誘い

しかし、何なんだろうな。俺はみんなに、今日の放課後に教室に残るように言われたのだ。

まさか補習のわけもあるまい。教室で何か遊ぼうというつもりなのか？

すると魅音が一度咳払いをしてから立ち上がり、大仰な身振りを交えながら言い出した。

「さてと。今日は会則に則り、部員の諸君に是非を問いたい！　彼、前原圭一くんを新たな部

員として我らの部活動に加えたいのだが…いかがだろうか!!」
「レナは異議な～し！」
「をっほっほっほ！　貧民風情が私の相手を務められるかしら！」
「……ボクも沙都子も賛成しますですよ。」
「全会一致！　おめでとう前原圭一くん。君に栄えある我が部への入部試験を許可する！」
「順を追って説明しろ！　何の部活だ？　俺はまだ入るとは言ってないぞ！」
「我が部はだね、複雑化する社会に対応するため、活動毎に提案されるさまざまな条件下、…時には順境、あるいは逆境からいかにして…!!」
「…レナは弱いから…いじめないでほしいな。仲良くやろうね。」
「レナは甘えてますわ！　弱いものは食い尽くされるのが世の常でございますわー！」
「……つまり、みんなでゲームして遊ぶ部活なのです。にぱ～☆」
梨花ちゃんだけが的を射た説明をしてくれた。
ようやく思い出す。そう言えば魅音には、ボードゲームなどを収集する趣味があったっけ。
ようするにこの「部活」は、魅音がこれまでに集めたゲームでみんなで楽しく放課後に遊ぼうと、そういう趣旨なわけだ。
もちろんただ遊ぶだけでなく、ちゃんと順位に応じて、一位にはご褒美があったり、ビリに

は罰ゲームがあったりと盛りだくさんらしい。

「先に断っとくけど。ままごと遊びみたいなレベルじゃないからね！　一勝一敗に命がかかってるくらい本気でかかった方がいいよ⁉」

「た、楽しくやれればいいじゃねえか…！　そう凄むなよ。」

「会則第一条‼　狙うのは一位のみ！　遊びだからなんていうといい加減なプレイは許さないッ！！！！」

「会則第二条！　そのためにはあらゆる努力をすることが義務付けられておりますのよ！」

…沙都子が言うと、どんな手段を使ってもいい、と言ってるように聞こえる。

「……もちろんボクもがんばりますです。」

「レナも弱いけどね、精一杯頑張ってるの。」

でも、みんなの言うのもわかった。

みんなで優勝を争うゲームに、楽しければいいやなんていう考え方はアンフェアだ。みんなが優勝を狙うなら、自分も狙わなければならない！　だからこそ熱い激突が起こり大いに盛り上がるに違いないのだ。

「よし、俺も……本気でやってやるぜーーー！！！」

雄叫びと共に拳を天に突き出すと、みんなは笑顔で頷いてくれた。

こうして俺は、いよいよ入部試験の洗礼を受けることになった。
「はぅ、がんばろうね圭一くん…。入部試験は大変だよ…。」
「お、おぅ、気遣いありがとうよ。何だかわからんが頑張るぜ…！」
「くっくっく！　圭ちゃんに一応忠告。レナも結構エゲツナイからね？　うっひっひっひ！」
魅音の嫌らし〜い笑いが、これから起こる暗闘を物語っているのだった…。
「さって、圭ちゃんの入部試験だけど、何の種目がいいかねぇ？」
魅音は教室のうしろにある生徒用のロッカーを漁っている。
…学校にゲームを持ちこんでいるのか。…ま、部の備品だからいいのだろう。
「難しいゲームは圭ちゃんだけに不利だからね。今日は誰にでもわかるゲームにしよう。スタンダードにトランプの……ジジ抜きはどうぅッ!?」
「よし！　受けてやるぜ！！！」
「罰ゲームは月並みに……一位がビリに一個命令！　この辺でどうかな!?」
「上等でございますわーー!!　をっほっほっほ！　私が一位になって圭一さんをビリにして、とんでもない目に遭わせてさしあげますわよー!!」
「みー！　ボクも一位になってビリの圭一に恥ずかしい罰ゲームをしてやりますのです。」
「み、みんな、初日からそれは可哀想だよぅ、…はぅ。」

ギロギロとした目線が恐ろしい…。どうやらこの部活とやら、…一筋縄(ひとすじなわ)では行かないようだな……。

「じゃあカード切って……みんなに配るねー！」

ジジ抜きってのはつまりババ抜きと同じゲームだ。

違うのは一箇所。ババが入っていない。かわりに最初にカードが一枚抜かれている。

つまり、抜かれたカードと対になるカードは最後に必ず一枚残ってしまうわけだ。

どれがジョーカーにあたるカードかわからない。そんなスリリングなゲームなのだ！

「じゃあ、一枚抜くね。」

レナが一枚カードを抜き、裏返しのまま車座の中央に置いた。

みんなそのカードをじっと凝視(ぎょうし)する。

「ま、終盤になれば自(おの)ずとわかるし。最初は様子見で行くしかないよなー。」

だが…他の部員たちは真剣だ。俺のような弛緩(しかん)した雰囲気(ふんいき)はない。

手札と伏(ふ)せたカードを見比べ、そして周りの人間の様子をうかがう。

まるで…伏せたカードの裏側が見えているような……。……まさか…。

「…このトランプ、結構傷物だろ。……まさか、…みんなにはその傷で、そこに伏せたカードがわかってる…？」

「会則第二条ですわ～。圭一さんも勝つために最善の努力をなさいませ～！」
「いくつかのカードは特徴的だから……圭一くんにもすぐ覚えられるよ。」
あ、あまりにもさらりと言われる…。
何てことだ…。仲間たちは、…いや、部活メンバーたちは、このトランプの傷を暗記していて、裏側がわかるというのだ…⁉
「じょ、上等だぜ‼　この程度でハンデになると思うなよ！！！」
…と威勢良くタンカを切ってみせたところで俺の不利は明白だった。ジジ抜きは本来、運のゲームだ。そこに、カードの裏がわかるインチキが横行しては俺の不利は火を見るより明らか‼
これはもはやただのジジ抜きじゃない。……麻雀風に言うなら…ガン牌ジジ抜き‼
「じょ、上等だぜぇぇぇ‼　来い！　貴様らの油断を逆手に取って返り討ちにしてくれるぜ‼」
…もちろん、そんな何の根拠もない自信も、すぐに打ち砕かれることになる…。
「くっくっく！　圭ちゃんの手札を右から言うよー？　3、4、9、J、Q。」
「ぐわあぁぁぁあ‼」
「……ちなみに、ジジはダイヤのJなのです。」

「うがぁあぁあぁあッ!!」

「どうカードを入れ換えたって見え見えですわ！　あがりですのー!!」

「ぐおぉおぉおぉお!!」

覚悟はしていたが……これほどまで…圧倒的とは…！！！

みんながみんな、ほとんどのカードの傷を暗記している上、しかもそのズルを活用することに何の躊躇もない！　確かに魅音が予め予告した通り、この部活はお遊戯のような甘いレベルじゃない！　勝てば官軍、フェアプレイなど敗者の戯言だとでも言わんばかりの弱肉強食の世界だった…!!

「お…おにだ…こいつらは鬼だ…！　レナ…は…鬼じゃないよな…？」

「ご、ごめんね圭一くん。……こっちがハートの3だよね？　……あがり！」

「おわぁあぁあぁあぁあぁあぁあ!!」

「をーっほっほっほ!!　圭一さん、さっそくは華麗にビリを決めてくださいましたわねぇ！」

「かぁいそかぁいそなのですよ、にぱ～☆」

ち、血も涙もない…!!　レナや…梨花ちゃんまで…!!

恐るべし部活。この部のOBなら、どんな過酷な環境でも生き抜けるに違いない…。

多分、クラス全員が無人島で自爆首輪付きで殺し合いなんて状況下では水を得た魚と化すだ

ろうな。嬉々としながらクラスメートを狩る光景が目に浮かぶぞ…。
「はいはい、ポイントは減点制ね。着順がそのままマイナス点。トータルで減点の一番少ない人が優勝！」
「……では圭一はビリなので5です。」
俺のスコアボードにさっそく減点「5」が書き込まれる…！
「…や、やっぱりさ、綺麗なトランプでやらないと圭一くんに不公平だよ…。」
「いいのいいの。圭ちゃんだって男だし。…これくらいの逆境ははね返せるよね⁉」
「貧民風情は逃げ帰って涙で枕をぬらすのがお似合いでございますことよ〜⁇」
やりきれぬ悔しさに震える俺の頭に、すっと小さな手がかかる。……梨花ちゃんだった。
「……ファイト、おーです。」
「お、…おー…。」
梨花ちゃんの励ましに俺はようやく冷静さを取り戻した。追い詰められた時にこそ冷静になれる。…それが俺の火事場の「力」だ。
冷静に考えろ前原圭一。……時間をかけてカードをよく観察しよう。レナの言う通り、いくつかのカードの傷はとても特徴的で、暗記は簡単そうだぞ。
よし、この状況で考えられる、少しでも勝率を上げられる全ての努力をしてみよう。

「わ、…うまいよ圭一くん。その調子！」
カードの端に特徴的な傷のあるカードは手や他のカードに重ね、見えないように工夫する。
「……角が割れているのはスペードの5だったはずです。……あがりましたです。」
「ふむふむなるほどな、あのカードはスペードの5と…。よし覚えたぞ…！」
他のプレイヤーの貴重なヒント発言は聞き漏らさない。全ての情報が武器だ。
そして俺の順番になった。上手の沙都子が仰々しくカードを扇状にして突き出す。
「ほしいのは7なんだが。……これかな？」
「…さぁてどうかしら…?? 引いてみないとわかりませんことよ…？」
「見えたッ!! これだっぁあぁあぁああ！！！！」
当たり！ スペードの7…！！！ おぉお！ と歓声が沸く！
「な、ななんですってぇえぇ!? 7は一番わかり難いはずですのに〜!?!?」
暗記じゃない。カードを選ぶ時の相手の微妙な反応でも充分に参考になるのだ！ よっしゃ、少しずつ戦い方がわかってきたぞ！
「ほら圭一ちゃん、カード隠さない隠さない！ ……この傷が確かダイヤの2だったよね。……あれッ!?」
魅音が自らの読み間違えに驚愕する。もちろん他の全員も…！

「…わ、…魅ぃちゃんがカード間違えるなんて珍しいねぇ。」
「ち、違う……。圭ちゃん……あんた…まさかぁ…ッ‼」
彼女らは「傷」でカードを識別しているのだ。その傷には「爪の跡」もある。
だから……付けたのだ。俺が…新しく‼
「ダイヤの2を…擬装したと言うんですの⁉　あ、…あじな真似をするでございますわぁぁぁあああ…ッ‼」
「……圭一、一矢報いましたです。」ぱちぱちぱちぱち。
「やったね圭一くん！　大善戦だよ⁉　だよ⁉」
首魁の魅音を討ち取った俺は、自らの善戦に有頂天だった。だが、すでにトータル得点では、優勝魅音、ビリは俺が確定している。
…くそ、トップを取ることはもはや不可能だが、…何とかビリから脱出する起死回生の大技はないものか…！　となれば…大将戦しかない！
俺は魅音の神経を逆撫でしそうな声色を慎重に選び、たははと笑いながら言った。
「へへ。まぁビリは確定しちまったけどなー。でも園崎魅音サマを華麗に騙して一本取れたんだからなぁ。それで大満足だぜ、へっへっへ〜！」
後に知るのだが、魅音はこの部活では常に一位を争うプライド高き王者だという。その魅音

にとって、入部試験に臨むド素人にただの一本でも取られるのは許せないことらしい。
　結果、俺の挑発にまんまと魅音は乗ってくる！
「この回、仮に圭ちゃんが一着になってもトータルビリは確定してるんだけど……嫌でしょ？」
「当り前だ！」
「一騎討ちしようじゃない。ラストチャンス！　勝てたら圭ちゃん一位で私ビリの大逆転！…なんてどう⁉　乗るでしょ⁉」
「な、何ぃ⁉　すでに優勝が確定しているというセーフティを全て投げ出そうってのか⁉　そのラストチャンスとやらに負けたら今日積み上げた勝ちが全部チャラになっちまうんだぞ⁉」
「くっくっくっく。そう、おじさんは次の勝負にそれだけのチップを積み上げるってことよ。……あれしきのことでこの私から一本取ったつもりなんて笑止千万‼　何しろ私は百パーセント次の勝負に勝てる自信があるからねぇ。自分の全てを賭けても何も恐ろしくないもの。…これくらいのリスクを自らに課すからこそ、さっきの一本を取り返せるってもんなんだよ。ねえ、圭ちゃん…⁉」
「く……、なんつー覇気だ…ッ‼　へへ、よっぽどさっきのダイヤの2が悔しかったらしいなッ！　その汚点を取り返すため、全てを投げ出す気迫、大いに気に入ったぜッ‼　よっしゃ魅

音、そのラストチャンスとやらを説明してもらうぞ‼」
魅音と最後に一騎討ちできれば充分だったが…、ここまで向こうが乗ってくるとはな…。へへ、面白いじゃねぇか！　今日の戦いの最終決戦に相応しいぜ‼
魅音は手元の二枚の手札の片方を捨て、今までゲームに加えていなかったジョーカーを加えると、それを背中に回してよく切った。
「右手のカードと左手のカード！　どっちがジョーカーか当てたら圭ちゃんの勝ち！　どう？これ以上ないくらいにシンプルな勝負だと思わない？」
………確かにシンプルだ。だが、今日やったガン牌ジジ抜きと本質は変わらない。つまり、提示されたカードの傷は何か、そして裏側は何かってことを探りあうのは同じってわけさ…！
「……い、今、後に回したときジョーカーを抜いた、ってことはないだろうな⁉」
「圭ちゃんが負けたら反対の手のカードも公開するよ。それならＯＫでしょ？」
「…よ、…よし、乗ったぜ…‼」
他の三人は思わぬラストギャンブルにごくりと唾(つば)を飲みこむ。
「さ、最後の最後にとんでもない大勝負になりましたわねぇ！　をほほほ、これは見物でございましてよ！」
「でも魅ぃちゃん、すっごい本気…。圭一くん、勝てるかな、かな…！」

「……どっちが勝とうとボクたちはビリにはならないので、高見の見物なのです☆」
「気に入ったよ前原圭一……！　さぁ勝負ッ!!　ジョーカーはどっちッ!?」
魅音がばっと両手に一枚ずつカードを持って俺に突き出す！　カードの背中だ！　背中の傷を見ろ!!　それが何のカードかを雄弁に物語るッ!!　つまりこいつは、…今日の俺がどれだけ多くのカードの傷を暗記できたかってのを試しているわけだ。へへん、なるほどな…。今日のが部活とやらの入部試験ってことなら、その最後に相応しい勝負じゃねぇか!!
じっと心を落ち着けて、両方のカードを見比べる。……右のカードは特徴的な傷がなく、まったく正体がわからない。
「……どっちだろ。…圭一くん…慎重にね！」
「は、話しかけるなレナ！　気が散るぜ…！」
……く、……記憶を探れ。今日のゲームに使ったカードなんだ。必ず俺はそのカードの傷を一度は目にしているはず…！
おや？　…左のカードには良く見ると傷があり、どこかで見たような気がしなくもない。
「あ、…あのカードは…!!　んが、むぐ！」
沙都子が何かに気付き思わず口にしてしまう。それを慌てて梨花ちゃんが口を塞ぐが遅かった。魅音が、ちっと舌を打つ。それは重要なヒントに違いなかった。

左のカードの傷は、俺が暗記するほんの何枚かのカードの特徴とは一致しない。
だが沙都子の反応を見る限り、左のカードが何であれ、それはゲームに登場したカードだということだ。ゲームに登場した、ということは絶対にジョーカーではないということ！　何しろ今日の種目はジジ抜き。ジョーカーは未使用なんだからな！
「……ふぅん。圭ちゃんは右のカードを疑ってる？　じゃあ右にする？　右？」
沙都子の反応だけで決め付けるのは早計過ぎる！　もっと…慎重に……あ！
…思い出した…!!　あの傷は…左のカードは……間違いない！　クラブの7！！！
「うん…。きっとクラブの7だね…。」
レナがこっそり助け舟を送ってくれる。そのお陰で俺は完全な確信を持つ！　あれは間違いなくクラブの7だ！
ということは、左がクラブの7なら、…残るは右。右がジョーカーだッ！！！
「ふ、…ふっはははははははは!!　魅音敗れたり、食らえぇぇぇぇぇ!!」
そしてッ、右のカードにまさに触れんとした瞬間、俺はぴた、と手を止めた。
「……ふっふっふ……くっくっく…。さすが魅音だよ。」
場の誰もが右のカードがジョーカーだと確信した矢先の俺の『止め』に皆がざわつく。
「??　え？　圭一さんは何を言ってるでございますの??　だって左はクラブ…、」

「……シーなのです。」
みんなが何事かと見守る中、魅音だけが、にや〜りと嫌らしい笑みを浮かべる。
「へー…。圭ちゃんはどうして右が『ジョーカーじゃない』って確信できるの？」
魅音からの思わぬ発言。俺を除く全員が困惑する。
「右のカードが何かは俺にもわからないさ。だが左のカードがクラブの7だってことだけはわかる。」
「じゃあ！　残りの右のカードがジョーカーなのじゃありませんこと!?　必ず左右どっちかがジョーカーという約束じゃありませんの！」
「あぁ。…左右のどっちかにジョーカーがあるのは本当だろうな。」
「……圭一は勘がいいです。」
「え？　梨花ちゃんそれってどういう…、」
へっへっへ…。どうやら梨花ちゃんも魅音のトリックに気が付いたようだな。
「つまりさ。…クラブの7は。…さっき俺が沙都子のスペードの7と合わせて捨てたカードなんだよ…ッ！」
みんなが一斉に場に捨てられたカードを凝視(ぎょうし)する！　ぐちゃぐちゃに捨てられたこの状況では真偽(しんぎ)はわからない…！

「つまり……魅音は捨て札を一枚拾って…左のカードに重ねている…つまりッ！！！」
「…そうか、わかった！　左のカードを…クラブの7に見せかけているんだね⁉」
魅音は、俺が左のカードをクラブの7だと見抜くことを最初から見越していたのだ！　普通なら消去法で安易に右を選び、ワナに掛かる‼　だが俺は見抜いた。魅音はさりげなく捨て札から一枚を取り、ジョーカーに重ねてクラブの7に偽装したのだッ‼　つまり、つまりつまりつまりッ！！！
このゲームが始まって初めて、魅音の顔に影がさしたのを俺は見逃さない。そして……俺は三回転半のひねりを入れてからビシリと指定したッ‼
「ジョーカーは……『左手』、そのクラブの7の裏側だぁぁぁあぁぁああぁぁぁあッッ！！！！！！」
あまりに熱過ぎる一瞬…！　その一秒間がその場の全員には何時間にも感じられた。
その沈黙を破り、始めに口を開いたのは…魅音だった。
「……初代部長として私も様々なプレイングを見てきたけど。……圭ちゃん。…あんたは…ベストだよ。…ベストオブザベストオブザベスト…ッ！！！」
おそらくは魅音の最高の賛辞だろう。魅音は観念し…カードを握（にぎ）ったまま、両手を下ろした。
……俺の……逆転勝利だッッ！！！！！！

梨花ちゃんがぽん、と俺の頭に手を載せ、俺の逆転勝利を祝ってくれた。
「にぱ～。なでなでしますのです。」
「へ、へへへ！　ありがとな梨花ちゃん！　どうだよみんなも見たかよ、俺の華麗な逆転劇を!!」
でも、レナと沙都子はきょとん、とした顔で…まるで幽霊でも見たかのような顔をしている。
…何だよ、今の俺の勝負に何かイチャモンでもあるのかよ。
「なんだよレナに沙都子。別に俺はインチキしてないだろ？　俺は正々堂々と！」
「……あの、圭一さん？　梨花は、慰めるときにしか頭を撫でませんの。」
え…？　それってどういう……？　その時、レナが短い悲鳴をあげた。
「け…圭一くん…ッ！　……こんなことって…ッッ!?!?」
レナが凍りつく。魅音が晒したカードを見て凍りつく。
な、何を見たってんだレナは…。ひ、左だろ？　ジョーカーはクラブの7の裏に隠して左だったんだろ!?
その不気味な沈黙を切り裂く魅音の不気味な笑い声…。
「圭ちゃんならさ。ここまで読んでくれる、と思ってたよ。………くっくっく！」
誰もが凍り付く。…いや、それは俺だけなのか…。

「賭けだった。圭ちゃんがおてんばさんの早とちりだったなら、負けてたのは私だった。圭ちゃんはさ、この負けを誇っていいよ。」

魅音が両方のカードを裏返す。……ジョーカーは……み、『右手』だった……！　クラブの7の裏には、全然関係のない、ハートの6が隠れていたのだ！

「え、えっとえっと、じゃあこれはつまりなんだッ!?　俺が左手のカードをクラブの7だと下手に見破ったがばかりに、搦め捕られちまったってわけなのかぁッ!?」

「圭ちゃんならちゃんとこのクラブの7を看破してくれると思ったよ…。もし看破せず運に託されていたら、私は二分の一の確率で負けてたね。でも私は圭ちゃんを信じた！　圭ちゃんは今日の戦いで我が部の新部員に相応しい成長を遂げて、必ずこいつを看破すると信じた！　そして、さらにその裏まで読んで安易に右を選ばないと信じた！　だからこのワナに引っ掛かってくれると確信できたんだよ！　だからこの負けは、負けではあるけれども負けじゃない。圭ちゃんがたくましき成長を見せたからこそ至った負けだった！」

「う、うおおおおおおおお、何てこったぁあぁあぁぁ…!!　深読みがむしろ逆にワナだったのかぁあぁあ!!」

「その負けぶり、実に見事なりッ!!　部長、園崎魅音の名において！　前原圭一、……あんたの我が部への入部を許可するッ！！！」

放心しがっくりと膝をついた瞬間、みんなはこの好ゲームを割れんばかりの拍手で称えてくれるのだった…。

「ま、とゆーわけでこれにて決着ッ!! 本日の優勝は私! 園崎魅音!! 栄えあるビリは…前原圭一～!!!」

みんながきゃっきゃと喜びながら拍手する。

敗北感はあったが、その傷口はとても鋭利で逆に爽やかなくらいだった…。

「魅ぃちゃんが後ろ手で細工した時、またやるんだ～って思ってどきどきしちゃった!」

「圭一さんが正解に触れる直前で止まったときには掛かった! って思いましてよ～!」

「……やっぱり入部試験の人は罰ゲームにならないとダメなのですよ、にぱ～☆」

「…え? ちょっと待て。お前ら全員、最初から全部、魅音がワナを仕掛けてるって知ってて見守ってたのか!? い、いかにもな感じで大盛り上がりしてたあれは何だったたんだ!?」

「……みー! 楽しくなるようにみんなで盛り上げましたですよ。」

…………お、

「お前らみんな鬼だぁぁぁああ! 人でなし～ッ!!!」

「さぁて圭ちゃんには罰ゲームだねぇ…! 今日は部活の初日だしねぇ。ソフトなのから行こうかなぁ。…いきなり登校拒否になられちゃ困るし!」

残りの三人が俺の両腕、両肩をがっちり押さえる。…女の子の力とは思えないくらいにがっちりだ。いやその、マジで身動きできない…。

「お、おいおい、何をする気だよ、罰ゲームって一体なんだー!!」

そんな俺に魅音が舌なめずりをしながら近づいてくる…。右手はポケットから何かを取り出そうとしているが、…まさか…ナイフとか!?!?

「くっくっくっく！　ほんじゃ行くよ～。覚悟しなぁ…、ひーっひっひっひ！」

「や、や、やめろおぉおおぉおぉ……ぉ……ぉ……!!!」

黄昏（たそがれ）の雛見沢に、俺の悲痛な断末魔（だんまつま）が木霊（こだま）していった…。

■魅音と下校

レナは部活が終わると同時にすっ飛んで帰って行った。

きっと昨日持ち帰り損（そこ）ねた、かぁいいケンタくん人形を掘り出しに行くのだろう。

だから今日は珍しく、魅音と二人での下校となった。

「宝の山かぁ。捨ててる連中も、まさかレナに感謝されてるとは夢にも思わないだろうねぇ。」

「あそこさ、ダムの工事現場跡。…なんかあったんだろ？　昔。」
「そりゃああったよ。戦いが！　座りこみやったりデモをやったり！」
聞きたい話とは少し違ったが、聞いておこうと思った。
「自分たちの土地がダム湖に沈むんだもんなぁ。俺だって戦うだろうな。」
「役人どもは本当に一方的だった。偉そうで威張ってた！　金で解決できないと悟るとあらゆる嫌がらせをしてきたんだよ!?　嫌らしいヤツらだった！」
「よく勝てたな…。相手は国だろ？」
「村長や村の有力者たちがね、方々に陳情した。東京にも行ったし、いろんな政治家に根回しもした。……そうしてる内に計画は撤回されたんだよ。私たちの完全勝利だった！　あっははは！」
「暴力沙汰とかには…ならなかったのか？　傷害事件とか…殺人、」
「なかった。」
……ぴしゃりと言い切られた。
レナの時と同じ。言葉にはピリオドが込められていた。
富竹さんは「事件」と言い「腕が一本見つからない」と言っていた。俺はてっきり…バラバラ殺人とかがあったのかと思っていたのだが…違うのだろうか。

でも、なぜだろう。…レナには知らないと言われ、魅音にはなかったとはっきり言われたのに、……なぜか納得できない。彼女らが、本当のことを知っていながら口を閉ざしているように感じたからだ。

…だが、知ったとしても、何だというのか。

知って何かをしたいわけじゃない。…ただその、…気になってすっきりしないというだけのことなのだ。

収まりのつかない俺の好奇心は、胸の中で所在なくうなだれるのだった…。

「じゃね、また明日ねぇ！　圭ちゃんそれ、家に帰るまで消しちゃダメだからね！」

「わかってるよ消さねぇよ！」

魅音は俺の顔をちらちらと見ては笑いを堪えている。……いったい、どんなえげつないラクガキをしたのだろうか…。

今日の部活の罰ゲームに勝者の魅音が指定したのは……、マジックで顔面ラクガキの刑だった…！

何しろ自分の顔に書かれているのだ。鏡を見せてもらえなかったから何を書かれているのかわからない。でも、みんなのあの笑い転げようから見て、そうとうエゲツないことが書かれているに違いない…。

お、覚えてろ魅音め…！　もし逆の立場になったら、貴様の顔面にねっちりと！　タワシじゃ落ちないくらいラクガキしてやるからなぁ…！！！
自宅に着き、見事にお袋と鉢合わせして、俺は改めて恥をかくことになったのだった…。

自宅

自宅は妙な緊迫感に包まれていた。
その気疲れするムードの元凶は、どうやら親父のようだった。おそらく、新しい絵のアイデアが行き詰まっているのだろう。
煮詰まった時、親父は短気になる。子連れ熊みたいな感じで、イライラしながら家中をウロウロしているのだ。こういう時は無理に刺激しない方がいいことを俺は知っていた。ちなみに俺は親父とはまったく逆で、ヤバければヤバいほど冷静になる性質だ。
となれば、家にいるのは得策ではない。俺は荷物を置いて着替えると、とっとと表に出た。
そして自転車にまたがり、どこでどう時間を潰そうか思案する。
本屋で立ち読みでもできればいいのだが、町は自転車でも遠い。今の時間から出掛けたら、帰りは暗くなってしまうだろうからよしたい。

何しろ雛見沢は田舎だから街灯の数は少なく、夜は本当に真っ暗で、ついでに薄気味悪い。
あ、そうだ。俺、昨日、レナと約束してるんじゃなかったっけ。レナの宝探しを手伝ってやるという約束じゃないか。
レナは今頃、あのダム工事現場跡のゴミ山で、積もり積もった粗大ゴミと格闘しているに違いない。…昨日約束しているし、ここいらでひとつ、恩を売っておくのも悪くないだろう。
…何しろ、妙な部活に巻き込まれてしまった以上、今後もあの苛烈な戦いに否応無く参戦させられるんだからな…。味方はひとりでもいた方がいい。
そんなことを考え、ちょっぴり打算的に俺は足をダム工事現場跡へ向けた。
だが、それだけが本音じゃない。
……ひょっとするとまたあそこに富竹さんがいるかもしれない。
それも本音だった。

■ダム工事現場跡

ダム工事現場跡だとわかって見渡してみれば、なるほど、そうであることを物語るたくさんのものが残されていることがわかった。

おそらく、ここに大きな堤(つつみ)が作られ、それが沢を堰(せき)止め、やがては緩慢(かんまん)に村を水没させることになっていたのだろう。
それに対して村人が反対運動を繰り広げ、ダムの計画を中止に追い込んだ。
……その時、何か物騒な事件でも起きたのだろうか。
「お、…いたいた。」
レナが斜面のゴミ山で奮闘(ふんとう)しているのが見えた。
一心不乱に作業する様子を見る限り、レナが欲するお宝は相当しっかりと埋まってしまっているようだった。
今日はここには富竹さんは来ていないようだ。…俺は少しだけ肩を落とすと、レナを手伝おうと危なっかしい足取りで粗大ゴミの斜面を降りていった。
「よぅレナ！　精が出ますなぁ。」
「……わ、わ、圭一くん！　…どうしたの、こんなところへ。」
どうもレナも、俺が今日手伝うって約束を忘れてるらしいな。
「事故発生の緊急通報を受け参上しました！　負傷者はどこでありますか⁉」
「え⁉　え⁉　事故って⁉　…え⁉」
「ケンタくん人形がゴミ山に生き埋めになっているとの通報でしたが…⁉」

「え？　…っな、なぁんだ。びっくりした…。圭一くん驚かさないでよ。」
「あははは、冗談だよ。レナがひとりで困ってるだろうなって思ってさ、手伝いに来てやったんだよ。昨日、手伝うって約束したじゃねぇか。」
「……へ？　…って……レナのため…に…？　……はぅ……。」
レナはぽぅっと赤面する。…約束を忘れていたわけではないようだが、守られるとも思わなかったらしい。
妙なもんで、期待されてない方が、なら頑張って手伝ってやろうって気持ちになってくる。
「冗談だよ。こっちまで恥ずかしくなるだろ、いつまで赤面してんだ！」
「……て、…え？　……冗談って…どこからだろ？　どこからだろ!?」
「ほれ、どいたどいた。で、どこだよケンタくんは。」
「…あ、ごめん！　……ほらこの隙間から…見える？」
「こりゃあ……本当に生き埋めだなぁ…!!」
生き埋めのケンタくん人形を、複雑に絡み合った木材や建材がまるで牢屋(ろうや)のように閉じこめていた。
レナの話によると、昨日まではこうではなかったらしい。どうも昨夜のうちにまた不法投棄のダンプが来て、またゴミを捨てて行き、さらに深く埋めてしまったというのだ。

「お前、この凄まじいゴミ山をひとりで発掘するつもりだったのか？　その細い腕で⁉」

「……でも……ケンタくん人形…かぁいいんだもん……。お店のケンタくんには鎖がついてるけど……これならお持ち帰りできる……はぅ………。」

「…はー。レナって、本当にかぁいいものをお持ち帰りするためには、どんな苦労も厭わないんだなぁ…！　負けたぜ。このゴミ山にひとりで挑もうとしたその度胸に惚れて、この前原圭一さまが手伝ってやるぜ！」

「え、あ、ありがとう！」

このケンタくんを諦めることになれば、レナは多分、町にあるケンタくんフライドチキンのチェーン店を襲ってでも人形を強奪するだろうからな…。レナの保護者として、断固犯罪に手を染めさせるわけにはいかない！

「どいてろよ。俺がやってやるぜ。」

レナはまだ赤面しているが、今回はからかわないでおく。今は時間が惜しい。

何しろ、不法投棄のダンプは今夜もやってくるかもしれないのだ。そうなれば、状況はさらに悪化する。現状でもかなりやっかいな発掘作業になりそうなのに、これ以上になったらもうどうにもなるまい。

「圭一くん、レナも手伝えるよ。手伝わせて。」

「かえって邪魔んなるから下がってろって！　いよいしょぉおおッ!!」
四の五の考えててもしょうがない。俺は覚悟を決めると、手当たり次第に廃材を引っこ抜き、放り投げていった。
それは決して楽な作業ではない。すぐに汗まみれの埃まみれになった。
「…ぜぇぜぇ、はぁはぁ！　ほ、本気でやるなら…斧とかのこぎりとかがいるかもしれねぇなぁ…！　これ以上は引っこ抜けない。あとは切断だなぁ！」
「もういいよ圭一くん…！　すごい汗だよ。……そんな…無理しなくてもいいんだよ…。」
「レナのためにやってるだけだ。気にするな。」
レナは言葉をどもらせると、さっきまでよりさらに真っ赤な、ゆでダコみたいな色で赤面した。
う、言葉を間違えた…。レナを犯罪者にしないために頑張ってるんだって言うつもりだったんだが……。まぁいいか。
男が手伝うと口にした以上、後には退けない。その後も素手で出来る限りの発掘を行なったが、それ以上はもう素手でどうにかなるレベルではなかった。
「さすがに…休憩……！　こいつは…手ごわいぜ…!!」
俺は草むらの斜面にどかっと大の字になって倒れこむ。口では悪態をつくが、実は汗がちょ

っと気持ちよかった。
「ごめんねごめんね…。すごい……汗だく……。」
レナのハンカチがペタペタと額に触れる。その感触も気持ちいい。
「あ、あのね、ちょっとここで休んでてね！　私、家近いから。麦茶とか持ってきてあげるね！」
ハンカチを額に置くと、レナはぴゅーっと駆け出して行った。
「……からかい甲斐もあるけど、手伝い甲斐もあるヤツだよな。竜宮レナか。いいヤツだよホント。都会の普通の学校に通ってたら、結構モテてるんだろうになぁ。」
もっとも、粗大ゴミ置き場でゴミ漁りが趣味なんて誰も想像できないだろうが。
レナの駆けて行く足音が完全に聞こえなくなり、静かなひぐらしの合唱だけが辺りを支配していた。
「……………………。」
少し起き上がり、レナの姿がないことを改めて確認する。……大丈夫、レナだけじゃなく誰の姿も見えない。
俺は体を起こして、さっき見付けたモノへ近付いて行った。
それは、紙紐で縛られた新聞や週刊誌の束で積み上げられたゴミ山だった。

さっきのが見間違えでなければ……。たしか……この辺に積まれていたと思う……。
………あった。
それはあまり上品でない写真週刊誌を束ねて縛ったものだった。過去数年分のバックナンバーが順番通りに重ねられている。

〝……嫌な事件だったね。…腕が一本、まだ見つかってないんだろ？〟
富竹さんの言葉通りなら、それは間違いなくバラバラ殺人を示唆していた。
最近は物騒な世の中だ。そういう気色悪い事件は後を絶たない。
そして、そんな事件に好奇心を寄せる大衆だって大勢いる。ならば載っているはずだ。この手の写真週刊誌には必ず、どこかに。
手早く梱包を解き、雨で貼り付いたページを器用にこじ開け目次に目を通す。
ない。次。ない。ない。次。
事件がいつあったのかわからないのが痛手だった。犯人も被害者もわからない。わかるのはここであったということだけ。…時折顔を上げ、レナがまだ戻ってこないかを確認した。
この手の写真週刊誌には大抵、エッチなグラビアが付き物なので、こんなものを漁ってるところをクラスメートになど見られたくない。…でも実際はそれだけではなかった。

レナも、魅音も、知らないと言った。
だが間違いなくそれはあったのだ。……富竹さんが嘘をついていない限り。
レナも魅音も。「うん。あったね。」と一言言ってくれれば、俺の妙な好奇心も収まったのかもしれない。でも、彼女らはそれを拒んだ…。
レナも魅音も口にしたくないような「事件」。
好意で隠してくれていることをわざわざ暴(あば)こうとしている……。
さっきから自分を襲うこの不快な気持ちの正体は、そんな気遣いをしてくれる仲間たちへの背徳感(はいとくかん)だった。

〝雛見沢ダム工事現場・作業員リンチ死！　バラバラ殺人!!〟

…あった。
特集記事は後のページで、巻頭のカラーページに写真が出ているようだった。
特集ページは雨か何かのせいでがっちり貼り付いてしまって簡単に開かない。
そろそろレナが戻ってきてもおかしくない頃だ。…とりあえず今はそちらを諦め、写真ページの方を開く。

警官が死体袋を運び、報道陣が一斉にフラッシュを浴びせているシーンだった。写真は黒ずんでわかり難いが、白抜きの見出しはくっきりと読み取れた。
〝雛見沢ダムで悪夢の惨劇！　リンチ・バラバラ殺人！〟
…あったのだ。……やっぱりあったのだ。
〝犯人達は被害者を鉈やつるはしや斧で滅多打ちにして惨殺し、〟
〝さらに斧で遺体を頭部・両腕・両足・胴体の六つに分割、〟
見出しだけでも充分わかる、……それは…あまりに無惨な…事件だった。
普通、リンチってのは殴ったり蹴ったりじゃないのか…？　鉈やつるはしや斧で？　こんなのはリンチですらない。文字通りの惨殺、残虐殺人だ…。
何人もでよってたかって。…鉈で。…つるはしで。…斧、で。

…その時。その人影は、肉厚の鉈を携えて俺の後ろに立ちはだかった。
その人影は俺を見下ろし、………その鉈を、すぅっと振り上げて……、

「う、わあああぁあぁあぁあぁあッ！！！」
「きゃッ！、ごご、ごめんなさい…！！！　驚いたかな!?　驚いたかな!?」

レナもまた、俺の声に驚き、その手の鉈をどさりと草むらに落とした。

「圭一くんね、さっきほら、斧とかのこぎりとかがあると便利だって言ったじゃない⁉　そ、それでねレナ、物置からちゃんと鉈、持ってきたんだよ…‼」

レナは慌てふためきながら弁解(べんかい)と謝罪(しゃざい)の言葉を続ける。…どうやら、俺は相当険(けわ)しい目つきをしているらしかった。

「ご、ごめん…、ちょっとオーバーに驚き過ぎたかな。」

「う、ううん、…こ、こっちこそごめんね！　…ごめんね！」

…もうすぐ日が落ちてしまう。辺りは急に薄暗くなり始めていた。……体はくたくただし、続きを明日にしてもいいだろう。

「最後の梁(はり)はその鉈じゃないと壊せそうにない。せっかく持ってきてくれたんだし。…明日借りるよ。な？」

「…うん。」

「なにしょんぼりしてるんだよ。明日にはケンタくんが掘り出せてお持ち帰りできるんだぜ⁉」

「そうだよね。…あははは！　早くケンタくんをお持ち帰りしたい〜！」

互いに、これ以上謝り合っても意味がないことは充分にわかっていた。

俺たちはレナの持ってきてくれた麦茶で喉を潤すと、すっかり冷えてしまった汗を拭き、帰路につく。

……脱いだ上着にくるんで隠した写真週刊誌が、今はとても後ろめたかった。

■雛見沢ダム計画

昭和××年十月。
総理府告示第×××号を以て、雛見沢発電所電源開発基本計画が発表された。
計画された「雛見沢ダム」の規模は甚大で、雛見沢村の受ける影響は余りに重大だった。
雛見沢ダムにより水没する地域は雛見沢、高津戸、清津、松本、谷河内の五ヶ部落に及び、水没世帯は二九一戸、人口一二五一人、小学校一、中学校一、郵便局一、農協支所一、営林署貯木場一、神社五、寺院二、魚族増殖場一、等多数の公共的文化的生産的施設と信仰の対象を永久に湖底に没するものである。
この天恵豊かで住みよい郷土を、血と汗をもって築いてくれた父祖幾百年の艱難辛苦を思えば余りに痛ましいことであり、水没地域はもとより全村は郷土死守の決意を固め次々に決起、団結し鬼ヶ淵死守同盟を結成。ダム建設の中止、又は支流への計画変更を強力に要請し続けたのである。

平和的かつ民主的な話し合いを求めるも、政府とその傀儡である電源会社総裁ＸＸＸＸＸはこれを拒否。筆舌に尽くし難い極悪非道を以て、村民の民主的運動と雛見沢の郷土を踏みにじったのである。だが村民はこれに怯むことなく益々団結、郷土死守の決意をさらに強固にしていき、ついには勝利を収めるのである。

今日、恐るべき雛見沢ダム建設計画は、その再開が無期限に凍結されている。村民はこの凍結が自らの団結の崇高な力によってなされていることを理解しており、そしてこの恐るべき計画が依然撤回されていないことも理解しているのである。

すでに鬼ヶ淵死守同盟はその役割を終え解散しているが、そこで育まれた団結の炎は消えていない。村民の心にこの炎が灯り続ける限り、再び郷土が湖底に沈む災厄に見舞われることは断じてあり得ないのである。

鬼ヶ淵死守同盟会長　公由喜一郎書

■週刊誌の特集記事

雛見沢ダムで悪夢の惨劇！　リンチ・バラバラ殺人！

X月X日、XX県鹿骨市の雛見沢ダム建設作業現場で起こった血も凍るバラバラ殺人。列島を震撼させたショッキングな事件でありながら、警察はその細部を語ろうとしていない…。一体、雛見沢ダムで何が…？

「始めは殺すつもりはなかったのでしょう。ですが被害者がシャベルを振り回して抵抗を始めると、加害者たちも一斉に得物を手にし、一気に殺し合いにエスカレートしたのです。」と前述の捜査関係者A氏は語る。

血の惨劇が終われば、そこには誰の眼にも生きているとは思えない無残な屍…。日頃から粗暴な振る舞いで容疑者たちをいじめていたXXさん。始めはちょっとした仕返しのつもりだった…。

「加害者たちは皆、自らの罪深さに恐れおののきました。警察へ出頭しようと言い出す

者もいたのです。」
　だがリーダー格のＸＸだけは、死体を隠そうと提案した。始めは渋った彼らも、次第に捕まりたくないと思い始めるようになる。人数は六人いて死体を隠す方法がいくらでもある建設現場…。彼らは揚々（ようよう）と死体を隠し、その場を離れるはずだった…。
「しかしリーダー格のＸＸは、他の五人が良心の呵責（かしゃく）に耐えられなくなり、自首して事件が発覚することを恐れ、恐るべき方法でその口封じを図ったのです。」
　なんとＸＸは死体を人数分に切断し、それぞれの責任で隠すという悪魔の方法を思いついたのである。
「ＸＸは、単なる暴行致死でなくもっと恐ろしいバラバラ殺人に仕立て上げ、ひとりひとりを深く関与させることで結束を固めようとしたのです。」
　ひとりひとりを深く関与させる。…これが意味するものは何なのか。Ａ氏は重い口を開く。
「ＸＸは、ひとりひとりに自らの手で遺体を切断するよう命じたのです。彼らは始めは渋りましたが、結局誰も逆らえませんでした。」
　毒食らわば皿まで…ということなのか。かくして、想像するのも躊躇（ためら）われる恐るべき

血の儀式が始まったのである。

「加害者たちは泣きながら嘔吐しながら、死体を切断しました。頑強に抵抗する者もいましたが、XXに『今さらもうひとり死んでも同じことだぞ。』と凄まれ、結局は抗えなかったのです。」

だがXXの目論見はわずか一晩で崩れた。死体の切断に最後まで抵抗したXXXが、乱闘時の傷の治療に訪れた病院で、泣き崩れながら告白したのである…。

犯人たちは芋づる式に逮捕されたが、リーダー格のXXの行方だけは摑めていない。また、XXが隠した右腕部分も発見されていない。警察の連日の捜査にもかかわらず、悪魔のような男が未だ法の手を逃れているのである。警察は何をしているのか…。

「XXが死体（右腕）を沼に捨てに行くと言っていたらしいのです。実際、沼の近くにXXの乗用車が乗り捨ててあったのですが、その後の足取りはまったくわかりません。」

仲間の裏切りを最後まで疑っていたXX。仲間が警察に自供することを見越して、沼以外の場所に逃れた可能性は拭いきれない。

「もちろんそれも疑っています。…車はないはずなので、逃げられる範囲にも限度があると思うのですが…。署内では、死体を捨てる時に誤って自分も沼に落ち、溺れてしまったのではないかと囁かれています…。」

この沼、地元では底なし沼と恐れられ、その名を鬼ヶ淵と言い、沼の底の底は地獄の鬼の国につながっているのだという。

まさに地獄の鬼とも言える残虐非道のＸＸ。まさか沼から元の地獄へ帰ったのでは……？




6月14

この学校は、学校として機能しているのか本当に怪しい。中でも体育の時間はめちゃくちゃだ。

みんなで一緒にやったのは最初の準備体操だけ。その後は先生すらいない。みんなてんで勝手に遊び始めている。

「ほ、本当にこんなのが体育の時間でいいのか…。仮にも授業中なんだろ…。」

「仕方ないじゃん。年齢も性別もバラバラだしさー。」

「一応ね、体育の時間は校庭で体を動かすのだけが決まりなの。」

みんなが体操服に着替えているという外見以外は、昼休みの校庭と何も変わらないように見えた。

…まぁ確かに、雛見沢の子たちは軟弱な都会っ子とは基礎体力が違う。わざわざ体育の授業など受けなくても、充分に鍛えられているのかもしれない。

「……やれやれ。きっと、教育委員会はこの学校を見落としてるんだろうなぁ。」

「何よ。んじゃ圭ちゃんにだけ特別メニューで体育授業ってことにしてあげよっかぁ？　くっ

くっくっく！」
魅音がにやにやと笑う。じょ、冗談じゃねぇ。魅音の特別メニューなんてきっと、どこかの海兵隊の訓練キャンプみたいなのに決まってる！
「……お待たせしましたです。」
「さぁてご一同様。今日の体育は何をいたしましょう⁉」
前の授業の片付けで着替えが遅れていた梨花ちゃんと沙都子が合流した。これで仲間五人は勢揃いだ。
「おっしゃ。これでいつものメンバー全員集合だな。」
「さて魅ぃちゃん、今日はいったいどんな体育をやるのかな？　やるのかな？」
……ふぅむ、と魅音が偉そうに腕組みして周囲を見渡す。
「瞬発力と持久力。スポーツの世界においては仲間などいない。全てがライバル！　信じられるのは己の肉体のみ！」
「何だそりゃ。漫画の読みすぎだろ。」
「ってわけで温故知新（おんこちしん）！　古いながらも全ての要素を詰め込んだ屋外乱戦の王様、『鬼ごっこ』で行こう！」
すごい前振りの割りにはなんとも可愛らしいお遊戯が出てきたものだ。

「望むところですわー！！！　のろまな圭一さんはイの一番に鬼ですのー！」
「……ボクだって負けませんです。」
「レナもがんばるもん！　今日は負けないぞー!!」
「…何でお前ら、そんなにやる気満々なんだよ…。」
「会則第三条ッ!!　ゲームは絶対に楽しく参加しなければならない！！！」
「じゃ、これ、部活なのかよ!?」
みんなが不敵に顔を見合わせる。
のんびりと日頃の運動不足を解消…、なんてのはどうやら甘えた考えだったらしい。どうやらこいつは…、再び「部活」ってヤツになっちまうようだ。
先日はトランプで勝負したが、今日は肉体で勝負する。……なるほど、優劣が競えるなら種目は本当に何でもござれなんだな。…どうやら俺は、とんでもない部に引き込まれちまったみたいだぜ…。
しかし、みんな大した自信だ。俺は仮にも男だぞ。身体能力的で同世代の女子に後れを取るとは思わない。にもかかわらず、魅音や沙都子は勝てるつもりでいるし、レナは俺の不利を憐れんでいる。
「…上等だぜ。鬼ごっこ、乗ってやらぁぁぁぁぁぁ！！！」

ルールはこうだ。

授業終了のチャイムまで逃げきれた者が勝者。ただし鬼の交代はない。鬼に触られた者もまた鬼となるのだ。結果、鬼はどんどん増殖していく。終盤は鬼の方の人数が多くなり、阿鼻叫喚の包囲戦となるだろう。

「ここいらではこの遊びのこと、『ゾンビ鬼』って呼んでるけどね。」

「なるほど。食われたヤツがゾンビ化して増殖するからな。」

「…なんでそんな怖いこと、言うんだろ。…だろ？」

「レナを捕まえたら、生きたままお腹を食い破ってやるからなぁ…!!」

「…や、やや、やだよ圭一くん、そんなのや…！」

梨花ちゃんがあたふたとするレナの頭に、ぽんと手を載せた。

「……大丈夫です。圭一に食われる前にボクがやさしく食べてあげますですよ。にぱ～☆」

「梨花、それは全然慰めになってませんわ。」

沙都子のもっともらしい突っ込みに、俺も激しく同意する。

「んで魅音、最初の鬼…ゾンビはどうやって決める？　ジャンケンか？」

「一応授業時間だからね。問題で決めよう。問題を出すから答えられなかった人がゾンビ！」

どこがどう授業なのか全然わからん。

「『六』は英語で⁉」

はぁ？　突然、妙なことを聞かれた。……六は英語で？　妙なトンチクイズでないなら、こんなの小学生にだってわかるぜ。

「シックスだッ‼」

「圭ちゃんＯＫ！　なら『靴下』は⁉」

「ソックスだね！」

「レナＯＫ！　アルファベットの後ろから三つ目！」

「……エックスなのです。」

「梨花ちゃんもＯＫ！　では『性別』は英語で⁉」

「もちろんわかりますわ～‼　セッ……、」

沙都子が答えきろうとしてぐっと言葉を飲みこんだ。…なるほど。実に嫌らしい…、というか下世話な問題だな。

「沙都子は大人だもんねぇ～？　知らないわけはないよねぇ⁇」

「…し、知ってますもの…！　知ってるもん…‼」

「じゃあ言ってごらんよ。『アレ』だよ『アレ』。『アレ』は英語で～⁉⁉」

沙都子に卑猥な単語を口走らせようと追い詰める魅音。……魅音って黙ってりゃそこそこ可

愛い子なのになー。何でこう下品なネタとか得意なんだろーなー。
逆に、普段は生意気盛りの沙都子は、答えはわかりつつも恥ずかしくて口にできずわたわたしている。…その様子に沙都子ちゃん困ってる、身悶えしてぷるぷると鼻血を垂らすレナ。
「…はぅ……沙都子ちゃん困ってる、……かぁぃぃよぅ〜！」
「も、持ち帰るなよ。犯罪だからな。」
「さぁさぁさあ言ってごらんよ大声で‼ 『アレ』は英語で何と言う〜⁉⁉」
「知ってるもん…‼ 知ってるもん！！！ ……セッ、」
「…ザットですよ。〝ｔｈａｔ〟。」
「え？ ……あら？」
梨花ちゃんの意外な解答にきょとんとする俺たち。
そうだ。『アレ』は英語でザットだ。……ハメられた‼
…俺が沙都子の立場だったらどうしたろう。…逆ギレしてもろにその「単語」を叫んでいたのだろうか…。敵に廻すと恐ろし過ぎるぜ園崎魅音！ 女に生まれてよかったよな。お前、男だったらただのセクハラ野郎だよ…。
「し、…仕方ありませんわね。…不肖、この北条沙都子が最初のゾンビ役を務めさせてもらいますわ。……みんな食い殺してやりますわよーッ！！！ 最初はどうしますの？ 百数えれば

いいんですの⁉」
「百数えるのはズルするヤツがいるからな。俺の問題が解けたら追ってよし。」
「…わ、圭一くん、簡単なのにしてあげてね…。」
「安心しろ、レナ。沙都子だってわかる簡単な算数の問題さ。五分の一のケーキと六分の一のケーキと七分の一のケーキを一皿に載せました。」
「うが‼　ぶ、分母が違いますの…⁉⁉」
沙都子が慌てふためき、棒で地面に分数とケーキの絵を描き始める。
「ケーキ一個を六十秒で食べられる沙都子がそれを全部食べると、お皿にはケーキがいくつ残っているでしょう?」
「ハイ、その問題が解けたらゾンビは行動開始ね！　よーーーいどんッ！！！！」
魅音の合図に、沙都子をその場に残し全員が方々へ駆け出して行った。
「クスクス……圭一くん、それ算数じゃないよね?」
同じ方向に逃げながら、レナがくすくすと笑いかけてきた。
その通り。こいつは算数でも分母が違う計算でも何でもない。悩んだ時点で沙都子の負けだ。
何しろ、全部食べたんだから、お皿にはケーキがゼロ個！
レナとも別れ、魅音も梨花ちゃんもみんな、それぞれ思い思いの方向へ散っていく。

どこへどう逃げたものかと思案する俺に比べると、他の仲間たちははっきりと逃走経路を頭に描けているようだ。…何しろ校内の地形については熟知してるんだろうからな。……地の利の分、俺がみんなよりも劣っていることは明白だった。
こういう場合、サバイバル能力に長けていそうな、例えば魅音辺りについていくのは有効な手だったように思う。だが、魅音はとっくにどこかへ逃げ去ってしまいその姿は見えない。
……くそ、ゲーム開始時にそれに気付けなかったのは痛かったな。
ちらりと校庭をうかがうと、沙都子が今まさに立ち上がり行動を開始するところだった。
怒ってる怒ってる。くっくっく！　考えるだけ無駄な問題だったと今頃気付いたらしい。…こんなまぬけな問題に引っ掛かりおって、可愛いヤツめ！
さぁて、どう逃げる⁉
現在のポジションは校舎角だ。二方向に長い視界を得られその接近を素早く察知できる。有事の際にはかなり早いレスポンスで行動することが可能だろう。
まず呼吸を整え、昨日さっそく鍛えられた部活的な思考に切り替える。
…冷静に考えろ前原圭一…。俺が鬼ならどうする？　ゾンビ鬼の最大の特徴はゾンビが増殖する点。つまり仲間を増やすのが勝利の近道ってことになる。…ならばまずは弱いヤツから狙うのが定石。………つまり、俺だ！

「さぁて圭一さんはどこでございましょう⁉　逃がしませんことよ〜！！！」

…当然だろうな。沙都子は露骨に俺狙いを宣言すると、どこに隠れたやらと周りをきょろきょろうかがい始める。

だが俺を優先して探すにはどうする？　足跡とか匂いとか…何かの痕跡とか。

それを巧みに隠すことができれば…沙都子の追跡はかわせる！

だが警察じゃあるまいし。たかが鬼ごっこでそれは可能なのだろうか？

「富田さん〜岡村さん〜！　圭一さんを見かけなかったではございませんこと⁉」

なッ、なんだそりゃあぁぁぁぁあッ⁉　最近のゾンビは獲物の逃げた先を聞きこみ調査するのかよ⁉⁉

富田くんと岡村くんは素直に俺が潜伏するこの場所を指差している。沙都子がこちらへ駆け出すのを確認すると同時に、俺はこの場所を放棄した…！

とにかくこうなるとかなり厄介だ！　俺はゾンビだけでなく、このゲームに参加していない他のクラスメートの目からも逃れなきゃならなくなる！　でも、好き勝手にはしゃぎまわる子供たちから完全に隠れきるのは簡単なことではない。俺に地の利がないことによる不利はますます明白…！

ならば…情報戦で挑んできたゾンビに対し、こちらも情報戦で対抗してやる…‼

俺は物陰（ものかげ）に潜（ひそ）みながら、すぐそこでボール遊びをしている女の子たちを手招きで呼び寄せた。
「すまんが伝言を頼まれてくれんか。北条沙都子にご両親が校門に来てるぞ、ってな。」
「伝言伝言あははははは〜〜!!　いいよいいよ！」
「待てまだ行くな！　あと園崎魅音にもだ。先生が校門のところで呼んでるぞって伝えてくれ。」
「沙都子ちゃんと委員長に？　あははは、伝言伝言〜!!」
女の子たちは伝言遊びだと思い、きゃっきゃと騒ぎながら駆け出していった。
くくく、我ながら狡猾（こうかつ）…！　うまくかかれば沙都子と魅音は校門で鉢合わせだ!!　だがそこは魅音のこと。うまく立ち回って逃げ切るであろう。…だが、それでいいのだ。時間が稼げるならば…!!　このゲームに勝ち残るには、授業の終わりまで逃げ切ればいいのだから。
くっくっく、踊（おど）れ魅音に沙都子!!　俺の手の平でなぁぁぁぁあ！！！
悪代官気分を満喫すると、取りあえずこの隙に、自分の隠れられる場所を探すことにする。
…しかし、冷静に考えれば稼げる時間はわずかでしかない。……それどころか、やがてはしっぺ返しが来るのだ…！
この伝言による情報戦は俺だけの専売特許じゃない。踊らされた沙都子も、同じ手を使って

俺を追い詰めようとするだろう。

つまり、沙都子も他のクラスメートを伝言者に仕立て、一緒に俺を探させるわけだ。それは同時に…ゲーム参加者以上のゾンビが大量発生することを意味するッ!!

……お、俺のいたずら心が生んだわずかなウィルスが大発生の大感染…。クラスメートが次々とゾンビ化し……しかも俺だけを探して徘徊する!

……この作戦、…かえって自分の首を絞めたかもしれんな…。俺はやがて起こるバイオハザードに戦慄しながら隠れ家を探した。

「……お、物置の上って結構、死角っぽいよな…!」

校舎裏の焼却炉脇に物置を見つけ、屋根によじ登ると身を伏せ、息を殺した。…ふむ、なかなかいい潜伏場所だ!

鬼ごっこというのは結局、隠れんぼにも通じる。鬼から逃げる前段階として、そもそも鬼に見付からないというのが重要な戦術となるのだから。

ここは実に悪くない籠城場所だった。屋根の上に伏せているので簡単には見付からない。それでいて周囲の視界は良好な上、万が一の際には好きな方向に飛び降りて緊急脱出が可能!なかなかの砦じゃないか…、くっくっく!

下が慌しくなった。物置の下をクラスメートの下級生たちが走り回っている。

「いないね前原さん。そっちいた？」
「いないい〜。前原さんどこだろ。お父さんが校門に来てるのにね。」
絶対ウソだ。校門という俺と同じキーワードに復讐性を感じる。下手人は魅音か沙都子か……！
しかし、俺の一手早い対応の勝利だった。まさかこんなところで息を潜めているとは夢にも思わず、みんなはウロウロと探し回っている。後輩諸君には申し訳ないがチャイムまでたっぷり探しまわってもらおう。
俺はにやにや笑いながら、下で困った顔をしている彼らを見下ろす。
「ねぇねぇ、圭一さん知らないー？　お母さんが急病で大変なんだってー！」
「前原さんに伝言だよ。家が火事だから急いで校門に来い！　って。」
「前原さんちにジャンボ機が墜落したらしいよ！」
「警察が事情聴取に来てるって言ってた！」
……もう何でもありだな。いくら何でも逸脱し過ぎだ。
「趣味はお風呂覗きなんだってー。」
「夜な夜な下着を盗んで回ってるって本当なのぅ？」
「ぱんつをかぶったり匂いを嗅いだりするんだって。」

はぁッ⁉　誰がぁ⁉　んなわきゃねえだらぁあああぁあぁ‼
「魅音委員長も被害にあったって言ってたよー⁉」「えーーーッッ⁉」
ぐをおおぉおおぉおぉおおぉおおぉおおッ！！！！！！
てめぇの仕業か魅音んんんッんんんッ！！！
お、落ち付け前原圭一‼　俺をあぶり出そうとする魅音の作戦だ！　耐えろ‼　まんまと校門前で鬼と鉢合わせにされたので、屈辱の怒りに燃える魅音の復讐でしかない！　後輩たちだって俺という一個人を冷静に考えればただのデマだとわかるはずさ！
……だがまだ幼い子供たちにそんな冷静さがあるはずもない。彼らにとって「それ」は全て事実として認識されると、げらげらと笑い合って俺を探しに散っていった。
くくく…がははは…！　勝ったぞ魅音！　俺の勝ちだ！　がははは…‼
後輩たちが去った後、俺はひとり屋根の上に伏せながら、笑い泣きするのだった…。
「聞いたー？　転校生の前原さんてHな人なんだってー！　きゃはははは‼」
…勝利と魅音をはめた代償はあまりにも大きいようだ…。
っと！　………お、誰かが下に来るぞ。あれは…レナに梨花ちゃんか。
「……はぁはぁ。梨花ちゃんはまだ無事かな⁉」
「……何とかがんばってますです。」

「…な、なんかね、…魅ぃちゃんも鬼になっちゃったみたいなの…。」
魅音がッ!? まさか…俺の作戦で鬼になったのか!? そこまでの戦果は期待してなかった…。なるほど、執拗な魅音の報復の裏がようやくわかった。…しかし…だとするとまずいな…。ゾンビにかなり強力な助っ人を加えてしまったことにもなる…。
「魅ぃちゃんは、なんとか撒いたけど……。沙都子ちゃんはどこだろ…。」
「……沙都子は土管のところを探してますから、ここはしばらくは安全ですよ。」
その一言に、聞き耳を立てている俺も安堵の息を吐く。
ぺたりとしゃがみこみ、荒い呼吸を整えているレナの背中に、嫌に足音を殺した梨花ちゃんが歩み寄る…。
梨花ちゃんが足音を立てずに歩くのはいつものことだが……変だ。…まさか…、
「わ!? ……梨花ちゃん？ ……何かな？ 何かな!? …えぇ…!?」
「……大丈夫ですよ。」
「な、何で近寄ってくるのかな？ くるのかな!? 梨花ちゃんは…ゾンビじゃないもんね!?」
「……怖くないですよ。…ボクがやさしく、」
「やさしく……？」
「……食べてあげますのです。みー。」

「う、ううう嘘だよね⁉　…梨花ちゃんがそんな……ひ…ッ‼」
レナが壁に追い詰められ、じりじりと梨花ちゃんがゾンビよろしく両腕を突き出しながらよたよたと近付いて行く…。レナは震えながら背中を壁に押しつけていた。
こ、これはすごい生ホラーだ…。そんじょそこらのゾンビビデオを地で行っている。
その時、レナと俺の目が合った。
「け、圭一くん‼　助けてぇぇぇぇッ！！！」
梨花ちゃんゾンビがエクソシストよろしくぐるりと一八〇度反転し俺を睨む！
「いたぁ‼　圭ちゃん見っけッ！！！！」
梨花ちゃんと目が合った時、さらにどこか遠くから魅音の威勢のいい声も聞こえた。
見れば、向こうのゴミ捨て場のブロック塀の上に仁王立ちしていて、まさに俺を指差しているところだった。
この地形の有利はゾンビがひとりの時だけだ。挟み撃ちはまずい！
「何ですってぇ⁉　圭一さんを見付けたですってぇぇ⁉⁉」
その騒ぎを聞きつけ、遠くから沙都子も駆けて来るのがわかる。梨花ちゃんはレナを取り逃がしたらしく、今やその矛先を俺に向けていた。
「えぅうぅ～……あぅあぅう～……。」

「…お〜り〜て〜こ〜い〜…圭ちゃぁあぁあぁん…。」
呪いの言葉を吐きながらゾンビ三匹が俺を狙って物置の周りをぐるぐると徘徊する。ぞわぞわとしたものが背中を昇り、チビりかけている俺は悲鳴のように叫ぶ！
「お、お前ら怖い!!　怖過ぎるッ！！！」
「圭一さんのハラワタはどんな味がするのかしらぁぁ??　圭一さぁあぁあん…！」
「……圭一も、…ボクたちの仲間になってほしいですよ。」
「をーっほっほっほ！　さぁさぁ、そろそろ観念なさいませー!!」
「だ、だだ、誰か、たた助けてくれぇぇぇえええ！！！」
この状況で俺を助けてくれる人間はもうレナしか残っていない。…そのレナはさっき梨花ちゃんから逃れて今どこだ？
はるか向こうの校庭にレナの姿があった。こっちを見て拝むようにしながらぺこぺこ謝っている。
…謝る？　謝罪？　ごめんなさい？　ってことはつまり、見殺し？　…レ、レナぁあぁあぁあぁあぁあ!!　俺をダシにして逃げ延びることができた恩も忘れやがってぇえええぇ!!
恐怖にかられた俺は屋根から飛び降りるも、滑って転倒。
沙都子と梨花に飛びかかられ馬乗りされると、全身を存分に……くすぐられた。

「ぎゃっはっはっはッ！！！　やめ！　やめッ!!　ぎゃ〜〜〜ッ！！！　沙都子やめて、わき腹はダメ!!　あぁん魅音、そこはもっとダメぇぇぇぇ!!　はぅん!?　梨花ちゃん、耳たぶ噛むのもダメぇぇぇぇ!!　お嫁に行けなくなるぅぅぅぅ!!」

俺の悲しき断末魔の声も、賑やかな校庭の喧騒に混じれば、楽しそうに聞こえるのが皮肉だった…。

「ってことはあとはレナだね。おりょ？　チャイムまであと何分もないよ！」

「…ぅのれレナぁあぁあ…!!　よくも…俺を見殺しにぃいいぃいいい!!」

ゾンビの気分。無念の怨霊の気分がとてもよくわかるぞ。自分を見捨てたヤツに復讐してやるぅぅぅぅ！

「……かわいそかわいそです。…でもこれで圭一も仲間ですよ。」

ゾンビというより、吸血鬼に血を吸われて、自らも吸血鬼化した犠牲者の気分だな。

これまで自分を追いまわしていた側に、新しく歓迎されるのは何だか不思議な感覚だ。

「ゾンビ鬼、なかなか奥深し！」

「気取っている場合じゃありませんわ!!　レナさんを捕まえるですのよー!!」

「まずい、校長が廊下を歩いてる！　…もうすぐチャイムが鳴る、ゲームセットだよ!!」

「ふっふっふ！　…任せろ。こうなったらもう誰にも俺は止められねぇぜ。レナだけ勝ち逃げ

なんて断じて許さねぇ!!　リミッター解除！　戦闘力上昇！　うぉおおぉ、俺は地球人をやめるぞおおおお!!」

復讐鬼と化した俺はレナを食い殺すため、あらゆる手を尽くさねばなるまい！　だが今の俺はただのゾンビじゃない。闇の眷属（けんぞく）を従えた吸血鬼なのだ!!

先ほどは自分の首を絞めてしまったあの技も、今はレナを炙（あぶ）り出すためにもっとも有効な手として使える！

部活メンバーたちの大騒ぎに加わりたくてしょうがない後輩たちを集め、大々的に命じる！

「さぁ散れしもべたちよ!!　竜宮レナを探し出せ！　ぐわはははははッ!!」

かくして、クラス全員がレナ一人を追うという、恐るべきフォックスハンティングが始まるのだった。だが残された時間はわずかだ。俺たちはレナ一人に勝ち逃げを許すのか、否かッ!!

「えーん、何でレナはクラス全員に追われなくちゃならないのかな、かな!!」

いくらレナでもクラス総がかりでは逃げ切れない。

これはもはや鬼ごっこじゃない。サメの海に放り込まれたウサギが逃げ回っているようなものだ…。

でも、レナもあとわずかでゲームセットになるのを理解しているようで、最後の瞬間まで諦めるつもりはないようだった。…だが、この圧倒的は不利は覆（くつがえ）せない！

詰め将棋のように、次々と追い立てられ、レナはとうとう体育倉庫奥に追い詰められてしまった。
「こ、怖いよみんな!! 圭一くんまで…!! 怖いよぅ！！！」
ゾンビたちがゆらゆらとレナを追い詰める。そりゃあ怖いだろうなぁ。…何しろクラス全員が自分を追い回してくるのだから。その恐怖、察して余りあるぞ。…だが、同情はしないぞ！
「レナぁあ、さっきはよくも見捨てたなぁ!! 覚悟はできてるだろうなぁ…⁉⁉」
「ささ、さっきはごめんね圭一くん、…だだ、だって仕方なかったんだもん…!!」
「をーっほっほっほ！ 大人しく…食い尽くされるでございますのよ!!」
「……みんなに食べられて、ゾンビで仲良しなのです。にぱ～☆」
「くーっくっくっく！ どうやら今日のゾンビ鬼は勝者無しで終わりそうだねぇ？ さぁレナ…念仏でも唱えな!! うっひゃっひゃっひゃッ！！！！」
マットに躓き、震えながら倉庫奥で涙ぐむレナ。追い詰める俺。その様子に著しく不道徳なシチュエーションを連想し、俺はちょっぴりドキドキ、前屈み気味だ。
…両手をわきわきとさせている沙都子と梨花ちゃん。きっとレナをくすぐる気だろう。レナもそれを知っていて、それだけは嫌だと身を硬くしている。
「……け……圭一くんは……みんなみたいなひどいこと…しないよね？ …しないよね？」

「…さぁどうかなぁあぁあ〜⁉⁉」

「……う…ぁ、………はぅ…………、」

「…さぁて…覚悟は決まったかなぁあぁあ⁉」

「……いいよ…圭一くんなら……。」

覚悟の決まった笑顔に、一瞬俺の心臓がどきんと跳ねた。

「け…圭一くんはひどいことしないって……レナ、信じてるし…。」

う。

……こ、この最後の瞬間に…、何て卑怯な言葉をぉおぉぉ…‼　そんなこと女の子に言われたら、並みの男はお預け状態になるじゃないかよ⁉　あああぁでも、敢えてそう言っておきながら据え膳ってケースも⁉　でもでも本当に信じてくれてるかもしれないしぃいいぃ⁉　ぬおおおぉおおぉおぉ、俺は紳士だ、紳士だぞ前原圭一ぃいいぃ‼

と、俺が両腕で頭を抱えながら悶絶している時、からーんからーんと清らかなチャイムの音が聞こえてきた。ゲームセットだ。

「はぅ〜〜‼　やったやった‼　生き残ったよ！　わぁいわ〜〜い☆‼」

レナが呪縛が解けたかのように大はしゃぎして喜んだ。

「…フ、…あとわずかのところで日光が差し、悪のゾンビ軍団は灰燼に帰したか…。ヒロイン

だけが生き残るのは映画のお約束、だもんな…。完敗だぜ、竜宮レナ…。」
俺を信じると言ってくれたレナに、俺は持てる限りのダンディパワーを結集してキザに決めてやる。…そのダンディな後頭部を沙都子がぱかーんと叩く！
「何を気取ってるですのー!! 圭一さんがもたもたしてるからぁあぁあ！！！」
「……戦犯の圭一にはおしおきしますのです。」
「ひぃいいいぃいいい許ッ許してッ!! あぁんそこはダメぇ！ だから梨花ちゃん、耳たぶはダメぇぇえぇええ!!」
沙都子と梨花ちゃんが、俺に馬乗りになってくすぐっているのを面白そうに見下ろしながら、魅音はレナの腕を取る。
「じゃあ生き残ったで賞は、竜宮レナと園崎魅音。いぇ〜い！」
「え？ あれ…？ 魅ぃちゃん、ゾンビじゃなかったの…？」
「フリしてただけ〜。敵を騙(だま)すには味方からって言うじゃ〜ん？」
魅音が小馬鹿(こばか)にしたようにペロっと舌を出す。……や、やっぱり魅音は沙都子なんかに捕まりはしなかったのだ。自分はもうゾンビだと嘘をついて、しゃあしゃあと追う側に紛れ込んでいやがったのだ！
「…うおおぉおおおおぉぉお!! 魅音〜てめっぇえええぇえぇぇ!! あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ、

だから沙都子そこダメ、あぁん梨花ちゃんそこはもっとダメぇぇぇぇぇぇ!!」
「はいはい。急いで着替えないとね〜。次の授業に遅れないでよ〜！」
放課後に遊べば大騒ぎ。体育の授業はそれ以上にハチャメチャ。……まったく雛見沢ってとこの学校はどういうことになってんだよ！
授業が始まる時には、こんないい加減なことでいいのかなと余計な心配をしていたが、終わる時にはそれはどうでもいいことになっていた。
体育なんて、受験に無関係な科目だから適当にこなせばいい。…かつての俺はそう考えていたんじゃなかったっけ。……俺は、雛見沢の学校で本当に大切なことを学び直していることに少しずつ気付き始めていた。

■富竹再び

帰宅後、俺はさっそく身支度を整えることにした。レナと例の宝の山のケンタくん人形を発掘する約束だ。
昨日の作業でわかったことは、結構大仕事であること。備えを充分にして臨んだ方がいいだろう。

「母さん、うちに軍手ってあるかな。あとタオル。」
「表の物置の中になかった？　タオルは洗面所ね。」
よし。これで準備は万端だ。…それを見てお袋が怪訝な顔をしている。
「なぁに圭一。すごいいでたちでどこへお出かけ…??」
「ちょっと発掘に。クラスメートを犯罪者にしないために。」
不法投棄のダンプがまたゴミを捨てていって、今度こそ完全に埋って発掘不能、なんてことになれば……間違いなくレナは町のフライドチキン屋を襲ってでも、ケンタくん人形を手に入れようとするだろう。それは阻止しなければならないからな！
「??　…よくわかんないけど、あまり遅くならないようにね。」

ダム工事現場跡への近道の林道を抜けて行くと、林の木立にカメラを向けている人影に出くわした。富竹さんだった。
そう言えば、野鳥を撮るのが専門だって言ってたっけ。いい野鳥は見付かったのだろうか。
…まさか夕焼けにたそがれる美少年ばっかりを撮ってるんじゃないだろうな…??
「やぁ久しぶり。圭一くん、だったよね。」
「どうもその節は。いい写真は撮れましたか？」

失礼な想像を頭から追い出し、無難に挨拶する。
「ひょっとして、レナちゃんとダム現場で待ち合わせかい？」
「…ええ、まぁそんなとこです。」
「そうか…。うーん、……これは言った方がいいのかなぁ…。」
富竹さんがそわそわしている。…何か妙な話でもあるのだろうか。
「実はね、さっきレナちゃんとすれ違ったんだけどね…。どうも様子がおかしいんだ。はぅ〜はぅ〜ってにやにや笑いながら、ぎらぎらと光る剝き身の大きな鉈を持ってたんだよ！　あれは一体何だろうね⁇　け、圭一くん、もし彼女に呼び出されてるなら…その、注意した方がいい。あそこ、ひと気が少ないからね……。」
「…………は、………はぁ…。」
富竹さんには、レナが俺をひと気のない場所に呼び出して、あの鉈で殺してしまうようにでも見えたのかもしれないな…。でもまぁ、ケンタくん人形を語る時の夢見心地のレナを思えば理解できなくもない。順調に発掘が進めば今日にはお持ち帰りできるだろうからな。きっとだらしない笑いが隠せないに違いない…。
「身に危険を察して隠れたけど……、警察に電話した方がいいんじゃないかなぁ…⁉」
確かに年頃の女の子が剝き身の鉈を持って徘徊しているのはヤバい。富竹さんの反応は極め

て正常だ。
「いーんですいーんです。ほっといて下さい。また犠牲者を探して徘徊しているだけですから。」
俺のぞんざいな反応に富竹さんは目を白黒させている。まぁ、一般的な常識人にレナの異常性を理解するのはとても難しいだろう…。適当に煙に巻いておくことにする。
「富竹さんがここで殺されたら多分犯人はあいつです。…せいぜい嗅ぎ回らないようにすることですねぇ。」
意地悪っぽくにやりと笑ってやると、俺はとっととレナの待つダム現場へ向かった。
少し歩きかけて、不意に富竹さんが呼び止めてきた。

「それ、警告のつもりかい？」
…え、そんなマジな意味で言ったんじゃないですよ。そう弁解しようとしたが、
「…せいぜい気をつけることにするよ。はは、ありがとう。」
それだけ言い残すと、富竹さんは踵(きびす)を返し、去って行った。
……なぜだろう。どうしてだかわからなかったが、彼を不愉快(ふゆかい)にさせたことだけはわかった。

■ついに発掘！

レナは俺がやって来たのを見つけると大はしゃぎで迎えてくれた。
「圭一く～ん！　待ってたよ。今日もがんばろ！」
……確かに富竹さんの言うのもわかる。鉈をぶんぶん振りまわしながらはしゃぐのは確かにヤバい。
「鉈は鞘とかを被せて持って来い。剝き身はさすがにまずいだろ！」
「なくしちゃったみたいで、ないんだもん。」
「いやその、しかしだなぁ…！　にやにや笑いながら剝き身の鉈を持って徘徊してたら、お巡りさんに呼び止められたりとかしちゃうぞ？」
「……はぅ？　お巡りさんにはさっき会ったよ？　今日も宝探しだよ、はぅ～って挨拶したけど…??」
「……………ふがー。」
…考えたら世間体もヘチマもないな。レナの奇癖は多分、雛見沢中に知れ渡っているだろう。
この雛見沢で凶器を持って徘徊しても不審に思われない唯一の人物なのだ…。

まぁ、どうでもいいことか！

「よっしゃ、始めようぜ！　今日で決めるぞ！　最後の梁をぶっ壊せば引きずり出せるはずさ。軍手まで用意して準備万端。任せとけ！」

「うん！」

　レナから鉈を受け取り、不安定な斜面を降りて行く。

「待っててね、ケンタくん。…今、圭一くんが助け出してくれるからね…☆　はぅはぅはぅ〜、は〜やくケンタくんをお持ち帰りし〜たい〜〜♪！」

　歌うように言いながら、レナはくるくると踊り出す。…興奮し過ぎだろと思ったが、そういうつまらない突っ込みはやめた。日々の出来事を全て、ありのままに受け入れ楽しんだなら、レナのような反応を示すのは当然なのだ。

　何があっても無関心を装うのが美徳という、腐った都会根性とは俺もいい加減、決別しなくちゃならない。

「よぉし、燃えてきたぜ！　必ずお持ち帰りさせてやるからなぁ！　一気にケリをつけてやるぜ！　うをりゃッ!!」

　豪快に振り下ろす鉈が、ケンタくん人形を閉じ込める梁(はり)を打ち、木こりが斧を打つような心地よい音を響き渡らせる。

「…どう？　うまく行きそう？　無理そうだったら無理しなくていいよ…？」
「ここさえ折れればあとは何とかなる！　今日は気力も充実！　行ける！！！」
…だが思ったより敵も手ごわかった。
第一、俺は今まで鉈を使った事なんかない。林間学校の時、薪割りをやりたくて立候補したが、ジャンケンに負けてできなかった。
不安定な足場にも翻弄され、ついにへばり、休憩を挟むことにする。レナがシートを広げると水筒の紅茶と甘そうな駄菓子を出してくれた。
「大丈夫！　もう一息。今夜レナが寝るときにはケンタくんにお休みのキスができるようになってるさ。」
汗だくの俺を申し訳なさそうにレナが見ている。頼りないと思われたくないので、ここは弱音を吐いちゃいけないところだぜ。
「…うん、ありがとう！　……はぅ、ケンタくん……お休みのキス……はぅ……☆」
レナは再び紅潮すると、瞳の中に星をいっぱいちりばめて夢見心地になる。そんなレナに最初は面食らったが、今では純粋に可愛い、面白いと思うようになっていた。
「そう言えばさ。レナも転校生だったんだろ？　前はどこに住んでたんだよ。」
紅茶を飲みながら、レナにさりげなく聞いてみる。てっきりレナは昔からここに住んでいる

とばかり思っていたからだ。
「ん？　関東の方だよ。ここほどじゃないけど、やっぱり田舎だったかな。」
「何で引っ越してきたんだよ。雛見沢に。ほら、ここって結構田舎だろ？」
「圭一くんは何で引っ越してきたの？　お父さんの仕事と関係あるのかな？」
「うちの親父がアトリエを移したいって言い出したんだよ。こーゆう山奥がいいって前々から言っててさ。」
「アトリエ？　…圭一くんのお父さんて芸術家さんなの??」
「風景画ばっかり描いてる。年に一回くらいはどっかで個展を開いてるらしい。」
「それってすごいね！　今度レナにも見せてね！」
まぁその内な。曖昧に答えながら俺は腰を上げた。親父が画家であることは知ってるが、どういう仕事なのかは見せてくれないし、俺も実はそんなに関心がない。
家と職場が一緒というのは、俺くらいの年頃の息子には結構、迷惑なもんだ。一度出勤したら夜までは家にいない、世間平均の父親をだいぶ羨ましく思ったこともある。
「でも…学期途中の転校だったんでしょ？　大変じゃなかった？」
「別に。…都会ってのには飽きてたし。」
レナに質問していたつもりが、いつのまにか自分が質問されている。…これ以上、話が及ぶ

と自分のつまらない身の上話になりそうなので、もう切り上げることにした。
「さて！　もうひとふんばりするか。何が何でも今日中に決着つけてやるぜ！」
「うん！」
気付けばもう、日が傾きだし、少しずつ空気が冷えてくる。ひぐらしたちも、今日はもうやめて家へ帰れと合唱し始めていた。
くそ、もう少しなんだ。今日で絶対に決着をつける！
始めはレナに軽口を叩きながらの作業だったが、もうそんな余裕はなかった。ぼろぼろと零れ落ちる汗を拭いもせず、無心に鉈を振り下ろし続けた。
「うら！　てめ！　畜生!!」
今日一日、何度もそうしてきたように、鉈を振る。叩く。小気味良い音が響き渡る。木片が砕け散る。
……ひぐらしの合唱が始まったからだろうか。なぜか俺の脳裏に、あの写真週刊誌の物騒な一文が蘇った。
〝犯人達は被害者を鉈やつるはしや斧で滅多打ちにして惨殺し、〟
振り下ろす鉈が梁を打つ。…そこには、何度も打ち付けられてできた無数の刃の跡が残されていた。……これは太い梁だからこんなにも頑丈だけれど。…もし、人間に大してこんなにも

無慈悲な刃を振り下ろしたなら、…腕なら折れ、頭なら一撃で割られてしまうかもしれない…。
…梁の下に見える人形。それに鉈を振り下ろしている自分の姿が、なぜか不吉な光景とオーバーラップするように感じられた…。
その時、これまでとは違う手応え。最後の一撃が、とうとう拒み続けてきた梁を叩き折ったのだ。
だが、最後の一撃は梁を割っただけでなく、その下の人形の肩も打ち砕いていた。
体より一足先に自由を得た腕が、梁の隙間をごろんと抜け、俺の足下に転がり出る…。
「……ぁ、」
「ど、どうしたの大丈夫⁉　ケガしたの⁉」
「ご、ごめん…、人形の腕、壊しちゃったよ…。」
「…な、なぁんだ。圭一くんがケガをしたんじゃないかって思っちゃった。」
レナは、俺がどこかに手をぶつけるかして怪我でもしたのかと思ったらしい。そうでないとわかり安堵の溜め息を漏らすのだった。
「修理するから大丈夫。ガムテープとかでくっつけて、その上に上着を着せるもの。だから全然問題ないんだよ。」
「…そっか。じゃあ引っ張り出そうぜ。そっち持ってくれるか？」

「うん！」

〝…腕が一本、まだ見つかってないんだろ？〟

さっきのごろんと転がった腕がやけに不吉に思えたが、そこでふと気付き、俺はちょっと自分の情けなさに苦笑した。

胸くその悪くなる事件だってことはレナも魅音も知っていた。俺が知れば、きっと同じ不愉快な思いをするに違いない。だからすっ惚けて知らないふりをしてくれた。

そこで余計な好奇心を出し、わざわざ調べたのは自分だ。…で、情けなくも俺は知らなくていい事件を知ってしまい怖がっている。……レナたちの気遣いを自分でふいにしておきながら、何て俺は情けない…。

「…よっしゃレナ！　一気に行くぞ!?　せーのぉッ!!」

もうケンタくんの救出を拒むものはいなかった。こうして二日掛けてとうとう、ケンタくん発掘作戦の偉業は成し遂げられたのである！

どこかのフライドチキン屋の店先でずっと働き、この雛見沢の地で終焉を迎えようとしていた彼は、レナによって再び迎えられたのだった。ツイてたなケンタくん。次のご主人様がいい人で！

「…わぁあ…ケンタくんだケンタくんだ！　やっぱ、かぁいいよぅ!!」

汚れているにもかかわらず、レナは嬉しそうに頬擦りをしている。
すごく疲れたが、レナの嬉しそうな顔を見ているとそれだけで報われるような気がした。
「じゃ手伝うからレナの家に持って行こうぜ。暗くなるとまずいだろ。」
「…うん。そうだね！　圭一くん本当にありがとうね！　この恩は忘れないね！」
「ほほぅ、武士に二言はないな⁉　ふっふっふ、恩返しは何がいいか、よく考えておくぜぇ。」
「わ、わ…、…どんな恩返しだろ。…恩返しだろ？　はぅはぅ…！」
取り敢えずは意地悪そうに笑い、今日のところはそれ以上からかわないことにする。
人形をシートで包み、二人で抱えて帰る途中、レナはずっとご機嫌だった。その様子に俺ももちろんご機嫌だった。
でも、ひぐらしの合唱が今日の汗を冷やしていくにつれ、……どうでもいいことを脳裏(のうり)に蘇らせていく。

〝…それ、警告のつもりかい？〟
ちょっとした冗談を言ったつもりなのに、噛み合わない返事を返した富竹さん。
……何かが、釈然としない。
その気持ちを心から追い出そうとした頃、ようやく俺たちはレナの家に到着したのだった…。

■レナってどういう名前だよ？

「……レナがいないです。圭一は知りませんですか？」
「あれ？　たった今までそこにいたのにな。…おい魅音。レナはどこ行ったんだ？」
「レナー？　トイレじゃない？　最近、お通じが来ないって言ってたなぁ。」
「そんなことは一言も聞いてない！」
「……沙都子。レナを知りませんですか？」
「レナさんですの？　さっき廊下ですれ違いましてよ。レナさんは日直だから、花壇(かだん)にお水をやらないといけませんので。」
「あーレナが日直かぁ。そりゃお疲れ様なことで。」
…レナレナレナ。…とレナの名が乱発され、ふと疑問に思った。
人の名前にこんなこと言っちゃ失礼だが、……変わった名前だよな。外人さんみたいな名前だ。
「レナってどういう名前なんだろうな。…レナって漢字だとどうなるんだ？」
「……レナはあだ名なのです。ちゃんとした名前がありますですよ。」

「え、そうなのか⁉　俺はてっきり竜宮レナってのが本名だと思ってたよ。」
「まぁ確かに。レナさんとしか呼んでませんから間違えるのも無理はないですわね。」
しかも、習字の名前も「レナ」になってるしな。学校では本名同然のようだ。
「本当の名前は何て言うんだろうな。…レナが戻ってきたら聞いてみるかな！」
沙都子と梨花ちゃんが顔を見合わせる。
「……聞かなくてもいいですよ。ボクたちが教えてあげますです。」
「お礼の礼に、奈良の奈。…竜宮礼奈が本名ですのよ！」
「礼奈か。………ふーん。それでレイナじゃなくてレナって読むのか？　面白い読み方だよな。」
「……いいえ、違いますです。レイナで正しいのです。」
「レナが言ったのですわ。レナと呼んで欲しいって。だからレナなのですわ。」
「圭ちゃん。…レナはレナだよ？　礼奈って呼ぶのは他人だけ。そこんとこ、わかってるよね？」
魅音の言いたいことはわかる。本名が何だって、俺たちの間の通り名が全てに決まってる！　竜宮レナはレナだ。それ以外の誰でもないさ。
「思ったんだけどさ、自己申請すれば俺も今日からあだ名で呼ばれるのか？」

「面白けりゃね。何て呼ばれたいわけ？」
「越後屋。」
やがてレナが教室に戻ってきた。入り口で後輩が、レナを探している人がいたことを教えている。
「あれあれ？　誰かレナの事を探してたかな？　かな？」
それを見てにんまりと笑う俺と魅音。
「お代官様、竜宮めがまんまと現れましたぞ!!」
「越後屋、お主も悪よのぅ。…ふぉっふぉっふぉ！！！」
「なな、何かな何かな!?　圭一くんと魅ぃちゃんが悪代官だよ？　越後屋だよ!?」
「おのれ竜宮レナの助！　ここで会ったが百年目でおじゃる。いざ覚悟〜!!」
「わ！　わ！　助さん角さん、こらしめてやりなさいかな、かな!!」
「アイアイサーですわー！！！」
「……報酬はスイス銀行に入れて欲しいのです。」
こうなっては仕方ない！　あとは五人入り乱れての大乱闘…！！！
印籠の出てくるタイミングでレナの必殺パンチが炸裂する。結局、悪は滅びる俺と魅音…。

「…レナにはぜひ世直しの旅に出てもらいたいもんだ。…永田町なんかどうだ？」
「……ダメだよ。旅先でかぁいいものをチョロまかすから。」
振鈴が休み時間の終わりを告げる。
「ほらほら、圭一くんも魅ぃちゃんも。先生来るよ！」
レナに手を借りて起き上がる。ちょうど先生が教室に入ってきたところだった。
……あと一時間か。やれやれ。……もうひと踏ん張りするかな！


6月15日(水)

俺が昨日、レナの家に行ったことがわかるとすぐにその話題になった。……あのインパクトの強い家は、やはり雛見沢中で有名だったらしい。

「あははは！　どうだった圭ちゃん！」

「レナさんの家に行ったでございますの？　おほほほ、凄かったでございましょ〜⁉」

「…あははは…そんなことないよね…？　ね？」

竜宮家はうちみたいな新築ではなく、すでに建っていた家を改修したものらしかった。ま、家はいい。問題は庭だった。

そこには……庭いっぱいに…未知のオブジェが並んでいたのだ‼

それはみんなケンタくん同様、町を歩けばどこかで見かけるようなものばかりだった。

ケーキ屋さんの店頭のペロちゃん人形。薬局前のケロモン人形。デパートの屋上につきものの空飛ぶゾウさんまでッ‼　その圧倒的な光景を見て、俺はようやくレナの非凡なる美的感覚とお持ち帰り魂の真骨頂を理解するのだった…。

オブジェに見える俺は多分、マシな方だろう。…見えない人には粗大ゴミの集積場にしか見

えないに違いない…。
「その他諸々は百歩譲ってかぁいいことにしてもいい！　だが郵便ポストまでかぁいいかぁ!?
それにあーゆうのってマズいんじゃないのか!?!?」
「…だって……はぅ……かぁいいんだもん…☆　はぅ～！」
「デカけりゃいいのか！　デカけりゃ!!」
「はぅ、そんなことないよぅ、小ちゃいのも大好きだよぅ、はぅ～☆　もちろん、大きいのは
もっと好きぃ、はぅはぅはぅ～☆」
「なぁレナ。ニューヨークに自由の女神ってあるだろ。…あれ、かぁいいか？」
「……うん、かぁいいよ……はぅ……ほしぃよぅ……。」
合衆国政府は早急に対策を練るべきだろう。このままでは遠くない未来、雛見沢に本当に自
由の女神がやって来てしまう…。
「…お待たせしましたです。」
梨花ちゃんが戻ってきた。先生に用があるとか言って職員室に呼ばれていたのだ。
「職員室に呼ばれるなんて面白くないよな。何かイタズラでもしたのか？」
「失礼な！　梨花は圭一さんのような不良とは違うでございますのことよ！」
沙都子が憤慨する。つくづく梨花ちゃんと沙都子は仲良しだよなぁ。勝手に感服し、沙都子

の頭をわしわし撫でてやる。

「あはは。違うよ圭一くん。梨花ちゃんはお祭りの実行委員さんなの。」

「祭り？　学校の文化祭かなんかの？」

「圭ちゃん圭ちゃん、この前言ったじゃん。村祭りだよ。綿流(わたなが)しのお祭り。」

「あぁ、そう言えば今度の休みに神社でお祭りがあるって言っていたな。んで、そのワタナガシって何なんだ？　灯籠(とうろう)流しみたいなもんか？」

「最後に沢に流すってとこだけは同じかな。」

「傷(いた)んで使えなくなったお布団(ふとん)とかどてらとかにね、ご苦労さまって感謝して供養(くよう)しながら沢に流すお祭りなの。」

レナと魅音が口頭で色々説明してくれるが、見たことのない俺にはなかなかイメージができない。

雛見沢中の住人が集まって布団やどてらを沢に積み上げる……？？？

流れが堰止められて大変だな…。そこに魚でも放してつかみ取り大会でもするのだろうか。

…串刺(くしざ)しにして塩を振って…お、うまそうな匂いがしてきた…!!

「それじゃあサマーキャンプですわ！　圭一さんて意外に想像力貧困でございますのね〜。」

「な、な！　なんで俺が下らん想像をしたことがわかったッ!?」

「……みー。表情に出てましたのです。」
今の想像が伝わる表情って一体どんなのだよ…⁉
レナがこんなカオだよ、と言って再現してくれる。………なるほど。納得。
「はははは！　まぁそんなに面白いものじゃないけどさ。楽しみにしてりゃいいじゃん。」
「みんなで行こ。当日は迎えに行くからね！」
お祭りなんて誰かと誘い合ってじゃないと行く気がしないからな。それにこのメンバーなら退屈はしまい。
「退屈どころか！　今年もやるよッ!!」
魅音が全員をぐるりと見回しそう宣言した。…一体何が始まるってんだ？　…魅音の様子から見るに…おそらく…、
「我が部の夏の風物詩ッ!!　綿流祭四凶爆闘!!」
「セ、センスねぇーッ!!　なんだよそのネーミングは!!」
「…レ、レナはかぁいい名前だと…思うけどなぁ……。」
鋭く却下しようと思ったが、レナは取り敢えず幸せそうなので無理に否定しないでおく。
「……圭一もいますから、今年は五凶爆闘になりますです。」
「で、この仰々しいネーミングの部活動とお祭りがどう結び付くんだ？」

「をっほっほ！　日頃部活動で培った実力をご披露するのでございますわ！」
「その通り！　日々の厳しい試練を乗り越えた精鋭中の最精鋭たる我々の実力を…!!」
「でも去年は村長さんに怒られたし…。今年は迷惑をかけないようにしないとね…。」
「……つまり露店巡りをしながら部活動をするわけです。」
例によって梨花ちゃんだけが的を射た説明をしてくれる。
なるほど、俺たちのあの騒がしさを祭り会場で「発表」するわけか。そりゃあ、レナの言う通り、村長さんにも怒られるだろうなぁ！
「あはは…！　でもとっても楽しいんだよ！」
その点に関してだけは疑いようもない。俺の仲間たちは遊ぶことや楽しむことについては天才的だ。転校してきての数日間でそれはもう実証されている。
都会にいた頃は祭りなんて興味なかったし、模擬店がちょっと並ぶ程度のもの以上の認識はなかった。だから心待ちにしたことも一度もない。……でも、みんなと行く雛見沢の祭りは、それとはまったく異なるだろう。
祭りの日はもう、すぐそこだった。

■大貧民と罰ゲーム

「じゃ、それはそれとして。今日も始めようかね！　異議はぁ!?」
梨花ちゃんが戻ってくるのを待ってたのは、例によって放課後の「部活」のためだ。なので全員が揃ったことを確認すると魅音が威勢のいい声をあげてくれた。
「「「な〜〜しッ!!」」」
俺たちの声が綺麗にハモる。
「やっぱり人数が多いときはトランプが一番の王道だよねぇ！　まさにこれぞテーブルゲームのベーシック！」
「ってことは、またガン牌トランプか!?」
「うぅん、今日は新品。傷はないから本当に条件は互角！」
「ほ、本当でございましょうねぇ！　そのカード、改めさせてもらいますわぁ！」
む、沙都子の言うのも道理だな。学年上は後輩に当たっても、部活においては俺の先輩だ。その沙都子の慎重さは多分正しい！　念の為と、みんなでカードを改める。
「うん。これなら大丈夫だよ！」

「みんな納得した？　じゃあ今日はね……『大貧民』にしよっか。五人て人数もいい感じでしょ！」

ほほぅ、大貧民とはなぁ！　トランプのスタンダードなゲームのひとつだ。手札を全てなくしたヤツがあがり、なんてのは今さら説明不要なくらいの有名人気ゲームだ。

基本は、前に出されたカードより強いカードを出して行く。連番や二枚出し、革命等様々なテクがありゲーム性を増している。ただ、知名度の高いゲームなだけに地方差やローカルルールが多数存在するらしい。

例えば名称。俺の住んでた街では「大富豪」と呼んでいた。

さっそく沙都子から学んだ慎重さを発揮し、ゲーム開始前にその辺りを確認しておくことにする。

「…一応、細部を確認しとくぜ。ジョーカーはオールマイティーか？　3は三枚でも革命可能か？」

「ジョーカーはなし。2が最強。革命返しは有り。3でも四枚なきゃ革命不可。」

「あとね、ゲーム開始時に貧民がいいカードを上納するってルールがあるでしょ？　あれはなしなの。」

「……圭一、だいぶ手馴れた感じがしますのです。」

「そ、そうですわね。…大貧民、だいぶお得意なんじゃございませんこと…？」
俺の手馴れたルール確認に梨花ちゃんと沙都子が警戒の眼差しを向ける…。
もう少し素人っぽく振舞うべきだったかもしれない。俺はこのゲームには多少慣れている！
大貧民で、しかもカードは新品。今日なら…勝てるかもしれない!!
さて、ルールはだいたいわかったが。…これだけじゃあるまい？
「で、今日の罰ゲームは何でございますの!?」
「それなんだけどさ、みんなで何枚かメモに書いて箱にでも入れて、敗者に一枚を引かせるってのはどうかな！」
「お、そりゃあなかなか面白そうだな！」
「をっほっほっほ！　ではドギッ～イのを書いて圭一さんに引かせてやりますわぁ！」
「あ、あんまりひどいのを書くと、自分で引いたとき大変だよ。」
レナの言うのももっともだ。とんでもない罰ゲームを書けば、万が一の時、自分が引くはめにもなるだろう。……でも、だからといって手加減をしようなんてヤツがこの場にいようはずもない！
「へへ、どんなドギツイのがあろうとも、負けなきゃいいってんだろ!?」
「わかってるじゃありませんの！　をっほっほ!!」

魅音がメモ用紙を数枚ずつみんなに配る。

「じゃ適当に書いてこのカバンの中に入れてー。負けた人はこの中に手を突っ込んで一枚引くってことで。」

さて、罰ゲームは何がいいだろう。さっきは威勢よくドギツイのを書いてやるぜと息巻いたが、レナの言う通り、下手をすりゃ自分が引くはめになる。……あまり過激な内容は自分の首を絞めるよな…。

「……何もなし、って書くのは禁じ手にしましょうです。」

梨花ちゃんのさりげない提案に魅音がぎくっ！　と手を止める。

「あぁあぁあ!!　魅音さん卑怯ですわぁ!!　『何もなし』って書いて角を折ってあるじゃございませんの〜!!!」

「はぅ、魅ぃちゃん、ずるーい！」

「へへ、えっへへっへっへっへ…。」

な、なるほど。万が一自分が負けた時には「角の折ってあるメモ」を引き当てれば安全ってわけか。…うまい保険だな。さすがは魅音、部長を名乗るだけのことはあるぜ…！

しかし、それを看破する梨花ちゃんも侮れないな。存在感が薄いからと言って甘くは見れない！

「みんな…あ、あんまり意地悪な罰ゲームはやめようね…？」
このレナの提案には誰も賛同しない。……みんな非情だ。
「大丈夫だよレナ。負けなきゃあいいんだからな!!」
「…う、うん。そうだね。よし！　頑張ってレナの罰ゲームをみんなに引かせるぞう！」
気弱そうなわりに容赦のないレナのことだ。……あまり舐めてかからない方がいいな。
「同感ですわ…。特に『レナの罰ゲーム』ってのがとっても気になるでございますわ…！」
「……誰の罰ゲームでも怖いです。」
「そういう梨花ちゃんの罰ゲームこそ得体が知れないぜ！」
「つまり。このゲームには負けられないってわけ!!　ご一同、覚悟はいいね!?」
皆、覚悟を決め、強く頷く。それを魅音が確認し、罰ゲームのメモをカバンに集めた。
……いよいよ…開戦だッ!!!

…よしよし、まずは軽快な滑り出し。
様々なカードが次々と場に出されていく。魅音は言うに及ばず、沙都子も梨花ちゃんもカードの切れは冴える。やや長考気味なのは俺とレナだ。
レナの場合は純粋に悩んでいるだけのようだが…俺は違う！　獲物を狙うサメの心持ちでじ

っと牙を伏せる。
「あれ？　これ通るのかよ？　じゃあ3出してあがりだぜ！」
「9！　いらっしゃいませんの⁉　8！　7！　あがりですわよッ‼」
「……5と5。あがりますです。」
「じゃあ最後の一枚を捨てて、あがりね！」
「ち……！　おじさんが機を逸すとは……ッ！！！」
なんと！　初戦で敗北を喫したのは魅音だった！　そして俺は確信する。
…今日なら…俺は勝てるッ！！！
「じゃあじゃあ！　魅ぃちゃん、この中から一枚引いてね〜！」
意気揚々とレナが罰ゲームの詰まったカバンを魅音に突き出す。魅音は照れ笑いを浮かべ、
頭をぽりぽりと掻きながら、その中に手を突っ込んで一枚を取り出した。
…そして、その内容を目にした途端、絶叫してわなわなと震えだす。
「……だッ⁉　誰これ⁉　書いたヤツだれぇぇぇえ⁉」
「…ぇぇと、どんなの？　どんなの？　…………ぇぇッ⁉」
覗き込んだレナも驚く。…一体どんなヤバいのが書いてあるってんだ⁉
〝校長先生の頭をなでる〟

なんだこりゃ。…魅音とレナの狼狽ぶりについていけない。
「…ちょっと待て。これがどうヤバいんだ?」
「圭一さんは気付きませんの⁉　校長先生はハゲ頭を恥ずかしがってますの‼」
「確かに校長先生の頭はいい感じで光っちまってるが。…だからってあの驚きようは大袈裟だろ。」
「……校長先生は武道の達人なのです。」
「若い頃は世界を修行して回って、武術の奥義を極めきったと豪語してますのよ⁉　素手で熊を倒したことがあるとか聞いたことがございましてよ!」
「戦後の日本の教育の乱れを憂えて教育者に転向したんだって…。」
な、何だが妙な雲行きになってきたぞ。…そいつの頭を撫でろってのか…?
「ぶ、部長の私が模範を示さないわけには行かないね…。ふぅ。………………うりゃあぁぁあああッ‼」
気合いの雄叫びと共に、魅音は廊下へ駆け出して行った。
「なぁ、静かにこっそり行って、穏便に済ます方が有利じゃないのか?」
「多分無理だよ…。だって気配でアメフラシが探せるって言ってたし。」
それはもはや人間の領域じゃねぇぞ…。

どっがぁあぁあぁんッ！！！　その時、教室を揺るがす轟音!!

「……校長の渾身の一撃なのですよ、にぱ〜。」

梨花ちゃんだけが、にぱ〜と笑うが、俺やレナは魅音が救急車の世話にならずに無事帰ってこれるかで心配だ…。

とりあえず、この学校に不良がひとりもいない理由がよくわかった。……あんな一撃、生徒指導の度に食らってたら、命がいくつあっても足りないぜ…。

しばらくの沈黙の後、よたよたとした足取りで魅音が戻ってきた。

「……撫でた。……これで……いい…!?」

そう言って魅音がドサリと倒れこむ。

沙都子と梨花ちゃんが近付き、介抱するのかと思いきや、首筋や手首に手を当て脈を測りだす。

「取りあえず生きてますわね。ゲーム続行は可能でございますわぁ!!」

「……お……鬼……。」

そーゆう部活にした部長がよく言う。

「でもでも！　これで一番おっかない罰ゲームはなくなったね！　ね!?」

気を取り直して笑うレナに魅音が憎々しげな笑みを向ける。

「私も絶対負けられないでございますのよ!!」
「…あがりましたです。」
「ならこれで俺も……あがりだぁあぁあッ！！！」
「そ、そんなあぁああ!! またレナの負けですかぁ!?」
ま、またレナか…！ 一体今度はどんな罰ゲームが…!?
不思議な期待感に胸が躍る。……期待？ いや、これは確信だッ!!
〝上下一枚ずつ脱衣。〟
ぶぷッ。もう片方の鼻の穴からも熱い鮮血がほとばしるのを感じた。
「そ、そそそりゃまずいだろッ!?!? 誰だよこんなの書いたのッ!?」
俺は真っ赤になりながらいきり立つ。取りあえず何か叫んでないと動揺が隠しきれない!!
あぁ誰だよこんなの書いたの!! 神様、そいつにノーベル賞を渡してくれ!!
「きっとノーベルすけべぇ賞ですわね。」
い、いかんいかん！ また表情で胸の内を語ってしまったぜ。
「……はぅ………ぅ………魅ぃちゃん……。」
レナが目を潤ませながら魅音に助けを乞うが…、非情の部活の部長、園崎魅音の答えは決まっている。

「ハイハイ！　甘えない甘えない!!　負けたら潔～くッ!!」

「…わ、わかりましたご主人様…。………はぅ……ぬ…脱ぎます…。」

「え、ええ!?!?　いやそのあの、マジっすか!?　うええええぇ!?」

いやそのマジかよ本当かよ!?　誰かがやめさせるだろうとキョロキョロするが、誰もレナを止めようとしない!?

やがて衣擦れの音がして……スカートが床に落ちる音に俺の心臓がどきんと高鳴る！

「こ、これで…よろしいでしょうか…ご………ご主人様ぁ…。」

紳士的に顔を背ける俺。…で、でも部活は…ひ、非情だもんな…！　それにどの道、対戦中は向かい合うしかないんだしな、…だだ、だから俺は仕方なく見るんだぞ！　決して邪な気持ちで見るんじゃないからなー!!

「あ、………な、なんだ……あははは……は。」

「圭一さん、何を期待してますの～!?　下に体操服着てなかったらさすがに脱げませんわぁ!!」

…レナは制服の下に体操服を着ていたのだ。…期待する姿と大きく違い、俺のこの世の終わりのようにがっかりしているのが、不覚にも言葉の端からにじみ出ていた…。

「くっくっく！　圭ちゃんもやるねぇ～!!　こっちの方向で攻めてくるとはおじさん、予想も

つかなかったわぁ。」
「ちちち…ちッ違うぞ魅音、誤解だ!!　これは俺が書いたんじゃない!!」
「ご、…ご主人様が書いたんじゃないんですかぁ…?」
　レナが赤面しながらもじもじとこちらを見る。
　…う、体操服なんて体育の時間に見慣れてるからどうってことないつもりだったが、……なんていうのか、…脱いだら体操服だったという前置詞が付くと…、何かこう、…あぁ！　ぐっと来るものが感じられるッ!?
「……圭一の頭から湯気がぷしゅーでにやにや笑ってて気持ち悪いのですよ?」
「う、うぇへへへへ梨花ちゃん、それは誤解だぜ、俺は極めて冷静だぜだぜだぜ、ぷしゅーーー。」
「はぅ、ご主人様、そんな目で見ないでくださいぃぃぃぃ…。」
　ふんぬぐおおおお!!　レナの恥ずかしがる仕草がいちいちクリティカルヒットする！　お、おちつけ前原圭一…!!　多分、この罰ゲームは魅音辺りが書いて俺のパニックを狙ったつもりなのだッ!!　敵のワナと知ってわざわざ躍るな前原圭一ー！！！　心頭滅却(しんとうめっきゃく)！　冷静になって今の状況を分析しろ……！！！
　俺は頭のコンピューターをフル回転させ状況判断に努めた。…そして出た答えは非常に単純

だった。
「ぉ……俺は勝ぁあぁあぁあぁあつッッ！！！！！」
そう、俺が勝ち続ける限りこの夢のユートピアミレニアムハーレムヘブンは永久に続くのだ!! そんなにも簡単なことで、たかだか部活メンバー四人に勝ち続けるだけで、この夢が終わらずに済むなんてッ!?
……そして俺は神になった。
「…ひぇ!? 何でこんなにカード運が悪いでございますのー!?!?」
「くくくく！ 沙都子の負けだな。罰ゲームカードを引くぞ。そりゃ来たぁッ!! 〝妹口調でしゃべる〟！！！」
「ぅぅぅ!! …はい、お兄ちゃん…。 …くぅぅ!!」
くぅぅぅぅ！！！ 生意気ッ子を屈服させるこの快感!!
「くわぁ！ …またおじさんの負けぇ!? おっかしいなぁッ！」
「ほほぅ、魅音の負けか。では引くぞぅ!? うひょぅ！ 〝女子スクール水着に着替える〟！！！」
「のぉおぉおぉ!! そいつは圭ちゃんに引かせたかったぁあ!!」
くぅうぅうう！！！ 魅音の嘆き(なげ)きは蜜(みつ)の味よのぉおお〜ッ！！！

「えっぇぇ⁉　ご、ご主人様ぁ…ま、また負けちゃいましたぁ…‼」
「レナの負けだな。引くぞ。〝一位にひざまくら〟‼　もちろん一位は俺だぁあぁあぁ‼」
「……は、はぅ……この格好でですか…ご主人様ぁ……。」
くぅおおぉおぉ‼　スカート穿いてないから生ひざまくらだああぁあッ！！！
「きゃ‼　お兄ちゃん…強過ぎですの………くすん。」
「おうおう、また沙都子の負けだな。引くぞ。〝一位にご奉仕〟‼　そうだのぉ、肩でも揉んでもらおっかなぁあぁ⁉⁉」
「は、はいお兄ちゃん…。くううぅぅ、悔しいぃぃいぃ‼」
「ほぅらもっと奥まで！　爪立てんじゃねーぞぉぉおお！　ぎゃっはっはっは〜♪‼」
すでに悪の皇帝と化した俺はこれ以上ないくらいに絶好調！　今の俺なら眼力ひとつでカードを操り、念ずるだけで次に引くカードの絵柄まで決められる…そんな気分だッ‼
…気がつけば、そこはすでにハーレム状態。俺はブルマーメイドと化したレナのひざまくらで高笑い。沙都子は首輪付きで妹属性化。魅音はスクール水着で羽団扇を扇いでいる。
「はぅ……きょ、今日はご主人様は、圧勝でございますね…。…きゃふ！　あんまり頭をごろごろしないで下さいましぃ…。」
あぁ、最初は直視できなかったはずのレナの恥ずかしい姿も、今の俺は当然のものとして見

ることができる…。なぜなら俺は神だからだー!!

あぁ、俺は思う。…どうして人間の欲望には終点がないのか。これだけのドリーム御殿(ごてん)状態でこれ以上、何を望むッ⁉⁉　にもかかわらず、まだ求めてしまうのだ！　それは、まだ俺のハーレムに加わることを頑(かたく)なに拒んでいる人間が一人いるからだー！

「……みー？　どうしましたですか圭一。」

「どうして人の欲望には限りがないのか…憂えていたのさ。」

そう。梨花ちゃんは一位こそ取らないものの、さっきからのらりくらりとビリを回避し続けている。

「……圭一は欲張りさんですよ。足るを知るといいのです。」

「ふっふっふ、充分理解してるよ。……なんてゆーのかな。もう死んでもいいってカンジ♪♪」

「きゃふ！　ご主人様ぁ…あんまりごろごろしないで……きゃふ…！」

「……死んでもいい、ですね。なら、その願いをボクがかなえて差し上げますのです。」

「ほぉう…？」

あまりに穏やかに、いつものようににこやかに言う。…だがそれは紛れもなく、梨花ちゃんの宣戦布告だった…！

「いいぞ梨花ちゃん!! やっちゃえーー！！！」
「このどすけべ大魔王をやっつけておしまいですわ〜！！！！」
「……ボクでは勝てないかもしれませんですが、それでも一矢報いますのです。」
「ほほぅ？ 梨花ちゃんにしちゃなかなか言うじゃないか。今のこの俺に勝てるとでも…？」
だが認めてやろう。沙都子の陰にやや埋もれがちなこの少女の精一杯の克己！ それを受けて立たないのは失礼というものだ。…相手になってやるぞ小娘ぇぇぇぇッ！！！！
さてさて、どんな足掻きを見せて、どんな罰ゲームを以って我がハーレムに加わってくれるというのか！
ゲーム中盤、魅音が数枚のカードを梨花ちゃんとすり替えているのを見抜くが、俺は知らないフリをする。……その程度で今の圭一さまが敗れると思うのかぁああああ!! その程度のことは取るにも足らない。これぞ王者の貫禄なのだ!!
「…2です。A・A・Aです。……8・8・8・8。革命しますです。」
梨花ちゃんがみんなから集めた強力な切り札の数々で畳み掛ける！ 序盤に惜しげもなく強力カードを束で使い、さらに革命でひっくり返しカードの優劣を逆さにする！ 見事な連続攻撃だ。さすがにこれでは手も足も出ないだろうとばかりに、みんなが一斉に、自信たっぷりそうに俺に振り返る。

「……くっくっく！　四人揃って共同戦線を張って…この程度か…笑止千万ッ！！！　愚か者どもめ身の程を知るがいいッ!!　………有りだったよな。革命返しだぁあぁあぁあぁあぁあッ！！！」

「んなッ!?　そんな馬鹿なことがあるわけ……ッ!?!?」

沙都子が絶望的な嘆きを漏らす！　……くっくっく！　うつけ者めッ！！！　そのそんな馬鹿なが今、目の前で起こったのだー!!　くっくっく、革命を前提にカードを切っていた梨花ちゃんにはもう強力なカードは残っていまいッ!!

梨花ちゃんの手札は、革命後の流れを掴むために弱いカードだけが集められている。つまり、その革命が潰された今、それらのカードには何の価値もない！

だから、呆気ないくらい一瞬で勝負は決着した。

「……ボクの…負けです…。」

梨花ちゃんが大量に抱え込んだ屑カードを手から取り零しながら俯く。……ふふふ、くっくっくっく、

「がっはっはっは！！！　ついに我が軍門に下ったり古手梨花ぁッ！！！　さぁさぁ、罰ゲームカードを一枚引くぞ!?　来い来い素敵な罰ゲームよ我が導きに応えよぉおお！　をぉおお!?!?」

〝猫耳・鈴付き首輪・しっぽ付き装備〟
「くっくっく!! もはや罰ゲームまでが俺の意のままに現われるわッ！！！ これは素晴らしい、素晴らしい罰ゲームだ、ぐわっはっはっは!!」
「……み、……みー…。」
梨花ちゃんはうな垂れながら諦め、猫耳、首輪、しっぽの三種の神器を装備する。そんなものがどうして魅音のロッカーに入っているのか疑問だが異論はないので突っ込まない。
「をお!! こ、これは!! ……はぅ〜〜!! 俺までレナ化した気分だ…！ こりゃあ確かに…か、かぁいい……♪♪♪」
「かぁいいよねぇ?? ねぇ!? ……はぅ……お持ち帰り……☆」
これは俺のセリフじゃない。本家レナのセリフだ。両鼻から鼻血をぼたぼたと零しながら、今すぐにでも拉致監禁しようと両手をわきわきさせている…。
しかし、今の俺ならその気持ちはよくわかる…。あああぁ、俺もレナになりきって、梨花ちゃんをお持ち帰りしちゃおうかなぁぁあぁ、げへげへ!!
「……みぃ…。」
梨花ちゃんが涙目で泣き真似をした時、レナの両耳からぽん！ と音がして輪っか状の煙があがる。…それでもなお残っていた、レナの最後のリミッターが外れる音だった。

「は、…はうううううぅぅ!! りり、梨花ちゃん、お持ち帰りお持ち帰りぃぃぃ!!☆」
「そ…そうか…その手が残ってたか…ッ!!」
レナの異常な様子を見て、魅音がぽんと手を打つ。
「……みー。…レナがどうしてもって言うなら……ボクはお持ち帰りされてしまうのです。」
「をっほっほっほ、でもそれは、レナさんに圭一さんが倒せたらですわぁぁぁあぁあぁッ!!!」
「はぁ? くっくっく、はーっはっはっは!! なるほどなぁ!? かぁいいモードのレナなら俺を倒せると踏んだわけか! だがそううまく行くかな!?!? 俺への反逆は神への反逆だッ!! 身のほどを思い知らせてくれようぞ!!! レナなど返り討ちに……ひッ!?」
威勢のいい俺の買い言葉は、みっともない悲鳴と共に飲み込まれてしまう。
…レナに一瞬、何が起こっているのかわからなかった。
なんと、レナの両手を五十二枚のカードがうねり、踊り、まるで手品師のカードさばきのように自由自在に駆け巡っているのだッ!!! そのカードのうねりの渦中でレナが恍惚とした表情で頭をぐるんぐるんと回している…!!
「や…ややややろややろ圭一くん……早くぅ早くぅッ!! 圭一くんをやってけて、レナが梨花ちゃんをお持ち帰りするんだよ〜〜ぅ!! はぅはぅはぅはぅううぅ!!!」

…俺の全身から、血の気と運気がザーッと潮が引く音を立てながら引いていくのがわかる…。
俺は体全身で理解した。……俺は、負ける。
「出ない!? 出ないの圭ちゃん!? ……ならこれで…あっがりぃ！！！」
レナの圧倒的な運気に吸い寄せられ、俺の手札は見事にゴミばかり…。運気の流れが完全に逆になったことをこれ以上ない形で思い知りつつ、俺は完全敗北した…。
悪の限りを尽くした俺の敗北を受け、みんなが一斉に大歓声をあげる。
「ふっ、悔いはないさ……。神さま、短い夢をサンキューな…。」
「さぁ！ 引くでございますよ、圭一さんの罰ゲーム!! どれがよろしいかしら、ゴソゴソ！
…これですわ!!」
みんなが一斉にそれを覗き込み、文面と俺の顔を交互に見比べる。
「今日一日、はしゃがせてもらったからな。…なんでもやってやるぜ。で、内容はなんだ？」
「全部。」
「は？」
〝今まで出た罰ゲーム全部〟
「なッ、……なんだそりゃぁあぁあぁあぁッ!?!?!?」
「圭一さん、言葉遣いが弟属性になっていませんでしてよ!?」

「ぅう！　……はいお姉ちゃん。……くぅうぅ！！！」
「ふわぁあ…☆　こ、これは病み付きになるでございますわぁ！　あと肩も揉んでもらいますわよ!!」
「圭一くん、ひざまくらはいいから…レナにも、ね？」
「うぐぅ…、は、はいご主人様ぁ……。」
「は、はぅ…！　圭一くん、そ…それ……すごくかぁいい…!!　もも、もっと言って!?　もっと言ってッ!?」
「あぁん、もうお許し下さいご主人様ぁ〜…!!」
はぅ〜〜！　と叫びながら、レナは鼻血を噴き出して悶絶する。もう俺のプライドなんか一山百円状態だ。
「次はおじさんだねぇ！　まずはの〜んびりと団扇で扇いでもらおうかなぁ!?」
ばっさばっさ！！！
「…あ、そうか。これも着ないと駄目だよねぇ？　スクール水着☆」
「え、ええ!?!?　それ女子用だろッ!?　俺は男子用でいいんじゃないのかぁ!?」
「ここにちゃんと〝女子スクール水着に着替える〟と明記してございますわぁあッ！！！！」
「だだ、だって!?　誰のスクール水着を着るんだよ!?　やだろ!?　俺なんかに着られた

ら！！！」
「あ、おじさん、そーゆうのはぜぇんぜん気にしないからぁ☆　いいじゃん役得でさぁ！　私、スタイルすっごく悪いからぁ圭ちゃんでも着れないことないと思うよ!!」
執行人たちが両手をわきわきとさせながら俺を取り囲む。
じょじょ、冗談じゃない!!　男の俺が女用の水着を着せられるなんて末代までの恥だぁあぁあ!!　だが部活メンバーに慈悲の心なんてあるわけない!!
「ぎゃぎゃ…ぎゃああぁあぁあぁあぁあぁあッ！！！」
第一感想。…胴回りがキツイ。第二感想。胸だけは割りとラク…。第三感想。股間が………はぅ。
「あははは～圭一くん、前屈みだぁぁ……かぁいいかぁいいッ!!」
「……あとこれに猫耳と首輪としっぽを付けて完成しますのです。」
「圭ちゃん、鏡見る？　……いやマジ凄いって。多分見といた方がいい。」
魅音の面白がる表情に混じる科学者的な冷静さがすごくイヤだ。見たらきっと俺の目が潰れちまうだろう…。
「え、…遠慮しますご主人様……。」
「ほほほ！　これで出来上がりですわね!!　このままの格好で下校するってのもあれば良かっ

たですのにぃ！　をーっほっほっほ、残念ですわぁ!!」
「じゃ…も、もういいか？　着替えてさ…。」
そう言って肩紐に手をかけた俺の背後に音もなく梨花ちゃんが立つ。
「……まだです圭一。…一番最初にやった罰ゲームが残ってますですよ？」
「え？　あと何が残ってたよ…？　……うぇ、」
梨花ちゃんが満面の笑みで突きつけた罰ゲームのメモには、……今日の大貧民の一番最初に引き当てられた罰ゲームが書かれていた…。
〝校長先生の頭をなでる〟
「………この格好で、…か？」
「にぱ～☆」
梨花ちゃんは黙って俺の頭を撫でてくれた…。

「ぅ押忍ッ!!　失礼します!!」
「うむ。入りたまえ。」
ガラリと引き戸を豪快に引き開け、俺は校長室に躍りこむ。首輪のちりんという音が無意味に可愛らしかった。

その俺の姿を見て、校長は笑顔のまま表情を硬直させていた。……無理もないだろう。俺が逆の立場でもそうなるに違いない。

だがこれは俺が狙った作戦でもある。何しろ校長は武道の達人だという。どんな奇策を以ってしてもその頭には触れられまい！　となれば、精神的な隙を生み出しその一瞬に賭けて真っ向勝負しかない！

そう、つまりこれこそは擬態・カモフラージュの原点と言えるのだ。人間は相手を見て「それは人間だ」と認識して始めて行動に移れる！　つまり、目の前に現われたものが何か理解できなければ、理解できるまでの一瞬は完全な空白時間となるわけだ……！！

校長め、この俺の服装が何なのか理解できまい!!　あぁそうさ俺だって何でこんなスゲエ格好してるのか理解できないさ!!　だがそのインパクトが与える一瞬の空白時間、それが俺の唯一の……勝機ッ！！！

「校長ぉぉおおおぉおおおっ！！！　その頭もらったぁあああぁあッ！！！！」

ピタリ。え…？

それは宙に舞い上がって空中より校長に襲い掛かる俺の額に、校長が左手の人差し指を当てた音。……じゃなくて、宙より襲い掛かる俺を、指一本で止めた音…!?

校長は一言俺に言った。

「漢(おとこ)とはなんぞや…？」
そして一心拍の間……。
ごぉぉおぉおおぉおん……ッ!!
黄昏(たそがれ)の雛見沢に轟音が響き渡るのだった……。

考え過ぎ

あの後の罰ゲームで、レナは梨花ちゃんの頭を好きなだけなでなでできる権利を獲得したので、ほくほくしながら梨花ちゃんたちと下校していった。
なので今日はまた魅音と二人での下校だ。
「いやぁ…白熱したねぇ！　圭ちゃんがあんなに大貧民が強いとは思わなかった！」
「いや、俺自身が一番驚いてるよ。でも、あの大負けのせいでちっとも強かったと思えねぇぞー。」
「あーれは古今稀(ここんまれ)に見る強烈なヤツだったねぇ！　くーっくっくっくっく！」
「いや…、ひっでえ目にあった。…あんな姿で担架(たんか)で運ばれた日にゃ末代までの恥だぜ。」
「あっはは！　でもいいじゃーん？　七代は自慢できるくらいイイ目も見たんだしぃ!?」

はぅ。それを言われると弱い。二人で笑い合う。
こうして下校しながら今日を振り返るなら、それはものすごく充実して楽しい時間だったと断言できるのだから。
この頃には、俺はもうすっかり、魅音の「部活」の虜になっていた。レナや沙都子に梨花ちゃんたちと過ごす部活の楽しさは、いつだって俺の人生の最高の思い出を塗り替えてくれるのだ。

「おや、また会ったね。圭一くん。」
突然、自分の名を呼ばれて驚く。
振り返ると、そこには折り畳み自転車にまたがる富竹さんの姿があった。
俺が挨拶を返すより早く魅音が挨拶する。その雰囲気から親しい面識があるように見えた。
「ありゃ、富竹のおじさまじゃないですの｜。どうです？　いい写真は撮れてます｜？」
「ま、そこそこにね！　……んで、」
富竹さんが急に俺の肩を引き寄せボソボソ声でしゃべる。
「しかし圭一くんも隅に置けないなぁ。今日はこの間とは違う彼女かい!?」
「そ、そーゆんじゃないですよぉ！」

「とぼけないとぼけない！　若いうちは経験が大事なんだからなぁ〜！　いやぁ羨ましい羨ましい！」
富竹さんなりに小声で気を遣っているつもりらしいが、身近にいる魅音には全て筒抜けで何の意味もない！
「ありゃあ、それを言ったら富竹のおじさまだってなかなか隅に置けないって噂ですけどぉ？」
「え⁉　あ、あははは！　嫌だなぁ、そりゃ僕と誰のことかな？　はは、ははは！」
「くっくっく！　プロポーズはいつなんですぅ？　というかそのカメラのフィルム！　何枚が彼女を収めているんだか〜！」
「からかわないでくれよ！　なは、なっはっはっはっは…！」
苦笑いをしながら頭を掻く富竹さん。…人のことをからかう割には、自分にも気になる女性がいるという風な感じだ。
魅音はしばらくの間、それをネタに、男ならガツーンと！　みたいな話をしてからかうのだった。
「んで、おじさまは今年は？　綿流しまで滞在ですか？」
「うん、そのつもりだよ。お祭りを一通り撮影したらまた東京に戻るつもりさ。」

「やれやれ、カメラマンってヤツぁ本当に気楽な商売ですことぉ！　早くでっかい賞を獲って有名になって下さいよねぇ！　婚期（こんき）逃してまで写真撮影に熱中してるんだからぁ！」
「そ、そんなことはないと思うな！　男は三十路（みそじ）から味が出るんだよ…？」
「ミソから味が出てどーすんですかぁバッチイなぁ！」
「ん、あ、あはははは！　おっと、そろそろ宿に戻らないと暗くなっちゃうなぁ！」
富竹さんは苦笑いしながら、そろそろ話を切り上げてその場を去りたいようだ。どうも魅音には全然頭が上がらないらしい。
「じゃあお二人とも。お祭りでまた会おうね！」
富竹さんは陽気に手を振るとひぐらしの声の中に消えて行った…。

「あんな調子で本当に有名になれんのかねぇ。個展開いたら私の写真、展示してもらう約束になってんだけど〜、こりゃ当分実現しそうにないかねぇ。」
「魅音は富竹さんのこと知ってるんだ。」
「ん、知り合いっていうか、ほら、ここじゃよそ者はすぐわかっちゃうからね。」
「昨日今日会ったばかりという感じじゃなかったな。」
「富竹さんはね、季節の風景や野鳥を撮影してるんだとかで、季節ごとにマメに雛見沢に通っ

てるんだよ。だから、遭遇率はレアだけど、顔と名前は村中に知られてるんだよ。まぁ、あんな感じでユニークなお人だからねぇ！　いい年しててからかい甲斐があるし！　一昨年（おととし）だったかな⁉　秋頃にさ～！」

住んでいるのは東京らしいが、だいぶちょくちょく雛見沢に現れるので、村人にとってはだいぶ知名度の高い人らしい。

それだけに、富竹さんに関わるエピソードも少なくないらしく、魅音はそれらを回想しては、面白そうに語るのだった。

そんな魅音が口にする富竹さんはずいぶんユニークなイメージだ。

…俺の中での富竹さんは、……もう少しミステリアスだ。…バラバラ殺人とか、…「それは警告かい？」とか、……何と言うか。

その心の中の言葉が、そのまま口から出た。

「……富竹さんって本当に野鳥撮影で来てるのかな？」

魅音がきょとんとした顔で、なんで？　と聞き返す。

「なんかこう…撮影以外の目的で来てるような…さ。…そんな気がしないか？」

例えば……例の…バラバラ殺人の何かを……。そう言おうとしたら魅音がポンと手を打って笑い出した。

「へぇ⁉　やっぱりそう思う？　……だとしたらいい勘してるよ圭ちゃ～ん！」
「何だよ、何か知ってるのかよ魅音…。」
「まぁねぇ～！　他のみんなはひょっとすると気付いてないかもしれないけど……このおじさんの目は誤魔化せないしねぇ～…☆」
魅音はやたらともったいぶったが、その答えが俺の想像する方向とはまったく違うことは容易に想像できた。
魅音が言うには、村のある女性に心を寄せているらしく、そのために通い詰めているのが本当の雛見沢来訪の理由らしく、写真はその方便に過ぎないという。
それから魅音は、富竹さんのことをよく知らない俺のために色々なことを教えてくれた。
彼がカメラマンとしては三流であること。煮え切らない奥手な男で、相手の女性にいい感じで尻に敷かれていること。でも基本的にいい人で子供たちと一緒に遊んだり写真を撮ってくれたりすることもあるという。
そのイメージは非常にのどかで、俺が彼に対して持っていた妙なイメージは勘違いであることを認めなければならなかった。
「そうなのか…。いやごめん。俺、富竹さんって人をちょっと勘違いしてたよ。」
「へー？　どう勘違いしてたの？」

「いやさ、何と言うかミステリアスな感じと言うか…。だからてっきり探偵とかスパイとかそういう感じの、」

「探偵!? スパイぃ!? あっはははははは、そりゃあどっちも富竹のおじさまに一番向きそうも無い職業だねぇ、あっはっはっは！」

愚直で疑うことを知らぬお人好し。それが富竹さんなのだ。魅音にこうして笑われていると、俺も何だってそんな妙な勘違いをしてしまったのか恥ずかしくなる。だから魅音と一緒に俺も笑い、その勘違いを吹き飛ばすことにした。

そうして、富竹さんに対する勘違いが消えると、急に肩が楽になった。

俺は雛見沢の、夕暮れの空気がこんなにも澄んでいたことをやっと思い出す。

「……………ッ、はぁぁあぁぁあぁぁ〜!!」

肺の空気を全て吐き出し、同じだけ思いきり吸いこむ。黄昏の匂いがした。

「どしたの圭ちゃん。」

「ひぐらしの声ってさ。こんなにも気持ちいいものだったんだな、って。」

「あはははは！ 圭ちゃん、何を今更。」

どちらからともなく。もう一度二人そろって軽く笑い合う。

涼しい風と徐々に朱を混じらせていく空の色。…そして、ちょっぴりの儚さを感じさせるひ

ぐらしの美しい大合唱。
ようやく俺は先日から心の中に居座っていた、もやもやした気持ちを吹き飛ばせるのだった。
「レナは今頃どうしてるかな。梨花ちゃんを思う存分可愛がれたのかな。」
「今頃は夕食を振舞うから遊びにおいでって誘っている真っ最中だと思うよ。」
「はは、うまく持ち帰れるといいな。」
「どうだろうねぇ。梨花ちゃんってあれでなかなかうまいから！」
「あぁ、それは同感だ。可愛い優等生に見えて、あれでなかなか狸だよなぁ！　頭を撫でる罰ゲーム、あれきっと梨花ちゃんだぜ。」
「私も同感～！　校長先生が頭を撫でさせてくれるのは梨花ちゃんだけだしね！」
とりとめのないおしゃべり。
夕方の空気とひぐらしの声が、熱かった今日一日の熱をやさしく冷ましてくれた。


回覧
で協力して、楽しいお祭りにしていきたいと思います。
(1) バザー品募集中！
毎年好評の鶴見沢大バザーへの出品をお待ちしています。
なま物はご遠慮ください。
担当：牧野　Tel(X)XXXX
飛び入り参加を募集しています。
小学生から中学生の目立ちたがり屋さんを待ってます！
Tel(X)XXXX
一口千円からの義援金を募集しています。
一口につき模擬店券シートを1枚進呈しています！
Tel(X)XXXX
お祭りの楽しいアイデアも随時募集しています。
キリトリ線
200円
200円
200円

回覧板


6月19日(日)

それから数日が経つ。

あれから今日まで、魅音に用事があったり、梨花ちゃんにお祭りの手伝いがあったりとでなかなかメンバーが揃わず、部活はお預けになっていた。

部活の度に命を削るような大立ち回りをさせられて二度とやるものかッと思うのだが、こうして何日もお預けになれば、日々の学校などまるで炭酸の抜けたコーラみたいなもんだ。

つまり、俺はすっかり部活に魅せられて修羅場中毒と化してしまっているらしい。だから、今日は本当に久しぶりの部活が開催されることになり、全身の血が泡立つほどわくわくするのを抑えられなかった。

それもただの部活ではない。その名も「綿流祭五凶爆闘」!! 神社の境内で行なわれるお祭り会場でわいわい遊ぶ、我が部の一大イベントらしい。

…しかし、部活部活って言うけど、俺たちって何部なんだ? まぁ名前なんてどうでもいいか!

「圭一〜。この浴衣、まだ着れるかしら? ちょっと袖を通してみてくれる?」

お袋がほこりの匂いがする浴衣を引っ張り出してきた。息子がお祭りに遊びに行くからと、季節感たっぷりなのを引っ張り出してくれたわけだ。
「いいよ浴衣なんて…！　恥ずかしいから普段着で行くよ。」
「でもお祭りなんだから。着て行きなさいな？」
「レナとかは普段着でいいって言ってたぜー？　浴衣なんか着てったらかえって恥さらしだよ！」
俺はいつものよそ行きの上着を着る。早く表に飛び出したくて仕方がなかった。
「祭りにはレナたちと行くからさ。俺のことは放っておいて大丈夫。」
「そう？　じゃあ母さんは父さんが起きたら二人で行くわね。」
親父はソファーに毛布で高いびきだ。
「あの調子じゃ…昨夜も徹夜かな。」
「急ぎの原稿をようやくさっき発送したとこなの。ひょっとすると起きないかもねぇ…。」
親父はたまに美術雑誌のコラムとかも書いてるらしい。…一度も読んだことはないが。
ひょっとして俺の親父ってすごい画家なんだろうか。…実の息子が言うのもなんだが、そんなに売れているとは思えないのだが。でも家族三人をしっかり食わせているし、生活には何の不便もない。俺が知らないだけで……ひょっとするとすごい大画伯なのかもしれない…。

ぴんぽ〜〜ん！

「圭一くん、いらっしゃいますか〜〜!!」

しまった！　もう待ち合わせの時間だったか!!　レナの元気のいい声が聞こえてくる。

家に来られたくなかったから、早々に家を出て外で落ち合うつもりだったのに…!!

「あらあらレナちゃん！　いつもうちの圭一がお世話になってまして…！」

「あ、…お、おばさま……こ、こちらこそ…お、お世話に…なって……、」

息子の友人、しかも異性ともなれば挨拶したくなるのが親の習性ってもんだ！　しかしレナ、なんでうちのお袋に会うだけで赤くなるんだぁぁあ！！！

「そこで真っ赤になるな！　実に気まずい！　行くぞレナ！」

放っておけばいつまでもぽやーっとしているだろうレナの手を取り、ずんずんと歩いて行く。

「いってらっしゃい。レナちゃ〜ん！　圭一をよろしくね〜！」

「はぅ！　はい、おばさま〜〜！　圭一くんはレナが命に代えましても〜☆」

「えぇい、やっかましい!!　ウチのお袋と会話するなー!!」

引き摺(ず)られながらもお袋に手を振り返すレナ。俺は気恥ずかしさを隠すため、ずるずると引き摺っていくしかなかった。

待ち合わせ場所にはもう魅音が待っていた。登校の待ち合わせの時は遅れることが多いくせに、遊ぶ時の待ち合わせだけは遅れた例がない。
「いよッ、圭ちゃん！　今日はお腹空かしてる？　露店で済ますんだからね！」
「部活が露店勝負とわかってて、腹を無駄に膨らますと思ったかよ!!」
「くっくっく！　そうでなくっちゃ！」
魅音と互いに嫌らしい笑いを浮かべ合う。きっと今夜もとんでもない目に遭わされるだろう。
でも、きっとものすごく楽しい時間になるに違いない…！
「おいレナ、沙都子と梨花ちゃんは？　もう神社に行ってるのか？」
「うん！　梨花ちゃんはお祭りの実行委員さんだもん。沙都子ちゃんもきっと一緒だよ。」
「そっか。よっしゃ！　ならさっそく神社へ向かおうか！　今日は目いっぱい騒ぐぞぉ!!」
「「お〜〜〜〜〜ッ!!!!」」
俺たち三人は、祭り会場に入る前から早くもテンションはマックス！
神社へは自転車で向かうが、とろとろのんびり走るわけもない。わずかの時間も惜しいと、遅刻を争う時でも滅多に見せない気迫で会場を目指すのだった。
古手神社は以前来た時の静かな様子からは想像もつかないくらいの大賑わいを見せていた。

色とりどりの提灯が並び、連なる露店やそれに群がる人々の雑多な雰囲気が、とても心地よい。
「すげぇ人だなぁ!! 雛見沢ってこんなに人がいたんだ…。」
「綿流しのお祭りはみんな来るよ。多分、雛見沢の人の半分くらいは来てるんじゃないかな。」
村人参加率五〇パーセントはいくらなんでも大袈裟な！ と笑おうと思ったが、普段の閑散とした雛見沢を思えばレナのその表現はそうおかしくもないかもしれない。それくらいに境内は大賑わいしていた。
「それだけじゃないよ。近隣の町の町会や子供会も招待してる。子供の賑わいはお祭りの花だからねぇ。」
「そうだよな。俺たちの学校、あれしか生徒いないのに。今日は子供の姿がやたらたくさんあるぜ！」
これだけ村人が大勢いるとなれば、レナも魅音も面識のある人とたくさんすれ違う。
「あ、どうもこんばんは〜！」
「あぁらレナちゃん。この間はお惣菜をありがとうね！ うちの子もおいしいって喜んでたわ。」
「あ、いえいえ！ 気に入ってもらえてうれしいです。和正くんにもよろしくお伝えください

ね！」
「よぉ！　園崎のお嬢ちゃんじゃねぇの！　今年も屋台担いで来てやったぜぇ!!」
「おっちゃん、太ったぁ!?　今からそんなお腹じゃ果ては心筋梗塞だね！」
「お。この兄ちゃんは新顔だなぁ。嬢ちゃんの後輩かい!?」
「うちの新入部員だよ！　期待のニューフェイス！　侮ると一晩で屋台潰されちゃうよ〜？」
「がっはっは！　嬢ちゃんのお墨付きかい！　そりゃーお手柔らかに頼むぜ〜！！」
想像通りというか、魅音は屋台のおっさんたちととても親しげに話している。
「魅ぃちゃんは元気いいからね。おじさんたちにすごく人気あるの。」
「あー、何かわかるなぁ！　でも、レナも人気あると思うぜ？　可愛いしな！」
もちろん悪い病気が出なければ、という条件付きだが。
「…へ……レナが……？　……だ、…誰に人気あるのかな？　あるのかな!?」
「へへ、誰かにだよ。」
レナの頭を乱暴にぐしゃぐしゃなでてはぐらかす。
色々と妙なところはあるが、それらを受け入れられるならレナもとても面白いヤツだった。
もっとも、大抵のヤツは数々の奇癖に面食らうだろうがなぁ。
「すっごいたくさんの露店でしょ！　町からわざわざ来てくれてるんだよ。やっぱりこういう

のがないとお祭りは盛り上がらないよねぇ。」
「まぁなぁ、祭りの最大の楽しみって露店で遊ぶことだもんなぁ！　で、それを俺たちは荒して回るわけか。…どんな勝負にせよ、俺は負けないぜ!!」
「そうだね。……えへへ…がんばろ！」
レナと二人で意気込んでみせる。魅音もニヤリと笑い、今日のお祭りをそれ以上に楽しいものにするとその表情で語るのだった。
「あーーッ!!　遅いですわ皆々様!!　レディーを待たせるとは圭一さんもなってないでございますわ〜！！！」
そこへ、甲高い声が飛び込んできた。先に来ていた沙都子である。
「ほ〜。そりゃすまんな。で、その待たせた『レディー』ってのはどこにいるんだ？」
「ぬわんですってぇええええええッ！！！！」
「あっはっはっは！　沙都子も元気が有り余ってるようじゃん！　結構結構！」
「当然ですわー!?　何しろ今日は部活部活また部活の連戦ですのよ？　このくらいのパワーじゃまだまだ足りませんわ！」
「へへ、絶好調みたいじゃねぇか！　でも気持ちはわかるぜ。何だかんだ言って久しぶりの部活だもんなぁ。」

その時、レナが感嘆の声をあげた。どうやら梨花ちゃんの登場らしい。
「…わぁ〜あ☆！　梨花ちゃん……か、かかかかか…かぁいい!!　お持ち帰りぃいい!!」
レナが梨花ちゃんにがばっと引っ付く。梨花ちゃんは赤い袴の印象的な巫女さん姿だった。どことなく神秘的な雰囲気と相まって、なるほど、レナならずともお持ち帰りしたくなる気持ちはよくわかる！
「……こんばんはですよみんな。圭一もこんばんはです。」
「おう！　その服、なかなか今日の雰囲気によく似合ってるぜ！」
「みー、ありがとうなのですよ。」
「魅ぃちゃん家のおばあちゃん、本当にお裁縫上手だね…！　梨花ちゃんにぴったりサイズ合ってるかな！」
「採寸に何度か呼ばれてましたものねぇ。まさに梨花専用の一点物ですわね！」
「へぇ！　じゃあこれ、魅音の家のばあさんが作ってくれたのかよ。すげぇな！」
「まぁねぇ。婆っちゃも色々多芸だからねぇ。着心地は問題ない？」
「みー！　とっても良い着心地なのです。」
「梨花ちゃんはお祭りの最後に大切なお仕事があるから、その衣装なの。」
「あー、なるほどな！　梨花ちゃんは確か、今日の祭りの実行委員だったとか言ってたよな。

その仕事が祭りの巫女さん役ってことだったのか！」
「……お仕事はお祭りの最後のところだけなのです。…だから、まだまだゆっくり遊べますですよ。」
「ってことはここで時間を無駄にできないということですわ～！　さぁさぁ、皆さん参りましょうですわー!!」
「おっしゃぁぁあぁッ!!」

こうして部活メンバー全員が揃い、俺たちは五人の郎党でさっそく祭りを練り歩き始める。
やっぱり祭りの雰囲気ってのはテンションを上げる魔力があるよな！
魅音は目に付いた屋台にみんなを誘っては珍妙な勝負を提案するのだった。
「まずはここから行くよッ!!　たこ焼き早食い勝負～ッ！！！　各自購入の上、よーいどんッ!!」
屋台の定番、たこ焼き屋ッ！　たこなど名ばかりの小麦粉玉というエセっぷりがいかにもだ!!
「あッ熱ッアツがツがぁあぁあぁあッ！！！」
「け、圭一くん、大丈夫!?!?　お水お水!!」

「あ～あ～…そんなアツアツたこ焼き、丸呑みなんて自殺行為でございますわぁ！」
「コツを伝授すると、作り置きの冷めたヤツを購入するのがミソかなぁ。」
「……実においしくないですよ。」
もちろんこんなのは前哨戦だ。口の周りの青海苔を拭うのもそこそこに隣の屋台へ駆けて行く。隣の屋台はかき氷だ。ちょっと季節が早いが、俺たちには関係ない!!
「よしみんな！　今度はカキ氷の完食早食い勝負で行こうぜッ!!　レディ、…ゴーッ！！！」
「…か、かき氷の早食いなんて……む……むり～…!!」
「体温で少しでも溶かせば……!!　つッ!?　冷たいですわよぉおぉおお！！！」
「甘いね！　おじさんはシロップ大盛で頼んだのさ!!　混ぜればすぐに溶ける!!」
「へっへへへ!!　遅過ぎるぜのろまども!!　正攻法の時点でお前らの負けだぁあぁあああぁあ!!　見ろこの超絶技ッ!!　んぐッ、ぷはぁあぁあぁッ!!　完食だぁあぁあぁあぁッ！！！」
「け、圭ちゃんがぁ!?　は、早過ぎる…ッ！！！！」
「ま、……まさか…圭一くん……後ろの……金魚すくいのお水を入れたんじゃ……!!」
「ポイントは金魚のフンが入らないように気をつけるところだ。みんなも試してみろ、早いぞ!?」
「……実においしくないですよ。」

四人は揃って首をぷるぷると横に振る。
さぁさぁ次の露店はなんだ！　お次はこれまた定番！　綿アメ屋だッ!!
「次はこちらにしませんこと!?　もちろん早食いですわっぁあぁあ！！！」
「ね、ねぇねぇ…綿アメの早食いなんて、どうやるのかな、かな!?」
「いや、……ひとつ手がある!!　くそ、だがこの技はまさに綿アメに対する冒瀆!!」
沙都子のよーいドンッ!!　の合図と共に俺と魅音、そして沙都子が手の平でばしんばしんと叩いて一瞬にして綿アメを潰してしまうッ！！！　割り箸ごと口に入れるまで……三秒ッ！！！！
「ほぅ!?　言い出しっぺの沙都子はともかく、圭ちゃんまでもこの技に気付いてたとはね……！」
「へっ、俺をいつまでも新入部員扱いしないことだぜぇぇぇぇぇぇ!?」
「……実においしくないですよ。」
そういう梨花ちゃんも両手でぺたぺたにしてから割り箸をしゃぶっている。
「こんな綿アメの食べ方。きっと日本中でもここだけだよぅ、はぅ。」
ひとり完全に出遅れたレナは、諦めて大人しく綿アメを頬張る。多分、レナに食べてもらえた綿アメが一番幸せだっただろうなぁ。

しかし……、このまま行くと終いには「ヤキソバを犬食いで完食！」とか「トコロテンを鼻で食べる勝負！」とかに発展しかねないぜ…。
「くっくっく！　それでもおじさんは勝つけどねぇ！」
「悔しいですけど、悪食勝負では魅音さんにはかないませんわねぇ…。」
「みー。魅音はお行儀が悪いのが大好きなのですよ？」
「何よあんたたち。次はヤキソバにブルーハワイかけて食べる勝負にしたいわけぇ??」
ブンブン！　沙都子と梨花ちゃんが同じモーションでブンブン首を振る。
「あ、あのさ…！　今度はちょっと食べ物から離れたゲームにしないかな？　かな？」
レナもこのままヒートアップすれば、洒落にならない勝負に発展しかねないと感じたのだろう。他のゲームにしようと提案してくれた。
「じゃあレナ。次のゲームをあんたに任せるよ！　何でもいい!!」
「じゃあねじゃあね！　レナは審判だよ！　このお祭り会場でかぁいいものを探してくるの！！　制限時間は一分〜!!」
「ほほぅ？　おじさんを試すつもりぃ!?　レナのセンスはわかってんだから！」
「上等ですわぁぁぁ!!　私だってレナさんの好みは熟知していましてよ!!」
「よし…。……多分、あれなら勝てるッ！！！」

「よーいどん！！　……あれ？　圭一くんと梨花ちゃんは…なんでスタートしないんだろ？　しないんだろ？」

魅音と沙都子は猛ダッシュで会場に散ったが、俺と梨花ちゃんは焦る様子もなく、ただ立ったままだ。

「ひょ、ひょっとして……もう見つけてあるの？？　かぁいいの！」

「……もう見つけてありますです。…圭一もですね？」

「あぁ。」

「なんだろ！　なんだろ!!　楽しみ～!!」

魅音と沙都子が戻るまでのわずかな時間を立ち尽くす俺と梨花ちゃん。

「梨花ちゃん、……あの技を使う気だろ。」

「……みー？　圭一は一度見たことがありましたですね。ボクも部員です。…勝つためなら会則第二条ですよ。」

梨花ちゃんのせいいっぱいの冷笑。…上等だぁあぁあッ！！！

魅音も沙都子もそれぞれ秘策を胸に戻ってきたようだ。

「じゃあじゃあ順番にね！　一番は部長さんの魅ぃちゃんからぁ!!」

「悪いけど。いきなりキメさせてもらうよ！！！　おじさんはこれだッあぁあぁ!!」

こんなのどこから拾ってきたんだ。それはブリキでできた古いひし形の看板だ。

「…凡カレーに…緊張蚊取線香…オロ波ンCぃッ!!! どうッ⁉⁉」

し、渋い……渋過ぎるぜ魅音…。そんな時代を感じさせるお宝をよく一分で掻き集めてこれたもんだよ…。しかし、それのどこがどうかぁいいのか説明してくれ。

だが、レナは両耳と鼻の穴からチリチリと音を立てながら煙を吹いている⁉⁉ ……わ……わからねぇ…。

「い、いいねいいね‼ お〜持ち帰りぃ〜‼」

「魅音さんのもまずまずの線でしたけど、私のは手作りの分、強力ですわよぉ⁉ ご覧あそばせッ!!! これでございますわぁああ‼」

「んなんじゃそりゃあ…⁉」

…それは婦人会の出店する焼とうもろこし屋の手作りの画用紙ポスターだった。

いかにも絵心のない主婦の手描き。…まるでデッサンの取れていない擬人化された焼とうもろこしのイラストが哀愁を誘う……。だが、………ぷッ! という鋭い音が響き渡る!

それはレナが鼻血を噴き出した音だったッ‼ ってことはその評価は、魅音より上だってことかッ⁉ わからねぇ、わからねぇよレナのセンス、五世紀遅れてるか、さもなきゃ五世紀先取りしてるかのどっちかだ…。

「なんてこと…！　降り積もった年月の渋みなら勝てると思ったのに…！」
「をっほっほっほ!!　所詮は量産看板！　手描きには勝てませんわぁ!!」
悔しがる魅音に高笑いの沙都子。そして満面に至福の笑みを浮かべるレナ。…何だか、俺の「アレ」が通用するかちょっと不安になってきたぜ…。
「……では次はボクが行きますですよ。」
「さて、梨花ちゃまはどんな手で来るのかなぁ？　さっき探しに行った様子もなかったし。」
忘れたのかよ魅音も沙都子も。……梨花ちゃんにはあの技があるじゃねぇか……。
梨花ちゃんは俺たちのところから十メートルくらい離れると、レナに向かってよちよちと歩き始めた。…………その様子に魅音と沙都子がはっとする!!
「し、しししまったぁ！！　その手がありましたわ、というかずるいですわぁ!!」
そうなんだよ、ずるいんだよ!!　でももう遅いッ！！！！
梨花ちゃんは…何もない平らなところでコテン、と転ぶと動かなくなった。……レナが慌てて駆け寄る。
「り、梨花ちゃん、大丈夫かな!?　大丈夫かな!?」
梨花ちゃんは額にこぶを作り、半分涙を溜めて……、袖からは指だけを覗かせて…。（そしてここが肝心だッ!!）でも手の甲は袖に隠れて見えないようにし……ッ!!

「……みぃ。」……と一言、「鳴いた」。
「はッはぅ〜〜！！！！　か、かかか、かぁいいかぁいい！！！　お持ち帰り〜〜！！！」
レナは真っ赤になって頭をぐるんぐるんと回しながら興奮した様子で梨花ちゃんに抱き付き頬擦りを繰り返している…ッ！！！　三人の中で最高の評価だ！
「梨花ってたまに狡猾ですのよね…。将来が末恐ろしいでございますわぁ…。」
「しかし、さすがだぜ……。どこまで取っても一分の隙もない。ロリ！　巫女！　半涙！　みぃ！　完璧だッ!!　ただのコケを萌えにまで昇華した！　これぞまさに芸術と呼ぶに相応しいぜぇぇぇッ!!」
「……圭ちゃんってこーゆうの好きなんだねー。へー。」
魅音のつっこみにカミソリを感じるが気のせいということにしておく。
完全にかぁいいモードに浸かり込んだレナをなでなでしながら、梨花ちゃんが不敵に俺に振りかえる。
「……さぁ圭一☆　ボクに勝てますですか？」
…冷静な笑顔がコワイぞ梨花ちゃん。やっぱり梨花ちゃんは狸だ…。
「そう言えば、圭ちゃんもさっき、探しに走らなかったよね。何か秘策があってのことだろうけど。……何を見せてくれるのやら…。」

「そうですわね。梨花の技は梨花だからこそ可能なんでございましてよ？　圭一さんがどう振舞ったところで、梨花以上の萌えを表現できるとは思えませんわ！」
「……圭一も芸をしますですね？」
「へへ、………さぁどうかな。判断は審判のレナに委ねるぜ。…見てろよぉ！」
俺は未だかぁいいモードの冷めないレナを梨花ちゃんから引き剥がした。
「はぅ～!!　かぁいいのかぁいいの～…☆　圭一くぅん……離してぇ…！」
「今から俺がもっとかぁいいのを見せてやるから少し我慢しろ。」
「え…？　へ？　も、もっとかぁいいの……??　そんなのあるの？　あるの!?」
「だがここはちょっとギャラリーが多い。あっちの陰へ行こう。」
俺は目を白黒させるレナを神社裏の物陰へ引きずって行く。
「……私たちには見られたくなくて、それでレナさんがお持ち帰りしたくなるようなかぁいいもの、ですの？　何でございますのかしら。」
「……って、……ふぇ!?　い、いや圭ちゃんに限って……いやまさか……。」
「……みー！　ファイト、おーです。」
ほどなくして俺はみんなのところへ戻る。……やや遅れてたどたどしい足取りでレナも戻ってきた。

「まさか圭ちゃんのヤツ！　ねんねのレナに…ヘンな事したんじゃあッ!!」
魅音たちが俺を追い越しレナに駆け寄る。
「へ、ヘンなことって一体なんでございますのぉ!?」
レナは、ぽーーっとした様子で惚けていて、話し掛けられていることにしばらくの間、気付かなかった。
「は!?　……はぅ、なんだ魅ぃちゃんかぁ……はぅ…。」
「レナ！　だ、大丈夫!?　圭ちゃんにヘンなことされなかったッ!?」
「ぅ……ぅうん、…レ、レナ……ヘンなことはされなかったよぅ……はぅ…。」
「……か、かなりの重症ですわ…。圭一さんは一体、レナさんにどんなかぁいいのを何を見せましたの!?」
「…うん………とってもかぁいかったよぅ……はぅ〜……☆」
「だから何!?　レナあんた、何を見せられたのッ!?」
はぅ〜……と、大きくため息をもう一度つくレナ。そして目を輝かせながら言った。
「かぁいかったよ☆　圭一くんのオットセイ、」
ぐしゃ、どしゃあぁぁあッ！！！

瞬きするより早く、俺の顔面に魅音と沙都子の肘が埋め込まれる……ッ！！！

「え？　えぇ⁉　なに？　なに⁉」

驚くレナをよそに、大激怒の魅音と沙都子は俺に馬乗りだ。ちょ、やめ、ぐぎゃげごぷげッ‼

「いくら勝負とは言え、圭ちゃんの汚い物を見せるなんてーー‼」

「コンのド変態～！！！　調伏してさしあげるでございますわッ！！！！！」

「ちッちがちがッ、誤解だぁあぁあぁあぁあッ！！！！！」

「魅ぃちゃん、沙都子ちゃん⁉　何だかわかんないけど…誤解だよ‼　圭一くんは…‼」

「……みー。オットセイさんのキーホルダーなのです。」

梨花ちゃんが俺のポケットをまさぐって、カギに付いたキーホルダーを取り出す。

「ふぇ？」

「……昔、夏休みの宿題で作ったと言ってますです。恥ずかしいので滅多に人に見せないとも言ってますですよ。」

「うん。……ちっちゃくて、かぁいくて。…せいいっぱいがんばったって感じがとっても素敵だったよ…☆」

「な、…なぁんだ…‼　てっきりおじさんは圭一のかぁいいオットセイかと～‼」

「をーっほっほっほ！　さすが魅音さんですわ〜！　間違える方向もお下品ですことぉ。」
「あぁぁあ⁉　あんただって同じモンに勘違いしたでしょーがー‼」
互いを威嚇し合い一触即発状態の魅音と沙都子！
…頼む。……疑惑が解けたなら取り敢えず、この踏みつけている足をどけてもらえないかな……。あんまりグリグリされてると…新しい快楽に目覚めちまうだろうが…、きゅう。

そのドタバタの光景をパシャリとカメラのフラッシュが捉えた。
「やぁみんな。相変わらず元気そうだねぇ…！　はははは！」
やはり富竹さんだった。先日会った時、お祭りの写真を撮るまで滞在するって言ってたっけ。
…ボロ雑巾のようにKOされた俺に、その上でいがみ合う魅音と沙都子。梨花ちゃんは俺の頭を撫でてるし、レナはかぁいい状態が継続中…。……さぞや賑やかな写真になっただろうな…。
「こんばんはではございますがぁ！　レディーに断りもなくお写真を撮るのはエチケット違反でございますのことよー⁉」
「そうだな、レナや梨花ちゃんには必要だな。だが少なくとも沙都子の許可は必要ない。ぐぉをぅッ⁉⁉」

沙都子が靴のごつい踵で俺を踏みにじる!! じょ、冗談だって、うぐぐぐ…。
「あー、こんばんは～！ そっか、…明日、帰られちゃうんですよね。素敵な写真はいっぱい撮れましたか？」
「御陰様でね。いい絵がたくさん撮れたよ。」
「富竹のおじさまに会えるのも今晩限りなのねぇ～！ お名残惜しいですことー。いい加減、とっととメジャーデビューして下さいよねぇ～！」
「あ、相変わらず口が悪いなぁ…！ でも、その毒舌もまた何ヵ月か聞けないかと思うと寂しいよ。」
「せいぜい今夜を楽しんでらして下さいな。明日の夜にはもう東京なんですからねぇ！」
「…そうだね。東京に帰ったらこんなにも満天の星は見られないからね…。」
富竹さんは陽気に笑いながら夜空を見上げる。笑顔なのに寂しさを感じさせる、そんな間があった。
「富竹さん、いっそ住めばいいじゃないすか。雛見沢。」
「…え？」
富竹さんは一瞬言葉を失った。
「確かに不便なとこです。店もないし。娯楽もないし…何にもないかもしれないけど。えっと、

…んっと。」
俺の言いたいことがみんなにもわかっていた。……きっと富竹さんも、わかっていたに違いない。
だからレナも魅音も。沙都子も梨花ちゃんも。誰も茶化さない。
「俺はまだここに引っ越してきてひと月も経たないからよくわからないけど。」
俺の普段なら饒舌な舌は、この時だけは言葉をなくしてしまったらしい。でも、伝えたかった。ついこの間まで、富竹さんと同じような都会に住んでいて、こちらに引っ越してきて初めて知った数々の尊いことを伝えたかったのだ。
でも、それを伝える言葉が、俺の貧弱な言葉の中に見付からなくて、うまく口に出せない…。すると、富竹さんは、それ以上を言わなくてもわかるよとでも言う風に、手を上げて軽く制した。
「…ありがとう、圭一くん。魅音ちゃんにレナちゃん。沙都子ちゃんに梨花ちゃん。」
薄い、吹けば飛ぶような笑顔だったけれど。富竹さんは柔らかく笑った。
「僕もここに住めたらきっと楽しいだろうなぁ…って思うよ。」
働かなくても食事の心配をしなくてもいい子供の、残酷な言葉だったのかもしれない。
富竹さんにだって仕事や生活がある。それでも雛見沢に惹かれていて、休みをとっては足を

運ぶことで何とか雛見沢の一員に短い時間だけでも加わろうとしているのだ。
その社会人の苦悩に対し、俺が掛けた言葉はよく考えれば残酷なものだったに違いない。
俺の背中に手が当てられた。……レナだった。
「圭一くん。富竹さんは雛見沢に住んではいないけど。私はこの村の一員だと思うかな。」
「……そうだよな。ごめん、俺、変なこと言っちまった！」
そして再び喧騒が戻った。
「ま！　しばらくのお別れなんですからね！　今夜は富竹さんにもたくさん楽しんでもらわなくっちゃ！」
「そうだね！　ぜひそうさせてもらうよ。」
「あ！　ねぇねぇ魅ぃちゃん!!　どうだろ!?　富竹さんを今夜だけの、一日部員にしてあげるのは!!」
「あら、それは面白い話ですわねぇ!?　私も賛成ですわ！」
「み～！　みんなで富竹をいじめて遊ぶのも楽しいと思いますのです。」
「…ふーむ……。さて！　どうしようかねぇ…？　入部条件のひとつに雛見沢在住ってのがあるんだけどねぇ～？」
「そんな魅ぃちゃん…、今日くらい意地悪しなくても…。」

すんなりＯＫと言わずもったいぶってるだけだ。魅音はしばらくの間、レナをからかうとニヤッと笑って宣言した。
「ま、こつこつ毎年来てるからね。富竹さんを、雛見沢名誉村民と認定してあげよう!!」
「わ!!　やった！！！」
「さぁてさて！　こんな旬を過ぎたご老体にこの私の相手が務まるでございましょうかしらぁ!?」
「……老獪な大人の知恵を見せてもらいましょうです。」
「へへ！　俺たちの若さについて来れるかな？」
俺たちの不敵な笑いに、思わず富竹さんは後退る…！
「部長ッ園崎魅音の名において、名誉村民富竹氏の我が部への入部を許可するッ!!」
「「異議なぁしッ!!」」
「な、なんだい、その部活ってのは…!?」
「我が部はだな、複雑化する社会に対応するため、活動毎に提案されるさまざまな条件下、…時には順境、あるいは逆境からいかにして…!!」
「…レナは弱いから…いじめないでほしいな。仲良くやろうね！」
「子供のごっこ遊びと侮るつもりなら好都合でございますわぁ!!」

「身包み剝いでッ!!　ケツの毛までひん剝いてやるぜぇぇぇぇッ！！！！」
「…つまり、みんなでゲームして遊ぶ部活です。」
やはり梨花ちゃんだけが、的を射た説明をしてくれた。
富竹さんに、つまり部活ってのはハチャメチャなことをして遊ぶことなんだよと説明すると、すぐに理解して乗り気になってくれた。
「ようし！　望むところだよ。その挑戦を受けてたとうじゃあないか！　お手柔らかに頼むよ先輩方!!」
一気に十は若返った富竹さんが腕まくりして奮起する！　上等だッ!!
「さぁて、何のゲームで行くかねぇ…！　せっかく富竹さんも加わってくれてるんだからね！　くっくっくっく、また罰ゲームありで行こうかぁ〜!?　ビリには素敵な罰ゲームありってことで行こう！」
「な、何だい罰ゲームってのは!?　きき、聞いてないよ魅音ちゃん…！」
富竹さんは驚いたようだったが、俺たちにとっては馴れっこだ。…そして絶対に侮ってはならないことも！
「はぅ、大丈夫だよ富竹さん！　だって、負けなきゃいいんだからね！」
「へへ、レナがいいことを言う。そうっすよ富竹さん。負けることなんて考えてたら、本当に

ビリになっちまいますよ？」
「さぁてどなたが罰ゲームになるのやら！　をっほっほっほ、少なくともそれは私以外の誰かでございますわぁぁあぁ‼」
「みー！　その可哀想な人を、ボクはかぁいそかぁいそと慰めてあげますのです☆」
「なるほど。…これが童心ってヤツなんだなぁ。」
賑やかに盛り上がるみんなを見て、富竹さんは誰にともなくつぶやく。
「ヘイ、イラッシャイイラッシャイ‼　挑戦者はいねえかい⁉」
そこへ威勢のいいオヤジの声が響いた。射的屋のオヤジで、棚の上にずらりと景品を並べ、コルク鉄砲を振り回しながら客引きをしているところだった。
「おやおや！　来たかい、園崎の嬢ちゃん！　しかも、今年は大人数みたいじゃねえの！」
「くっくっく！　あんたの店、根こそぎかっさらいに来たよッ‼　みんな、いい〜？　ルールは簡単ッ‼　三発撃って、得られた景品のデカさで勝負しよう‼」
全員が異議な〜し！　と叫ぶ。
勝利条件が景品のデカさである以上、事前の品定めは欠かせない。三発という限られた弾数の中で狙える獲物はどれかということだ。
射的屋の景品の中には大きなぬいぐるみなどもある。それを落とすことができればかなりの

高スコアだろうが、ああいう獲物を落とすには何発かの弾をまとめて撃ち込んで、少しずつ打ち崩していく必要があるのだ。しかし俺たちには一人三発しか与えられない。となれば、より慎重にターゲットを選定する必要がある…！

しかし、慎重さが必要と言われれば言われるほど、ならば狙いたくなるのが男のロマンってもんだ。…この店で一番デカい景品は……あれか⁉

「わぁ…あ……あの…くまさん、か、…かぁいいよぅ…☆」

レナが物欲しそうに眺めるのは大きなくまのぬいぐるみ。

わざと不安定な台の上に載せてあるので、うまく当てれば獲得できるかもしれない！

「…と、一瞬思わせる絶妙な配置が見事だな。」

「さすが圭一さん。なかなかの眼力でございましてよ…。ここのオヤジ、いかにも狙えそうに攻略不能な景品を配置するトラップセンスになかなか長けているでございますわ…！」

「ふむ。となれば、ここは無難にキャラメルや人形を狙うのが定石のようだね。」

「……富竹もなかなかよい見方をしますのです。」

部活は無策で臨めばただただ食われるだけだ！　本番直前までにどれだけの策を講じられるかが全て…ッ！！！

いつの間にか、俺たちのまわりを人垣が囲んで大賑わいになっていた。我が部の大騒ぎは、

この祭りの悪名高き名物なのだろう。
「……くまさんを落とせれば勝利は確定しますです。」
「だが三発しかないんだぜ。それを確かめるために使うには…重いな。」
「へいへい！　他のお客さんも待ってるんだぜぇ⁉　最初のチャレンジャーはだれからだい⁉」
「先に挑戦した方がラクな景品を狙えて有利かもしれないけど……鉄砲のクセが見えない内の挑戦は危険だね。」
富竹さんの読みもなかなかいい。我が部をよく理解した慎重さだぜ…！
「じゃあさ、公平に…ジャンケンで決めるのはどうかな、かな⁉」
「結局それしかないかね。じゃ一発でキメよ！　じゃーんけーんッ！！！！」
何度かのあいこ合戦の末、一番バッターは魅音に決まった。
「一番は避けたかったんだけど……ま、ハンデってことにしとくかな。おっちゃん‼　銃ッ‼」
「そらよッ‼」
射的屋のオヤジから鉄砲を受け取り、入念にチェックする魅音。弾のコルクのチェックも怠らない。

「OK。…この銃は卸したてだね？　クセはなし。悪くないッ!!」

魅音がくわッ!!　と一気に銃を構える!!　事前のチェックと違い、入念な照準などない、直感の射撃!!

撃つ！　詰める。…撃つ！　詰める。…撃つッ!!　魅音らしい大胆な三段射撃だった。

ぱたり。…ぱたりぱたり。…お菓子の箱が三つ、次々に倒れる。大戦果だッ!!　ギャラリーがどよめきッ、そしてそれが歓声に変わる。

「わぁあぁあぁあッ！！！　すげぇえぇぞぉおぉおぉお！！！！」

パチパチパチパチ！

「さすが魅ぃなのです！　ぱちぱちぱちぱち！」

「なるほど…。この苛烈な部活で部長を張るだけのことはあるぜ…。恐ろしいヤツ！」

「す、……すごいよ魅ぃちゃん!!　三つ！　三つ！！！」

命中率もすごいが……標的の選別も悪くない。魅音が狙った三つはいずれもやや大きく、やや倒れやすいといった、非常にハイリターンな標的ばかりだ…！

「参ったなぁ、僕も狙ってた的をほとんど取られちゃったよ。先頭バッターの利点を活かしきったねぇ…！」

「あ、やっぱり富竹さんも同じの狙ってました？　銃が新品ってわかってたら先頭打者を名乗

り出るべきだったぜ…。くそ、出遅れた！」
「二番手は誰？　沙都子？　……気をつけて。弾が軽い。」
「ほほほ、了解ですわ。今の魅音さんの射撃で、大体の弾道は掴みましてよ！」
次は沙都子だ。華奢な体にはちょっと大きめな鉄砲だが、重たがる様子はない。女の子ではあるが、鉄砲の玩具でも遊びなれているようだった。
「やはりここは、………大物狙いで行かせてもらいますわぁッ!!」
ってことは、あれか!?　それは射的屋最大の標的、くま狙いの予告だッ！！！　沙都子め!!
大胆に…来やがったッ！！！
だが沙都子は直前の品定めで、そのくまを倒せそうで倒せないトラップだと読んでいたはず。にもかかわらずくま狙いに躊躇なく変更する。……多分、魅音の獲得したスコアを相当大きく読んだのだろう。その結果、くま狙いで行かなくてはもはやトップがありえないことを知り、下手をすればビリの可能性すらあるリスクを背負ってくまを狙うという方針変更を瞬時に決断したのだ。…その切り替えの早さに舌を巻く…！　沙都子め、年は下かもしれないが、部活においては俺の先輩なだけある…!!
「確かに、そいつを落とせばその時点で沙都子ちゃんのトップは確定するね！」
「沙都子ちゃんがんばれ〜ッ!!」

沙都子は魅音とは逆に冷静に的を狙い……引き金を絞る！　パカンと気持ちいい音がしてコルク弾が綺麗にぬいぐるみの胴体を捉えた。

「……ちっ、…弾が軽いですわ…！」

だが敵は重量感ある大物だ。一発当てても微動するだけ。いや、少しはズラすこともできたのか？　…とにかく一発だけでは何とも言い難い…！

沙都子は、額に当てればもう少し揺れるかと期待し、狙い通りの場所に二発目を叩き込んだ。

だが、確かに多少は揺れたが落とすには至らない…！　沙都子の顔が歪む。やはり一番最初に自分で看破した通り、このくまには安易に手を出すべきではなかったのだ…。

「残念でございますけれど…、私にくまは荷が勝ちすぎているみたいですわね…！」

沙都子の三発目はくまではなく、そのわきのキャラメルの箱を転ばせた。

大胆な大物狙いが、最後の最後で小物狙いに移ったので、ギャラリーは苦笑している。度胸なし、と笑っているのだろうか？　……わかってないヤツらめ!!

「ほほぅ、沙都子もなかなか状況判断が冷静になったね。…渋い、いい判断だよ！」

「その程度の判断力ございませんと、我が部じゃ罰ゲーム常連でございましてよ！」

魅音の差し出す手の平をぱーん!!　と小気味良く叩く沙都子。

沙都子め、一見大胆な口を叩きながら、その実は極めて冷静！　優勝を狙うため、一番の大

物を狙う無謀さを持ちながら、ビリを回避するために、最後の一発を冷静に手堅い目標に切り替える冷静さも持ってやがる…！　俺だったら三発目も無謀に挑戦しビリを確定させてたかもしれない。くそ、見事だぜ…！

「くまはレナさんに譲るでございますわ。健闘をお祈りしましてよ！」
「うんうん！　ありがとね沙都子ちゃん☆　……はぅ〜、くまさんかぁいいよぅ!!」
次のバッターはレナだ。
いつものレナなら的にかすりもしなさそうだが………あのくまをレナはかぁいいと言っているッ!!　あぁあぁぁ、レナの目が見る見るとろんとしてきて、神もビビって道を開けるかぁいいモードになっていく!!
「レナちゃんはどうだろうね。…ひとつくらい当たるといいんだけれど。」
「富竹さんはちょっとレナを甘く見てますね…。……あのレナっすよ？　竜宮レナっすよ!?　かぁいい物をお持ち帰りするためなら、」
「「「うぉおおぉおぉおおおおッ！！！！」」」
観客がどよめき、富竹さんも何事かと振りかえる！
あのぬいぐるみをお持ち帰りできるなら、…………画鋲(がびょう)の穴だって狙撃できるんだよッ！！！　竜宮レナってヤツはッ！！！！

「ゆゆゆ、揺れてる揺れてるよ………はぅ……かぁいいよぅ…！！！」

くまの緩やかな揺れに興奮を隠しきれない様子だ…！　こうなればレナは負けない!!

「さすがレナさんですわ…!!　冷静さを失えば失うほどに…、」

「強いッ！！！」

「「うおおおぉおぉおおおぉッ！！！！」」

また大歓声だ！　再びレナの着弾はくまの額を捉える!!　あんな微妙なポイントをよくもこんなに正確に狙撃できるもんだ！　心なしか、さっきより大きくくまが揺れたように感じられた。

「……でも、あと一発では無理かも知れませんです。」

「い、いやぁわからないよ!?　レナちゃんの腕だったらひょっとすると…!!」

富竹さんもギャラリーも興奮気味で、レナが奇跡を起こせると確信しているようだが、…梨花ちゃんの分析は冷静だった。

確かに、レナにあと十発も与えればきっと倒せるだろう。……だが……あと一発ではどう考えても………無理かッ！

「「あぁあぁあぁーーーーー…ッ！！！」」

ギャラリーの落胆の声が響き渡る…。三発とも額に命中し、くまをその玉座から確実に押

し出しつつあったのに、やはり打ち崩すには至らなかった…！　そしてやや遅れて健闘の拍手が鳴り響く。
最後の一発を手堅い的に切り替える柔軟さは示せなかったが、最後まで奇跡に挑戦したひたむきさに、ギャラリーはしばらくの間、拍手を惜しまなかった。
「……はぅ………くまさん……お持ち帰り…………はぅ……。」
健闘は称えられたが…戦果はゼロだ。…だがその時、屋台のオヤジがキャラメルの箱を手でぱたん、と倒すとレナに渡した。
「こいつぁ嬢ちゃんのだぜ。」
「………へ……？　……くれるの……？　レ、レナに……はぅ、」
「あんなすげぇの見せられて手ぶらで帰しちゃあ…お天道様に申し訳が立たねえぜ！」
そしてもう一度割れんばかりの拍手！　すっかりのぼせて真っ赤になったレナの腕を引っ張ってこっちへ連れ戻す。
「頑張ったじゃないかよ！　かぁいいモードのレナにゃ驚かされるぜ！　それにキャラメルのオマケももらえたしな、少なくともビリは回避できたぜ？　はっはっは！」
「……はぅ……。でも、欲しかったよぅ……くまさん……ぅぅ……。」
もう一息だった分だけ、落胆している様子がよくわかる。

……レナにはいっつも世話になりっぱなしだ。うまい弁当の借りもある。
「よっしゃ！　そんなら俺が、」「僕が取ったらプレゼントするよ。」
んなッ、俺がたまにおいしいセリフを口にしようとしたら！　その先を富竹さんに奪われてしまう。
「うん！　うん！　お願いね富竹さん!!　がんばれ～!!」
「富竹のおっさんめぇぇぇぇ!!　人のおいしいところを…!!!」
「はっはっは、ここでこう言えたら男はかっこいいよねぇ！　じゃあすまんね圭一くん。ちゃちゃっとくまを撃ち落としてくるよ！」
「うおおお、何でここで俺の順番じゃないんだー！！！」
「……圭一もファイト、おーですよ。」
富竹さんもやはり慎重にくまを照準している。…一度目を戻すと、残りの二発の弾を握ったまま鉄砲を構えた。
「ん!?　どういうことだ？」
「……うん、間違いない!!　富竹のおっさんの狙いは……!!!」
ぱかん！　ぱかん！　ぱかん!!　発射の間隔が短い!!
一撃ごとに揺れが収まってから撃つのでは何の意味もない!!　つまり、富竹さんは連射で一

気に強い衝撃を与えて打ち崩そうと目論んできたのだ!!
「こ、これは…!! た、倒せるんでございますのッ!?!?」
これまでとはまるで違う、誰が見ても揺れとわかる大きな揺れ…!!!
……だ、だがそこまで!! 転げ落ちるには至らない!!!
「はぅ〜〜〜………ざ、残念だったぁ……。」
レナは大きな揺れに一瞬期待するも、すぐに落胆のため息を漏らす。
「…う〜ん…結構行けると思ったんだけどなぁ…!!」
「をっほっほ！ 男だとキャラメルはもらえないようでございますわね！」
つまりはそういうこと！ 富竹さん、戦果ゼロだ。
「つまり、圭ちゃんと梨花ちゃんは手堅く、ラクなものを撃ち落とせばビリ回避ってわけだね。」
「ビリ回避、か。…………………あ、すみませんね。」
「う〜〜ん。格好いいこと言っても実績が伴わないと恥をかくだけだねぇ…。見せ場は圭一くんに譲るよ。がんばれ！」
五番手は俺。富竹さんから鉄砲を受け取る。
非情に徹するなら魅音の言う通り、ここは小物狙いだ。戦果ゼロの富竹さんがいるのだから、

どんな物でもいいから一つ転ばせればそれで罰ゲームは回避できる。
……だが……!!
「約束しちまったからな。…レナに。」
「…え、……え？　…約束って……なんだろ？　なんだろ？」
「あのくまを撃ち落として。……レナにプレゼントするって。」
「へ………へ………それって………はぅ…………。」
このやりとりを見て、ギャラリーがヒートアップする!!
「おぉおおぉおぉ！！！　兄ちゃんいいぞぉ!!　男見せたれぇぇぇぇぇぇぇッ！！！！」
「うーん！　愛だね、愛の力だねぇッ!!」
「へ？　愛ぃい!?　ちち、違うぞギャラリーの諸君！　……こうしないと、この屋台のオヤジ、帰りにレナに追い剝ぎされるかもしれないからだよ…!!　俺は屋台のオヤジのためにあのくまを撃ち落とさなきゃならねぇんだよ…、あぅあぅ、じゃなくてじゃなくて！」
ああもう、どうして俺ってヤツはもっと素直な言い方ができないんだ!?
「圭一さんも男を見せますのね。……でも実際、どうやってくまを落とす気ですの？」
「……レナや富竹の弾で幾分、傾きはしましたですが。やはり難しいと思いますです。」
「…け、圭一くぅん………。」

「富竹さんの連射戦術は間違ってなかった。でも足りない！　もっとなんだ。もっと素早い連射力があれば…一撃ごとの揺れにパワーを上乗せできるのに…！」
「頑張って！　圭一くーん!!」
…そうか、……この手なら富竹さんの連射力を超えられるか!?　へへ、頭が固かったぜ、前原圭一！　普段の射的屋なら一度に何人もが射撃をしているが、今は俺たちの大会のようになってしまって、他の客はみんなギャラリーに徹してしまい射撃をしていない。……だから、…可能!!
俺は二つ深呼吸してから、オヤジに注文した。
「鉄砲をもう二丁貸してくれ。」
どよ!?　ギャラリーがざわめく。
「圭一さんは何を企んでいるんですの!?」
「読めたよ…。圭ちゃんも……考えたじゃん!!　つまりさ、一番時間がかかってるのがこのコルク弾の装塡なんだよ。富竹さんは連射の発想は悪くなかったけど、この装塡時間を甘く見てしまった…！」
「はぅ、レナにもわかった！　じゃあ、先に弾を詰めた鉄砲を三つ並べておけば…!!」
「圭一くん!!　今こそ討ち取る時だよ!!　僕に決定的瞬間を見せてくれ!!」

富竹さんはファインダー越しに俺とくまを捉える。カメラマンの血が、これから起こる奇跡を予見させるのだ!!　そしてギャラリーも遅れて俺の狙いを理解する!
「「「おおぉおぉお、兄ちゃん、頑張れぇえぇえぇ!!!」」」
割れんばかりの大歓声!!　圭一コールが巻き起こる!!!
連射が命!　外せば意味もなし!!　激しい連射の中にも失わない冷静な狙撃!　……ふーーーーーッ!!
息を深く吐いてから…止める。……緊張が止まる。
……今だッ!!!!
その瞬間、時間が止まったようにすら感じた。俺にはコルク弾が飛んで行く軌跡まで見えていたのかもしれない。
当たれ……、そして……倒せッ!!!!!
くまの頭に弾が一発二発……三発ッ!!!!　大きく揺れるくまの巨体!!　そして……!!
「きゃ、…きゃーーーー!!!　やったぁあぁあぁあぁあッ!!!!」
「うおおぉおおおおぉおおおッ!!!!」
大歓声はぬいぐるみがごろりと棚を転げ落ちるのを待たずに巻き起こった。
それが地面に落ちる前にオヤジがキャッチし、俺に投げてよこす。勝者の栄誉(えいよ)を土で汚すま

いという粋(いき)な計らいだった。
「……まさか本当に落としやがるたぁなぁ。…完敗だぜ兄ちゃん!!」
「す、すごいや！　おめでとう圭一くん!!　これは現像が楽しみな一枚になった！」
「やりますわね！　圭一さんも頭を使えるようになったじゃありませんの!!　少しは我が部の部員らしくなってきましたわよー！」
「へへ、俺ひとりで落としたわけじゃないぜ。みんなで当てて、少しずつずらして落としたんだ。……だから、こいつぁ俺たち全員！　我が部の戦果だぜッ！！！」
「そうそう！　全員の力の結晶だね～!!」
「……魅ぃはくまさんに一発も当ててませんです。」「……う。」
俺はトロフィーのように大きくぬいぐるみを抱え上げると、それをぼすんとレナに押し付けた。戦果はみんなのものだが、このぬいぐるみはレナのものだ！
「そら。こいつは俺から……いやみんなからだな！　いつもうまい弁当をありがとよ。こいつぁそのお礼だぜ！」
レナはまさか本当にもらえるとは思わなかったらしく、一瞬面食らったようだった。
「だ、だめだよ圭一くん……、だってこれはみんなの……はぅ、」
「じゃあ落としたのは俺！　だからこれは俺の！　俺のだからレナにやるッ！」

もう一回、レナの胸にぬいぐるみを押しつけてやる。…今度は素直に抱いてくれた。
「俺が引っ越してきてから、いろいろ面倒を見てくれたよな。…すげぇ感謝してるんだぜ？ありがとな!!」
「……は、はぅ〜〜!! 圭一くぅん!! ありがとぉ〜〜☆！！！」
レナが飛びついてくる。後日魅音に、レナはキスしてたよって言われたが、この時は興奮しててよく覚えていない。
かつて、俺は雛見沢を何もないところだと言った。
確かにここには何もない。都会に比べたら、何もかもが何にもないひなびた田舎でしかない。
……でも、ここにしかないものもたくさんある。
俺はきっとこの雛見沢に来てたくさんのものを手に入れた。…今この瞬間だって。それはかつての都会の生活では、絶対に手に入れられなかっただろうものばかり。
ギャラリーの大歓声がいつまでもいつまでもこだましているのだった…。

■綿流し

やがて社の前の祭壇からどーんどーんと大太鼓の音が響き始める。

もうこの賑やかなお祭りもフィナーレなのだ。
「……じゃあボクはそろそろ出番なので、お先に行くですよ。」
「おっと！　僕も早く行っていいポジションを確保しないとな。…じゃあみんな、後ほどね！」
梨花ちゃんと富竹さんはぺこりと頭を下げるとぱたぱたと人ごみへ消えていった。
「二人ともお勤め、しっかりでございますよ～!!　ささ！　参りましょうでございますわ！」
「ふむ、んじゃ、梨花ちゃんの艶姿(あですがた)を見に行きますかね。行こ！」
「おう！　あれ、レナは？　……な、何やってんだよ??」
「け、けけ、圭一く～ん！　魅ぃちゃ～ん、……たすけてぇ～…！」
馬鹿デカいぬいぐるみを抱いてるものだから人の流れにすっかり翻弄(ほんろう)されている。
「何やってんだあいつ…。くまの世話で手いっぱいなんだな…。」
「じゃあ圭ちゃんにはレナの世話を頼むかねぇ。私は沙都子の世話で忙しいし。」
「誰が魅音さんの世話になるでございますの～!!　痛い～！　手ぇ引っ張らないで下さいましい～…！」
魅音を見失う前にレナの後ろ襟をふん捕まえる。
「けけ、圭一くん……そこ違う…、掴むとこ違う…！」

「注文のうるさいヤツだな。どこならいいんだ。」
「……え……と………はぅ………」
レナが俺の分まで恥ずかしがってくれるものだから、俺に恥ずかしさはあまりなかった。レナの手をきゅっと握り、小走りに魅音たちを追う。
「置いてかれる。早く行こうぜ！」
「………う、うん…！」
レナの手ってこんなに華奢だったのか…。……少し運動と栄養が足りねえんじゃねーのか？
……じゃなくて！　じゃなくて!!
自分の耳がカーッと熱くなっていく。
冷静になろうとしても、頭の中が「冷静になれ前原圭一」という活字でいっぱいになるばかりで、ちっとも冷静になれそうになかった。
そんな顔をレナには絶対見られたくないと思ったので、俺は振りかえらずにレナを引きずってずんずん進んでいった。
社の前の祭壇はもうすごい人だかりだ。
焚かれた祭壇の炎が真昼のように明るく、熱い。その祭壇にはしめ縄で飾られた布団の山が

積まれている。
そう言えば、布団の綿をなんだかするお祭りだって言ってたな。
「圭一さん！　レナさーん！　こちらでございますのよ〜!!」
沙都子が最前列で手を振っている。
「お！　すまんすまん！」
人ごみの間をすり抜け、魅音たちが陣取ってくれた場所へ辿りつく。
「どう〜？　ちょっとはレナとドキドキできた〜？」
「やや、やっぱりてめぇ、そーゆうつもりだったのかぁッ!!　俺たちだけ放り出してずんずん先に行きやがってー！」
「レナはどうだった？　圭ちゃんの手って意外に大っきいとか思わなかった〜？」
「はッ、…………はぅ〜…………」
レナが真っ赤になってしゅうしゅうと蒸気を上げている。
その時、風を切る音がしたので振りかえると、魅音が顔面にあざを残して倒れていた。
「…魅音、…お前、いつ食らったんだ…？」
「はぅ〜、の「は」と「ぅ」の間くらいだったか…な…。」
「レナ…。照れ隠しに友達を殴るのはよくないぞ…。」

「レ、レナ殴ってないよ…し、しし知らないもん………はぅ。」

…レナの照れ隠しは物騒だ。覚えておかないと命がいくつあっても足りないな…。

どーんッ!! と大きい太鼓が響くと一気に場がシーンとした。

「お静かになさいませ!! 始まりですわ!!」

それは厳かな神事だった。

巫女役の梨花ちゃんが神官に扮した町会の爺さま方を引き連れて登場する。

お年寄りは梨花ちゃんの姿にありがたがりながら手を合わせている。静寂を乱すのは富竹さんのフラッシュだけだった。

「梨花ちゃんが持ってるあのデカイのは何だ?」

「祭事用の鍬だよ。巫女さんしか触っちゃいけない神聖な農具なの。」

農具にしちゃややこしい形をしている。実用性はないだろうなぁ。でも、祭事用なんてそんなもんだ。

祝詞をあげた後、梨花ちゃんは作法に基づいて鍬を振ったり、布団を突っついたりし始めた。

「今度は何だ? 布団叩きかな?」

「あれはね。人間に代って冬の病魔を吸い取ってくれたお布団を清めてるの。」

「圭ちゃんの布団叩きって表現も、まぁハズレじゃないかね。」
見ると、梨花ちゃんの顔はすでに汗だくだ。
……あの鍬は本当に重いのだろうな。梨花ちゃんが振りまわす度に、重さに負けて体を右に左に振られている様子がよくわかる。
それをじっと見詰め、沙都子は親友に無言の応援を続けていた……。
「…心配か？」
「梨花は毎日毎日、お餅（もち）つきの杵（きね）で練習してましたですの…。…きっとやりきるでございますわ。」
沙都子は手に汗を握り、梨花ちゃんがよろけそうになる度に息を飲んでいる。
「…魅音とかは巫女役、立候補しなかったのかよ。…梨花ちゃんくらいの子にあの重さは気の毒だろ。」
「そりゃ頼まれりゃやるけどね。…神聖なお役目だからね、誰でも務まるもんじゃないし。」
「そうだよな。巫女は清らかじゃないと駄目だもんな。魅音みたいな下ネタ好き、……ぎゅおおをぉ…ッ!!」
魅音がわき腹の急所に肘を捻（ねじ）り込む!!

大太鼓がどん！　と鳴ると、梨花ちゃんは黙礼をし、祭壇を降りる。…そしてそれを大きな拍手が迎えた。
神官役が、清め終わった布団をお御輿のように担ぎ上げると、見物人たちが一斉に腰を上げる。そして神官たちの後に付き従い、みんなぞろぞろと移動を始めた。
神社の大階段を行列がぞろりぞろりと下って行く。
「今度は何が始まるんだ？　布団を川で洗濯か？」
「あははは。だから、綿流しだってば。」
行列に続き階段を下りていくと、沢のほとりまでやって来た。かがり火がこうこうと焚かれ、ここも真昼のように明るい。
人々が沢に群がり始め、きゃあきゃあと騒いでいる。
「はい、順番順番。並ぶよ圭一くん。」
…何だろう？　お神酒でももらえるんだろうか？　紅白まんじゅうかな？
「あはは。食べ物じゃないよ。だから、ワ・タ。」
「あ、あぁ、そうだもんな。綿流しだもんな。ようやく理解したぜ。」
そこでは町会の人たちが、布団の中身の綿を手際よく引き出して、お餅のように丸めてどんどん配っている。

レナがひょいと行列をくぐって、俺の分ももらってくれた。
そしてもらった人々はめいめいに沢のほとりへ向かう。俺たちもそれに続いた。
「圭一くんは初めてだから、やり方知らないよね？　レナのやり方を真似するんだよ。」
ワタを右手にもち、左手で御払いみたいにしてから、額、胸、おへそ。そして両膝をぽんぽんと叩く。
「これを三回繰り返すの。そして心の中で、オヤシロさまありがとうって唱えるんだよ。」
「オヤシロさまってのが、この神社で祀ってる神さまの名前なのか。ふむふむ。」
レナに倣い、ぽんぽんと三回繰り返す。オヤシロさまありがとう…オヤシロさまありがとう…オヤシロさま……。
初めて名前を聞く縁のない神さまだが、俺も雛見沢に引っ越してきた以上、このオヤシロさまの世話になるわけだ。そういう意味ではちゃんと敬わないといけないだろうな。
「これでね、体に憑いてた悪いのがこの綿に吸い取られたの。……で、あとは沢の流れにそっ、と流してね、おしまい…。」
レナと一緒に、俺も綿をそろりそろりと水面に浮かべる。
雛見沢中の病魔を吸い取り、綿の花が次々と水面に咲き、そして流れに消えて行く。
…悪いものを吸い取った綿が、沢を下って闇の向こうに消えていく。

それは、悪いものを浄化してくれる清浄な世界に続いているのだろうか。……俺は何となく、目が吸い込まれるように、その闇の向こうへ流れていく沢の流れを見つめているのだった……。

「うん。これで今年も一年、健やかに生活できるんだよ。」

レナはそう言いながら微笑んだ。

テレビで見た灯籠流しのような華やかさはなかったが、引っ越してきたばかりの俺が、ようやく雛見沢の住人として認めてもらえたような、通過儀礼的な心地よさがあった。

■今年は誰だろうね。

沢の流れをぼんやりと見詰めていた俺は、いつのまにかレナとはぐれていた。

でも、そんなに心細いとは思わない。もうここは知らないところじゃないんだ。…自分が住む、地元だ。

ヘタにうろちょろしないで、ここで待っていた方がいいだろう。きっと夕涼みでもしている内に誰かが見つけてくれるに違いない。

…その時、ふと、知っている声が聞こえた。富竹さんの声だった。

俺はそちらへ足を向ける。富竹さんとおしゃべりでもしていれば、その内誰かが見つけてく

れるさ。
「どうですか富竹さん、いい写真はいっぱい撮れましたか？」
「あぁ。御陰様でね！」
富竹さんは女の人と一緒だった。…気付かなかった。ちょっと悪いことをした気がするな。
「前原くんはどうだったかしら。お祭りは楽しめた？」
その女性の口調からすると雛見沢の人のようだ。向こうは俺を知っていても、俺が向こうを知らないのが申し訳ない。……そろそろいい加減、俺も住人の顔を覚える努力をしないといけないな…。この人は何て名前だっけ……。
「その……えぇと…、楽しかったです。」
俺が必死に名前を思い出そうとする様子がよっぽど表情に出ていたのだろうか、女性は愉快そうに笑った。
「圭一くんはまだ引っ越してきて日が浅いんだそうだね。他の子たちととても親しげだったから、とてもそうは思えなかったよ。」
もしもそう見えたなら、それはレナや魅音や、みんなのお陰だろう。
「あなたも今日のお祭りに参加して、自分が雛見沢の人間になれたんだ、って自覚できたんじゃないかしら…？」

「………うーん…どうなんでしょうね。」

「おや、圭一くんらしくない返事だね。あんなに元気にみんなと遊べるなら、もうそれは立派な雛見沢の仲間ってことじゃないかい。」

自分ではもう雛見沢に馴染めたつもりでいる。

だが…俺にはまだまだ知らないことが多過ぎる。例えば、こうして出会う人たちの顔とか。

……過去の出来事とか。

過去の出来事。

……その言葉に、俺は一度は忘れられた気でいた、あのことを思い出してしまう。

レナや魅音に聞いたのに、知らないの一言で片付けられてしまった、あの事件。

でも、写真週刊誌には確かに掲載されていて、確かに雛見沢で起こった、あの事件…。

「…なぁんだ。その程度のことで君は疎遠に感じていたのかい？」

「疎遠なんて大袈裟なもんじゃないですよ。…ただその、……なんていうのか……。」

この村の大事件、ダム工事のこととか。それを巡る戦いのこととか。……聞いても知らないふりをされる、過去の残酷な事件のこととか。

終わったこととは言え。…雛見沢に住まう人間として、明るい部分だけでなく、暗い部分についても知っておきたいと思ったのだ。

それを知ることは義務ではないかもしれない。自分の低俗な好奇心のせいかもしれない。
「それを知ることで君が納得するなら……、僕の知っている範囲で何でも教えるよ。」
「ほ、本当ですか！」
富竹さんの笑顔がいつになく頼もしい。
そうさ、俺のこんな下らない好奇心は、ちゃんとした話を聞けばそれで解決してしまうのだ。
しかも、俺が知りたいのは真実じゃなくて、ただすっきりしたいだけ。それだけの、本当に下らないことなのだ。
「じゃあ……、えっと、まずダム工事について聞かせて下さい。雛見沢が水没するとかいう、大事件だったんですよね…？」
「ダムについては……多分、ここの人に聞いたほうが詳しいと思うけどなぁ。ま、僕が知っている範囲でいいんなら。…新聞で読んだ程度だけどね。」
富竹さんは遠くを見るような目で記憶を辿（たど）ると、それを語ってくれた。
「ダムの計画が決まったのは七、八年くらい前なんだ。黒部（くろべ）に次ぐ巨大な計画だったと聞いてるね。」
当時の日本の重点課題は三つ。交通網整備による列島改造と需要の高まる電力供給。そして

治水だった。
中でも発電と治水、そして莫大な経済効果を生み出すダム建設はラッシュだったという。そしてこの地でもダム建設の気運が高まり、この雛見沢に白羽の矢が立ったのだった。
「ダムの完成に伴って生まれるダム湖はかなりの面積になったらしいね。この雛見沢からずーっと上流の谷河内辺りまでが全部沈むことになったらしい。」
「…しかし…、なんだって人が住んでる雛見沢にわざわざダムを造るんすか？　もっと他の、人が住んでないところに作ればいいのに。」
「んん～…、…よくは知らないんだが…ダムを造るのに適した地形ってのがあったって聞いてるね。」
となれば雛見沢では当然、反対運動が起こった。以前、梨花ちゃんが「戦った」と表現したが、それからも激しいものだったことが窺える。
「裁判にもなったし議会でも取り上げられたんだ。東京の新聞にも載ったよ。」
魅音も確かそんなことを話してたと思う。きっと雛見沢住民は一丸となって戦ったんだろうな。…雛見沢の、アットホームの一言だけでは言い表せない連帯感は、きっとこの戦いの賜物なんだろう。
「で、いろいろな不祥事や汚職が発覚してね。ややこしいことになっている内に工事中止が

決まったんだそうだよ。」

「…………なるほど……。」

「これで充分かい？　それとも、まだ他にもあるのかい？　圭一くんの疑問がそれで晴れるなら、僕の知ってることなら何でも教えてあげるよ。」

富竹さんは頼もしそうに胸を叩いてくれた。……なら、聞いてみるなら今しかないだろう。

…富竹さんなら、きっと惚けずに教えてくれる…。

いかにも年頃の男の子が興味を持ちそうな猟奇事件。

レナや魅音にちょっとお預けをくらったからといって、かえって興味を持つ自分の安っぽさがちょっぴり恥ずかしかった。

でもせっかくなので聞いてみる。それでこの妙な好奇心が引っ込むなら……。

「あの……バラバラ殺人って…ありましたよね？」

恐る恐るの切り出しに、富竹さんはさも何でもなさそうに答えてくれた。

「あぁ、あったね。偶然、その時期に雛見沢にいてね。だからよく覚えてるよ。」

「……ちょうど四年前の今頃だったかなぁ。あれも確か綿流しの日だったね。」

ダム工事の継続を巡って議論が紛糾、相次ぐ不祥事に揺れに揺れたダム騒動の末期の出来事。

…そして、ダム計画に終止符を打つことになる事件だった。

ダム工事の現場の人たちで喧嘩があり、被害者を殺してしまったという。発覚を恐れた加害者六人は遺体を六分割し、それぞれが遺体を隠したらしい。

結局、六人の犯人の内、五人は逮捕されたというが、残った一人は依然逃亡中。彼の隠した右腕部分が今でも見つかっていないという。……なるほど、富竹さんが前に言っていた、腕が一本まだ見付かってないんだろというのはこれのことなのか…。

あとの大まかな内容は、以前拾った写真週刊誌で読んだのと同じだ。

確かに悲惨な事件だが……、レナや魅音が俺にひた隠すほどのものとは思わなかった。そこは男の子と女の子の感性の違いだろうか。

…あるいは、引っ越してきたばかりの俺に雛見沢のマイナスイメージを持たせたくなかったんだろうな…。

そんな友人たちの気遣いに感謝すると共に、にもかかわらず興味を持ってしまった自分をちょっぴり悔いた。

「当時はダムのトラブルの末期だったからね。オヤシロさまの祟りだ、って言ってずいぶん騒がれたんだよ。」

「オヤシロさまの祟り…か。」

オヤシロさまってのは今日のお祭りをやったあの神社で祀られている神さまの名前。……な

るほど。雛見沢を水没させようとする悪のダム工事に守り神さまがバチを当てた、ってことなのだろう。
「若い人たちはそうは思わなかったみたいだけれど…。お年寄りたちはオヤシロさまの祟りだと強く信じたわねぇ。」
さっきまで黙って聞いていた富竹さんの連れの女の人が、そう言いながらいたずらっぽく笑った。
合わせて富竹さんも笑ったので、俺もつられて笑うことにする。
「…でも、…今ではどうかしらね。結構いるんじゃないかしら。若い人にも。」
「いるって、…何がですか？」
「信じてる人だよ。…オヤシロさまの、祟り。」
富竹さんも女の人も、笑顔のままだったが、目から笑いは消えていた。
……その時、今まで涼しいと感じていた風が、…なぜかひゅぅっと、冷え込んだように感じた。
後に俺は後悔する。…聞かなければよかったと、後悔する…。
「その後ね。毎年起こるんだよ。……決まって今頃にね。」
「起こる、って…何がですか。」

富竹さんはそこで少し、もったいぶるように間を置き。周りをうかがうようにしてから小声で続けた。
「毎年…綿流しの日になるとね。………誰かが死ぬんだよ。」
富竹さんはそこで一度言葉を区切る。…世界から人々の喧騒が消えていって、急に静かになった気がした。
「バラバラ殺人の翌年の綿流しの日。雛見沢の住人でありながらダムの誘致派だった男と、その妻が旅行先で崖下の濁流に転落して死亡した。奥さんに至っては死体もあがってない。」
「雛見沢の人間でありながらダムに賛成していた、ある意味、裏切り者の男だからね。事故当時、お年寄りたちはオヤシロさまの祟りだと囁きあったものよ。」
女の人はやはりいたずらっぽく笑って言った。
「さらに翌年。綿流しの晩。今度は神社の神主が原因不明の奇病で急死した。奥さんはその晩の内に沼に入水自殺した。」
「神社の神主って……今日のこの神社の神主ですか？」
女の人は頷く。
「村人たちは、オヤシロさまのお怒りを鎮めきれなかったんだ、って噂したわね。」
「さらに翌年。これもまた綿流しの晩。今度は近所の主婦が撲殺体で発見された。」

…主婦？
これまで怪死した人々は、みんなダム関係者やオヤシロさまに縁がある人ばかりだった。
それを思うと……ひょっとしてこの主婦も何か関係があるのでは……と思ってしまう。
「その通りよ。前原くんはいい勘をしているわね。くすくす。」
女の人はいたずらっぽく、…いや、むしろ残酷にそう断じた。
「被害者の一家はね、…その二年前に転落死したダム誘致派の男の弟一家に当たるのよ。」
「弟本人はまだ生きてるらしいね。でもやはり……かなり気にしてね。近隣の町に逃げるように引っ越してったらしいよ。」
「………………。」
…しばらくの間、俺は呆然としているしかなかった。
雛見沢存亡を賭けたダム工事との戦い。そしてその最中に起きた凄惨なバラバラ殺人事件。
俺が知っているのはそれだけだったし、また聞きたかったこともそれだけだったはずだ。
だが…実際はそれだけではなかった。
殺人。死体損壊・遺棄。事故死。病死。自殺。撲殺。
……俺は、基本的に現代っ子だ。祟りなんて本当は信じない…。…だが…こんな怪死が毎年、それも綿流しの日に起こり、しかも死ぬ人がいつもダム工事の関係者だなんて……？

考えたくないが、何かの意志に基づいて事件、…いや、…祟りが起こっているのは明白だった。

そのいずれもが、個々に偶然だと断じるのはあまりに容易だ。

だが……それらもこうして積み重なっていくと……それを偶然だと決め付けることの方がよっぽど冷静さを欠いているように思えてくる…。

祟りなんか、信じない。…だけど……毎年、綿流しの日に何かが起こるという「意志」だけは確実に、……ある。

俺のそんな様子を見て取ったのか、女の人はくすりと笑った。あたかも、怖がらせ過ぎちゃったかしら、とでも言わんばかりだ。

内心を見透かされたのが恥ずかしくなり、少し苛立つような、急かすような口調で富竹さんに先を促した。

「で？　その調子でいくなら、その翌年の綿流しの晩にもまた人が死ぬわけですよね…？　今度は誰が死ぬんです？」

「さぁてね………圭一くんは誰だと思うかな？」

「は……はぁ!?」

それまで、聞きたいことに親切に頼もしく教えてくれた富竹さんが、急にもったいぶるよう

な口調になった。
早く先が聞きたい自分は、その嫌味な言い方にちょっとだけかちんと来る。
「はぐらかさないで下さいよ…！　俺は結構、真剣に…！」
「…くすくす。前原くん、落ち着いて。」
女の人にやんわりとなだめられ、自分が取り乱していたことに気付く。
「別にはぐらかしたつもりはないんだよ圭一くん。つまり……その翌年の綿流しってのはつまり…。」

「今日よ。」
富竹さんの躊躇をあっさりと女の人が片付ける。
……じっとりとした汗を誘う、嫌な風がどっと吹いた。
「みんな口にしないけど……。今夜また何か起こるんじゃないかって思ってる。」
「こ、こんなにお祭りで賑わっているのに⁉」
誰もが今日のお祭りを満喫していた。誰もが至福の笑顔を浮かべていた。…なのに、その心の中では、今夜もまた誰かが祟りで死ぬんじゃないかと信じているってのか……⁉
「あのね、去年の被害者の主婦は不信心者だったらしくてね。綿流しのお祭りに参加しなかっ

たらしいの。」
「今年の綿流しに参加しないと、オヤシロさまの怒りに触れるかもしれない、って噂。…圭一くんなら聞いてるんじゃないかい？」
……そんな噂、微塵も聞いていない。
「…じゃ、じゃあみんなのお祭りの参加は…………祟りを恐れて!?」
「そうなんじゃないかと思うね…。…今年の綿流しは例年になく参加者が多いと思うよ。」
「やっぱりみんな、……怖いんでしょうね。オヤシロさまの祟り。くすくすくす。」
「…………………。」
絶句するしかなかった……。
この昭和の時代。あらゆる分野が目覚しい進歩を遂げ、無知と未知の闇を照らし出してきた。白黒テレビは絶滅したし、宇宙ロケットは人類を月へ運んだ。
なのに…。そんな現代社会なのに……？
「サクラってことで近隣の町の子供会をかなり招待したらしいけど、やっぱり一連の事件を受けて…あんまり参加はなかったみたいね。子供が来てくれない、って町会の人がぼやいてたもの。」
「警察もね、過去の事件は全て別個のもので関連性はないとしてるみたいだけどね。……警備

ってことで私服警官をだいぶ立たせてたみたいだよ。今年は結構見掛けたね。」
レナや魅音の口が重かった理由が…少しずつ見えてきた気がした。今年の綿流しで何も起こらなかったなら、俺には何も知らせずに済むのだろう。
……何も起こらなければそれでいい。そうすれば、全ては杞憂だ。
俺は始めから何も知らないふりをすればいい。彼女らも何もなかったかのように振舞うだろう。…そしてまた、いつもの日常が戻ってくるんだ。
最後に残る感情は、みんなの気遣いを蔑ろにして下衆な好奇心を優先させた自分の浅ましさだった。
「…やっぱり刺激が強過ぎたかしら？」
女の人は緩く髪をかきあげながらため息をつく。
「い、いえ、…そんな、全然…、」
精一杯強がったつもりだったが、かえって狼狽ぶりを露呈するだけだ。
富竹さんはそんな俺の様子を見て、少し後悔しているようだった。そしてひとつ息を吐くと、いやに明るく振舞いながら言った。
「まさか圭一くん、祟りなんて信じてるわけじゃないだろ？」
「…そりゃ…まぁ……。」

「全ての事件が原因不明で犯人も手口もナゾ、っていうなら僕も祟りを疑ってもいいよ。だけど実際には違う。どの事件もちゃんと警察が捜査して真相や犯人を究明してる。」

「え、…そうなんですか？」

警察という単語がなんだかとても頼もしく感じられた。祟りというキーワードと最も対に位置すると思ったからだ。

「……例えば、一番最初のバラバラ殺人。言ったよね？　犯人は一人を除いて全員逮捕されてる。残った一人だって時間の問題さ。動機だって、酒の上での口論からと判明してる。祟りなんかじゃない。……だろ？」

確かに…綿流しの日に起こった事件でさえなければ、祟りとは無縁な事件だと思う…。

「次の、誘致派の男の夫婦の事故死だってそうさ。恨みを買う立場だったからね、警察が特に入念に捜査したと思うよ。それで発表は事故。他殺じゃない。」

「でも……また綿流しの日に起きたんですよね…？」

「ははは。考えてもみなよ圭一くん。…雛見沢に敵が多かった彼が、地元のお祭りにおちおち参加できると思うかい？　彼にとっては綿流しの時期は特に雛見沢に居辛い時期に違いないよ。だからわざわざこの時期に旅行をし、意図的に雛見沢を離れようとしたんじゃないかな？　それでたまたまその旅行先で偶然の事故に遭ってしまった。」

いまひとつピンと来ない説明だったが、富竹さんが何を言おうとしているのかはなんとなく伝わった。

だから俺は敢えて素直に、そうだと思えるに足る疑問をぶつけてみた。

「じゃあ富竹さん、…その次に死んだ神主さんはどうです？　原因不明の奇病だ、って。…それも、またしても綿流しの日に…。」

「神主さんはもっと説明が付き易いよ。綿流しのお祭りは神主さんにとっては年に一度の大行事。過労に体調不良が重なったんだろうね。あるいは元々持病があったのかもしれない。」

「でも、奇病ですよ？　この医学の進歩した時代に原因不明なんて…。」

「尾ひれだよ。病気で亡くなったって噂を、誰かが祟りっぽく奇病だ祟りだと騒いだだけさ。三年連続で事件が起これればそう考える人が現れても不思議はないさ。……急死は確かに不自然だったかもしれないけど。こういう死に方をすると必ず警察が検死をする。…で、事件性は発見されなかったんだろ？　本当に偶然の病死なんだよ。」

「…確か神主の奥さんが自殺してますよね？　じゃあこれは？」

「すでに説明したとおりさ。三年目の事件に村人たちは動揺していた。信心深い人たちはすぐに祟りだと決めてかかったのさ。……もちろん、神主の奥さんもね。自殺の際に、死んでオヤシロさまの怒りをお鎮めする……みたいな遺書が見つかったらしいし。」

「じゃあじゃあ！　……次の主婦の事件は？　またしても綿流しの日に！」
「この事件は犯人も逮捕されて解決してるよ。一種の異常者で、雛見沢の祟り騒ぎを面白がって再現したと自供してる。」
「じゃあじゃあじゃあ！　…次の年の事件は!?　…あ、えぇと…。」
そうだ。その次の年は今年だ。富竹さんが明るく笑う。
「ははははは、もう何も起こらないよ。今度こそね。…オヤシロさまの祟りなんて元々ない。一連の偶然を、あると信じている人たちがそうだと吹聴しているだけさ。」
「……………な、…なるほど……。……んん…。」
…ようやく、脳のコンピューターが冷静さを取り戻してくる。ややもするとパニックを起こしていた自分のお子様加減が恥ずかしい…。
「僕は圭一くんが雛見沢をとても好きだと思ってること、よく知ってるよ。……仮にオヤシロさまの祟りが実在したとしても。そんな圭一くんに祟りがあるなんてとても思えないね。」
「そうでしょうか…。」
「そうさ！　オヤシロさまは雛見沢の守り神さまだよ？　こんなに雛見沢を愛していて、綿流しのお祭りでこれだけ楽しそうに遊んでた君を、どうして祟ったりなんかするんだい。はっはっはっは、だろ？」

……少し、心が軽くなる。

そして、ようやく自分の心に今日まで居座っていたもやもやが完全に払拭されるのを感じた。

今夜聞いた話は早く忘れるべきなんだろうな。レナや魅音たちには明日、いつものように笑顔で向かい合おう。みんなだって今夜が無事過ぎ去り、俺を不安がらせることなく明日からを過ごして行くことを望んでいるはずだ。

俺のそんな様子を見て取ったのか、岩に腰掛けて耳を傾けていた女の人が、伸びをしながら立ちあがった。

「……さて、と。そろそろ私は戻らないとね。」

「おっと…！　そうだったね。僕も少々長くお喋りし過ぎたかな！」

すっかり話に夢中になってしまっていたが、気付けばだいぶ時間が経っているようだった。

あれだけいた大勢の人々の姿はすっかり減り、今では夕涼みを楽しむ何組かの家族連れが目に留まるだけだ。

時計を見ると…たっぷり小一時間くらいは話しこんでしまったらしい。

「前原くんもお友達といっしょに来たんでしょ？　みんなを探したら？」

「…そうだった…！　みんな、俺のことを探してるかもしれない！」

「ははははは！　女の子に探させるなんてなかなかの罪人だねぇ。」

「じゃあね、おやすみなさい前原くん。…ジロウさんもね。また後ほど。」
…富竹さんも充分に罪人みたいだぞ。そうか、富竹ジロウさんて言うのか…。下の名前が初めてわかった。
女の人はお尻の埃を払う仕草をすると、まだ撤収で賑わう境内の方へ去っていった。
それを見送っていると、入れ替わりにレナが駆けて来るのが見えた。その後にみんなの姿も見える。
「圭一く〜ん‼　ごめんなさぁ〜い‼」
「悪ぃね圭ちゃん！　すっかりみんなで話しこんじゃっててさ！　あっひゃっひゃっひゃ！」
「私、言いましてよ⁉　早く圭一さんを探しに行きましょうって‼」
「みー！　迷子の圭一が心細くて泣き出すまで放置していたのですよ。にぱ〜☆」
…別にみんなに非はない。俺の方だってみんなのことをすっかり忘れて話しこんでいたからな、おあいこだ。
「あぁら、富竹さんもご一緒でございましたの！　丁度(ちょうど)よかったですわぁ〜‼」
「……今日の射的の結果発表があります です。」
「くっくっくっく！　今日の射的勝負には、ビリに素敵な罰ゲームがあるってての、忘れてもらっちゃ困りますねぇ〜！」

「あ、…そ、そうだったねぇ…！　結局、ビリは僕なのかな？」

結局今日の勝負は、俺の劇的な大勝利の後、最後に梨花ちゃんが挑むが、何しろもう標的がほとんど残っていない。…あるにはあるが、どれも小さくて難度の高い的ばかり。

しっかり狙って撃つが三発とも見事に外し、富竹さんと同着ビリとなったハズだった。

…が、店頭でみぃみぃと泣きだし、露店のオヤジを萌え殺す。残念賞としてガムを入手。これによってビリを回避するという暴挙にて見事ビリを回避したのだった…。

「俺は今夜の一連の梨花ちゃんの振る舞いで確信したよ。…梨花ちゃんって、…結構狸だろ。」

「み〜☆　圭一の言ってる意味がわかりませんです。」

「なワケで！　ビリは富竹さんに決ッまり〜！！！」

みんなできゃっきゃと騒ぎながら拍手。富竹さんはよくわからず照れて苦笑している。

「じゃ〜富竹さん、覚悟はいいかなぁ？　罰ゲーム!!」

「え？　あ、……あははは！　い、一体どんな罰ゲームなのかなぁ…？」

「くっくっく！　まぁ富竹さんは正規部員じゃないからねぇ…？　アレで行くかねぇ！」

魅音がポケットからマジックを取り出す。……あぁ、アレだな。

「魅音、武士の情けだ。せめて水性にしてやれ。油性は辛い。…あの後、顔を洗うの大変だったんだぞー！」

「あはは、油性じゃないとだめだよ。お洗濯したら落ちちゃうじゃない。」

「わわ！　なんだいなんだい!?　お手柔らかに頼むよ!?」

みんなで富竹さんを羽交い締めにし、そこに魅音がマジックを片手に近付いていく。

「きゅきゅきゅ、っと！」

だが魅音が書いたのは顔面にでなく、富竹さんの着ているシャツにだった。

〝今年こそメジャーデビューだね！　魅音〟

次にマジックを受け取ったレナは〝今度写真も見せて下さいね☆　レナ〟。

……なぁんだ。ちょっぴり微笑ましくなり、苦笑いしてしまった。

「はは、これじゃあ罰ゲームってより、寄せ書きじゃないか。」

「ほほほ！　私は甘くはありませんのよ？　ちゃんと罰ゲームで行きますわぁ！」

〝やーいビリ！　沙都子〟

〝次回はがんばりましょうです。　梨花〟

「圭一もどうぞです。思いっきりキツイのを書くとよいのですよ。」

「そうだなー、俺は何にするかなぁ…。」

だいぶ迷ったが、この罰ゲームの趣旨を考えれば……これが一番妥当だろう。

〝また遊びに来てください。　圭一〟

富竹さんはずっと黙っていた。始めは面食らっている様子だったが、最後の方は違う表情を浮かべていた。

「これを着たまま帰京するのも、罰ゲームの内に入るのかな？」

「もっちろん！　ちゃんと着たまま家に帰ってね～！」

「あははは、次に来るときにも着てきてくれるといいかな。かな！」

感極まった様子だった。恥ずかしさとか、他にもいろんな感情のごちゃ混ぜになった、真っ赤な顔だった。

「わかった。次に来るときもこれを着てくるよ。約束する！」

みんなの歓声と拍手。今夜で一度お別れする仲間への最高のプレゼントだった。

境内の方に富竹さんの連れの女の人が待っているのが見えた。富竹さんもそれに気付いているようで、もう別れの時が来たことを悟る。

「お連れ様がお待ちみたいじゃ～ん？　そろそろお時間かなぁ？　ん～？」

「ん、ん～、そうみたいだねぇ…はは。」

照れ隠しに笑いながら、富竹さんは女の人のところへ駆けて行き、待たせたことを詫びているようだった。

俺たちはめいめいに冷やかしの言葉を富竹さんに投げかける。その度に富竹さんは振り返り、

手を振ってくれた。……やがてその後ろ姿は夜の闇に溶けこみ見えなくなった。
わりとあっさりとした別れ際だった。でも、みんなにとってはこれが初めての別れじゃない。
もう何度もしてきたことなんだ。
「…行っちゃったね。」
「じゃ、うちらも引き上げるかね。」
梨花ちゃんは実行委員さん同士で集まりがあるので残るらしい。沙都子もそのオマケで付いていくらしい。俺らはいつもの下校チームで帰宅する。
また明日学校で！　それだけを交し合うと、俺たちは解散した。
帰り道で、今日の戦果についていろいろと盛り上がる。あそこはああすればよかったとか、これにはやられた、とか。まだまだみんなの余韻は冷めぬようだった。
魅音と別れ、レナと二人になり、そして俺の自宅に着きレナとも別れる。
「こんな時間だけど、…一人で大丈夫か？」
「うん、全然平気だよ！　近いし。走って行くし。」
「…ヘンなヤツがいたら大声出せよ。」
「出したら…助けに来てくれるのかな？　……かな？」
「聞こえたらな。」

「はぅ…！　……………ぅ、うん！　聞こえるくらい、大きな声を出すね！」
レナはこれ以上ないくらい、ぶんぶんと腕を振りまわしながら元気よく去って行った。大丈夫。あの状態のレナなら大の大人でもかなうまい。
レナの賑やかな気配も消え、ようやく深夜の静寂が戻る。
……誰もが微塵ほども口にしない祟りの話。……知れば知るほどに不安になる、今夜。
みんなも…表情に出さないだけで、きっと不安に思っているに違いない…。だからこそ、今夜をあれだけ元気に騒いだのだろうか。
だが、何も起こらなければそれはただの杞憂だ。
何も起こらないさ。不吉なことなど、何も。
家に入り、お袋に今日の祭りはどうだった？　楽しかった？　と聞かれ、俺は胸を張って最高に楽しかったと答えた。
「母さんは行った？　綿流しのお祭り。」
「結局、お父さんが起きなかったからね。行きそびれちゃったわ。残念。」
お袋はさも残念そうに舌を出すのだった。

■北条夫妻の転落事故

ＸＸ日午後二時頃、鹿骨市雛見沢村Ｘ丁目、会社員ＸＸＸさんと妻ＸＸＸＸさんが、県立白川自然公園内の展望台から二十七メートル下の渓流へ転落、行方不明になった。警察と消防で下流を捜索し、同日夜七時頃、ＸＸＸさんの遺体を発見した。妻のＸＸＸさんは依然見つかっていない。渓流は先日の台風三号の影響で増水しており、捜索は難航している。

ＸＸさん夫妻は展望台で柵にもたれかかっていた所、柵が壊れ転落した模様。柵は老朽化しており、警察は公園内の設備管理が適正だったか関係者から事情を聞いている。

■古手神社神主の病死

ＸＸ日午後十時頃、鹿骨市雛見沢村Ｘ丁目、古手神社神主のＸＸＸＸさんが体の不調を訴え病院で手当てを受け一時は回復したが、深夜に容態が急変、死亡した。関係者の話では、当日開催されていた祭りの準備等で相当の心労があったと言う。

また、XXXXさんの死亡直後、妻のXXXXさんが遺書を残し行方不明になった。警察と青年団で捜索を続けているが、遺書で自殺をほのめかした鬼ヶ淵沼は地元では底なし沼として知られており難航している。

■主婦撲殺事件

（新聞には掲載されなかった……）

■無線記録

「興宮STより、三号どうぞ。三号どうぞ。」
「三号です。感度良好ー。」
「応援が向かいました。別命あるまで維持で願いします。どうぞー。」
「はいー、三号了解。」
「それから回転灯は付けないでお願いします。静か静かで願います。」
「STー、今、地元の先生が到着しました。運びたいそうですがどうしますか。どうぞ。」
「了解しました。先生に任せてください。」
「はいー。了解です。……あ、応援も到着しました。運ぶ前に写真撮らせた方がいいんじゃないですか?…ガイ者、もームダだと思いますしー。」

6月20日(月)

「おっはよ〜！　圭ちゃん、昨日はお疲れ様〜！」
「魅音こそお疲れさんな！　昨日は楽しかったぜ！」
「そうそう、圭一くん、本当にありがとね！　くまさん！」
「気に入ってもらえてうれしいぜ、裁縫針とか刺したりするのに使うなよ。」
「し、しないよそんなこと…！」
みんなで談笑しながら教室に入ろうと足を踏み入れると、ドボンと嫌な感触。
そこには…なみなみと水を張った掃除用のバケツ。俺の足が無情にも突っ込まれている。
「あぁら朝から雑巾がけとは熱心でございますわねぇ〜！」
すたすた。ひょい。びし！
「ふ、ふわぁあぁあぁあぁああん!!　圭一さんがデコピンしたぁ〜!!」
「……みー！　今度はもっと凶悪なワナを仕掛けなさいですよ。」
その様子を見て悶絶しながら沙都子と梨花ちゃんに頬擦りするレナと呆れる魅音。
何もかもが全ていつものままだ。欠けているクラスメートもいないし、雰囲気が変わったと

ころもない。
昨夜からずっと頭の隅でもやもやしていたものが一気に晴れる。今日も爽やかな一日の幕開けだった。
「どしたの圭一くん？　ひょっとして寝不足かな？　かな？」
「ばっちり爆睡（ばくすい）したよ。なんなら授業中にも実演するぜ？」
「はぅ、だめだよそんなの…！」
「はい、先生来たよー！　着席着席ぃー！」
魅音が先生が来たことを告げると、みんなはぞろぞろと着席した。
「みなさん、おはようございます。昨日はお祭りでしたね。最後まで後片付けに参加した人たちは本当にお疲れ様でした。」
梨花ちゃんたちは祭りに残ったから、後片付けにも参加したのだろう。…あれだけ大騒ぎさせてもらったんだから、俺も残って片付けを手伝うべきだったなぁ。来年の綿流しではぜひそうしようと誓う。
「さて、この時期にはお祭りの取材で遠くから雑誌なんかの取材の方が見えたりします。」
いつものお題目と思い聞き流していたが、少し先生の声色が変わったので意識が戻った。
「皆さんが取材を受けることがあるかもしれませんが、曖昧なことやいい加減なことは言わな

いように。……いいですね？」

はし〜い！　とみんなが合唱する。

巧みに言葉を濁していたが、先生が何を言いたいのかよくわかった。

なにしろ。……今年で五年目なのだ。祟りを期待して三流雑誌の記者などが出入りすることもあるのだろう。村としてはマイナスイメージを助長するだけで百害あって一利なし。それに対し、面白半分にいい加減なことをしゃべるな、と言っているのだ。記者たちは、三歳の子の戯言でも、村人談ってことにしちまうだろうからな…。

今度は俺も、黙っている側の人間なのだ。…そっか、そっか。記者たちに不穏な事件がなかったかと聞かれたら、今度は俺も「知らない」と答える側。

こういうささやかなところで結束を感じてしまう自分がちょっぴり可愛かった。

■部活再開

放課後、やはり部活の召集がかかった。昨日の疲れもあるだろうから今日は大人しく…なんて思いやりはここにはない！

むしろ俺たち的には、昨日の余韻がまだ冷めず、エネルギーを持て余してるくらいだった。

「今日は…本格派の推理ゲームで行こう！　こんなのはどうかな⁉」

魅音が机の上に置いたのは、英語でタイトルが書かれたカードゲームのようだった。和製とは異なる渋い雰囲気が非常に面白そうだ。

「お！　海外もののゲームかぁ！　そういや魅音、洋モノのゲームをだいぶ集めてるって言ってたもんなぁ！」

「説明書も英語ですけどね。でも、ルールはそう難しくはありませんのよ！」

「はぅ！　ま、負けないからね。」

「今日こそ、レナは罰ゲーム常連から脱出、なのですよ☆」

どうやらレナはこのゲーム、苦手みたいだな。

「ルールはね、事件の犯人と凶器、あと犯行現場の三つを当てられた人が勝ち！」

犯人、凶器、犯行現場の三種のカードがあるらしい。

犯人のカードを見ると…「魅音」やら「梨花」やら…みんなの名前が書いてある。お、俺の名前のカードもあるぞ！

「凶器のカードにもいろいろ種類があるな！　斧やらナイフやら毒物やら！　犯行現場のカードも渋いぞ！　リビングやら書斎やら中庭やら！　いかにも推理小説に出てきそうなキーワードがいっぱい登場して実に面白そうだ！」

「つまりね。これらのカードが一枚ずつ抜かれるの。それが正解のカード。」
「で、残ったカードはシャッフルしてみんなで等分。互いに手持ちのカードを質問しあって、抜かれた正解のカードが何かを探るわけ！」
「なぁるほど。誰も持っていないカードがすなわち、真犯人なわけだな！」
「それで、答えがわかったら挙手！　ゲームを終了して答えが正しいかを確認。」
「正解なら勝ちで一ポイント！　外れていればマイナス一ポイント！　正解してもしなくてもゲーム終了だからカードは集めて仕切り直しってわけ！」
「やってみればわかるでございますわぁ！　結構アタマを使うでございますわよ！」
「……メモを取りながらじゃないと混乱しますですです。」
「あとはやって覚えるさ。…で魅音！　今回の罰ゲームはなんだ⁉」
部活と言えば罰ゲームだ！　はっきり言おう、こいつがあるから白熱するんだ。こいつがあるから負けられないんだ！　さぁ、今日の罰ゲームは何なのか、みんなの目線が部長の魅音に集まる！
「そうだねぇ…。じゃ、昨日の疲れも多少あるだろうから今日はソフトに。『使いっぱしりの刑』はどう？　みんなからお使いを頼まれてそれを買いに走るってわけ！」
「つまり、ジュースとかお菓子とかを買いに行かされるんだね。」

「……今日の罰ゲームは何だか簡単そうな気がしますです。」
「ほ、本当にか？　何か落し穴がある気がするぜ…。」
「やはり、圭一さんもそう思いますの？」
「あぁ…。何を買いに行かされるかわからないからな…。魅音のことだ、負けたら『痔の薬』やら『Hなゴム風船』やら、まともでないものを買いに行かされるに違いない!!」
「は、はぅ！　Hなゴム風船って何だろ、何だろ!?」
「風船なんか、文房具と一緒に福田屋さんで売ってますわよ??」
「みー☆　沙都子もその内、必要になりますのですよ、にぱ～。」
「くっくっくっく！　さぁて何を買いに行かされるんだかねぇ～！　せいぜい負けないようにみんな気合を入れて行きなッ!!　始めるよー!!」
さっそくカードがシャッフルされみんなに配られる。
真犯人と正しい凶器、犯行現場のカードはそれぞれ抜かれているから、手元にあるカードは全て「無実」のカードということになるわけだ。
ちなみに、例によってカードに傷がないかどうかのチェックはすでに済ませてある。今回のゲームはイカサマなしの知力勝負だ！
「じゃ～一番は部長の私からいくよ？　じゃあねぇ…『魅音』『ナイフ』『書斎』！」

犯人、凶器、犯行現場の中から一つを宣言し、その所有を全員に尋ねる。その内、一枚でも持っていたら「持っている」と答えなければならない。(何を持っているのか言わなくていいところがポイントだ)

「あ、俺持ってるぜ。」

「レナもあるよ。」

「……ボクも持ってますです。」

「あら、完全な通しですわね？」

「魅音」「ナイフ」「書斎」はないかとの問いに三人があると答えた。つまりこれは「魅音」も「ナイフ」も「書斎」もシロ、というわけだ。メモメモ…。

「じゃあレナはねぇ……『レナ』『斧』『ラウンジ』だよ！」

今度は二人だけが持っていると答えた。

むむ？　ってことは…「レナ」「斧」「ラウンジ」のどれかひとつは…犯人、正解ということか⁉

いや待てよ、あると言っても、何枚持っているかは言っていない！　今あると答えた沙都子と梨花ちゃんのどっちかが、内二枚を持っていることも考えられる…‼　この三つの中に正解が混じっていると考えるのは早計だ！

「じゃあ次は圭ちゃんだね。どうぞ〜！」
「まま、待ってくれよ…！　まだ整理中！　くそ、集まる情報をどうまとめるかにもコツがいるな…！　このゲーム、思ったより頭を使うぞ…！　ヤバイぜ…苦戦の予感ッ!!」
「よっしゃ！　おじさんわーかった！　犯人確定!!」
「なに!?　もう!?!?」
右往左往(うおうさおう)してゲームを進める内にとうとう魅音が挙手する。やっぱり場慣れしてやがるな！
「犯人は『梨花』ちゃん！　凶器は『毒物』で犯行現場は『医務室』！　どう!?」
箱の中に隠していた正解のカードを取りだし、魅音の推理を検証する…。
「正解だねッ!!」
「き〜！　あと一手だったですのに〜！　『毒物』か『ピストル』かわからなかったですわ〜!!」
「……み〜！　ピストルなんか使わないです。毒物でじわりじわりがいいのです。」
梨花ちゃんがソフトな顔してハードな事をさらりと言っている…。
みんなであと少しだったのにと大賑わいしている。蚊帳(かや)の外なのは俺とレナだ。
「…圭一くんはどうだったかな…？　レナは全然…。」
「安心しろ。俺もさっぱりだ。……というかさ、みんなのペースが速いんだよ！　情報をどう

書き留めようか迷っている内に番がすすんで混乱しちまう！」
「はぅはぅ！　レナもそうなのー！　最初は付いていけるんだけど、途中から混乱しちゃうぅぅ…。」
「二人ともなぁに自信ないこと言ってんだか！　二人なかよくビリになっちゃうよ～？　まさか二人で一緒に、Hなゴム風船を買いに行きたいのぉ～？」
「ぐおおおおおおおぉぉおおぉ!!　何だそりゃあぁぁあぁ、駄目だ、それは極めてまずい!!　明日から日中に表を歩けなくなるうぅぅうううぅ!!」
「……圭一は明日から村中の人気者なのですよ。みー！」
「くっくっくっく！　大貧民の時に大暴れした圭ちゃんらしくもないぃ～。もう降参なわけぇ？」
「なッ！　全然そんなことはないぞッ!!　見てろよ、次でシャーロック前原の実力を見せてやる！」
「をーっほっほっほ！　早くお見せになりませんと、手遅れになりましてよー!!」
その後、何とかコツらしきものを摑むが、どう戦っても数手遅れる。……魅音などは相手が発した質問からも何らかの情報を得ているように見える。…駄目だ、場数の違いが圧倒的だ！
この不利を覆すには……、俺も非情に徹しなければなるまいッ！！！　そうさ、部活では生

き残るためにあらゆる努力がいる！　運に任せて伸るか反るかなんてやってる内は罰ゲーム常連だ！
推理という狭い思考を捨て、ゲームに勝つための部活的思考に切りかえる…。大切なのは犯人を見付けることじゃないぞ……このゲームに勝つことだぞ……!!
……むッ！　閃いたぜ！！！
「あ、ごめん、ちょっとトイレ行って来るな。」
「くっくっく、トイレで黙考？　ゆっくりブリブリしておいで〜！」
「魅ぃちゃん、それ下品…！」
俺はゲームを中断させ、廊下へ出た。
ふー、空気が澄んでいるぜ。いかに教室が俺たちの熱気で澱んでいるかわかる。
校庭では俺たち同様、帰らずに遊んでいるクラスメートたちがにぎやかに騒いでいる。それに比べれば、教室で遊んでいる俺たちは一見不健康そうに見えるがそんなことはない。教室の俺たちの方が百倍熱く遊んでると断言できるぜ！
しばらくの間、混乱して熱くなった額を冷ましていると、教室からレナがやってきた。
「…圭一くん、ひょっとしてレナのこと、呼んだ？」
「あぁ、呼んだ。」

席を立つ時、俺はレナに目配せをしておいたのだ。うまく通じてよかった。
「時間の無駄なので単刀直入に行く。レナ、お前の今日のゲームの過去の戦績は？」
レナは一瞬戸惑ってから、おずおずと口を開いた。
「え…と……うん。…全敗だよ。……どうしてそんなこと聞くんだろ。…だろ？」
レナの自信なさそうなプレイから想像はついていた。しかし全敗とはなぁ…。
「このままで行くと俺もそうなる。今日のゲームは、大貧民なんかと違って運や流れでどうにかなるタイプじゃない！」
「じゃ、じゃあ、…今日の罰ゲームは圭一くんと一緒なのかな…？」
「おいおい！　早くも負けを受け入れるなよ！　勝ちに行こうぜ!?　俺たちで！」
「で、でも…どうやって!?」
レナの耳元に口を寄せる。ごにょごにょごにょ……。
「え？　そ、そんなのありなのかなぁ!?」
「忘れたのかレナ。会則第二条だぞ！　勝つためには全ての努力が許されてるんだろ!?　今ここで実践せずしてどこで実践する！」
「う、うん！　レナも今日の罰ゲームは嫌だからね…。が、頑張るよ。」
俺とレナの作戦は非常にスタンダードなものだ。

ゲーム開始時、全員にカードが配られるとしばらくの間はメモ書き等のため、みんなの視線が手元のみに集中する。その瞬間、隣り合って座るレナと俺のカードを互いに公開し合うのだ! 机の下でさっと済ませればまずバレない!

結局、このゲームは疑わしい情報の潰しあいだ。平たく言えば、サイコロの代わりに情報を潰してゴールを目指すスゴロクみたいなものとまで言い切れる。となれば、他の連中の倍の情報を持ってスタートするというのは、かなり有利な条件のはずなのだ。

何しろ、情報が多いがゆえに質問にも無駄が無くなる。しかも、その有利を俺とレナの二人が持っているのだから、他の三人はちょっとやそっとのことでは勝ちを奪えなくなるだろう。そうしている間に俺たちはスコアを重ね、焦った他の連中にミスと減点を誘うことができれば、圧倒的大勝利も夢ではない…!

「……な⁉ この作戦なら他の連中よりも確実なリードを持って開始できる!」

「う、うん! これなら…今度こそ勝てそうだよ…!」

にやりと二人で笑い合う! 俺が越後屋ならレナは悪代官だ。くくく、お主も悪よのぅ‼

「じゃあさっそく戻ろうよ! 二人で組んでみんなをあっと言わせちゃおう!」

「おいおい! 二人で一緒に戻っちゃ意味ないだろ! いかにも打ち合せしてきました〜ってカンジだぞ!」

「あ、ごめん。じゃあどうしよ…？」

「レナは先に戻れ。俺は洗面所で顔でも洗って、のんびりしてから時間差で戻る。」

「うん。わかった！」

レナは踵を返すと教室に戻って行った。

ん、もうちょっと引き止めてから戻した方がよかったかな？　ちょっと早過ぎてトイレっぽくない。魅音辺りに勘付かれると厄介かも…。

ま、いずれはバレるだろう。なにしろ俺とレナがこれから連勝を続けるんだからな！　魅音が勘付く頃には俺とレナはビリを回避できるだけの充分なポイントを稼いでるという寸法だ‼

グッド‼　こいつぁ悪くないぜ‼

ようやく俺も、我が部の戦い方ってもんを理解してきたように思う。正々堂々なんてのは我が部では創意工夫のないヤツの言い訳だからな。…座していれば食われるのを待つのみ！　バレなければ全て合法、勝てば正義だ！　…あぁ、何て社会的含蓄の多い部活だろう。ここで鍛えられれば、将来は相当たくましくなれる気がするぜ…。

「前原くーん。ちょっといいですか？」

そこを突然、先生に呼ばれた。

「なんですか？　今ちょっと大事な…、」

「前原くんにお客さんがいらしてますよ。昇降口へ行って下さい。」
「お客さん？　誰に？　………俺、ですか？」
「待たせていますよ。早く行ってきなさい。」
もし親が学校にやってきたなら、お客さんという言い方はしないだろう。……一体誰が俺を訪ねてくるというんだ…？
早く教室に戻って部活を再開したいという気持ちもあったが、それ以上に一体誰がやって来たのかということにも強い好奇心を覚えた。
遊ぶ時間を無駄にしたくないので、とっととその用件を済ませることにし、俺は昇降口へ向かうのだった。

■大石蔵人

昇降口は強い日差しと日陰の明暗のくっきりしたコントラストに彩（いろど）られていた。
その中を、暑そうに小脇にジャケットを抱え、だらしなくネクタイを緩めた中年のおっさんが待ち構えていた。
「前原さんですか？　前原圭一さん。」

雛見沢の人間なら、前原さんですか？　というような聞き方はしない。俺にもこんな男と会った記憶はなく、初対面に違いなかった。
……どうも富竹さん以降、俺はおっさんに縁があるようだな。
「そうですよ。…どちら様ですか？」
「私の車はエアコンが利いてますから、そっちでお話ししましょう。ここ、暑くありませんん？」
男はこちらの問いかけをあっさり無視すると、校門に停まっている車を指差し、とっとと歩き出す。
じょ、冗談じゃないぞ。こんな見ず知らずのおっさんに付き合う気もないし、しかも車に乗れだって？
みんなと楽しく遊んでいるのに、その教室からさらに離れてしまわなくてはならないのが何だか不愉快だった。
「捕って食いやしません。どうぞどうぞ！」
車の後部座席を開けて俺を呼んでいる。……何だかマイペースで気に入らないオヤジだが、一体何の話をしに来たというのか。その内容が気になる。…昔からこういう切り出し方をされる話にはろくなものがないとは知りつつ、俺は誘いに乗ることにした。

車内は本当に涼しかった。カーエアコンなんて結構高級品のはずだ。少なくともうちの親父の車には付いていない。

「冷え過ぎだったら言って下さいよ？　私、ガンガンに冷やしちゃう性質(たち)ですから。」

「で、俺に何の用ですか？」

向こうのマイペースっぷりのお返しに、俺も相手の問いかけを無視して切り出すことにする。話には付き合うが、今は遊ぶ時間が削られることが一分でも惜しかった。

男は胸ポケットから手帳を取り出しぱらぱらとめくると、そこに挟まれた一枚の写真を取り出した。そこには……寝ぼけたような顔をした男の顔が写っていた。

「この男性のことで、ご存知のことがあったら教えて下さい。」

誰だ、このおっさん。

……こんな免許の写真みたいな感情のない様子だったら身近な友人でもそれとわかるまい。

「シャツにマジックで落書きがありましてね。前原さんを始めクラスメート何人かの署名が入っていました。」

「……え、…これ…富竹さん⁉⁉」

いつものあの、どこか頼りなさそうで、でも飄々(ひょうひょう)とした雰囲気はこの写真からは微塵も感じられない。こんな寝ぼけた感情のない顔だったので、なかなかそうだと認識できなかった。

「ではこちらの女性はわかりますか？」

…となれば、見る前から何となく察しはついていた。

「……ええと、名前は知りませんけど、昨夜、富竹さんと一緒にいた女の人です。」

名前こそよく知らなかったが、雛見沢の住人であることは知っている。ちょっぴり薄気味悪い笑い方をするのが印象的だった…。

「この二人に最後に会ったのはいつですか？」

「綿流しのお祭りの晩、一緒に話をしました。…二人とも仲良さそうでしたよ？」

「何か気になったこととかありませんか？　何でも結構です。話して下さい。」

こう根掘り葉掘り聞かれると正直困る。…この頃には、俺にもこのオヤジの正体の見当がついていた。

「…あの、富竹さんたちに…何かあったんですか？」

その問いかけに答えはなかった。だからこっちも同じくそれを沈黙で返してやることにする。

多分おそらく……いや、間違いなく…このおっさんは警察だ。

だったらなぜ？？　どうして富竹さんのことを尋ねる？　彼に何かあったのか？　それよりも何で俺なんだ？　俺よりも詳しそうなヤツは大勢いるはずなのに？

カーエアコンの唸（うな）る音がやたらとうるさく感じる…。

……長い空白時間ののち、彼はようやく口を開いた。

「前原さんはまだこちらに越されて来たばかりですよね？　ご存知ですかな？　例の………オヤシロさまの話は。」

心臓がどきんと跳ね上がる。隠し事のヘタな俺のことだ。さぞや表情に出してしまったことだろう…。

「まったく知らない？　知らないんなら結構なんですがね…。」

「……まぁ……聞いたことくらいは。富竹さんに教えてもらったんですけど…。」

「どの辺までご存知ですか？」

バラバラ殺人。事故死。病死に自殺。それから撲殺。毎年、必ず綿流しの日に起こる怪死事件…。

富竹さんが隠し事をするとは思えない。あれが全てだと思う…。…いや、あれ以上があるとは思いたくない。

「前原さんは…その…祟りとかを信じていますか？　率直なところで結構です。」

「信じてません。」

即答する。

それには信じていないというよりも、信じかけているからその疑念を晴らしたい、という感

情の方が強く出ていた。
「本当に？　ならよかったです。やっぱり前原さんは都会育ちですねぇ〜。」
「信じてなかったら何なんですか。俺、仲間を待たせてるんであまり時間取れないんすけど。」
「その写真の男性は昨晩、お亡くなりになりました。」

頭の中が真っ白になる。
……え？　富竹さんが…どうしたって？
「よりにもよってね、お亡くなりになられたのが昨日なんですよ。つまり綿流しの当日。
……前原さんにはどういう意味があるのか、わかりますよね？」
「意味って、…意味なんか……、」
死因とか理由とかじゃない。…問題なのは綿流しの日に死んだということだ…。
つまり……今年も……オヤシロさまの祟りは……ッ！
「富竹ジロウさんがお亡くなりになられたことはまだ内緒です。どうしてかは、何となくおわかりになりますよね？」
わかりたくもない…。…オヤシロさまの祟りは今年も起こったというショッキングな事実を伏せたい以上の何があるってんだ…。

「……教えて下さい。…一体、何があったんですか？」
「…特異なんですよ。雛見沢の方にはちょっと刺激の強い。」
もったいぶった言い方だったが、その先を聞くことに一瞬、躊躇した。
俺は、無用の好奇心で知らなくてもいいことを無理に知り、その結果、後悔してきた。
バラバラ殺人という不愉快な事件をみんなは伏せてくれた。なのに俺は勝手な好奇心でそれに興味を持ち、…知る必要のなかったオヤシロさまの祟りの話を聞いてしまった。
そしてオヤシロさまの祟りの話も同じ。…嫌な予感がしていたなら話を断ち切って逃げればよかったのに先を促してしまい、あの楽しかったお祭りの夜をおかしくしてしまった。
そして、そのオヤシロさまの祟りの話は、あの夜を越えてとうとう、こんな白昼に学校まで押し掛けてきて続きを話そうとしているのだ…。
俺の下らない好奇心が、連鎖的に不吉な何かを呼び寄せている…。そして、この男が話そうとすることに耳を傾ければ、さらに連鎖的に何かが続いていってしまう…？　第六感にも似たもので、それを俺は感じ取っていた…。
だが、だからといって今すぐこの車を降りる度胸がなかった。
俺はまたしても、……下らない好奇心から逃れられない。富竹さんがどうして亡くなったのか、それを聞き遂げようとしている…。

「最初の発見は祭りの警備を終えて帰還中のうちのワゴンでした。時刻は二十四時五分前。場所は、…えーと、町へ出る道路がちょうど砂利から舗装道路に変わるところありますよね？　坂を下りきった辺りに。あそこの路肩でした。」

街灯もほとんどない道だ。月明かり以外は車のライトしかない暗闇。
そんな中で路肩に倒れている富竹さんを発見したのは偶然中の偶然だった。
血塗れで道路に突っ伏した富竹さん。…アスファルトいっぱいに広がった血と汚物…。
「みんな始めは轢き逃げされたものだと思っていました。ですが、意識を確かめるために近付いた警官はすぐに異常に気付きました。…喉がね、引き裂かれていたんですよ。」
「ひ、引き裂かれてって……。ナ、…ナイフとか……⁉」
「いいえ。爪でした。」
「爪⁉　爪って、指についてる…この爪⁉　それで…ガリガリと⁉⁉」
「検死の結果、それも自分の爪で、ということが判明しました。」
「え？　え？　…それって…どういうことですか…？」
つまり……これは他殺じゃなくて……自殺なのか⁉
富竹さんは…何を思ったか、自分の爪で力いっぱいガリガリと！　喉を掻き毟りだしたのだ。

…皮が引き千切れて血が滲み出して…。それでも富竹さんはやめない。ガリガリと!!
爪が剝がれるくらいの凄まじい力で…ガリガリ！　ガリガリ!!
そして…傷つけてはいけない大切な血管にまで爪が届き……ガリガリ！　プチ、……辺り一面に鮮血を撒き散らす！　血を吐きながら。嘔吐しながら。…そして倒れ…痙攣しながら……悶死。
「薬物を疑いましたが、そういう類のものは検出できませんでした。」
でもこれ……自殺なのかッ!?　こんなの聞いたこともない!!　…こんな尋常でない死に方……!!!
これを怪死と言わなくてなんと言う…？　こんな死に方……この五年間の死で、…一番祟りらしいじゃないか…！　それもまるで、祟りなんかないと力説した富竹さんと、俺に見せ付けるような…!!
「他にもいくつか不審な点があります。体内分泌物、発汗、脱毛等から、富竹さんはお亡くなりになる直前、極度の興奮状態だったようなのです。」
「そりゃそうですよ…。冷静な状態で自分の喉を搔き毟るなんて考えらんないです…。」
「手の傷と付近に落ちていた角材が一致しました。…周囲の木やガードレールに叩いた跡。周囲に散乱する富竹さんの血痕…。………つまりですね、」

富竹さんは喉を掻き毟り血塗れになりながらも、角材を片手にそれを振り回していたということだ。

「また、体からは本人によらない外傷がいくつか発見されました。…富竹さんは何者かに暴行を受けた可能性があるということです。外傷の部位から見て、複数犯の可能性もあります。」

……まとめるとこうだ。

富竹さんはあの夜、おそらく祭りからの帰り。何者かに取り囲まれ、襲われた。そして夜道を興奮状態で逃げ惑い、とうとう逃げ切れなくなり、落ちていた角材を拾い抵抗を試みたのだ…。

その最中、何かが起こった。そして富竹さんは錯乱しながら自分の喉を掻き毟り始めたのだ。…ガリガリと!!

「そして……絶命した…。」

「死亡推定時刻は二十一時から二十三時頃のようです。つまり…お祭りで前原さんが富竹さんとお話しして別れてからすぐの出来事なんですよ。」

みんなで富竹さんのシャツに寄せ書きを書いて…お別れして……。…すぐ……。

そう言えば…富竹さんは女の人と一緒だったはずだ。…彼女は!?

「行方不明です。出勤もしていませんし、昨夜は自宅にも帰っていません。…事件に巻きこま

れた可能性が極めて高いようです。」

しばらくの間、俺は放心するしかない。
身近な人の不幸が、これほど鮮烈なものだとは思いもしなかった…。
俺と富竹さんの共にした時間は呆れるくらいわずかかもしれない。……だが、同じ祭りで、同じ時間を過ごし、同じゲームで競った。…仲間だ。
「我々もあらゆる面から捜査を進めますが、村人たちはオヤシロさまの祟りの話になるととにかく口が重くなる…。」
…それはよくわかる。…俺自身、富竹さんという村人でない人間に聞かされるまで何も知らなかったくらいなのだから…。
「…だから、俺なんですか？　俺が雛見沢の人間じゃないから。」
それが俺から話を聞こうとした理由なら憤慨すべきもののはずだ…。
俺は雛見沢に早く馴染みたいと願っている。だからこの男が俺を狙って訪れてきたなら、それはとても悔しいことのはず…。……だが、今はそういう感情にはなれなかった。
「このままでは、富竹ジロウさんはオヤシロさまの祟りで死んだことになってしまいます。」
男は視線を俺から外し、遠くを見つめた。

「……綿流しの晩、神聖な儀式の時、無神経にカメラをばしゃばしゃやってたものだから、オヤシロさまの怒りに触れた、…そういう話になってしまうんですよ。」

「と、富竹さんにオヤシロさまのバチが当たるわけがない…！　あの人は確かに住んでるのは東京かもしれないけど、雛見沢をとても好きでした。村人にも馴染んでいました。そんな彼に、こんなこと、あるわけがない…！　富竹さんを殺したのは人間の、それも卑劣な連中です。…祟りなんかのせいにされてうやむやにされて…たまるか…！」

「私もそう思います。バチも祟りもあるわけがない!!」

シンとした緊迫の中、…やがて男はにっこりと笑って語気を緩めた。

「つまりそういうことですよ前原さん。……祟りを信じていない雛見沢の方の協力が不可欠なのです。わかりますね？」

富竹さんも俺も、祟りなんか信じない。…だが、このままでは富竹さんの死は五年目の祟りとして上乗せされてしまうだけだ。それは、富竹さんを雛見沢が拒絶したことを認めることになる。それだけは…許せない。

富竹さんは俺たちの仲間だ。雛見沢に住んでこそいないけど、毎年毎年訪れている、…ある意味、俺なんかよりもずっと雛見沢の人間と言える。

その富竹さんに…オヤシロさまの祟りなんか、あるわけがない…！

「でも、…俺に協力できることなんか何もないですよ。あの晩のことは何も知らないし…。」
「いえいえ、何か気になるものを見たり、聞いたりしたら教えて下さればいいんです。」
見たり聞いたり？　未来形だ。
「モノでもヒトでもウワサでも。何でも結構です。不確かなもので構いませんから。……これ、私の電話番号です。不在でしたら出た者に伝言して下されば結構です。」
電話番号の書かれたメモを渡されたが、一瞬、受け取るのに躊躇した。
これを受け取れば…否応なく俺は当事者になる。
「富竹さんの無念を晴らすためにどうか、ご協力をお願いしたいのです。」
そうだ。…俺は何を躊躇する？　…仲間を殺した犯人を…見つけなきゃ！
力強くメモを毟り取ると、男は満足そうに笑ってから一気に表情を険しくした。
「今日ここでした話は全て内緒です。絶対に他言無用でお願いします。」
「わかりました。」
「お友達にも内緒です。特に、園崎魅音さんや古手梨花さんには絶対に知られないようにして下さい。」
「な、なんでだよ！　……あいつらが事件に関係あるっていうのかよ!?」
急に身近な仲間の名前を出され、しかもその仲間には内緒にしろと言われ、俺はとっさに憤

慨してしまう。
「…う〜ん、捜査上の都合、ということなんです。」
「煙に巻くなよ！　魅音たちは俺の大切な仲間だぞ‼」
食って掛かるが男は特に気に留める様子もない。
「言ってもいいですが……気を悪くしないで下さいね？」
「言えよ‼」
男は少し躊躇した。目線を車外へ向け、少し思案してから口を開く。
「雛見沢で起こった一連の事件は、村ぐるみで引き起こされている可能性があるのです。」
「………そ、…そんなことあるわけないじゃないか‼　バカも休み休み言え‼　第一、そんな証拠はあるのかよ⁉」
「証拠はありません。しかも過去の事件は個々に解決し、いずれの犯人も村とは直接関係ありませんでしたしね。」
「じゃあどう考えたらそんな考えに至るんだよ！！？」
「毎年、綿流しの日に村の仇敵が死ぬ‼　それだけで充分に疑えると思いませんか？」
綿流しの日に神聖性を感じるのは雛見沢の人間だけだ。……つまり、その日のみに事件が起こるのは「雛見沢と関係」があるからだ…？？？

「始めはダム工事の作業員！　そして次にダムを誘致した村人！　村の仇敵は次々に怪死しました。過程はともかく、結果はそうなのです。」
理不尽な証拠なき疑惑だ。……だが、それを一笑に付すことは難しかった。
「じゃあ…、次に死んだ神主や、その次に死んだ主婦はどうです⁉　別に村の敵だったわけじゃない…‼」
「神主はダム騒動当時、リーダーシップを期待されながらも、積極的な働きがなかったため、一部の村人から失望、反感を買っていました。」
「反感があったにしたって……別に村に害を与えたわけじゃないだろ⁉　その次の主婦なんかどうだよ！　誘致した男の弟夫婦だったってだけの理由だろ⁉　もっと殺される理由が薄いじゃないか‼　そして富竹さんに至ってはどうだよ‼　ダム工事とは関係すらないじゃないか！！！　ただよそ者だ、ってだけの理由だぞッ⁉」
始めこそダム工事関係者に偏(かたよ)っていたかもしれないが、後年になればなるほど、犠牲者の「敵対度」は希薄になっていく。
「…それがね、怖いんですよ。徐々に希薄になって行くのが。」
「何がだよ…！」
「つまり、村の敵でなく、よそ者だというだけの理由で犠牲になりつつあるんですよ。」

「じゃあ…来年の被害者は…『村のよそ者』から選ばれるっていうのか⁉」
「あるいは引っ越してきたばかりの人かもしれません。」
「それってどういう……、」
言葉を飲みこんだ。この雛見沢で…今一番のよそ者がいるとしたら……それは…うちだ。
俺自身がいい証拠じゃないか。…未だすれ違う人々の名前も充分にわかってない……。
じゃあ……次の犠牲者は……うち、……俺だって言うのか…ッ⁉
「でも…それと魅音とどう関係があるんだよ⁉」
「詳しくは申し上げられませんが、園崎さん一家はダム騒動時の抵抗運動の旗頭だったのです。それも過激なね。例えば園崎魅音さんについても同様です。抵抗運動時、いくつかの軽犯罪と公務執行妨害で補導歴があります。」
魅音が「戦った」ことは知っている。…だが一家が抵抗運動のリーダー格なのは初めて知った。……じゃあつまり…どういうことだ…、
「…魅音の一家が……一連の事件に関係しているとでも言うのかよ？」
「そうまでは言いません。……もしもそうだったら、一番確率が高い、それだけのことなんです。」
よくわからない説明だった。俺の、本当に知りたい部分はさっきから見事にはぐらかされている気がする…。

「誰が一体どれだけ関わっているのか、まったくわかりません。……だからこそ、村人に口外してほしくないのです。」

俺は露骨に渋い顔をして返事の代わりとした。…それは充分に伝わったようだった。

「じゃあこう考えましょう。…祟りを盲信する村人の皆さんに心配させたくないから内緒。…そういうことでどうです？」

何がそういうことだとどうなのか、さっぱりわからない。ただ、迂闊に口外すべきでないことなのは理解に難しくなかった。

犯人はどこかにいる。それは祟りとは無縁だ。そしてそいつはきっと警察が逮捕して、然るべき報いを与えるだろう。…そしてその過程はみんなには関係のないことだ。

祟りに過敏になっているみんなに…余計な心配をかけることなどないのかもしれない。

「……みんなが俺に心配させないために内緒にしてくれたように。……今度は俺がみんなに心配させないために内緒にする番、てことなのか…？」

独り言だった。

俺と違い、毎年起こる怪事件に不安を募らせてきたみんなにとっては、今度の事件が意味するところは大きいだろうな…。なら、みんなの心に…余計な負担をかけたくない…。

結局、男の言う通りに事が進んだのが面白くなかったが、仕方なかった…。

「わかりました。俺だけの秘密にします。それでいいですよね、…えぇと……名前、」
「興宮署の大石と申します。なんなら蔵ちゃんでもいいですよ？」
「あ、いや、大石さんでいいです…。」
いやらしい喋り方のくせに妙に敬語な、いかにもスケベ親父な感じの刑事だ。…俺の知るどんなドラマにもこんなデカはいないぞ…。
「…時間を取らせ過ぎました。お友達を待たせていますよね？　もう戻った方がいいでしょう。」
がちゃりと扉を開けると、茹だるような熱気がぶわっと入り込んできた。
車の外は凄まじい熱気だ。今日はこんなにも暑い日だったんだっけ…？
機械的な涼しさの車内とは対照的に、意地悪するような暑さ…。まるで、雛見沢という土地に急に嫌われたような、…そんな悲しい錯覚がした。
「お友達を疑え、と言ったわけではありませんからね。誤解しないで下さいよ。」
今更勝手なことを言うな、と思ったが口には出さない。
「前原さんが何も見つけず、何も聞きもしなかったとしても、それで充分なのです。……それは村が関わっていないという証拠になるのですから。」
「見たり聞いたりしたら連絡しますけど。……俺は探偵じゃないですからね。へんな期待、しないで下さいよ。」

「しませんしません！　探偵になんかならなくていいですよ。今までのように自然に生活して下さい。その中で見聞きしたことを教えてくだされば結構なんです。」
俺は大石さんに一礼すると校舎へと足早に戻って行った。
「またお会いしましょう、前原さぁん！」
俺は振り向きもせず校舎に戻った。

■部活は終わる。

どのくらい時間を潰してしまったかわからない。
みんなを待たせてしまって悪いという気持ちもあったが、今の頭の中は他のことでいっぱいだった。
……富竹さんの死だけでも充分に大変なことなのに……それが村ぐるみの可能性がある？
しかも……それに魅音が関わっている可能性もあるだって??
馬鹿馬鹿しい…。魅音やレナや沙都子や梨花ちゃんに限って、あるわけがない。
富竹さんを襲った犯人は複数？　一体誰が犯人なんだろう。…そして…その犯人は雛見沢に潜んでいるんだろうか…？　……わからない。

…確かに言えることは、魅音に限って犯人ということはありえないということだ。あんな快活なヤツがどうして人殺しなんか、

「魅ぃちゃんだよ!! 犯人はッ!!」

え、………レナの声に一瞬、ぎょっとする。

「凶器は『ロープ』で、犯行現場は……う〜ん……『ラウンジ』!!!」

「わっはっはっはッ!! ハッズレ〜〜!!!!」

「はぅうぅうぅう!! またハズレたあぁぁぁ!!!」

頭を抱えてのたうち回るレナ。……派手に自爆したようだな。

「あぁあー!! 圭一さん、遅かったですわねぇぇぇ!!! ぷんぷんでございますのことよ!?」

「あ、あぁごめんごめん…。ちょっと先生に職員室呼ばれてさ…。」

「素行が悪くて怒られましたですか? …かわいそかわいそです。」

「ま、こっちも白熱してて圭ちゃんのことなんかころっと忘れてたしねぇ! まぁ、今日はもういい時間だから次で最後のゲームにしよう。」

「おいおい…。俺の今の持ち点って…確か零点だろ…。…ビリ確定じゃないのかよ?」

「だ、大丈夫だよ圭一くん。……レナ、マイナス一点。………はぅ…。」

「なんだそりゃ！　ゲームに参加してなかった俺より点数が低いぞ…！」
「罰ゲームはレナがひとりでか、圭ちゃんと二人でかを決める最終戦!!」
「冗談じゃねぇぞ。罰ゲームはレナひとりでやってくれ！」
「……圭一くんと…二人で勝とうって約束したのに……ずーっと待ってたんだよ？　…だよ？」
「……ぅ……そりゃ俺が悪いな…。」
俺は当初の取り決め通り、レナにカードを公開するが、犯人がわかっても答えず、レナがあがるのを黙って待った。…レナが勝とうが俺が勝とうが、レナは罰ゲームから逃れられないのだが、そうなってしまった責任は俺にもある。…今日は腹を括ろう。
「わかったよ!!　犯人は『私』！　凶器は『毒物』で犯行現場は『玄関ホール』!!　どうかな!?　どうかな!?」
「おーおーレナ、回答早いじゃ～ん？　また当てずっぽうじゃないのぅ？　……お。」
「……みー。レナの正解なのです。」
「をーっほっほっほ!!　じゃあこれで圭一さんも仲良く罰ゲーム決定ですわねぇ!!」
「やったぁあぁぁ!!　圭一くん、一緒にがんばろうねぇ☆」
「あ、あぁ、一緒にがんばろうな…ははは…。」

「ではゲームセット!!　トップは私、園崎魅音!!　ビリは前原圭一と竜宮レナ!!」
みんなが拍手してゲーム終了だ。……問題は…罰ゲームだよな…。
「じゃあ、使いっぱしりの刑の買って来るものはトップの私が決めようかねぇ！」
「…な、何を買いに行かされるんだろ？　…だろ？」
「薬局は禁じ手にしような。図星だろ!?」
「はぁ？　薬屋なんかに用ないよ。おじさんが買って欲しいものはね、このメモに書いてあるから〜！」
「わぁ……いっぱい書いてあるよ…。」
い、いっぱい!?　畜生、一体何を買わされるんだよ!?
「…豆腐二丁。シャンプーとリンス。みりんに油揚げ。何だこりゃ。」
「罰ゲームってより…お買い物に見えるでございますわねぇ…。」
「……今日の魅ぃは勝つ気満々でしたです。」
「会則第七条!!　罰ゲームの内容に逆らわな〜い！！！　はい、お金。シャンプーはうち、果物物語だからね。よろしくぅ！」
「こ、これ、お前が頼まれたお使いだろぉおおぉ！　罰ゲームに使うなー!!」
俺は今度こそ勝ったなら、魅音に痔の薬を買わせようと誓うのだった…。

■犯人は四人以上？

大石の姿は休憩室の脇に設けられた喫煙スペースにあった。鑑識の老人も一緒だ。
「自分で喉を掻き破った出血性ショック死。爪の間に肉や皮がびっしり詰まっとった。他人の爪じゃない。間違いなく本人の爪じゃわい。傷の形も一致する。」
「えぇぇぇ。直接死因が自殺ってのはわかってますよ。」
「わかっとるわい。人為的にこういう症状が起こせんかと言っとるんだろう？」
大石は、富竹の特異な死に方に何かの鍵があると睨んでいた。だが調べれば調べるほどに不可解さが募っていくのである…。
「背中が痒くて掻きすぎて、血が出ちゃうのとはちょっと訳がちがいますからねぇ。」
富竹氏の指には爪が剝がれたものもある。
爪自体は割りと簡単に剝がれる。だがとても痛い。だから普通は剝がれるような無茶はしない。
そして、富竹氏の遺体に残る数々のアザ。…形状その他から素手の暴行によるもの、それも複数人に囲まれてであることは明白だ。

「分泌物から見て、仏は極度の興奮状態にあったのは間違いないのう。」
「では乱闘になって、興奮のあまり自分の喉を引っ掻きだしたってことですか？　襲った連中、さぞや度肝を抜かれたでしょうなぁ。」
確かに異常な環境で異常に興奮した人間は、健常者には考えられない行動を取ることはありえる。無論、極めて稀有なケースだが。
「実はな、大石くん。仏が武器にしたらしい角材な。砂粒とかガードレールの塗装片とかそんなのしか出んかったぞい。」
「ホシの服の繊維とか、皮膚片とかは？」
「出んかった。仏は犯人を殴っとらん。…あるいは殴った角材を、ホシが持ち去ったのかもしれんの。」
「なら、わざわざ角材なんて置いてきませんよ。全部持ってっちゃいます。」
「かっかっかっか！　それもそうじゃのう。」
「富竹氏は結構、体格もいいし肌も焼けてるし。…スポーツマンですよねぇ。」
「ん？　そうだな。よく運動しとるようだの。筋肉の付き方はなかなかのもんじゃ。」
…生前に何のスポーツを嗜んでいたか想像はつかないが、身体能力は高い方だと思う。
つまり、乱闘では決してひけを取らないはずなのだ。

これだけ体格のいい男が、身に危険が迫って、死に物狂いで武器を振り回して。それが犯人にかすりもしないなんて、ちょっと普通では考えられない。
しかも相手は素手。こっちは角材なんだから、一回くらいは殴れたと思うのだが…。にもかかわらず、角材からは不審な不着物は一切出なかった。
「こんだけ体格のいい相手を取り囲んで襲おうとしたら、…何人くらいいりますかねぇ。」
「あほぅ。それは大石の方が得意だろうが。悪タレ時代を思い出さんかい！」
「なっはっはっは…。そうだなぁ…。私が彼と喧嘩するなら何人ほしいかなぁ。…確かに富竹さん、なかなか大柄で一対一じゃ相当梃子摺(てこず)るだろうなぁ。」
群が時に大型獣を倒すように、多人数で襲うのは狩りの鉄則だ。
……四人くらいはほしい。多少の体格差があってもこれだけいればなんとかなる。
「だとすると、結構犯人は多人数だの。祭りで泥酔した四人以上のグループが怪しいとなるかの？」
………四人以上のグループ。
しかし…それだけの人数がいれば、遺体をもっと目に付きにくいところに隠せなかっただろうか？　あるいは…瀕死(ひんし)の状態で監禁されていたのをなんとか抜け出してきたの

か…。だとしたら自殺する理由がわからない。それ以上に、あの異常な死に方の理由がわからない……。謎だらけだ。

「こっちもそこは重視しとる。徹底的に調べるつもりだが…あまり期待できんな。何しろ、過去にこんな例はないんだからな。一般的な薬物反応はどれも空振りしたので、県警本部に分析に出させとるが、それでも何も出んかもしれんの。何しろ、怪しげな薬は星の数ほどある。特に、漢方系や天然生薬の類は非常に厄介じゃ。ソ連の暗殺機関が使う毒物や、中国伝来の毒物なんかは既存の方法では検出不可能とも言われとるしのう。……早い話が、お手上げの可能性が高いっちゅうこっちゃ。」

「期待はしませんよ。ですが県警本部の分析結果を楽しみにしてます。」

「大石さん〜！　課長が呼んでるっすー！」

「すみません、ではまた来年お会いしましょう。」

「おう。良いお年をの！」


・鹿骨市内の安ホテルに滞在
・宿帳に富竹ジロウと記名 → ペンネーム？
本名は不明
・折り畳み自転車で行動。免許の類なし。
・自転車は現場から300m離れた林道脇に放置。
・祭り当日、会場にいた。
・失踪中の鷹野三四と一緒にいた。
富竹ジロウ
仏
その後は不明
・21時頃に警察官が目撃。
・雛見沢には5〜6年以上前から、季節毎に1週間ほど滞在。
・野鳥専門のフリーカメラマン
・遺品のフィルムに不審な内容はなし。
雑誌社
調べる！
・遺品に財布 ← （物盗りではない!?）
・財布の内容物から、生活基盤は東京〜千葉？
国鉄総武線沿線？
・都内各区の住民基本台帳に富竹ジロウの同姓同名なし
・鹿骨から都内歯科へ照会 → 警視庁へ。
・各雑誌社へ顔写真の送付
富竹ジロウ問い合わせ。
・誘拐された？
それとも容疑者
重要参考人
鷹野三四
（失踪）
・入江診療所に勤務の看護婦
・趣味の野鳥撮影で富竹と親しい。
独身
・自宅は興宮×丁目××番地。
・富竹と共に祭り会場で目撃されるも、その後行方不明。
・仏を殺す動機がない
痴情のもつれ？
？
シュークリームが食べたいなあ
ジャンボで4つ
（大石）
・人間関係を徹底的に調べる！
勤務先
・会場警備の警察官に再度聞き込み！

捜査メモ


6月21日(火)

眠い。
「わぁ…圭一くん、でっかいあくび。」
飯を食う時って結構目が覚めてるもんだが…今日に限ってはだめなようだ…。
みんなでの楽しいお昼なのに、俺は食いながらさっきから大あくびを繰り返している。
「昨夜遅くまでテレビ見てたら……眠くて眠くて……。」
「圭ちゃんが喜びそうなH番組なんかやってたっけぇ？」
「ふ、ふふ不潔千万でございますわぁぁぁぁぁ～!!」
「勝手に決め付けるんじゃねぇぇぇぇ！！！」
「……男の子なら当然なのです。恥ずかしくないですよ。」
梨花ちゃんのまったくフォローにならないなでなでが駄目押しする。
「すまん。ちょっと…この昼休みは爆睡させてくれ。…いや本当マジで。」
「あぁら、私が黙って見過ごすとお思いでぇ？」
「邪魔したら怒る。すごい怒る！　…ふぁあ～～あ……。」

凄みなんかありゃしない。とにかく……眠い……。
俺は問答無用に机に突っ伏し、昼寝を決め込む。
沙都子が何か言い返してきたようだが、聞こえないふりをしてやる。
「…沙都子ちゃん、やめなよ。圭一くん寝ちゃった。………寝顔、かぁいい☆」
「あとでお持ち帰りしていいから。そっとしときな。」
「……向こうへ移動しましょうです。圭一にうるさいと悪いですよ。」
…やっぱ梨花ちゃんっていい子だよな…。
「先生が来ても起こさないであげましょうです。み～☆」
前言撤回。

テレビを見ていて寝不足だったというのは…嘘だった。
いつもの時間に消灯したが…昼間の大石さんの話がちらつき、少しも寝付けなかったのだ。
こうして過ごしていると…富竹さんの事件など、始めからなかったように思える。……ひょっとして大石さんに騙されたんじゃないかとすら思える。
だけど……きっとあの話は事実なのだ。……そして、それは誰にも喋ってはいけないこと。
協力を求められたが…どうせ俺にわかる事など何もない。何の役にも立てないなら、最初か

らこんな話、聞かされなきゃよかった。
結局俺はまたしても……知らなくていい事を知って後悔してしまったわけだ…。
何も知らなければ、俺は今この瞬間も、みんなと一緒にお昼のバカ騒ぎをしていたに違いない。………大石さんのことを逆恨みせずにはいられなかった。

「……え、…それっていつから？」
「もう次の日にはいなかったって。……綿流しの晩に失踪したらしいよ。」
魅音とレナが小声でしている話が聞こえてきた。…魅音は声が大きいタイプなので、潜めているつもりでもよく聞こえる。でもレナの声は本当に小声で、何を言っているのか聞き取りにくい。でも、不安そうな様子はその声色から伝わってきた…。
…なんだろう。まさか、富竹さんの話…!?
「……さん………けなの？」
「わかんない。私の知る限りではね。」
富竹さんの事件を胸にしまう自分としては、あくまでも知らないふりをしていなければならない話題だった。
起きあがり、話に混じって嘘を重ねるくらいなら、こうして寝たふりをしながら耳を傾けて

いる方がよっぽど気が楽だった。
しかし……どうして俺は寝たふりをしながら仲間の会話を盗み聞かなきゃならないんだろう…？　後ろめたさに…胸が痛んだ。
「……で……ってこ………他にもいるんでしょ？　………が。」
「…彼女が祟りにあったのか、オニカクシにあったのかはわかんないけどね……。」
オニカクシ…？　鬼カクシ…？　鬼隠し？
不思議な単語だった。……ただ、言い知れぬ不吉な気配に彩られていることだけはわかる。
「……ゃあ……らにせよ……もう一人いるんだよね？　……だよね？」
「オヤシロさまなら……ね。」
「でもでも！　……今年は………てないよ…？」
「婆っちゃと村長さんが話してたんだけどさ。……今年は事前に警察と話が付けてあるらしいんだよ。……何が起こっても、騒ぎにしないで穏便に片付ける、って。」
「じゃあ、……レナたちが知らないだけで………どこかで誰かが………たかもしれない……ってこと…？」
「…かも、ね。」
「………次は……レナ、……かな……。」

「……安心しなよ。レナはちゃんと帰ってきたよ。」
「……でも……………は…駄目だったんでしょ……？」
「昔の話だよ。もうやめよ、この話。」
気まずい雰囲気になったのか、二人は沈黙してしまった。
全体像のおぼろげな会話だったが…いくつか気になるものがあった。
まず鬼隠しという単語だ。…鬼隠しにあう、という言葉の使い方と前後関係から見て、類似語の神隠しと同義のものだろうか。…富竹さんと一緒にいた女性（名前がわからないのが実に歯痒い…）は綿流し以降、消息不明ということからもそれをうかがうことができる。
次に気になったのは、レナのもう一人いるんだよね、という言葉だ。魅音も、オヤシロさまならね、と言い添えている。
オヤシロさまの祟りなら、…必ず二人犠牲者が出るということなのか…？
そう言えば冒頭に魅音が、祟りにあったのか鬼隠しにあったのかわからない、と言ったのを思い出す。
祟りと鬼隠しは、どうやら別のもので、必ず対になって起こる「現象」らしい…？
富竹さんの惨たらしい最期を思い返した…。それはとても隠しなんてスマートなものじゃない。…それこそ祟りという形容が相応しい、壮絶な最期だ。

じゃあ…連れの女の人は…鬼隠しにあって失踪したことになるのだろうか……？

確かに大石さんは、出勤もしていないし帰宅もしていない、と言っていたように思う。…それは、世間一般では失踪といって差し支えないと思う。

ひとつわかったのは……正しい祟りの犠牲者の数は、常に偶数らしいということ。

そして…最後に気になったのはレナだった。

レナは怯(おび)えていた。…どういう理由でかはわからない。だが、何か身に覚えがあり、自らがオヤシロさまの祟りの標的になる確率が高いことを知っている…。

オヤシロさまは…確か、雛見沢の守り神のはずだ。…守り神ってのは住民を守り、外敵を追い払うものじゃないだろうか…？

確かに昨日、大石さんが言っていたように、始めこそ村の敵が標的だったが、近年、よそ者であれば見境(みさかい)なし…な状況にはなってきているらしい。

でもそれなら…レナよりも引っ越してきて日が浅い俺の方が狙われるべきだと思う。

レナの雰囲気からは、次こそ自分だ…というような悲壮感すら感じられる…。

…今聞いた話を大石さんに伝えた方がいいんだろうか。

寝たふりをし、仲間から盗み聞きした話を警察にする…。………気分は沈むばかりだった。

いくつもの疑問が生じ、俺を嫌な気分の黒雲で包んでいく…。

これらの疑問に…答えを求めない方がいいのだろうか…？　これまで同様、知る事によって、俺はもっともっと…戻れないいくらいの深みに落ちて行くのだろうか…。いつか、きっと俺は後悔しそうな気がする。……知らなければよかったと、きっと後悔するんだ…。

その後悔は、思えばもう、始まっている。

その時、沙都子の大きな声が飛び込んできた。

「先生が来るでございますわよ〜!!　圭一さぁん！　お起きなさいですわー!!」

遠くで午後の授業の始まりを知らせる振鈴の音がする。……げ！　ほとんど寝れなかった！

俺は慌てて目を覚まし顔を上げる。背もたれに背中を押し付けた瞬間、

「痛ぇぇぇぇッ!?!?」

俺の席の背もたれに、いつのまにかガムテープで画鋲が仕掛けられていた。…状況証拠だけで充分だ…!!

「沙都子ぉおおぉぉおぉおおぉッ！　法廷不要で即有罪!!　極刑に処すッ！！！！」

威勢よく席を立ち上がる!!　と、俺の足がもつれた。

いつのまにか…俺の両足の靴紐が結び付けられていたのだ！

「や、やるじゃねぇか沙都子ぉおぉぉお!!　俺が寝ている間に…気配を消してこれだけの上等をやってくれるたぁよぅ…！！！」

上靴を脱いで沙都子に飛びかかろうとした矢先に、ちょうど先生が入ってきた。
「をっほっほ!!　先生が来ましてよ圭一さん？　ご着席あそばせ〜！」
つかつか、ひょい、びし!!
そんなのお構いなしにデコピンを食らわしてやる。
「ふ、ふわぁあぁあぁあぁあん!!　圭一さんがいじめたぁあぁあぁあぁ…!!」
「こら！　前原くん、下級生をいじめてはいけません！　謝りなさい！」
沙都子がべーっと舌を出しているのが見えた。…このクソガキぃぃぃぃぃぃい！！！
「ほら！　前原くん!?」
「ヘイヘイ謝りますよー。沙都子サン、ゴメンナサイ。」
丸っきりの棒読みだが取りあえず謝る。…沙都子め、覚えてろよぉおぉおぉおッ!!
「圭ちゃん圭ちゃん、その恨み（うら）は部活でね！　着席着席。」
委員長モードの魅音に促され、俺は着席することにした。
…こうしていると、今の昼休みが、…レナと魅音の会話がまるごと夢だったのではないかと思えた…。

嘘だよ

退屈な授業も終わり、ようやくの放課後だった。
さぁて今日の部活は何だろう!? もう俺は部活なしじゃ生きていけない体になっちまってるなぁ。みんなでわいわい遊ぶ。書いたらそれだけのことなのに、こんなに麻薬的に楽しいなんて。都会の頃の生活の潤いのなさを嘆(なげ)いてやりたいぜ。
俺的には…昨日の推理ゲームをもう一回やってもらいたい。…大石さんのせいでろくろくできなかったからな。レナとのフォーメーションも全然活かしてないし!
そうすることで昨日をやり直し、変な話など聞かなかったことにしたかった。
「そうだね。今日こそ圭一くんと二人で大勝利だよね!」
「でもどうでしょうね。同じゲームを続けて二日やった例はありませんし。」
「…魅ぃにお願いしてみたらどうでしょうです。」
魅音に振り返り目線を合わせると。おもむろに手をぽんと叩いて叫んだ。
「いっけね! 今日、叔父さんの手伝いの日だ…! 悪い、みんな! 今日なし!」
「叔父さんの手伝い〜? 柄にもなく孝行なヤツだなぁ!」

「悪い悪ぃ…！　ホントすっかり忘れてた。…じゃあごめんねみんな！　今日はおじさん、これで帰るわぁ！」
魅音は一方的にそれだけ告げると、カバンを引っ掴み、どたどたと昇降口へ走って行った。
「魅ぃちゃんね、たまに町にある叔父さんのお店の手伝いに行くんだよ。」
「へぇ…そんな面倒臭いこと、絶対に引き受けないヤツだと思ってたけどなぁ。」
「バイト代が出ると言ってましたですわ。結構なお小遣いになるらしいですの。」
「なぁるほどな。山ほど持ってるゲーム代はこれで稼いでるわけだ。しかしそれは…アルバイトと言うんじゃあないのか？　校則で禁止されてないか？」
「……家業手伝いは除くと書いてありますです。」
「親戚の叔父さんの仕事は家業に入るのかなぁ？　……まぁとにかく、じゃあなんだ。今日の部活はお流れなのか？」
「…はぅ。…今日はこれで解散かな？　…かな？」
「別に部長不在でもいいだろ？　やろうぜ部活！」
俺は部活ロッカーを開け、積み上げられたゲームの山から昨日のゲームを探し始める。
「お、あったあった！　昨日の推理ゲーム！　ようやくコツがわかって来た所で中断しちゃったからな～。というか、せめて沙都子に今日の昼休みの復讐をしないとなぁ!!」

「をっほっほっほ！　そぉんなに返り討ちにされたいんですの⁉　魅音さんがいない部活なんて私の独断場でしてよ？　私は別に構いませんけど。レナさんと梨花はどういたしますの？」
「う〜ん、…圭一くんがどうしてもって言うんなら…ちょっとだけいいかな。」
「……ボクはみんなが揃っての方がいいな、と思いますです。」
「ん、…それを言われると…う〜ん。」
「部活がないなら、ボクはお買い物に行きたかったのです。…お醤油とかを買いに行きますですよ。」
「あ、…そうでしたわねぇ！　すっかり忘れてましたわ。」
「なら……、レナも久しぶりに宝探しに行こうかなぁ…！」
「なんだなんだ。…場はすっかり部活という雰囲気ではなくなっちまったな。」
これ以上、わがままを言うと逆に策があることを勘付かれてしまうかもしれないな…。……仕方あるまい。今回は諦めるとするか。魅音のいないところで勝手に盛り上がるのも、何だか悪い気もしてきた。
「ちぇ〜、このゲーム、楽しみにしていたのになぁ……。」
未練がましそうにカードをぺらぺらとめくる。
「またの機会に叩きのめしてさしあげましてよ！　をっほっほ‼」

「犯人は『沙都子』！　凶器は『ピストル』！　やはり貴様の仕業だったか!!」
「な、なんですってぇえええ!!　じゃあじゃあじゃあ!!」
沙都子が机の上のカードを探し、三枚のカードを俺に突きつける。
「犯人は『圭一』！　凶器は『ロープ』で犯行現場は『ラウンジ』ですわぁ!!」
「ロープなんかいらねぇ！　このまま絞め殺してやらぁあぁあ!!」
「いっやぁあぁあぁあ!!　圭一さんのケダモノぉおぉおぉ！！！　ふがががぐぐぐ、リーチの差が卑怯でしてよー!!」
しばらくの間、沙都子とドッタンバッタン、互いの首を絞めあってじゃれる。
ふぅ。…取り敢えずうっぷんは晴らせたので良しとするか。
「ふわぁあぁあぁあん!!　圭一さん、覚えてらっしゃあぁあぁあぃ!!」
「…いっぱいいいっぱい慰みものにされましたですね。かわいそかわいそです。」
「あははは☆　かぁいいいかぁいい…☆」
みんなは帰り支度を始める。俺も散らかしたカードを集め、ロッカーに片付けておくことにする。
その時、手がふっと止まった。……ただの犯人カードなのに…違和感があった。
「レナ」「沙都子」「梨花」「圭一」「魅音」………「悟史（さとし）」。

悟史？　………犯人カードの名前はみんな創作じゃない。少なくともこの名前以外は全員、部活のメンバーの名前だ。……じゃあ、この悟史というヤツも…部員？
クラスの男子に悟史って名前のヤツはいただろうか…？　壁に貼ってあるクラス全員の名前には悟史という名は見当らない。
「圭一くん、早く片付けよ！」
レナに急かされ、はっとする。
賑やかな沙都子と梨花ちゃんはもう下駄箱に向かい、教室に残っているのは俺たちだけだ。当のレナもカバンを担ぎ、もう帰る態勢でいた。
「レナ。やっぱりこのクラスからも、転校で出て行っちゃった生徒って…結構いるんだろ？」
ちょっと遠回しにレナに聞いてみる。レナはちょっと困った顔をしてから答えた。
「…うん。雛見沢って田舎でしょ？　転校して行っちゃう人も時々いるよ。」
「じゃあ、この悟史ってヤツも転校してったのか？」
「ごめん！　………よく知らないの。」
ちょっと間はあったが、ほぼ即答だった。
「あ、その…意地悪で言ってるんじゃないの！　……ちょうど去年。レナが転校してきてから…入れ替わりだったかな。だからあんまりお話ししたことないの。…ごめんね！」

よく知らない、ごめん。
以前、レナにバラバラ殺人のことを聞き、拒絶された時とよく似た答え方だった。
拒絶されたことに寂しさも覚えたが……ほんの少しだけ怒りも感じた。
俺は…みんなの仲間だろ？　仲間同士で隠し事なんて…ないはずだろ？
薄気味悪い祟りの話を隠してくれるのはありがたいさ。……だけど…みんなが不安なら、俺だってみんなと同じ不安を共有したい。……それが…仲間ってもんだろ…？
悲しさと苛立たしさが入り混じった今の俺は…一体どんな表情をしているんだろう…。
「け……圭一くん、…怖い顔してる。……なんでだろ？　…なんでだろ？」
レナの、言う通りの表情なのだろう。…俺の険しい表情に少し怯えて戸惑っているようだった。
「あ、ごめん。…今日の部活、楽しみにしてたからさ、残念だっただけだよ。」
レナの頭をぐしゃぐしゃと撫でてはぐらかす。
「帰ろうぜ。」
ちょっと気まずい雰囲気を引きずりながら、俺たちは下校した。
なぜだろう。…なぜ最近、こうも面白くない気持ちになるんだろう…？
何も知らなかった頃は…何も心配はなく、ただ日々が楽しかっただけのはずなのに。

俺の素朴な疑問に、長く伸びた影は答えてくれなかった。
「……圭一くん、疲れてるのかな…？　…かな？」
レナが恐る恐る俺の顔色をうかがっている。…気まずい雰囲気が余計気まずくなる、そんな表情だった。
「…そうか？」
「う、うん。…今朝から圭一くん、なんだか元気ないよ。風邪……かな？」
そういう意味では健康体だと思う。小学校はこう見えても皆勤だ。
俺がなかなか返事を返さないので、レナは勝手に先を続けた。
「きっと圭一くん、引越しの疲れが今になって来たんだよ。……前に住んでた所とは全然違うところだもん。いろいろ慣れたり覚えたり……疲れて当然だよ。」
「そうなのかな。」
「うん。絶対にそうだよ。レナも最初、そうだったから。わかるんだよ？　…だよ？」
俺が今感じている些細な疎外感を、レナもまた去年、感じていたのだろうか。……そう思うと、レナだけは俺の気持ちをわかってくれるんじゃないかという気がした。
「レナが雛見沢に転校してきた時の話が聞きたいな。…どんなだった？」

俺が話に乗って来たのに気付くと、レナの顔が急に明るくなった。

「あははは。圭一くんと同じだよ。人の名前も村の中も全然わかんなかった。魅ぃちゃんとかが親切にしてくれたから全然寂しくなかったけど……、やっぱり心細かったよ。」

レナは自分が引っ越してきた時のことを細かく話してくれた。出会いや驚き、不安や喜びをいろいろと。それらは今、俺が体験してることとまったく同じだった。

「なんだ！　じゃあ…レナも沙都子にやられたのかよ⁉」

「うん。椅子に座ろうとしたら画鋲が置いてあったの。どっさり。…そしたらそれを、……

……うん。懐かしいなぁ！」

「魅音の部活にはいつ頃誘われたんだ？　さっそく初日にか？」

「ううん。最初は部活なんてなかったんだよ。途中からできたの。………放課後にみんなで残ってゲーム大会をやろうって言い出して。」

「そう言えば…魅音、初代部長とか言ってたっけなぁ。納得。」

「内緒だけどね。魅ぃちゃん、最初は弱かったんだよ。全然勝てなかった。」

「えぇ⁉　魅音が⁉　……ちょっと想像つかないぞ⁉」

「自分で言い出した罰ゲーム、ほとんど自分でやってたんだよ。あはは！　本当に内緒だからね！」

「あの魅音がねぇ…！　…んで、その内、勝つためには手段を選ばない鬼みたいなヤツへと変貌していくわけだ。ダーティプレイになってからが魅音の真骨頂だからなぁ！」
「魅ぃちゃん以外ともちょっとずつお友達になれて……でも、うん。圭一くんが引っ越してきてからかな。ようやくここに馴染めたって自覚したのは。」
レナもやはり…引っ越してきた当初は、オヤシロさまの話は内緒にされていたんだろうか。
……オヤシロさまの話を打ち明けられて初めて、俺は仲間と認められるんだろうか。
だったら、その話を伏せられている俺は、……まだみんなに、本当の意味での仲間とは認めてもらっていないのだろうか…。
「俺はいつになったら、仲間だと認めてもらえるんだろうな。」
「え？　何て言ったの？」
「……いやごめん。独り言。」
「あははは。圭一くん、へんなの。」
レナはからからと笑ったが、それにつられて俺が笑う事はない…。
俺はふと足を止めた。そして……意を決し、それを口にした。
「なぁレナ。……みんなは俺に、嘘や隠し事なんかしてないよな…？」
「え。…してないよ。全然。」

「嘘だろ…？」

レナも足を止める。その表情は冷たく、少しだけ乾いていた。…俺の言葉がそれ以上に乾いていたからだ。

「どういう意味だろ…？　…圭一くん。」

口調だけはさっきまでの明るい、ちょっとおどけたものだった。…その乾いた言葉が自分の聞き間違いであってほしい。そう信じたいような声だった。

だが、…俺はそれが聞き間違いできないことをもう一度はっきり言う。

「してるよな。…俺に、隠し事を。」

レナはその意味を理解すると表情を強張（こわば）らせた。…その顔を見て、軽はずみなことを口にしたと後悔してしまう。…だがレナの切り返しは俺の想像とは違った。

「じゃあさ、圭一くん。……圭一くんこそ、レナたちに嘘や隠し事をしてないかな？」

「…………え。」

口調こそいつもと変わらなかったが、…レナが初めて見せる表情だった。とてもレナのそれとは思えない鋭い眼光に俺の両目は射抜かれる。

その質問は俺がしたはずの質問だった。…それから、瞬（まばた）きを三つする時間も経っていないはずなのに、……自分が質問される立場にひっくり返っているのだ。

聞きたいのはこっちだ…、そう言いたかったが、レナの眼光がその言葉を俺の喉に押し込んでしまう。
「してないかな？　嘘や隠し事。……してないかな？」
してるよね。隠し事。…レナは口にこそ出さなかったが、…そう続けていた。
確かに、…富竹さんの事件や…みんなに感じている疎外感。…自分の胸に聞くまでもなく…俺はいくつかのやましさを持っている…。
でも……富竹さんの事件をみんなに知らせないのは……気を遣っているつもりだからだ。…みんなが俺に気を遣ってオヤシロさまの話を隠すように、俺だって隠すさ…。なら…おあいこじゃないのかよ…!?
「……してないよ。…嘘も。隠し事も。」
「嘘だよ。」
即答され、俺はぎょっとする。
レナは食い入るように俺を見つめていた。その眼光は冷え切り、……あのレナがこんな眼差しができるなんて信じられなかった。
「……どうして嘘だって…、」
「圭一くん、昨日の部活の時、先生に呼ばれて職員室に行ってたって言ったよね!?　……レナ

は知っているよ。圭一くんは職員室になんか行かなかった。」
ごくりと唾を飲みこむ…。それはレナのはったりなんかじゃなく…事実だからだ。
「先生はお客さんが来たって言ったんだよね？　でも昇降口ではお話ししてなかった。校門の所の車の中で話をしてたよね。知らないおじさんと！」
「…………ぅ、」
レナは……全部知っているのだ…。俺が大石さんに呼ばれ、車中で富竹さんの話を聞かされていたことも……全部⁉
「誰、あのおじさん。」
「し、知らない人だよ…！」
「知らない人がなんで圭一くんに用があるの。」
「お、…俺が知りたいよ！」
「じゃあ何の話をしていたの！」
「みんなとは関係のない話だよ…！」
嘘だ。
「嘘だッ！！！」
レナの叫びが木々の合間を木霊（こだま）する…。それに驚いた鳥たちが慌てて羽ばたく音が静寂を破

った。
大きく吸いこんだ息が、吐き出せない。いや、息を吐き出す事すら許してくれない。
ここで俺は……初めて悟った。……俺の目の前にいるのは…竜宮レナじゃない。
…じゃあ……俺の目の前にいるのは…一体、誰なんだ？　……竜宮レナの外見をした、誰なんだ⁉
窒息するくらい長い時間、俺はそいつに文字通り息の根を止められていた……。
「ね？」
〝そいつ〟は、レナがいつも浮かべるようなにこやかさで表情を崩した。
…それはいつもの、やわらかなレナの笑顔だったにもかかわらず、………俺は凍り付いたままでいる。
レナが顔を近づけてくる。その吐息が顔にかかる。……なんのときめきもない。
近付く唇。…でも恐怖した。このレナの顔をした誰かに鼻を食い千切られると思ったからだ…。
しかし、唇は鼻先で止まってくれる。そして…そんな俺の内心を見透かしたかのように、にやぁと笑った。
「圭一くんに内緒や隠し事があるように、…レナたちにだってあるんだよ？」

レナは…いつもの笑顔で。…でも鷹のような目つきで。……互いの鼻がぶつかるくらいにまで顔を近づけ……「やさしく」、そう諭した。
俺は頷く事も、頭を横に振る事もできない。ただ…無性に……目の前の誰かが…レナに見える誰かが、怖い。
ごくり、と飲みこむ唾の音が、聞かれるんじゃないかと怖くなるほど大きく感じた。
永遠とも思える…長い空白の時間を経て、…そいつは言う。
「行こ。…だいぶ涼しくなってきたよ。」
レナだった。
レナがよく言うような、やわらかい言葉だった。
彼女はもう一度にっこりと微笑むと、まるで何事もなかったかのように踵を返し、歩き始めた。……あいつの眼差しから解放された途端に、俺の両膝がかくんと抜け、だらしなく地面につく…。
…結局、俺はあいつの後ろ姿が視界から消えるまで、指一本動かす事もできなかった。
「…あれは、……誰だったんだよ……？」
……体中に冷えた、それでいてべたべたした汗をいっぱいにかいている。
俺は喉の奥からやっと声を搾り出し、もう一度自問した。

あれは……竜宮レナの姿をした、…誰だったんだよ⁉
歪んだカセットテープで聞くようなひぐらしたちの歪んだ合唱が頭をいっぱいに満たしていく。…もちろん、それらの合唱が俺の問いに答えてくれることは決してなかった…。

興宮書房の電話

自宅にどうやって戻ってきたか記憶はない。
……ただ、ぼーっと自分の部屋の天井を眺めて横になっているだけだった。
そして、あのレナとのやり取りを思い出し、…あれが現実だったのか、幻だったのか、それすらもわからずに呆然としていた…。
俺はレナに逆上されて…恐怖していた？　…いや違う。あれはレナに似た別物だった。
じゃあ……あれは誰だったんだ？　そういう恐ろしい気持ち。
でも、あれとレナは別人なんだから、明日、レナとはいつものように話せるよな。そういう奇妙な安堵。
今は何も考えずに、頭を空っぽにすべきだという理性。…それらが頭の中でごちゃまぜになり、ずっと騒いでいるだけだった。

……ふと意識が戻り、階下の母が呼んでいるのが聞こえた。
「圭一～！　本屋さんから電話よ～。」
本屋？　電話を受けるような覚えはない。…取りあえず階下に降り、受話器を取った。
「夜分遅くに申し訳ありません。私、興宮書房の大石と申します。」
「大石さん？　…大石さんじゃないですか！」
「すみませんねぇ。ご両親が出られたので本屋さんということにしておきました。警察ですって名乗ると、いろいろ気分を害されるでしょうしね。」
大石さんなりに気を遣ってくれたつもりらしい。
それでも警察の人と話をしているところを親に見られたくない。…俺は子機に持ち替えると二階の自分の部屋へ駆け戻った。
「夜分遅くにすみませんですね。実は昨日お渡しした電話番号のメモ、あれ古い番号だったんです。本当に申し訳ない。これから申し上げる番号を控えておいてもらえますか？」
「あ、はい。……えー…どうぞ。」
職場の直通番号を教えてもらい、それを書き留める。
それだけで用件が終わりかと思ったが、下らない世間話が始まり、なかなか電話を切らせせよ

うとはしなかった。
「さてどうでしょう、前原さん。何か変わった事はありましたか？」
…なるほど。これが本題か。まわりくどい、大人的な話術にしばしば閉口する。
「大石さんは…ここの、地元の方ですか？」
「ええ、そうです。生まれも育ちも興宮ですよ。」
地元の人間なら…知っているかもしれない。
俺は、昼休みにレナと魅音が話していた気味の悪いあの会話について話してみることにする…。
「あの、大石さん。……『鬼隠し』って何の事か知ってますか？」
「ん、…それはですね、人が鬼にさらわれ忽然といなくなってしまうことなんです。この辺り独特の言い回しですね。世間様で言う、神隠しと同じ意味です。」
…神隠しと近い意味だろうとは自分も想定していたため、特別驚くような返事ではない。…でも、今の自分にはそうだとしてもこの返事は何か頼もしいものを感じさせた。
仲間から聞く事もかなわないことを、歳すら大きく離れているこのおっさんは即答してくれる。……その包み隠さない即答ぶりが少しだけ嬉しかったのだ。
「雛見沢は、……うーん、前原さんにこんなこと言っていいんでしょうか。」

「もったいぶらないで下さいよ。大石さんが言わないなら俺も何もいいませんよ！」
「あ、いやいや！　そういう意味じゃないんですよ。ただその、気を悪くされないかと思いましてね。………実はですね、雛見沢はその昔、鬼の住む里って呼ばれて恐れられていたんですよ。」
「鬼？　鬼って地獄にいる、金棒を持ったあの？」
「う〜ん、というよりは人食い鬼ですなぁ。里に降りてきて人をさらって食い散らかしてしまう、なぁんて怖ぁい昔話があるんですよ。」
この、鬼が人をさらってしまうことを本来、「鬼隠し」というらしい…。
「…祟りと鬼隠しは一緒に起こるって言ってましたけど。…どういうことですか？」
五年連続で人が怪死していることはすでに知っている。…だが、それと同時に五年連続で人が消えているという話は聞いていない。でも、レナたちは祟りと鬼隠しが必ずワンセットで起こる、というようなことを言っていた気がする。
「祟りと鬼隠しが必ず一緒に？　それは初めて聞きました。そうなんですか前原さん？」
「それは俺が聞きたいですよ。…レナと魅音が話してたんです。オヤシロさまの祟りなら必ず、祟りと鬼隠しが起こるって。」
大石さんは受話器の向こうでうなり始める。……思い当たるフシがあるのだろうか。

「前原さん。最初の事件、ご存知ですよね？　バラバラ殺人。」
「ええ。六人の犯人の内、一人はまだ逃走中なんですよね？」
「例えばそれ。……逃走中じゃなく、鬼隠しにあったんじゃないでしょうかね？」
「え!?」
……それは大石さんの、あまりに大胆な仮説だった。
四年前の事件は稀に見る凶悪な事件。犯人はすでに特定されていた。警察は顔写真入りの手配書を多量に刷った。あらゆる場所に目を光らせ、その逃走路をきつく締め上げていたはずだ。
だが…四年経った今日でも手がかりはない。……警察が無能でないなら。そんな大胆な仮説も…今は笑い飛ばせない。
バラバラ殺人の最後の犯人は、現在も逃走中なんじゃなくて、……鬼隠しで、……すでに消え去ってしまっている……？
「じゃあ、その翌年の事故はどうです？　誘致派の男と妻が一緒に事故死したんですよね？」
「実はですね。……正式には事故死したのは夫だけなんです。妻は死体が上がりませんでしたから。………現行法では死体が発見されない限り行方不明扱いなんですよ。」
事故当時、崖下の川は増水し濁流（だくりゅう）となっていたという。数十キロに及ぶ本流支流を警察のダイバーがくまなく探したが、結局、妻の死体は見つからなかった。

「でも…死体が見つからないだけで、亡くなったんですよね？　鬼隠しとは違うんじゃないですか…？」
「死体が出ない以上、亡くなったとは言えません。法律で定めた年月が過ぎるまで生存扱いなんです。」
これを鬼隠しと呼んでいいかわからない…。妻は行方不明。死体は出ていない。これだけが事実だ。
「三年目はどうなんですか？　神主は病死。妻は自殺ですよ…？」
「前原さん。実はね、これもまぁったく同じなんですよ。」
妻は雛見沢の奥にある底無し沼に身を投げたらしいのだ。……つまり、状況証拠だけ。遺書と沼の前に揃えられたぞうりだけ…。
ダイバーが沼に潜りいくつかの遺品を回収したが肝心の死体は発見できなかった。
捜査本部は擬装自殺の疑いから、重要参考人として今日も捜索中だという。
「これらを鬼隠しと呼んでいいかはちょぉっとわかりませんがね。前原さんの言う通り、確かに毎年一人、行方不明になっていると見ることもできます。」
「今年の事件では…富竹さんの連れの女の人が行方不明……。……じゃあ去年の主婦の撲殺事件はどうです？　誰か行方不明になりましたか？　…確か犯人は逮捕されたんですよね？」

「ええ逮捕されてます。覚醒剤の常習歴もあるトンチンカンでしてね。別件で取り調べ中に犯行を自供してます。…………ですがですね。犯人逮捕からしばらくして、被害者宅の子供が行方不明になったんです。犯罪に巻きこまれたのかどうなのか……。現在も捜索してます。」
「だって犯人は捕まったんですよね？　それともその仲間が!?」
「さぁ…多分単独犯だと思います。もっとも、今では確かめようもないんですよ。……実はその男、取り調べ中に、拘置所内でお亡くなりになっちゃいましてね。」
食事用の先割れスプーンを喉に詰まらせ窒息死したというのだ。自殺なのか事故なのかはよくわからなかったという。
「つまり…………過去五年間、必ず死者と行方不明者が一人ずつ出ているわけなんですよね…？」
「そうなります。……いえね、私も驚いていますよ。こんな共通項には気付きませんでした。」
これが事件解決の糸口になるとは思わない。…単なる共通項でしかない。
「……例えば…鬼隠しにあって失踪した人には…何か共通点があるとか？」
大石さんはう～んとうなり思案している様子だ。代りに俺が整理する。
「一年目はダムの作業員。二年目は誘致派の男の妻。三年目は神主の妻。四年目は被害者宅の子供で、五年目は交際相手…かな。……特につながりはなさそうだし。」

「一年目はともかく、妻とか交際相手とか、…そういう人が目立ちますなぁ。」
…確かに多いように感じた。だとすると…四年目の被害者宅の子供というのが変わっている。夫婦ごとの被害が目立つのに、ここだけ夫婦でなく、親子だ。…そう言えば…確か富竹さんも「弟本人は生きていて引っ越した」みたいなことを話してくれた気がする。
「四年目に行方不明になった子供って…どんなだったんですか？」
「大人しい感じの方でしたよ。歳はあなたのひとつ上です。名前は北条悟史さん。」
「…え、悟史…!?!?」
聞き覚えのある名前だった。…確か悟史ってのは、去年、転校して行ったたって言ってた……!?　そう、あの推理カードゲームの犯人カードに名前のあった……。
「あなたの学校に去年まで通っていました。話を聞いていませんか？」
そう言えば……転校してきて、席に案内された時、「転校した生徒の席」だと言われたような気がする…??
じゃあ……俺が座ってる席は……鬼隠しにあって……失踪した子の席なんだ!?
俺は…机の天板の、ひんやりとした手触りを思い出し、ぞっとする…。
連続怪死事件は…いや、オヤシロさまの祟りはとうとう……俺につながったのだ。
だから、あの冷たい手触りは……オヤシロさまに首筋を撫でられたような、…そんな感触な

のだ…。

「………オヤシロさまの祟り、か。」

……本当に…オヤシロさまの祟りは実在するんだろうか？

正直に白状する。…俺はオヤシロさまの祟りを信じている。そして怖い。…だからこそ、祟りなんかじゃなく、何者かの起こした陰謀であると決めつけたい。

だが…調べても調べても、それらしい気配はない。いや、むしろ調べれば調べるほどに不可解さは増していくばかりだ。

…このまま調べていくと……やがて、………本当に知ってはいけないことにまで、辿り着いてしまうかもしれない…。すでに知らなくてもいいことをいくつも知り、俺は立ち入ってはいけない深みにまでいつの間にか誘われている…。

このまま知らずに過ごすことと、後悔するかもしれない答えを求めて深入りを続けるのと。…果たしてどちらが俺にとって幸せなのだろう。…引き返すなら今なのか。それとも、それすらもう手遅れなのか。

ひょっとすると……来年の祟りは自分かもしれない。…それは一年間だけの執行猶予……？

…そこで俺は思い出す。…レナだ。レナは、次の祟りの犠牲者こそ自分だと言っていた。

「…竜宮レナさんがですか？　去年転校されて来た、前原さんのクラスメートですよね。……

女の子には刺激の強い事件ばかりです。怖がるのも無理ないんじゃないでしょうかね？」
そんなのじゃない。次こそ自分だとはっきり言った。具体的な心当たりがあるとしか思えないような言い方だった。
「…もっと確信じみたものだったように思います。……なんていうのか、その…、」
レナの怯え。レナの豹変。レナに似た、レナじゃない誰か…。
…それは関係のない話なのか。今日一日、レナに感じた違和感がぶり返す。
「そうですか…。ではこちらでも少し調べてみます。前原さんも少し竜宮さんの様子に注意してあげて下さい。」
「…それは…レナを見張れってことですか？」
「そんな意味ではありませんよ前原さん。お友達が次の被害者にならないよう、少し気にしてあげて欲しいということです。」
本当に大人的な、うまい言い回しをすると感心し、閉口しかけた時…、
ドンドン！
突然のノック音に心臓が飛びあがった。咄嗟に、意味もなく受話器を隠してしまう。
「圭一〜、ちょっとここを開けてくれ〜。」
ドアの向こうから親父の妙に機嫌の良さそうな声がした。…なんだ？　しかもこんな時間に。

「すみません、親父が来ました。…今夜はこれくらいでいいですか？」
「えぇ。夜分遅くに本当に申し訳ありませんでしたね。…何かわかりましたら教えて下さい。こちらも進展がありましたらご連絡しますよ。では失礼します。」
「圭一〜、早く開けてくれ〜。父さん、両手がふさがってるんだー。」
何やってんだ親父は…。長い時間、同じ格好で電話をしていたので、立ち上がると体の節々が痛んだ。
扉を開くと、親父が両手でお盆を持って立っていた。お盆の上には…うちじゃ貴重品のクッキーと紅茶のティーカップが二つ。角砂糖にレモンスライス付き。至れり尽せりだ。……どう見てもサービスが良過ぎる。
「な、何、父さん。……それ、何のつもりだよ??」
「もーぅ、はぐらかすなよ圭一〜。入るぞー。」
親父はにやにや笑うほどの上機嫌だ。しかし…生まれてこの方、こんなサービスをされた覚えはない。…一体、どういう風の吹き回しだ?
「…で、何の話をしてたんだ？」
ぎくりとする。……親父に隠さなければならない話ではないが、…警察の人と夜に電話しているなんて、うまく説明できない…。

「べ、別に何も…。友達だよ…！」
「電話の話じゃなくて。来てたんだろ〜今。レナちゃんが。」
……？
親父の言う言葉の意味が、よくわからない。
「…来てないよ？　っていうか、何の話…？」
「も〜、誤魔化さなくったっていいぞ〜！　さっきレナちゃんが遊びに来てたじゃないか。だいぶ話し込んでるみたいだったから、お茶でも、って思ったらすれ違いだったんだよ。」
そこまで言われてなお、親父の言っている話がよく理解できない。……なのに、俺の背中を凍るくらい冷たい汗がどろりと流れる…。
「ど、……どのくらい話し込んでたかな…？」
「レナちゃんが二階に上がったのが半くらいだったから…小一時間くらいかな？」
「二階に上がったの……父さん見たの？」
「あぁ見たよ。圭一の部屋は階段を上がって奥の扉だよって声もかけた。」
レナが一時間前に俺の家にやって来た。…親父が玄関に迎えて…二階の俺に声をかけた。
きっと、大石さんの電話に集中していて…聞こえなかったに違いない。

俺の返事はなかったが、部屋にいることはわかっていたので、親父はレナに上がってもらった。…そして俺の部屋は二階の奥だと教えた。……レナは親父にお礼を言って、階段を上がった…。そして小一時間して。…お茶を持って上がってきた親父とすれ違い、帰って行った。

階段を上がってから、小一時間。それから親父とすれ違って、帰宅。

じゃ……じゃあ、…階段を上がってから…帰るまで……レナは…どこに居たんだよ…?

俺の部屋と階段の間には……狭い廊下があるだけだ。

つまり……レナは………小一時間もの間………廊下に、…いや、…俺の部屋の前にずーっと立っていたわけだ……?

俺の部屋の扉は大して厚みがあるわけじゃない。中での話し声はほとんど素通しだろう。

……大石さんとしていた、不穏な、不用意な数々の会話が頭を過ぎる……。

「お父さん、あまりからかっちゃ駄目よ。それより、アトリエを片付けてー。またこぼすわよー。」

階下のお袋が親父を呼ぶ。親父は、残念そうに笑うとお盆を残したまま降りて行った。

親父が部屋を出て行くのを呆然と見送りながら、……レナがずっと立ち尽くしていたかもしれない、廊下の床を見る。

さっき…俺が大石さんと話していた時…背中の向こう、わずか二百センチのところに……ず

っとレナが立っていた……？

こんな薄暗い廊下に、ずっと……？　何を見て？　何を聞いて？　何の為に？

俺と、大石さんの電話を聞きながら………？

二人分のティーカップのほのかな湯気が、不吉な形にぐにゃりと歪みながら、俺の部屋いっぱいに紅茶の香りを満たしていった……。

昭和ＸＸ年Ｘ月Ｘ日

[illegible]イ１−１２号

各警察署長・[illegible]殿

ＸＸ県警察本部

本部長　ＸＸＸ

雛見沢村における事件について（通達）

最近の雛見沢村[illegible]の事件は、[illegible]も報道されているように[illegible]の日を引き地域住民の平穏な生活に重大な影響を及ぼし[illegible]すべき事態となっている。

地域住民の生活と財産を保護するため、以下の遵守を通達する。

記

（１）[illegible]捜査指定

興宮署昭和ＸＸ年第Ｘ号

雛見沢村主婦殺人事件（Ｘ月Ｘ日発生）

興宮署昭和ＸＸ年第Ｘ号

雛見沢村生徒失踪事件（Ｘ月Ｘ日発生）

（２）情報の非開示

興宮署昭和ＸＸ年第Ｘ号

雛見沢村ダム建設現場[illegible]殺人事件（Ｘ月Ｘ日発生）

白川署昭和ＸＸ年第Ｘ号

白川自然公園転落事故（Ｘ月Ｘ日発生）

興宮署昭和ＸＸ年第Ｘ号

雛見沢村神主[illegible]事件（Ｘ月Ｘ日発生）

（３）関係各機関への[illegible]

別紙資料１・２・３参照

担当　ＸＸ県警察本部

内線ＸＸＸＸ

[illegible]ＸＸ・ＸＸ

本部長通達

〈ひぐらしのなく頃に　第一話～鬼隠し編～　下巻に続く〉

本書は、２００２年発表の同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に　鬼隠し編』のシナリオをもとに著者である竜騎士07氏自らが全面改稿し、小説化したものです。

ILLUSTRATION　ともひ
BOX&BOOK DESIGN　Veia
FONT DIRECTION　紺野慎一（Toppan Printing Co., Ltd）

本文使用書体
本文：FOT-筑紫明朝 Pro L　A-OTF フォーク Pro R　A-OTF 明石 Std L
見出し：FOT-筑紫ゴシック Pro D

著者紹介

竜騎士07(りゅうきしぜろなな)

1973年生まれ。同人ゲーム作家、小説家。2002年夏、コミックマーケットで同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編』を発表。以来、夏と冬に1作ずつ『ひぐらしのなく頃に』シリーズ新作を精力的に発表し続け、まんが、アニメ、コンシューマー・ゲームなど、様々な他メディアを席捲(せっけん)する一大ムーブメントを作り出す。2007年8月、最新シリーズの『うみねこのなく頃に』を満を持して送り出す。小説の単行本化は、本作がデビュー作となる。

Illustration

ともひ

1983年生まれ。まんが家、イラストレーター。魅力的なキャラクターのみならず、奥行きのある妖(あや)しくも美しい背景を描く。竜騎士07たっての強い希望で、新人ながら、本作『ひぐらしのなく頃に』シリーズのイラストを担当することになる。ウェブサイト「古街(ふるまち)」(http://furumati.com/)を運営。

講談社BOX

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃(ころ)に　第一話～鬼隠(おにかく)し編(へん)～(上(じょう))　定価はケースに表示してあります

2007年8月1日 第1刷発行
2008年5月7日 第5刷発行

著者 ── 竜騎士07(りゅうきしぜろなな)

発行者 ─ 野間佐和子

発行所 ─ 株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号 112-8001
編集部 03-5395-4114
販売部 03-5395-5817
業務部 03-5395-3615

本文データ制作 ─ KODANSHA BOX DTP Team

印刷所 ─ 凸版印刷株式会社

製本所 ─ 株式会社若林製本工場

製函所 ─ 株式会社ナルシマ

ISBN978-4-06-283637-1　N.D.C.913　372p　19cm

KODANSHA BOX 最新刊

講談社BOXは、毎月、月初に発売！

お住まいの地域等によって発売日が変わることがございます。あらかじめご了承ください。

これぞ小説！

竜騎士07

ひぐらしのなく頃に 第一話～鬼隠し編～（上）

かつてない恐怖、そして来るべき未来の物語（ストーリーテリング）の可能性を斬新に詰め込み、あらゆるメディアを席捲したゼロ年代の記念碑的一大ムーブメント、『ひぐらしのなく頃に』の最終形態は、今ここに「小説」として結晶する——。

12ヵ月連続刊行、大河ノベル第８弾！

清涼院流水

パーフェクト・ワールド What a perfect world!

Book.8 Figure of Eight（8の字の形）

冷酷無比な「黒の陰陽師」。母親に1ヵ月で1000の英単語を記憶させられなければ、エースの「大切な人」が無作為に殺されてしまう。突きつけられた挑戦状。完全に退路を断たれたエースは、「西尾八ッ橋の少年」に希望を託すが……。

12ヵ月連続刊行、大河ノベル第８弾！

西尾維新

刀語（カタナガタリ） 第八話 微刀（ビトウ）・釵（カンザシ）

七花ととがめは、江戸の奥地に広がる人外魔境の地・不要湖に足を踏み入れる——。とがめたちを揺さぶる、監察所総監督・否定姫と、配下の元忍者・左右田右衛門左衛門の真の狙いとは——!?

批評界のトップランナー、東浩紀がヴィヴィッドに描く情報環境の輪郭——。

東浩紀

情報環境論集　東浩紀コレクションS

迫り来る"環境管理型社会"を生き抜くヒントを提示する「情報自由論」と、"情報"の誕生が生んだ新しい表現と表象とを鮮やかに解き明かす「サイバースペースはなぜそう呼ばれるか」を軸に、「情報社会を理解するためのキーワード20」を収録した必読書。

衝撃の"新伝綺"最新章第二幕！　（8月10日ごろ発売予定）

奈須きのこ

DDD2

加速する稀代の才能、奈須きのこが描き出す、石杖所在（いしづえアリカ）と迦遼海江（かりょうカイエ）の一度目の"悪魔払い"——！　物語は境界の"向こう側"へ!!

売り切れの際には、お近くの書店にてご注文ください。



ひぐらしのなく頃に

07th Expansion presents, Welcome to Hinamizawa.
WHEN THEY CRY.

竜騎士07

Illustration／ともひ

ひぐらしのなく頃に

第一話～鬼隠し編～（上）

「……圭一くんこそ、レナたちに嘘や隠し事をしてないかな？」


これぞ小説。
同人ゲームから出発し、あらゆるメディアを席巻した記念碑的一大ムーブメント『ひぐらしのなく頃に』の到達点にして新たな原点！
クリエイター！竜騎士07自らによる渾身のリライト作業を経て、〝出題編〟全七巻は講談社BOX八月刊より七ヶ月連続刊行!!
ひぐらしのなく頃に
07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa...
"WHEN THEY CRY..."
竜騎士07
Illustration／ともひ
KODANSHA BOX
©07th Expansion／Tomohi／Kodansha
定価:1029円(税込)

ISBN978-4-06-283641-8
C0093 ¥1300E (0)
9784062836418
1920093013000
定価：本体1300円(税別)
講談社

かつてない恐怖、そして来るべき未来の物語の可能性を斬新に詰め込み、あらゆるメディアを席捲したゼロ年代の記念碑的一大ムーブメント、『ひぐらしのなく頃に』の最終形態は、今ここに「小説」として結晶する——。

昭和五十八年。雛見沢村をめぐる連続怪死事件に終わりは来なかった。村人に恐れ敬われる〝オヤシロさま〟の祟り——〝鬼隠し〟——は、今年も二人の犠牲者を出す。村中に囁き囁かれる噂、事件を秘密裏に追う刑事、そして不可解な〝仲間〟の行動……。

点と点が猜疑心で結ばれた時、存在するはずのない〝何か〟が前原圭一に襲いかかる——！



これぞ小説。

『ひぐらしのなく頃に』の到達点に[illegible]な原点!

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に

第一話～鬼隠し編～(下)

竜騎士07

KODANSHA
UA-02



KODANSHA BOX

第一話～鬼隠し編～(下)

ひぐらしのなく頃に

07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa "WHEN THEY CRY."

竜騎士07

KOBANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に

第一話〜鬼隠し編〜(下)

竜騎士07

Illustration／ともひ

第一話～鬼隠し編～(下)

ひぐらしのなく頃に

07th Expansion presents, Welcome to Hinamizawa...

WHEN THEY CRY...

竜騎士07

Illustration／ともひ

KODANSHA BOX


menu
6月22日(木)

倦怠感と頭痛。目覚めは…とても悪かった。
「どうしたの。圭一。……今朝は顔色悪いわよ？　昨夜は何時に寝たの？」
お袋が俺の冴えない様子に気付いたようだった。
…昨夜、……俺は深夜に何度も目を覚ました。
それは間違いなく、気配だった。…俺の部屋の扉の前に立つ、誰かの気配。
気のせいに違いないと何度も自分に言い聞かせ、寝付こうと足掻く。
だが………それにも耐え切れなくなり、勇気を振り絞って…扉を開くのだ。……もちろん、誰もいるわけはない。
三度は繰り返したと思う。…あるいは覚えていないだけで、もっとなのか…。
こうして何事もなく、朝の食卓に着けることに安堵を覚えずにはいられなかった。
「風邪かもしれない。……なんだか食欲ないんだ。」
「…あら。…ちょっと熱あるんじゃない…？　どうする？　学校、行ける？」
学校って言っても、ほとんど自習状態なのだ。……今日一日休んだって問題はないんじゃな

いだろうか…。

ひょっとすると…ここ何日か気分が優れないのは本当に風邪のせいなのだろうか。薬でも飲んで、一日よく休めば、明日にはみんなに笑顔で挨拶できるかもしれない…。

ピンポーン…!

びくっとして玄関と時計を交互に見た。…いつものレナとの待ち合わせの時間から十分以上が過ぎている。………レナが迎えに来たのだろう。

「きっとレナちゃんね。……どうするの? 学校行くなら早く準備しないと。」

……レナはいいヤツだ。かなりズレたところはあるが可愛いヤツだと思う。弁当だってうまいし、面倒見もいいし。……それを、何で俺はこんなにも怖がらなくちゃならないんだろう……? レナは悪くない。悪いのはきっと俺の方なんだ…。

きっと風邪のせいなんだ。…きっと。

だから、早く治さなきゃいけない。…風邪が治れば、レナにだってきっと元気に挨拶ができるのだ……。

「休む。…ごめん。」

「そう。じゃあ、母さんが断ってきてあげるわね。」

お袋は玄関に出て行った。…俺の部屋に戻るためには玄関に行かなくてはならない。

レナに合わせる顔がなく…俺はソファーの上の毛布に包まると目を閉じる。
寝不足のせいもあって、俺はすぐに深い眠りに落ちて行った……。

■診療所へ

軽く横になったつもりだったが、目を覚ますともうお昼前だった。
呼んでみたが両親の気配はなく、食卓の上に昼食の準備とメモがあるのを見付けた。
親父とお袋は車で遠くまで出かけたらしい。親父の仕事の関係だろう。たまにあることで、そう珍しいことではない。
夕食までには帰るが少し遅くなるかもしれない。たんすに保険証があるから、それで病院へ行きなさい。…そう書かれていた。
メモには丁寧に病院までの地図も描かれていた。…そう。俺は行った事がないから場所もよく知らないのだ。
昼食、と言っても朝の残り物だが…、それを軽くつまむと、一応、病院へ行くことにした。
本来なら絶対にこんなところにいるはずもない、平日の日中。…ただ歩いているだけでもやましさを感じる、変な気分だった。

お袋の地図に従い、いつもは行かない道に入り、しばらく歩くと病院の看板が見えてきた。
看板には「入江診療所」とあり、何もかもが煤けている雛見沢の看板にしては割と綺麗に書かれていた。
やがて見えてくる診療所は決して大きいものではなかったが、雛見沢の規模を思えば立派過ぎるくらいだった。駐車場もしっかりあり、バス専用のスペースまである。…儲かっているのかもしれない。
待合室には数人のお年寄りがテレビを見ながら自分の順番を待っていた。
窓口に保険証を出すと、冷房の利いた涼やかな待合室で、自分の番が来るのをぼーっと待つ…。
「前原さん。診察室へどうぞ。」
やたらとおしゃべりな先生の問診に適当に答えると、定番の「風邪ですね」という言葉を返してくれた。
注射をしてお薬は三日分。…ちょっと大袈裟かなとは思ったが、昨日までの陰鬱さがこれで払拭できるなら安いものだった。
会計を済ませ、お手洗いに行ってから帰ろうとした時、いかにも常連っぽいお年寄りの会話が耳に入ってきた。もちろん気に留めるつもりはなかった。……その言葉さえなければ。

「………やっぱり鬼隠しかいね。」
「どうかね。まだまだ若い子だきゃあ。駆け落ちかも知らんね。」
「どこの誰とよ。」
「季節の度に東京モンが来ちょったろ。でっけえカメラ持った若者が。あれと仲が良きゃったって話、知らんかいね？」
……富竹さんのこと⁉　自分の耳がピンと立つのがわかった。
「そら知らんけど…。でも…普通、駆け落ちってても仁義あるだろ。書き置きとか、辞表とか書かんかいね。」
「すったらん書かんから駆け落ち言うんね。」
「…若きゃあ看護婦さんの顔、見られんようなるんは寂しいんねぇ…。」
「鷹野さんはしっかり者よ。…どこへ行ってもやって行けるん。」
鷹野さんって言うのか？　……あの、富竹さんの連れの女性は。そして…この診療所に勤めていたのか…⁉
またしてもオヤシロさまの影は、俺につながる。
しばらく耳を傾けていたが、話題が釣りの話になり戻ってくる様子がなかったので、諦めて帰ることにした。

こうして、学校という日常を離れている時ですら、俺はオヤシロさまの影を抜けることはできないのだ。
…当然か。だってオヤシロさまは守り神さまなんだからな。…ここ、雛見沢の。
雛見沢にいる限り、逃れられはしないのだ…。

お昼をご一緒にいかがです？

表を歩いたせいか、さっきまでなかった食欲が急に戻ってきた。
診察代のお釣りで菓子パンでも買って帰ろう。そう思い、知っている道を曲がった。
その時、突然、後からクラクションを鳴らされる。
…俺、車の邪魔になるくらいど真ん中を歩いているか？　もう少し路肩に寄るが、それでもクラクションを鳴らされたので、むっとして振り返った。
「前原さ〜ん。こんにちは。」
大石さんだった。エアコンをガンガンに利かせた車から身を乗り出して、大きく手を振っている。
「こんな時間にどうしたんです？　学校はお休みですか？」

「ちょ、ちょっと体調悪かったんで、今日は休みました。…お昼を買って帰ろうとしてたところです。」

「それは良かった。実は私、お昼に行こうとしてたんですよ。よかったらご一緒にいかがです？　……あぁ、お体に障る様でしたら構いませんよ。」

　どうせ帰ったって横になるだけだ。…それに本当は風邪じゃない。

「地元の食堂だと人目もあって嫌でしょう。興宮まで行きましょう。ちょっと走りますがよろしいですかな？　私、おいしいお店知ってるんですよ？」

　大石さんの遠回しな言い方が何となくわかってきた頃だった。…大石さんは多分俺に、雛見沢ではしにくい話をしようとしているのだろう。

　……本当は風邪じゃない。さっき診療所でもらった薬をいくら頬張ろうとも、頭の中に立ち込める黒い霧を払うことはできないだろう。…でも、……大石さんと話すことで、その霧を少しは晴らせるかもしれない。…そう思った。ひょっとすると、さらに霧が立ち込めることになるかもしれないとも思いながら…。

　大石さんの言うところの、ガンガンに冷やした車に乗り込む。外の日差しが嘘のように涼しかった。

　俺が助手席でシートベルトを締めたのを確認すると、車はすっと走り出した。

「昨夜は遅くまですみませんでしたね。ご家族に怒られませんでしたか?」
「いえ…。」
扉のたった一枚向こうで、ずっとその電話を聞いていたレナを、思い出す。…こうして陽光の降り注ぐ日中であっても…気味が悪かった。
町へ続く砂利道が、ガクンと大きく揺れてから舗装道路になる。
はっと思い出し、後方へ振り返る。………そう。砂利道が舗装道路に変わる境目。富竹さんが亡くなった場所だった。
「…富竹さんの捜査は暗礁に乗り上げています。」
大石さんは俺の様子を横目に見ながら口を開いた。
「自分の爪で喉を掻き破るという異常さから、幻覚作用のある何らかの薬物によるものだと信じているのですが。……こういう症状をそれも急激に引き起こす薬物は、なかなかないらしいんです。もちろん、検死解剖もそれを念頭において充分に行なったのですが…手掛かりはやはりありませんでした。」
「あの、…漫画なんかによくあるじゃないですか。体内に取り込まれると分解したりして、証拠が何も残らないなんて、そんな薬…。」
「ありますよ。塩化サクシ……なんでしたっけ…。まぁ、ええ結構あります。でもですね、富

竹さんのような症状を引き起こす薬物にはそういうものはないそうなんですよ。」

「……じゃあ…警察は富竹さんは祟りで死んだって、そう言うんですか⁉」

警察の不甲斐なさに憤慨したのではなかった。…富竹さんの怪死から、一刻も早く祟りという要素を払拭したかっただけだ。

「悔しいですが今のところは。ですが、死因はともかく、死ぬ前に何人かの人間に囲まれて暴行を受けたことだけは間違いありません。……祟りでなく、人間が事件に関わっているのは疑いようがありませんよ。」

ちょっとだけ…ほっとする。

やがて寂れた、それでも雛見沢よりは賑わった駅前に出た。レストランの駐車場に入り、大石さんの後に続いて店に入る。

賑わっているが、この時間にいるのは大人の人ばかりだ。平日の日中に子供がいるわけがない。

「二名です。タバコは我慢します。」

「こちらへどうぞ。ご注文がお決まりになりましたらお呼び下さい。」

目のやり場に困る風変わりな格好のウェイトレスさんに案内され、大石さんとボックス席に座った。

「どうです？　このお店のウェイトレスさんの格好、可愛らしいと思いません？」
「え？　まぁ…その…どうでしょうねぇ??」
「このお店ね、いっつも大人気なんですよ。お料理よりもウェイトレスさんがねぇ～。」
「はぁ。……大石さん、目がやらしいですよ。」
「んん？　そうですか？　んふふふふふふ…！」
他愛のない話をしながら定番のランチセットを突(つつ)く。…ウェイトレスさんの格好がどうとかはともかく、まぁ美味(おい)しかった方だろうか。
最後に大石さんの頼んだ食後のコーヒーが到着すると、大石さんは本題を切り出してくれた。
…そして、それが俺の一番望んでいたことでもある。
「昨日、雛見沢の昔話が出ましたよね？」
「ええ。人食い鬼の里だって言われてた、って話でしたっけ。」
「私もあんまり詳(くわ)しい方じゃないので、うちの婆(ばあ)さまに今朝(けさ)、ちょっと聞いてみたんです。」
大石さんは胸ポケットから畳(たた)んだメモを取り出した。
「何でもですね、大昔は雛見沢は『鬼ヶ淵村(おにがふちむら)』って呼ばれてたんだそうです。」
「鬼ヶ淵村…。…今とは全然違う名前だったんですね…。」
「今でもその名前、残ってるんですよ。…神主(かんぬし)の妻が入水(じゅすい)自殺した沼の名前は今でも鬼ヶ淵と

言うんです。……沼の底の底は鬼たちの住む国とつながってると言われてたんだそうです。」
もちろん、こんな薄気味悪い沼のことは誰も教えてくれなかったから、それは初耳だった。
「でですね。鬼ヶ淵村は恐れられていたと同時に崇められてもいたんだそうです。」
恐れ敬う。…一種の神聖視だったのだろうか。人でないものたちの住まう、村。
「鬼たちはある種の仙人でもあったらしいんですよ。例えば…不治の病にかかった村人を鬼ヶ淵に運んで、治してもらったりとかしたんだそうです。」
「鬼って言っても……天狗とかみたいな、仙人みたいなイメージですね。そんなに悪い人たちじゃないんでしょうか。」
「でもそこはやっぱり人食い鬼らしいんです。婆さまに聞いた昔話ではですね、息子を治療してやった代償として、連れて来た母親を食わせろ！　と、こうなるらしいんですよ。」
「…息子を治療してもらった対価が…自分ですか!?　…それは怖いな。」
「もちろん母親は息子を連れて逃げます。これをですね、鬼ヶ淵村に住む村人、つまり鬼たちがですね、全員で追いかけて取り囲んで捕まえたんだそうです。」
村人総出で、か。……それは想像するとかなり恐ろしい光景だ。
「結局、母親も息子も捕まって、食べられちゃったんだそうです。おしまい。」
「その話、矛盾がありますよ。…当事者の二人が食べられちゃったんですから、その話が残る

はずがありません。」
「ありゃ？　…なははは！　昔話はこういうの多いですよねぇ。」
大石さんは凄惨な昔話とは正反対にからからと笑いながらコーヒーをすすった。
「でもですね。…他の昔話にも結構あるらしいんですよ。鬼ヶ淵村の鬼たちが総出で獲物を捕まえに来る、というのは。」
ダム工事に抵抗したとき、村人が総出で一丸となって戦った、という魅音の言葉がふと蘇った。……その総出という部分にささやかな重なりを覚える。
「鬼たちの獲物は常に一人で、しかも前もって決められているらしいんです。」
「…決められている？」
聞き流せない部分だった。…大石さんも同じらしく、意味深な表情を浮かべている。
「婆さまが言うにはですね、『鬼の狩り』の時には絶対に邪魔をしてはいけない。家に閉じこもって布団を被ってろ、って言うんです。」
「…つまりどういうことですか？」
「獲物の人を助けたり、かくまったりしてはいけないんだそうです。鬼の狩りを邪魔しない限り、村人には危害を加えない。そういうルールなんだそうです。」
「つまり、被害者を助けるな。凶行を見て見ぬふりをしろ、…というわけですか。……ルー

ルを破ったらどうなるんです？」
「さぁ…。…なにしろ人食い鬼ですからねぇ。」
気になる部分の多い話だった。……話の内容は大石さんの言う、犯人は村ぐるみ説と一部重なるからだ。
犯人が村まるごとでなかったにせよ、数人の犯人の「狩り」を村人たちが「布団を被って見殺しにした」ことは充分に考えられる……？　口にしていて恐ろしかった。
「…じゃあ大石さんは…やっぱり村ぐるみ、もしくは村人数人の犯行だと見てるんですね…？」
「前原さんはどう思います？　…あ～、すみません。コーヒーのお代りいいですか。」
聞いているのはこっちだ。……あるいは…互いに口にしたくない最後の一言を相手に転嫁し合っているだけなのか……。
ウェイトレスさんがお代りのコーヒーを注ぐ間、互いに口を開くことはなかった。
「………去年、悟史くんが失踪した頃から私は不審に感じていたんです。」
大石さんはコーヒーカップの中のミルクの渦を見ながら呟いた。
「それで悟史くんのお友達、…つまり、前原さんのお友達グループの皆さんを、ちょっぴりだけ。…本当にちょっぴりだけですよ？　調べさせてもらったんです。」

以前、俺は仲間を疑うようなことを言った大石さんに逆上した。……だが、今度の俺はそうはならなかった。

「とてもつまらない話になります。…前原さんがつまらない、と感じたらいつでもおっしゃって下さい。終わりにしますので。」

大石さんはこれまで見せた表情の中で一番真剣になった。……俺に、覚悟を決めて聞け、と言っているのだ。

大石さんに聞かされて後悔した話はいくつもある。…だが、そのいずれの話でもここまで脅したものはない…。

心の中のもう一人の自分が警鐘を鳴らす…！　よせ圭一。これが多分、最後の……！

その声を、大きく息を吸いこんで黙らせる。………俺は真実から…逃げない。

「……お願いします。」

短くそれだけを告げた。……大石さんはしばらく沈黙し、俺の両目をじっと見、覚悟の程を確認してから切り出した。

「一年目の事件の被害者は現場の監督さんだったんですが、事件の数週間前に園崎魅音さんと取っ組み合いをしてるんですよ。何度か。」

…魅音が過激な抵抗をした、という話は以前、大石さんに聞いている。…まぁあの魅音がヒ

ートアップしたなら、想像に難くはない。

「二年目の事件で誘致派の夫婦が事故に遭いましたよね。現場にはお嬢さんも一緒にいたんです。…それが北条沙都子さんなんです。」

「え⁉　沙都子って、……沙都子⁉⁉」

大石さんは目配せで、声が大きいとたしなめる。…俺も気付き、トーンを下げる。

「三年目には神主夫婦が亡くなられますよね。そのお嬢さんが古手梨花さんです。」

「……梨花ちゃん…がッ⁉⁉」

「四年目に亡くなった主婦は、もうわかりますね。北条沙都子さんの義理の叔母です。……当時は沙都子さんはご両親を事故で失っていましたので、預けられていたのです。被害者宅に。」

唇が乾いていくのがわかる……。俺は…だらしなく開けられた口を閉じる事も忘れていた。

異常な事件だとは思いながらも…ほんの少しだけ、距離の開いた出来事だと思っていた。

……それがぱちんぱちんと音を立てながら…俺の足元の周りに組み合わさっていく…。

「ちなみに…四年目に失踪した北条悟史さんは、沙都子さんの実の兄になります。」

「え……その……あ、……ちょっと……待ってください……。」

やっとそれだけを言うのが精一杯だった。……コップのお冷を一気に飲み干し、おしぼりで改めて顔をごしごしと拭く…。冷静になれ前原圭一……！

だが大石さんは残酷だった。…俺の気持ちの整理がつくのを見届けることなく、それを告げた。一番…聞いてはいけない事を…。

「被害者たちはなぜか、あなたのお友達グループに全てつながるのです。」

「……偶然に決まってるじゃないですかッ‼」

「前原さん、静かに静かに…。みんな見てますよ…。」

「魅音が…？　沙都子が⁉　梨花ちゃんが⁉　つながるから何だってんだ⁉　俺の仲間たちが、グループが丸ごと…だって⁉⁉　そんなはずは…そんなはずは…。…そうだ、レナは違うじゃないか！　レナは今のところどの被害者とも縁がないですよ⁉」

「竜宮レナさんは昨年まで茨城の郊外にお住まいでした。まぁ確かに、いずれの被害者とも直接の面識はありませんが…。」

煮え切らない言い方だ。…何か関係があると言うのか…⁉

「実は調べてみたら、竜宮さんは引っ越しの少し前に、学校で謹慎処分を受けているんですよ。何でも、学校中のガラスを割って回ったんだとか。」

「レ、レナが⁉　学校中のガラスを割った⁉⁉」

あの…ぽやーっとした…レナが…⁉　とても想像はつかなかった。

…いや、……でも、……あの、…冷酷な鷹の目をした、あのレナなら、…そんなことをやっ

てのけるのか……。

「三日間の謹慎が明けた後も復学しなかったようです。その間に神経科に通院し、自律神経失調症と診断され、何週間かの間、投薬と医師によるカウンセリングを受けています。」

ノイローゼみたいなものだろうか。…そういうのは几帳面な人や神経質な人がかかると聞いたことがある。……それはいずれも能天気なレナのそれとは一致しないはず…。

「…でですね、そのカウンセリングをした医師のカルテにレナさんの会話内容が記載されているんですがね……。その中に、出てくるんですよ。結構。」

「何がです…？」

俺は無防備にその先を促した。……これ以上、もう後悔することなどあるものか…。

「出てくるんですよ。『オヤシロさま』って単語が。」

背筋を、冷え切った誰かの手に撫でられたような気がした…。……どうして…雛見沢に来る前のレナが…オヤシロさまなんて言うんだ…⁉

「オヤシロさまって言う、幽霊みたいなものがですね、夜な夜な自宅にやってくるって言うんですよ。枕元に立って自分を見下ろすんだ、って。」

……思考が凍り付いてしまう。……何を言われてるんだか…さっぱりわからない…。

「その後、しばらくして雛見沢に引っ越されたんです。…………あぁ、そうそう。レナさんは

よそ者なんかじゃないですよ。」
「え？」
「住民票でわかったんですが、竜宮一家は元は雛見沢の住人です。レナさんがちょうど小学校に上がるときに茨城へ引っ越されたんです。」
頭の中が真っ白な星でいっぱいになる…。…それは深夜の、放送を終了したテレビの砂嵐によく似た感じだった……。耳もキーンとしてよくわからなくなる…。
「…前原さん、大丈夫ですか？　もう終わりにしましょうか？」
その一言にはっとする。……まだ、ここで終わりにしてはいけない…！
「…レナのことはわかりました…。じゃあその……最後の被害者の富竹さんはどうなんですか？　…誰と接点があるんですか…？」
焦燥しきった俺の、最後の反撃だった。だが、それに対するこれ以上ない回答は、聞く前からわかっていたことだ…。
「全員ですよ。お忘れですか前原さん。みんなで楽しくお祭りの晩を過ごしたじゃないですか。何人もの警官が皆さんの楽しそうな様子を見ていますよ。」
…もう今更何も言い返せなかった…。……俺は頭を垂れ、沈黙する…。
「そろそろ出ましょうか。あ、前原さん、お昼の薬は飲みましたか？」

大石さんに言われるまで、今日自分が病院へ行き薬をもらったことも忘れていた…。お冷をもう一杯もらい、一気に流しこんだ後、店を出る。

車に乗り込み、再び雛見沢への悪路を戻った。

…自転車ではあまり気にならなかったが、車だとこんなにも揺れるのだろうか…？　…まるで、道路たちが何かを伝えようと死に物狂いに猛っているように感じられた。

がくん！　……その大きな揺れは、舗装道路から砂利道に変わる時の段差だ。

富竹さんの声なき叫びを、俺は確かに聞いた…。

俺は一言もしゃべらず、ただ車の揺れに身を任せてるだけだった…。

「おうちの前まで送りましょう。…今日は病気でお休みだったんですよね？　長々とお話ししてしまって申し訳ありませんでした。」

「……なんで俺に話すんですか？」

ぼそりと言い返した。…本当に、ぼそりと。返事なんか期待しなかった。

「私、一応、確認しましたよね？　お話やめましょうか、って。」

「じゃなくて！　……どうして俺に接触してきたんですか。」

…大石さんが一連の怪しい事件の関連性を調べていることはよくわかった。だけど、…なんでそれを俺に話してくれたんだ…？

25

6月22日（水）

俺は何も知らないし役にも立てない。大石さんの話はどれも初めて聞く話ばかり。……第一、引っ越してきたばかりの俺に…何がわかるってんだ。

もし……大石さんが俺に接触する理由があるとすれば…。……俺が、大石さんが怪しいと目する、魅音たちの仲間の一人だからだ。

「……私ね、今年で定年なんです。定年したら婆さまの意向で、引っ越しちゃう予定なんですよ。…だからこそ在職中に、この事件だけははっきりさせておきたかったんです。」

「…………で、……大石さんは疑ってるんですよね。みんなを。」

大石さんは特に返事をしなかった。今更、とは思ったが、大石さんなりの良心だったのかもしれない。

「これは…この道、三十年の勘です。……前原さん。危ないのはあなたなんですよ。」

「…え？」

そんなバカな、と反論しようと思ったが、すっかり意気消沈した俺にそんな気力はなかった。

「私は今年で定年ですから、来年の綿流しの日にはもういません。…だから今年中に決着をつけたいのです。」

それは暗に、来年の綿流しの日に自分はいないから、誰が犠牲者に選ばれようとも守ること

ができない。……そしてそれは俺なのだと脅しているようにも聞こえた。
「署長からも注意を受けています。…一連の事件は個々に解決しているから蒸し返すな、というのです。……これは一種の圧力です。」
「圧力って…何のですか。」
「雛見沢の誰かですよ。………着きました。この辺でいいですか?」
何時の間にか車は自宅へ続く坂道の前に来ていた。時計は二時。…食事に行ってからまだこれしか時間が経っていないことに驚いた。ただ話をしただけなのに、その疲労感からもう夕方くらいだと思っていたのに…。
車の外は暑かった。セミの喧騒も耳に痛い。
「今日の話は全て忘れてくださっても結構です。…ですが私は捜査を続けますよ。オヤシロさまの祟りは今年で終わらせます。」
「……何かあったら連絡しろってことですか?」
「いいんですよ。……前原さんが『どうしても』連絡したくなった時だけでいいんです。」
大石さんの遠回しの言い方を理解できるほど、今の俺は冷静ではなかった。…近い内に、俺が「どうしても」連絡したくなる何かが起こる。そう言っているようにはっきり聞こえた。
「ゆっくり休んでください。…病気でお休みの時に、よくない話ばかりして申し訳ありません

でしたね。」
もう、特に相槌は打たなかった。
「私はいつでもあなたの味方です。…それだけは信じといて下さいよ。それじゃ失礼します。」
車は砂利道の上をがりがり言わせてUターンすると、砂塵の中に消えて行った。
それは、鮫の潜む海に浮き輪ひとつで放り出し、ブイの向こうに消えて行くボートのようにも見えた。……俺は初めて、大石さんを卑怯な人だと思った。
次の被害者にそれを教えた上で、何かあったら自分を呼べと言う。…こんなのは警察の捜査じゃない。こんなの、ただの魚釣りと同じだ。……俺はただの撒き餌に過ぎないのだ。
釣れる魚は犯人なのか。それとも本当にオヤシロさまの祟りなのか。……どちらにせよ、俺という餌は魚のお腹の中だ…。
「……畜生……俺、…死にたくないよ…。」
しばらくの間、大石さんの車のエアコンが作った水溜りを見ていることしかできなかった……。

■レナと魅音のお見舞い

横になってどのくらいたっただろう。外は暗くなりかけていた。
帰宅してから、ますます頭の中がぐちゃぐちゃになり、俺は二階の自分の部屋でぼーっと横になっていた。
体は汗でぐっしょりだった。……シャワーでも浴びれば、汗と一緒にこの嫌な気分は洗い流せるのだろうか。
その時、階下の電話が鳴った。多分、お袋じゃないだろうか。
お袋は結構心配性だからな。病院の診察はどうだったのかなんて聞いてくるのだろう。……ひょっとすると気付かなかっただけで、もう何度目かの電話かもしれない…。
「もしもし前原ですけど。」
「お、生きてた！　もしもし！　魅音だけど。具合はどう～？」
「ん、圭一のお友達ですか？　圭一は休んでますけど。代わりましょうか？」
「へ!?　あ、お、お父様で??　あはははは、すす、すみません!!」
「わっはははははははは!!　ばかで～！　引っ掛かってやがるよ！」

「え⁉　け、圭ちゃぁあぁあぁあぁあぁん！！！」
いつものノリの応酬に、互いにしばし笑い合った。
……だが、笑い合いながら、疑ってしまう…。……みんなは…本当に事件と関係あるんだろうか…？　……ない、とそう言い切れない自分が悲しかった。
「元気そうで安心したよ。レナもすごく心配してたよ？　沙都子はざまぁないですわ！　って喜んでたな。梨花ちゃんは病気でかわいそかわいそです、ってさ！」
「ちぇ、みんなで勝手に大盛り上がりしてたみたいだなぁ！」
「まぁまぁ。でさ圭ちゃん。お見舞いに行っちゃ都合悪いかな？」
「お見舞い？　いいよ、そんな。重病人ってわけじゃないんだから。」
「うちの婆っちゃが山ほどおはぎを作ってさ。お裾分けに持ってけって言ってんだよ。だから持ってくね！」
「…おいおい、風邪が移っても知らねぇぞ。」
「おじさんもレナもおバカさんだから大丈夫！　じゃね！　すぐ行くから！」
電話は威勢良く切れた。レナも来るのか？　そんな言い方だったな。
……レナに会うのはまだちょっと気になったが、魅音と一緒ならと何も怖いことはないのだろうか…。

落ち着きなくそわそわしている内に、玄関のチャイムが鳴った。

「どんなカンジ？　ちゃんと薬飲んで寝てた〜？」

「そりゃもうしっかりとな。」

「げ、元気そうで良かった。心配してたんだよ…。」

「悪かったな。…明日にはもう大丈夫だよ。」

全然病み上がりを気遣わない魅音と、心底から心配そうな顔をしているレナ。……その表情に裏はないように見えた。

こうして話をしていると、自分がさっきまで考え込んでいたことは全て下らないことだったんではないかとも思えてくるような気がする…。……だが、そう思うと同時に、それでもなお払拭できない感情があることも否定できなかった。

「……ちょっとお邪魔しようかと思ったけど、まだ本調子じゃないみたいだねぇ。」

「ん、そ、そうか⁉」

俺の表情が陰るのを見られたようだった。

「…じゃこれ、圭一くん。…魅ぃちゃんのおばあちゃんが作ってくれたおはぎだよ。」

レナが新聞紙で包んだそれを差し出す。五つくらいは入っているのかもしれない。…ずっし

りとした重さがある。家族で食べてくださいということだろうか。
「あ、サンキューな。…作ってくれた魅音のばあちゃんによろしく伝えといてくれよ。」
「うん。あ、その中にね、レナが作ったのも混じってるんだよ！　圭一くんに見つけられるかなぁ…。」
「これ、今日の部活を欠席した圭ちゃんへの宿題ね！　おはぎにアルファベットがついてるから明日回答すること！」
「お、お見舞いなのか部活なのかどっちかにしろーッ！！！」
「うんうん、元気元気。これなら明日は大丈夫そうだね～。」
「この騒ぎで熱がぶり返したらどうしてくれんだよ、まったく。」
「み、魅ぃちゃん、あんまり騒いじゃ悪いよ…。もう行こ。おうちの人にも怒られるよ。」
…二人は両親がいると思っているらしかった。うちの玄関は靴が乱雑だからな。
「そうだね、もう行こっかね。………あ、そうそう圭ちゃん。」
「なんだよ。」
「お昼、何食べた？」
ぴくっと反応し、魅音を見上げてぎょっとした。……これまでに見た事のない、…薄気味悪

い顔だったからだ。魅音の顔にこんな表情が浮かぶなんて信じられなかった。その、浮かぶはずのない表情を見る恐怖を、俺はつい昨日、レナで体験してしまっている。

だから、……昨日とまったく同じあの感触が脳髄を昇ってくるのがわかる。家の外で鳴いているはずのひぐらしの合唱が歪みながら一際大きくなり、俺の中の世界を満たしてくるのがわかる…。

しかし…なぜ…俺に今日のお昼の話を聞くんだよ……!?

魅音の言葉は不気味なくらい空虚だった。…俺が何を食べたかなんて始めから興味ないような、そんな言い方だったからだ。本当に聞きたいことはそれじゃないというのが明白だった…。

「お、表で食べたよ…。」

……大石さんと一緒だったことを勘繰られているんだろうか……。とにかくはぐらかしても躊躇しても深読みされると思い…俺はなるべく早く、さりげなく返事をしたつもりだった。

だが……俺のそんな努力とは裏腹に、二人の返事には間があった。まるで、その返事をどういうつもりで言っているのか、吟味しているように見えた。

「…ふ〜ん、圭一くん、お昼は外食だったんだね。」

レナもいつの間にか瞳の輝きを変えていた。それは昨日の、レナに似ていてレナじゃないあの、恐ろしい眼差し。……それはギラギラとして、…一層、言葉に白々しさを感じさせた。

……自身はすでに知っていながら、無知を装っている…そうにしか見えなかった。

「どう？　おいしかった？」

「…な、なんでそんな事を聞くんだよ……。」

魅音のオクターブは変に低かった。…まるでそれは……俺が…町のレストランで食事したことを…知っているかのような……。いや……考え過ぎだ。…だって…お昼の時間には二人とも学校にいたはずなんだ。……俺の所在を知るはずはない……。

「渋いおじさまとご一緒だったみたいだけど、……誰？」

どさり。

…俺の手からおはぎの包みが滑り落ちる。自分の顔から血の気が、音を立てながら引いて行くのがわかった。

「…へぇ。圭一くん、それ誰？　…ひょっとしてこの間の車の中の人かな？　………かな？」

舌の根までカラカラに乾いていく…。もはや……はったりですらない。……こいつらは……全て知っているのだ……!?

「な、………なんで………そんな事……わかるんだよ……？」

やっと、それだけを喉から搾り出すのが精一杯だった。…膝が、かくんかくんと鳴り出す…。

「………さぁてね。…おじさんにわからないことはないからね。」
…魅音は意味深ににやりと、…糸を引くように笑った。
「で、圭ちゃん、何のお話をしてたの？　ずいぶんと熱くなってたみたいだけど…？」
「み、みんなの話はしてないよ…！　魅音ともレナとも関係ない…！」
「ふぅん？　…聞いてもないのにレナたちの名前が出るなんて、なんだか怪しいなぁ？」
レナはねっとりとした目線で、俺の瞳のさらに奥をうかがっていた。
墓穴だ。こいつらには何も言ってはいけない…、こいつらは俺が言う前から答えを知っていて、俺が素直にそれを白状するかを計っているだけなのだ…。
「ま、何を隠れてやろうとも、おじさんには全てお見通しってこと。…それだけを忘れないでくれればいいかなぁ。」
「……………………。」
頭を縦にも横にも振ることができない。…奥歯ががちがち鳴りそうになるのを必死に押しとどめるのが精一杯だ…。
魅音は小首を優雅に傾げるような仕草をしながらも、決して俺の目をその眼差しから解放しようとはしなかった。
「…圭一くん、顔色悪いよ？　もう横になった方がいいと思うな。」

「そうだね。私たちはもう帰ろ。」
二人はまるで何事もなかったかのように笑い合い、玄関を後にしようとした。その表情が、取って付けたかのようなのにあまりにいつもの彼女らの表情で恐ろしい…。
俺はさっき、おはぎの包みを落とした格好のまま、指一本動かすこともできないでいる。
二人が扉を出、…その扉が…ゆっくりと閉じていく。……俺はそれをじっと見ているしかない。…まるで、扉が閉まりきるまで動いてはいけないかのように。
その閉じかけた扉がぐいっ！　と開けられ、俺の心臓がもう一度跳ね上がった。
扉の隙間から片目だけを覗かせて、再び魅音の鷹の目が俺を貫いた。
「じゃあね圭ちゃん。」
「…あ、…あぁ…。」
「………明日、学校休んじゃ〝嫌だよ〟？」

ばたん。
……扉が閉まった。二人の低い笑い声が遠ざかり、静寂が戻ってきても、俺は指一本動かすことはできずにいる……。
我に返り、俺が最初にしたことは扉にカギをかけることだった。

どうして魅音たちは…俺が大石さんと話していたことを知っている…⁉

どうして…⁉　どうやって⁉　いや、…そんなことはどうでもよかった。…知られた、ということだけが事実なのだ。

今にして思えば……大石さんが俺を訪ねてきたその最初から…話は全て筒抜けだったのかもしれない。……魅音の言う通り…俺には何も隠し事などできはしないのだ…！

じゃあ……魅音たちは…俺に何が言いたいんだ…？

…そんなのは決まってる。…俺に〝余計な話〟はするな、と釘を刺しているのだ。

余計な話って何だ…？　俺が大石さんとしている話はひとつしかない。……そしてそれが余計だと警告しているのだ。

大石さんが俺にしている話。……それは毎年起こるオヤシロさまの祟りは個々の事件でなく、全て関連した事件であり、……しかもそれは複数犯で雛見沢に潜伏しているかもしれない、というものだ。

いや…もっと踏み込んで言った。…魅音がレナが、沙都子が梨花ちゃんが怪しいと名指しで言ったのだ。

それに対しての警告だというなら……？

「な…、なに馬鹿なこと考えてんだよ……俺ッ‼」

ぱしーん！　と大きな音が立つくらい大きく、自分の頬を打った。……それで悪い夢が覚めればと思ったが…なぜか布団を叩いたような手応えしかなく…虚しいくらい痛くない。冷静になれ前原圭一…！　俺はいつからこんなネガティブなことしか考えない男になったんだ!?　冷静になれ冷静になれ！　落ち着いてよく整理するんだ…！

魅音が、俺が大石さんと昼飯を食っていたのを知ってたのは……きっとあのお店に雛見沢の人がたまたま来ていたんだろう。それで魅音に俺が来ていたことを伝えたに違いない…。

そう思えば一番自然だ。それに…よくよく考えれば……魅音は俺がどこで昼飯を食ったかしか聞いてないぞ？　…それでおいしかった？　って聞いただけだ…！　たまたま俺と同席したのが雛見沢の人間じゃなかったから興味を覚えられただけで……別に…他意なんかないのかもしれない…。そうだ、そうに違いない…！

今にして思えば、レナの時もそうだ。俺が大石さんに会ったことを変に濁したので、レナに正されただけなんだ。それを俺が、いつものおっとりしたレナとのギャップに面食らってしまい……驚いてしまっただけなんだ…。そう考えるのが一番自然だ…！

……頭の中がぐちゃぐちゃのスパゲッティになったような気分だ。…こうして頭をぎゅっと押さえていたなら、耳や鼻から真っ赤なミートソースがはみ出てくるかもしれない。そのミー

トソースは血のように真っ赤で、頭の中身をすり潰した挽き肉が混じって…、
そう思ったら、急に吐き気と頭痛を感じた。……本当にそうなったらいやだったので、俺は頭を抱えるのをやめる…。
誰が何を言っているのか、最近、全然わからない…。
みんなと一緒にいる時は楽しい。表裏なんか感じない。みんな…本当にいいヤツらだと思う…。引っ越して来て、右も左もわからない俺に本当に親切にしてくれた。
レナは本当に親切な、面倒見のいいヤツだ。変な病気さえ出さなければ本当に可愛いヤツなんだ。魅音も最高にいいヤツ。歳や性別を気にせず、ポジティブでアクティブ。あいつと一緒だと退屈しない。…退屈しないなら、賑やかな沙都子だっていいヤツだ。いろいろ生意気だが、それがあいつのコミュニケーションなんだよ。…梨花ちゃんだってそうさ。口数は少ないけど、多彩なコミュニケーションを持っていていつも楽しくさせてくれる。…そうさ、みんな仲間さ!!
…だが…富竹さんや大石さんに、知らなくてもいい雛見沢の秘密を……オヤシロさまの祟りの話を聞かされた頃から……おかしくなり始めた。
そして大石さんから…みんなが、…魅音がレナが沙都子が梨花ちゃんが怪しいと聞かされた。
……そして……みんなが変わってしまった。

…そうだ。大石さんが変な話を始めてからだんだんとおかしくなり始めたんだ…！　……やっぱりあの時……変な話なんかきっぱり聞かなければよかったんだ。……それならそもそもあの綿流しの晩、富竹さんに過去の事件の話を聞いたことからいけなかったんだろう…。……俺が変な好奇心さえ出さなければ………出さなければ………。

そうだ…。だからみんなは富竹さんを＊したんだ。みんながせっかく俺のために隠してくれていることを、よそ者の分際で俺なんかにしゃべったから。

じゃあ大石さんだって＊されるだろう。みんながこんなにも知らないほうがいいと忠告してくれることを掘り返そうとしている。それに…俺にみんなを疑わせるようなことを吹き込んだ許せない男だ。…あんなヤツ＊されて当たり前なんだ…！！！

富竹さんも大石さんも所詮はよそ者なんだ。雛見沢の人間とは相容れない存在なんだよ。そんなヤツらこそオヤシロさまの祟りにあって＊されるべきなんだ!!

みんなは悪くない。…悪いのは好奇心を抑えきれなかった俺の方なんだ。みんなは悪くない。みんなは悪くない。みんなは悪くないみんなは悪くないみんなは悪くない…。

ぼーっとした…寝起きのような鈍い感覚だったが、さっきまであった嫌な悪寒は薄れていた。

……もう大丈夫。…もう怖くない。…もう完全復活。ようやく俺は悪い夢から覚めたんだ………。

明日は元気に学校行こう。みんなに挨拶。部活もやろう。きっと楽しい。絶対楽しい。……俺はみんなの仲間なんだから。

「…あ、そうだ。おはぎ食べないと…。どれがレナの手作りか、当てないといけないんだよな。」

さっき二人が持ってきたお見舞いの宿題を思い出す。…しかし、部活練習がデリバリーされるなんて、うちの部ってすごいよな。

床に落ちたままになっていたおはぎの包みを拾い上げ、居間へ持って行った。

せっかくだからお茶を飲みながらの方がいいかもしれない。…お茶を飲みながら頬張る手作りおはぎ。……お。結構うまそうなシチュエーションだぞ。

新聞紙の包装を開くと、中にはこぢんまりとした、それでいてずっしりとしたこし餡のおはぎが五つ。新聞紙には左端のものから順にA、B、C…とアルファベットが書きこまれている。

さて。この中のひとつがレナの手作りだと言うが……どれだろう?

見た目はどれも大差ない。匂いも雰囲気もほとんど同じだ。……これは…手応え充分な問題だぞ!?

一番差が出るとしたら…おそらく形だろう。魅音のおばあちゃんがどんな人なのかはわからないが、レナのそれとは絶対に違うはず…!

よく見ると中にひとつだけ、とても丁寧に作ったおはぎがあった。じっと見ればすぐわかるくらいに。

「……この一個がレナか否かが、勝負の分れ目みたいだな。」

さらに頭を落ちつけて良く考える…！

…このおはぎ、魅音は確か、おばあちゃんが山ほど作ったのでお裾分けって言ったよな。…ってことはつまり、この中の四つはその山ほどの中の四つのわけだ。

対してレナはどうか？　多分…これ一個しか作ってないだろう。だからその一個に手間を惜しまないに違いない。……つまり一番丁寧に作ってあるということ。…なら、レナの手作りおはぎはこの…Ｅだ!!

一瞬、それを見越した魅音のワナではないかとも思ったが、それはないだろう。…魅音が作ったならいざ知れず、レナが作ったと言ったのだからそういう引っ掛けはないはずなのだ。

「よし。お茶も準備ＯＫ。まずはディフェンディングチャンピオンの魅音のばあちゃんからだ。……どれ。」

ふむ。…悪くない。こし餡の滑らかさと充分な食べ応えの両立は侮り難し!!　その後にすするお茶も引きたてている。…これは…素晴らしい仕事だぞ！

さて、レナの方はどうかな？　高級和菓子を思わせる繊細な作り。食べ盛りの俺としてはボ

リュームに若干の不安を感じるが……。まずは一口……。
……これは…難しいジャッジになりそうだぞ⁉　使っている材料はまったく同じなのだから味に大差はない。違うのは最後の握りの部分だけなんだから、そりゃそうだ。
となると勝負は芸術点と…ボリュームが分ける事になるだろう。しっかりとした食べ応えのチャンピオンに、きめ細かな丁寧さのチャレンジャーレナ！
まだレナのは一口しか食べていない。取りあえず食べ終わってからのジャッジにすべきだろう。……ひょっとすると…何か逆転になるようなすごい仕掛けが隠されているかもしれないいんだからな…！
「もぐもぐ。……………ん、」
俺の予想は的中したようだ。俺の舌が何かに触る。食べるものとは少し違うようだったので、取りあえずそれを指につまんで取り出してみた。
……………………これは。…なんだ？
それが何かを頭が理解する前に、俺は食べかけのおはぎごと、それを力いっぱい投げ付ける。壁に叩きつけられ、餡が飛び散った。そして、一心拍置いてからぽろりと剝がれて床に落ちる。
…呆然とする自分。

何やってるんだ、俺は…⁉　せっかくのレナの手作りに…何て事をッ⁉
呆然と、凶行に及んだ俺の手を見、そして…口の中から取り出したそれが何だったのかを思い出す……。
それは始め、髪の毛かと思った。だけど、魅音より短いレナにしたって髪の長さは結構ある。あんなに短くはないはずだ。
それに、髪の毛というにはちょっと硬かった。舌の上でちょっと転がすだけの太さもあった。
…ちょっと銀の輝きがあり、…一方の端には、そう、裁縫針のような、糸を通すような穴が空いていて……。
うん、そうだ…。裁縫針によく似ていた。…そっくりだった。…先端も尖っていた。かなり鋭く。…本当に裁縫針にそっくりだった。
あれ？　……さっきのあれは……　〝裁縫針によく似た〟、何だったんだ……？
………答えなんか出ない。だが、俺の中にいるもうひとりの俺にはわかったらしく、…それを奥歯をがちがちと鳴らせて教えてくれた。
…湧き上がってくる恐怖を打ち消せない…。急に鉄の味がし、舌の奥がぴりぴりと痛くなる。
…出血を確かめるため、指を口の奥へ突っ込み、ぺたぺたと触ってみた。……突如こみ上げて来る嘔吐感。ひりひりする味の胃液が喉の奥を刺激する。

両の手で喉をぐっと押さえ、しばし悶え苦しむと…嘔吐感はなんとか収まった。
ようやく正常に息ができるようになると、今度は心臓が早鐘のようにばくばく言い始める。
………そして、ようやくこっち側の俺も理解する。おはぎに何が混じっていたのかを。
その単語を脳裏に浮かべるより手が動く方が早かった。
どしゃッ！　びたッ!!　べしゃッ！！！
俺は残ったおはぎを次々と壁へ叩き付けた。飛び散った餡の描く幾何学的模様がどこか不吉なものを想像させる…。それから目を背けると、俺は廊下に飛び出し、階段をどかどかと駆け上がり自室へ、朝のままになっている布団の中へ飛び込んだ。
そして自らの肩を抱き、恐怖と悔しさと怒りと悲しみでぐちゃぐちゃになりながら吠え猛った…。
これは脅しとか脅迫とか釘を刺すとかそんな生易しいものじゃなくて……ッ！！！
雛見沢で何が起こってきたのか。何が起こっているのか。何が起ころうとしているのか。…
そんなのはどれもわからないし、大事なことでもなかった。
一体、どこで禁忌に触れてしまったのか!?　とにかく俺は…レナや魅音や…あるいは他にも？　敵を作ってしまっている!?　そしてそいつらは…俺なんか死んでしまえと思っている!?
殺されてたまるかよ!!　こんな、…わけもわからずに！！！

様々な負の感情はまるで渦巻く底無し沼のように、俺を安らかでない眠りへと引きずりこんで行った………。

■自殺を誘発するクスリは？

「単刀直入に…自殺させる薬ってないんですか？」
「直接的にはない。」
大石を未だ悩ませているのは、富竹ジロウの不可解な死因だった。
自分の首を自分で掻き毟って死ぬなんて常軌を逸している。なら、そうさせるために誘導する薬物があったのではないかと疑うのは当然のことだった。
だから、それをもっともシンプルな形で鑑識課の最古参に問い掛けてみた。その返事は非常にシンプルだったが、深読みのできるものでもあった。
「遠回しですねぇ。…では間接的にはあるってことですか？」
「自殺したくなる精神状態を誘発することはできる、っちゅうことだ。」
「…難しい言い方になりましたねぇ。何ですかその、自殺したくなる精神状態っては。」
「例えば重度の躁鬱病患者だが、一般に鬱状態から躁状態に転じる時にもっとも自殺が多いと言われちょる。」

躁鬱病というのは鬱病とは異なる。

鬱病は鬱状態という非常にネガティブな精神状態のみを引き起こすが、躁鬱病は、このネガティブな鬱状態と交互に、非常にアクティブな躁状態を引き起こす。

「鬱状態の患者は自信を喪失し非常に悲観的だ。だが自殺もせん。自殺をする気力すらないからだ。…躁の状態もまた自殺をせん。今度は逆に、非常に自信過剰で行動的なので、自らを順風満帆と思う。だから自殺などせんのだ。」

「…面白いですねぇ。どっちの状態でも自殺をしないのに、状態が入れ替わる時に自殺するんですか。」

「鬱状態には自殺願望はあるが、自殺という大仕事を遂げる気力すらもない。だが躁状態が始まると徐々に気力が充実し、体の自由が利くようになってくる。つまり鬱状態から躁状態に移る時、一瞬、自殺願望を残したまま行動的になる危険な時期があるわけだ。」

「なぁるほど！　つまり自殺する気力が回復するわけですね。」

「そういうことじゃの。だからこの時期に変な気を起こさんように、向精神薬をたっぷりと処方するわけじゃな。」

「…では富竹氏はこの躁鬱病患者だったたんですかねぇ？」

「躁鬱病患者の自殺はちゃんとした文化的な自殺だ。飛び降りとか首吊りとか。ヤクの禁断症状のような自虐行動とはまったく違うぞい！」

「富竹氏の自殺は文化的じゃないですよねぇ。……ではやっぱり薬物中毒による錯乱と考えるのが自然ですか。最初に言った、自殺したくなる精神状態を起こす薬ってのを教えてください。」

「メトアンフェタミン中毒は躁鬱病に近い症状を起こすと報告されとる。覚醒剤のことだ。……それからバルビツール酸誘導体中毒にも異常行為が報告されとるがあまり一般的ではないのう。こっちは睡眠薬のことだ。」

「覚醒剤反応、出なかったんですよねぇ。…他の可能性は？」

「既知でない未知の薬物の可能性も否定できん。ソ連の暗殺機関が使う毒薬やら、中国伝来の暗殺薬などの類は既存の検査方法では検出できんと言われておる。そうでなくとも、漢方系や生薬系は検出が困難と言われちょる。わしらの業界では倫理上秘密にされとるが、一般でも簡単に入手できて致死性が高くてそれでいて容易には検出できん毒物などいくらでもあるぞい。」

「なっはっは、そりゃあ物騒な話です。」

「それらの話を抜きにすれば、あとは病気しか考えられん。バセドー病等の甲状腺異

常を引き起こす病気にしばしば躁鬱病に似た症状が報告されとる。だがバセドー病は特徴的な症状が多い。仏は違うの。」

「もっと突発的に発生するものはありませんかねぇ。今回のケースと合うような、突発性で自殺したくなるようなヤツです。」

「急性器質性精神病、っちゅうのを知っとるかの？　早い話が、脳障害によって精神が異常になる状態じゃな。これは薬物中毒でも起こるが、脳の外傷や脳炎、脳卒中、脳腫瘍なんかでも起こる。」

「つまり、薬によらなくても異常な精神状態に陥る可能性があると。」

「仏は犯人に囲まれて命に危険が迫っとったんじゃろ？　極度の緊張が続いて、それに分泌異常が重なって、さらに打ち所が悪くて脳に障害が起こり自虐行動に走った…可能性もあるかもしれんの。」

「…………もうちょっと省略して言ってくれませんかねぇ…。」

「かっかっか！　つまり、乱闘中に豆腐の角に頭ぶつけて、それで異常になったんじゃないかと言っとるんだ。」

「なっはっはっはっはっは！！！　じゃあホシには殺意はなかったってことですかねぇ。ちょいと小銭を巻き上げようと殴ったら、たまたま殴り所が悪かったと！」

二人はげらげらと下品に笑い合う。…そんなことはありえないと充分わかった上でだが。

「………なんてわけはありませんねぇ。」

「こほん。…いかにも。」

「薬物の常用にせよ、精神的なものにせよ、仏の身元がカギを握っとるぞい。そっちはどうなっとるんじゃ？」

「ありゃぁこんな時間！　そろそろ戻らないと熊ちゃん、怒っちゃいますねぇ。」

「おう！　頑張れよ！　いいお年をの！」

「いいお年を！」

鑑識の老人もそれ以上を追及しない。…長い付き合いで、それが答えに窮した時の大石の逃げ口上だと知っていたからだ。

富竹事件の捜査は、まったく進展していないようだった。

４　圧力

「……おんやぁ？　今の皆さんは確か…。」

大石と、後輩刑事の熊谷は午前の仕事を切り上げ、署に戻ってきたところだった。その時、受付ロビーに他の来客と一際雰囲気の違う人物の姿を見たのだった。
「議員バッジが二人いたっすね。」
「じゃー、県議と市議の園崎だ。」
「面白いっすね。親戚同士で県議と市議やってんすか。」
「これがズルイんですよ。お互いが同じ苗字なのをいいことに事前運動バンバン。片方の選挙中にはもう片方が別に講演会を開いて、二重に選挙運動やってんですよ。堂々と。」
「よくわかんないんすけど、それって公選法違反じゃないんすか?」
「事前運動にならない限り、政治活動は無制限ですからねぇ。…熊ちゃん、そんなんじゃ選対本部付きになった時、大変ですよぅ?　公選法くらいは勉強して下さい。」
「俺、知能犯課は無理っす…。あそこの連中は本当に尊敬しますよ…。」
「いたのは園崎県議と園崎市議。それから…雛見沢の公由村長もいたな。……どいつもこいつも園崎家の息のかかった連中か。…面白くないですねぇ。」
「お見送りしてんのは…副署長とうちの課長っすね。」
大石はピーンと来る。

その日の夜、一杯飲みに行かないかと課長に誘われた時、やっぱりなぁと思った。

「大石さんは友達多いから聞いてるかもしれないけど……聞いてるかな？」

「いいえ。何も。」

「お母さん、ガンモにはんぺん頼みます。……署長んとこに議員の怒鳴り込みがあったんだよ。」

「あれま。そうなんですか。…お母さん、私にもう一杯下さい。」

園崎は県議も市議も恫喝タイプだ。あんなヤクザと政治家のぎりぎりみたいなのに怒鳴りつけられたら、キャリアのハナタレ若署長にはキツイだろう。

「雛見沢事件の捜査の仕方で、君を指名して陳情してきたよ。」

「ありゃ私？　はてはて。」

「とぼけるなよ。例の雛見沢の、過去の事件。蒸し返してるだろ。」

「私、富竹殺しで手一杯でそんな余裕ないですよ？　なっはっはっは！」

「本当に？　本当にそうならいいんだけどさ…。」

しばしの沈黙。お互い黙ってもくもくと箸を進めビールを飲み干す。

「いやぁご馳走になっちゃいました。今月は負けっぱなしだったんで財布辛かったんで

すよ。助かりました。」
「いやいいよ。また馬、教えてよ。大石さんと同じ馬を買うから。」
「なっはっはっは！　最近はダメです。馬の声がさっぱりですから！　…タクシー！！！」
私は電車。課長にはタクシーを呼ぶ。公務員の飲酒運転ってのはいつの世も揉める。退職前にして飲酒運転でパーってわけには行かないのだ。
舌はよく回っても、課長の腰から下はもうすっかり砕けている様子だった。タクシーに押し込み、課長の自宅の住所を伝える。
「ではではまた明日。よいお年を…！」
「大石さん。」
「はいはい。」
「過去の事件は全部個別に終わってる。縦に並べるのはやめるんだよ。村の連中は半ば本気で祟りを信じてるんだから。」
「私だって祟りなんか信じちゃいませんよ。」
「大石さんは来年で退職じゃないですか。退職金でローン返して、お母さんと北海道に引っ越すんじゃなかったっけ？」

「婆さまがどうしても生まれの北海道に帰りたいって泣くんですよ…。最後のご奉公なんです。退職金は、まぁススキノで楽しむことにします。なっはっはっは‼」

「署長は退職時特別昇給を見直すかもってさ。」

公務員の退職金は、退職時の月給を掛け算して算出する。

そこで、退職直前に特別昇格で二号給（二年分）給料を昇給させることによって、退職金を水増しするなんてことが、この辺の地方では慣習で行なわれている。もらう側には嬉しいことだが、もちろんあまり褒められた慣習ではない…。ちなみに二号給違うと退職金の額はかなり違う。

「さすがインテリの若署長は言い出すことが模範的です。…でもまぁ。私たちの給料が血税で支払われてることを思えば、まぁ時代の流れですかねぇ。」

本当はすごく笑えないのだが、取りあえず笑い飛ばしておく。

「僕も模範的な事とは思わないよ。でもまぁ、大石さんはそれだけの退職金をもらってもおかしくない活躍をしてきたからさ。僕としてはぜひもらって欲しいんだよ。」

「運転手さん、引き止めてすみませんね。お願いします。」

威勢良くドアを閉め、課長の会話を少し乱暴に遮る。課長はまだ何か言いたげだったが、苦笑すると手を振った。こちらも手を振って応える。

タクシーは徐々に加速し、すぐに光の川に飲み込まれていった。
「なっはっはっは！　……まいったな。ローン返済できるかなぁ…。」
強気に苦笑いをする大石だったが、胸中は苦々しく、その不愉快さを払拭するためにもう一度のれんを潜らなければならなかった…。


6月23日(木)

…ひた、…ひた、…ひた…。

その押し殺したような足音は俺の部屋の前で止まった。中をうかがうような…沈黙の間。

…俺は事もあろうか、まだ浅いまどろみの中にいた。意識は徐々に鮮明（せんめい）になっていくが、体がそれについていかない。…危機がすぐそこ、扉のたった一枚向こうでうかがっているのに…まるで金縛（かなしば）りにでもあったように動かせない。……それは紛（まぎ）れもない、恐怖だった。

頼む……このまま去ってくれ…。ああ、体はまだ目覚めないのか？　今、部屋に踏（ふ）み込まれたら……!!

「うわぁあぁあぁあぁあぁあぁあッ！！！！」

「きゃあッ⁉」

威勢良く跳ね起き、その布団を扉を開けたお袋に投げ付ける!!

「ちょッ！　何、圭一⁉　どうしたの？」

「あ………あ、…ごめん。…寝ぼけてた…。」

「もう、しっかりなさい？　お顔を洗ってらっしゃい。」

まだ深夜の一時か二時だと思っていた。だがカーテンの隙間からは朝の空虚な日差しがこぼれてきている。……まったく実感のない朝だった。

昨日、俺は…あの後、そのまま寝入ってしまったはずだ。……なら、たっぷり十時間は眠っていたはず……。…だがとてもそうとは思えなかった。

体内時計は完全に狂い、体の平衡感覚もどこか鈍い。熱っぽさまで感じ、心身のバランスを崩してしまったことを自覚するには充分だった。

「…どう圭一？　体の調子はどう？　学校、行けそう？」

……とても学校に行けるような体調、…いや、精神状態ではなかった。

昨日の恐怖が、じっとりと蘇ってくる…。

あの針をそのまま…飲みこんでいたら…どうなっていたんだろう…？　あるいは口の中に、舌に突き刺さっていたなら…？

殺意は間違いなかったが、それでも…完全なものじゃなかった。

俺を殺す気なら、もっと確実な方法でやるはずだ。こんな、針を飲ませるなんて確実性の低い方法に訴えるはずがない。……つまり……信じたくはないのだが……、ここまでしようとも…レナや魅音にとっては…脅迫なのだ。

死なくてよかったね、…でも次はもっと確実な方法でやるよ…？　そんな感じの。

手紙と一緒にカミソリの刃を送る…なんて、これと比べればシャレでしかないだろう…。
「…ちゃんと病院は行った？　お薬は飲んだの？」
「ん、…うん。まぁ一応…。」
お袋の怪訝な表情がどこか不愉快だった。
なぜなら…病床の息子を気遣う様子よりも、二日続けての病欠への不快感の方が色濃く出ていたからだ。
…そりゃ確かに、精神的なショックがあったにせよ…別に病気というわけじゃないさ。
「一度生活のリズムを崩すとなかなか戻らないんだから。ささ、起きて起きて！　病は気から、って言うのよ。」
昔からよく聞かされたセリフだ。
俺は小学校卒業の時、精勤賞で表彰されたが…別に人一倍強健だったわけじゃない。
「ささ、顔を洗ってらっしゃい。ご飯はもう出来てるわよ。…もうレナちゃんが来るまであんまり時間がないわね。」
お袋の有無を言わせなさそうな口調に、俺は二日目のズル休みを諦める。
「そうそう。…居間の壁にぼた餅を投げつけたのは圭一？　だめよあんなことしちゃ！　お父さん、怒ってたわよ!?」

……別に罪の意識はなかったので、特にリアクションは返さない。また、お袋もそれ以上の追及はしなかった。いや、していたのかもしれないが、気にも留めなかった。
俺がもぞもぞと寝床を抜け出すのを確認すると、お袋は階下へ降りていった。
魅音が昨日、帰り際に言った「明日、休んじゃ嫌だよ？」という言葉がねっとりと脳裏に蘇る。
あれはどういう意味だったんだ…？
考えるまでもない。…もう欠席するな、と言っているのだ。
もっと踏み込んで考えればつまり……、いつもと同じように生活しろと言っているのだ。
俺が明らかに普段と違う様子を見せれば、それは特異に映るだろう。そんな俺の様子に……
例えば大石さんのような人間に「何かの異変」を気取られかねない、ということなのだろう。
つまり、…俺自身が口を閉ざしていようと、いつもと違う振る舞いをすれば、それは結果的に「好まざる者」たちに何かを伝えてしまう結果となるわけだ…。
そして彼女たちは、それすらも俺に許さないつもりらしい…。
じゃあ……俺がいつも通りに生活するなら……何も危害を加えない……ということなのか…？

昨日までの陰鬱さが気味悪いくらい薄れていく…魅力的な取引だった。
この数日の間に見聞きしたことを綺麗に忘れるだけで、…俺はいつもの生活に戻れるのだ。
「そ……そんな虫のいい話……あるわけ……。」
ごくり、と溜まった唾を飲み込む…。…一度は否定しかけたその想像を…俺はもう一歩踏み込んで考えてみた…。
魅音はきっと…仲間思いのいいヤツなんだ。…知りえない何かのルールに違反してしまった俺に……チャンスを与えてくれたのだ。
俺が犯した何かは…本当は許されないものなのだろう…。だが魅音はチャンスをくれた。…全部を忘れてこれまでと同じ生活を送れるなら、許そうと言ってくれているのだ…。
「圭一〜！　ご飯冷めちゃうわよー！　急いで降りてらっしゃい〜！　早くしないとレナちゃんが来ちゃうわよー！」
「あ、…い、今行くよ！」
俺はカバンに乱雑に教科書を詰め込むと、あわてて階下へ降りていった。
そして、何だか精彩のない朝飯を箸でついばむ。
時間はもうほとんどないようだ。レナとの待ち合わせ時間はもう過ぎていた。
昨日の様子だと…あと五分もしない内に迎えに来るだろう。…それまでには登校できるよう

にしないと…。
昨日までのことは全部忘れるんだ…。全部忘れて普通に生活するんだ…。普通ならもうレナとの待ち合わせ場所に行ってないと…。こんな日に限って、ご飯はパサパサで喉の通りが悪かった。
ピンポーン！
びく！　として思わず箸を落としてしまう。…レナの訪れを知らせるチャイムだった。
お袋が俺を急かす。
「ほら、レナちゃん来ちゃったわよ…！　急いで急いで！」
お袋の浮かれたような笑顔と、俺の顔の陰りがなんだか対照的だった。

玄関の向こうにいるレナを迎えるのには正直、抵抗があった。
…扉の向こうにいるレナは…俺のよく知っているレナだろうか？　…と。
だが待たせてはいけない…。いつものように振る舞わないと……。
「おはよう～！」
扉の隙間から聞こえた朝の挨拶はとてもさわやかだった。
「…圭一くん、遅かったから来てみたけど……今日はどうかな？　…かな？」

レナの気遣うような様子は、俺がレナだと思っているレナのそれに違いなかった。

…だがそれはきっと、俺がいつものように振る舞えばこそなのだ。

昨日までをすべて忘れて……何事もなかったように…。

残酷なバラバラ殺人のことも忘れる。その後毎年起こる怪死事件も忘れる。…転落事故も、病死も自殺も、撲殺も失踪も、全部全部忘れる。

レナが怖いのも、魅音が怖いのももちろん忘れる。みんな忘れる。おはぎのことも全部忘れる。忘れる忘れる忘れる。

レナがもう一度、念を押した。

「…学校、行けそう？」

「あ、……あぁ。…大丈夫だよ。」

「よかったぁ！　じゃ行こ！　魅ぃちゃん待ってるよ。」

レナはいつも見せるような、明るい笑顔を見せてくれた。

とても表裏があるような表情には見えない。……緊張が解け、自分が安堵したことを知る…。

「なのに沙都子ちゃんね、絶対にできるって意地になっちゃってー！」

歩きながら、レナはいつも以上にいろいろと話しかけてきた。昨日一日のことをダイジェストで教えてくれているらしいが、今の俺にはあまり関心がないことで、淡白に相槌を打つくら

いしかできなかった。
「……ふぅん。…それで？」
「沙都子ちゃんぶきっちょだから、何度やってもできないの！　…はぅ、かぁいかったんだよぅ…。」
その会話は、傍(はた)から聞く分には、いつもの俺たちの様子と何ら変わりが無いように見えたに違いない。……いや、…本当に、いつもの朝の登校と何も変わりがないかもしれない。
ご近所さんがすれ違い、俺たちに声をかけてくる。
「あぁれ、圭一ちゃんにレナちゃん、今日はちょっと遅いんじゃないの〜？　魅音ちゃん、先に行くって言ってたわよー？」
「わわ！　魅ぃちゃん怒ってるかな？　怒ってるかな⁉　早く行こ圭一くん！」
ご近所さんに笑顔で挨拶したあと、俺に振り返りぺろりと舌を出してみせた。そんな仕草に思わずつられて、自然に頬が緩(ゆる)んだ気がした。
「……あ、圭一くん笑った。」
「え、…な、なんだよ。」
レナが足を止めて、じっと俺を見入った。
「…圭一くん、今朝もなんか元気なかったから、まだ風邪が治らないのかなって思ってたけど、

…大丈夫みたいだね。…だね！」
そう微笑むと、俺の頬をちょこんと突っついた。
表裏のないさわやかな笑顔だった。
…なぁ前原圭一。…この笑顔を見てもなお俺はレナを疑うのか…？　昨日までの俺はひょっとしてものすごい高熱を出して寝込んでて、ありもしない幻を見ていたんじゃないのか？
……本気でそう思わずにはいられなかった。
もしも神様がひとつ願いをかなえてくれるなら…。俺が望むことはひとつしかない。
この何日間かの出来事。…もっと限定するなら、綿流しの晩から昨夜までの全ての出来事を……なかったことにしてほしい。
この何日間かで、俺は何度これを願っただろう……。
このままいつまでもレナが微笑み続けてくれたなら…それはかなうかもしれない。
だからレナにはいつまでも笑っていて欲しい。…いつまでも…笑っていて…。
「で、圭一くん。昨日のおはぎ、ちゃんと食べてくれた…？」
そんな俺の儚い願いはあっさりと打ち消された。
心臓がどきんと跳ね、朝のゆるやかな空気が一瞬にして氷結する。なぜならその問いかけは、…俺がなかったことにしたいと願う日々が現実のものであったことを否応なく突きつける

からだ。
レナの笑顔は…いつもの笑顔で、瞳もいつものやさしい瞳のように…見えた。
昨日のおはぎ、ちゃんと食べてくれた…？　…もちろん文字通りの意味のわけはない。
つまりレナは……私たちの意思は伝わったかな？　……そう言いたいのだろうか…。
「……………………圭一くん？」
レナは歩みを止め、返事に躊躇する俺の瞳をじっと覗き込んだ。
「…………あ、」
…ちゅ、…躊躇するな前原圭一。……レナはいつもの様子で振る舞ってるじゃないか。俺もいつもの様子で返すんだ。……それも自然に…！
だが喉も唇もいつの間にかからからに干上がり、上と下の唇をぴったりと貼りつけてしまっていた…。
早く返事するんだ圭一…。今ならそんなに時間は経ってない。まだ…自然に会話はつながるんだ…。何はともかく……早く言葉を……。
「……う、」
「う〜？」
俺がようやくひねり出した声をレナが愉快そうになぞる。

レナの反応は常識の範囲内だった。……俺が思ってるほど、間はなかったみたいだ。なんとか続く言葉をひねり出す。
「う、…うまかった…！」
だが、そんな俺の必死の苦労にも、レナは表情を晴れも曇らせもしなかった。
一瞬、返すべき言葉を誤ったのかと焦る。
だが数瞬の後、レナはいつもそうするようにやわらかく顔を崩し、朝の空気を澄み渡らせてくれるような軽快な声で笑ってくれた。
つられて笑いを誘う、そんな笑いだったから…俺も自然に笑うことができた。
「そうなんだ～。で、全部食べたのかな？　…かな？」
俺のささやかな笑いがもう一度凍りつく。
…裁縫針を飲まずに済んだの？　そう聞いているんだろうか…？
飲んでいたら無事にここにいられるわけがない。
「い、いや…全部は…食べきれなかったからさ。………まだ残ってるんだよ。」
恐る恐るだが…そう言い逃れた。
「……あれれ？　どれがレナが作ったのか、当てる宿題はどうなっちゃったのかなぁ…？」
「あははは…、あの宿題って…今日までだったっけ？」

「うん。今日までなんだよ。…魅ぃちゃん怒るよ～。きっと罰ゲームだね。」
もう一度二人で笑い合う。
誰が見たって違和感のない朝の風景だった。
俺だって、…ちょっと気を許せばいつもの朝の風景に思えてしまう…。だが…決して勘違いしてはいけないのだ。
このからからと笑うレナだって、その内には見かけからは想像できない何かが潜んでいるのだ。

「嘘だッ!!!」

あのレナの喉から出されたとは思えない、刺さるような声が思い出される。
それを思い出しただけで、背中を冷たいどろりとしたものが流れ落ちた。
あの時だけ、レナに何か悪いものでも取り憑いていたのだろうか…? いや違う。あれもまたレナなのだ。大石さんは確かに言ったじゃないか…。
「実は調べてみたら、竜宮さんは引っ越しの少し前に、学校で謹慎処分を受けているんですよ。何でも、学校中のガラスを割って回ったんだとか。」

レナには…常人とはかけはなれた魔性があるのだ。どんなにさわやかな笑顔で笑っていても……その事実は変わらない。

しかし…どのような状態でそのような蛮行、校内のガラスを割って回ったのかは……想像が付かない。

ひとつ言えることは、ささやかな瞬間的衝動によるものではないということだ。

瞬間的な怒りに任せてガラスを一枚割るくらいなら…まぁ、あるかもしれない。

だが学校中のガラスをだ。

自分がバットを持って実際に学校にガラスを割りに行ったところを想像すればいい。

ガラスを力任せに一枚二枚。砕け散る破片をものともせず…。

呆然とするクラスメートたち。…突然の出来事に、身じろぎひとつできまい。

ガラスが一番たくさん、それもずーっと並んでいるところはどこだろう。…多分廊下だ。

割って、歩いて、振り上げて。割って、歩いて、振り上げて。

その恐ろしい光景を、今こうして笑顔を浮かべるレナと重ねるのはとても難しい…。

だが、…それでも俺は、想像しなければならない。……想像できないからありえない、という子供染みた考えはすでに…通用しないのだ。

ガラスが砕け散る不穏極まりない音を立て、じゃりじゃりとその破片を踏みつけながら、ま

っすぐにこちらに向かってくるレナ。
……真っ青になって息をすることも忘れてしまったクラスメートたち。
彼らはガラスを叩き割りながら近づいてくるレナにどういう行動を取ったのだろう。
レナを説得するために懸命に何かを説いた？　あるいはその蛮行を制止するために飛び掛かった？　あるいは職員室に先生を呼びに走ったのだろうか？
多分どれも違う。
鬼気せまるその様子で、次々にガラスを誅していくレナに……黙って道を空けることしか出来なかったに違いない。
呆然としながら…レナの行進に道を空ける。…それを見て見ぬふりだと非難するのはあまりに暴力的だ。
彼らは見て見ぬふりをしてたんじゃない。……それが、唯一の護身法だと知っていたのだ。
周りの人間と違う行動を取ることで…突然、レナの興味が自分に移るかもしれない。
自分に興味を持ったレナはどのような行動を取るだろう…？
そんなのは簡単だ。……レナは興味のままに行動しているだけに違いない。
…つまり、自分が、…俺が次のガラスにされてしまうのだ。
レナが俺だけの瞳をじっと見つめながら、じゃり、じゃり、とガラスの破片を踏みしめなが

ら近づいてくる。……俺もまたレナの瞳に吸い込まれ、身動きひとつできない。
そしてレナは、他のガラスと同様に俺をバットで何度も殴打する。
俺は床にうずくまり必死で頭だけは守る。レナは頭でも背中でもどうでもいい。がむしゃらに何度も何度も殴りつける。
レナはどんな表情でこの行為を繰り返しているんだろう？　…そっとその様子をうかがってみた。
……その表情はあまりに淡白で、とても不愉快そうだった。いくら叩いても他のガラスのような軽快な音が出ないのだから。
何度も何度も。叩き続ける。レナの期待するような音は出ない。周りのクラスメートたちも止めない。次のガラスになりたくないから。
誰か助けてくれよ…。…楽しく遊ぶ時以外は知らんぷりかよ…!?
…そりゃそうだよな、偏差値ってのはクラス内での奪い合いなんだから。…俺みたいな塾三昧のガリ勉を助けて得をすることなんかないもんな…。
その内、くるみの殻を割る時にするようような軽い音に混じって、赤とも黒ともつかない飛沫が飛び散るようになるのだ…。
……そのぞっとするような想像を、強く頭を振って無理やり追い出す。

とにかくそのレナの様子は、怒りに我を忘れるといった瞬間的なものではなかったに違いない。

……深く息を吐き鼓動を抑えてから、俺は大石さんの言葉をもっと深く思い出す。

「…でですね、そのカウンセリングをした医師のカルテにレナさんの会話内容が記載されているんですがね……。その中に、出てくるんですよ。結構。」

「何がです…？」

「出てくるんですよ。オヤシロさまって単語が。」

その後、レナは謹慎処分となり、病院へ通院して診察を受けた。

そこでレナは医師とのカウンセリングの中で何度となく口にするのだ。「オヤシロさま」、と。

「オヤシロさまって言う、幽霊みたいなものがですね、夜な夜な自宅にやってくるって言うんですよ。枕元に立って自分を見下ろすんだ、って。」

医師と話した会話の一部なのだろうから話の全体は見えないが、……それは薄気味のいい話ではない。

ではレナは…、自身の行なった蛮行は、オヤシロさまに取り憑かれたからだと告白したのだろうか…？

俺はこれまで、オヤシロさまの祟りを認めたくなかった。だから、毎年起こる怪死事件を人

間の犯人の仕業だと思い込もうとしてきた。
そして大石さんと会話を重ねる内に、祟りでなく、人為的に繰り返されてきた事件であるとの確心を深めた。
だが……その人間の起こしてきた事件には…みんなが深く関わっていた。
祟りを認めないことへの代償は、こともあろうか………俺にとってもっとも親しい者たちの事件への深い関与だったのだ。
なぜ？　どうして？　何のために？　レナが？　みんなが??
それはオヤシロさまの祟りが実在することを受け入れること以上に苦痛で困難なもの。
だがそのレナは蛮行の後、病院で医師に、オヤシロさまに取り憑かれていたからだと告白したというのだ。
……俺はここで奇妙な安堵感を覚えた。
やはりそうなんだ。レナに表裏があるわけがない。……オヤシロさまなんていう怪しげなものに取り憑かれたからこそ…あんなこと、…本当のレナなら絶対に言わないようなことを口にしたりしたのだ。
レナは悪くない。悪いのはオヤシロさまなんだ…！
…わかっている。それは本末転倒だった。

祟りを信じまいとする俺は人間の犯人を切望し、……近しい仲間たちにその嫌疑がかかった今、都合よくすり替え、今度はオヤシロさまの祟りのせいにしようとしている。
俺にとって、レナたちが一連の怪死事件に深く関わっているかもしれないことと、オヤシロさまの祟りが実在することを認めるのと……どちらがマシなんだろう？
考えたくなかった。
考えないことによって、これまでと同じ日々が維持できると…そう信じたかった。
だが…………それはもう無理なのだ。
彼女らのメッセージは受け取ってしまった。あの裁縫針を受け取ってしまった。…それを何とか都合よく曲解しようとする自分の女々しさが情けなかった。
敵が人間だろうと祟りだろうと。……俺は殺されない。
殺されてたまるかよ！　……こんな訳もわからずに…！
「圭一くん？　…さっきから変な顔してる。何でだろ？　だろ？」
レナの声にはっとし、我に返った。気付けばそこはもう昇降口だった。
頭を軽く数回振り、たった今まで頭を満たしていた恐ろしい妄想を振り払った。
いくらなんだって…レナがこんな恐ろしいことをするわけがない……！
それはまるで、自らに言い聞かせるようなか細さがあった…。

■これからどうすれば。

　がらりと扉を開き、教室へ踏み込もうとすると同時に、頭にチョークの粉だらけの黒板消しが落ちてきた。もちろん、それは綺麗に俺の頭を捉(とら)える。チョークの粉末が目に入り、しばし苦痛を味わった。
「をっほっほっほ！　ズル休みの圭一さんにはお似合いですことよ～！」
「……にぱ～☆　圭一もレナも、おはようございますです。」
「おっはよー！　沙都子ちゃんに梨花ちゃ～ん！」
　何となくテンションが合わなかったので、沙都子のトラップにも俺は特に何の感情も感じなかった。
　沙都子は俺が横を通り過ぎる時、何らかの攻撃があるものと思って身構えていたようだったが、俺が黙って通り過ぎただけだったので拍子(ひょうし)抜けした様子だった。
「何なんですの…？　張り合いがありませんわ。」
「……圭一、まだ本調子じゃないみたいです。」
「うん。……だから今日は加減してあげて、ね。」

突然、俺の肩がバシンと叩かれた。ちょっと痛い…。
「よ！　圭ちゃん、しっかり休んできたー？」
魅音だった。
レナのことで頭がいっぱいだったが……、魅音だって当事者のひとりなのだ。
思い出すんだ圭一。…昨日の鷹のような眼差しを。
「……あぁ、………おはよ。」
「なんだなんだ、ずいぶんと覇気（はき）のない挨拶じゃ〜ん？　差し入れのおはぎ、ちゃんと食べてくれなかったのー？」
ちゃんと食べたからこの様子なんだよ…。言葉が喉のそこまで出掛かった。
「…やっぱ食欲がなくてさ。…いくつかは食べたけど、だいぶ残しちゃったんだ。」
「あれ？　じゃあ宿題は？　どれがレナの手作りか、ってのの回答は？」
「圭一くん、宿題忘れなんだって。あはははは。」
「……ありゃあ……じゃあ仕方ないねぇ、罰ゲーム。…いっしっしっしっし！」
嫌らしい笑いを浮かべると、魅音は席へ戻って行った。
そんなやり取りをクラスメートが不審がる様子はなかった。
そりゃそうだ。今朝までのやり取りを誰が聞いたって。…不審な様子があるわけがない。

だからこそ……怖かった。
前原圭一という一個人にどんなハプニングが起ころうと、絶対に疑われなさそうなそんな素振りが…逆に恐ろしかった。
やがて先生がやってくる。
俺の体調を尋ねると出席を取り、そしていつもの退屈な日常を再開した。

耳に入るのは、クラスメートたちがめくる教科書のページが擦れる音と、セミたちの合唱、そして先生の指導の声だけだった。
それらは、授業に関心がないならば心を掻き乱すほどの騒音ではない。……自習状態の授業中は、今の自分の置かれている立場を考えるのに都合がよかった。
俺は軽く目を閉じ、自分が置かれている理不尽な状態について考えてみることにする。
まず…忘れてはならないのは…自分がどれほど危険な状態にあるか、だ。
自分は彼女らにとって好ましくないことを知る人間になってしまった。大石さんと何度かの接触を重ね、核心に迫ろうとしているかに見える。
昨日のおはぎはそれへの警告だと考えるのが妥当だろう。
……いや、…警告という言い方自体、相も変わらず女々しい言い方だ。彼女らにとってあの

おはぎは俺を萎縮させ時間を稼ぐ意味しかないだろう。
…俺を完全な方法で「消し去る」までの………時間稼ぎ。俺が脅しに屈したって、知りすぎた人間には変わらないのだから。
その時、机のひんやりとした手触りが、去年までこの席を使い、そして失踪した生徒、北条悟史のことを思い出させた。
彼もまた…俺と同様だったのだろうか？　余計な事まで知ってしまい……消されてしまった…？
………くそ……！　俺は…簡単に消されたりはしないぞ……絶対に…!!
だが…本当に俺は命を狙われているんだろうか…？
レナたちを疑いながらも…同時にかばうような、そんな二律背反の気持ちはさっきからずっとあった。
不審な言動をあれだけ目の当たりにしながらも、こうして朝日の中にいると全部ウソなんじゃないかと思えて……。…いや、思い込もうとしてしまう。
俺は仲間を疑っている？　かばっている？
命を狙われている？　いない？
…本当にずれた論点だった。

自らが置かれている現状を思えば…そんなのはとっくの昔の論点のはずなのだ…。
なぁ……本当に俺は…命を狙われているのか…？　レナたちに……。
そんな俺の煮え切らない思考を、俺の中のもうひとりが罵倒(ばとう)した。
馬鹿かよ前原圭一!!　そんなのは決まってるじゃないか!!
で、…でもひょっとしたら……裁縫針は本当に偶然の、事故かもしれないだろ…？
裁縫針がどう間違ったらおはぎに混ざるんだ!?　お人好しも大概(たいがい)にしろ!!
確かにレナも魅音も…不審な態度や言動があるけど…ひょっとしたら何かの誤解で…。
何の誤解だよ!?　不審どころか…異常なのは明白だろッ!?
レナには嘘を正されただけだし……魅音には昼飯を聞かれただけだし……。
そのレナは部屋の前で一時間も聞き耳を立ててたんだぞ!?
そ、それはきっと…俺の電話が終わるのを待ってて……。
一時間もずっと部屋の前で!?　そしてそのまま何も告げずに帰るか普通!?
……………。
大石さんに聞かされただろ!?　レナが前の学校で何をしたかを!!
で、でも…それはオヤシロさまのせいだって病院で……。
「いい加減にしろよ前原圭一。お前、命を狙われてるって自覚、あるのかよ!?」

ッ⁉
それは自分が、無意識の内に口にした言葉だった。
自らのあまりにストレートな言葉に…しばし呆然とし、誰かに聞かれはしなかったかと周りをうかがった。
……今の独り言は…あまりに真を突いていた。
俺はレナたちから殺意を感じながらも、…心のどこかで、それを否定している。
この期に及んで…そんな躊躇は命取りだ。…それはわかってる。
だが…俺は平均的な男子生徒で……ごく普通の生い立ちのごく普通の男なんだよ！
先週の日曜日まで楽しく笑い合ってた仲間たちが…自分に殺意を抱いてるなんて…急に信じられるかよ…⁉　なぁ…？
「甘えるな圭一ッ！！！！」
今度は意識して、自分だけに聞こえるよう下腹に力を入れて小さく叫んだ。
ひとつわかったことがある。
俺は…甘い。レナたちがどれほど恐ろしい存在なのかを理解していない。いや、理解しようともしていない。
大石さんの心遣いに甘え、核心に耳を貸さなかった。

落胆したふりをすることで、聞こうとしなかった。理解しなかった。逃げていた。
俺に理解できないから殺意はない、などという甘えはもう捨てるんだ…！
そう決意したとき、終業の鐘の音が聞こえてきた。
…気付けば、あっという間。それは今日という一日の終わりだった。
食事をした記憶も、授業を受けた記憶も、何も残っていなかった。
仲間たちは机を向かい合わせて放課後の部活の準備中だ。今までの俺なら、大喜びであの輪に飛び込んでいくのだろう…。
……だが、今の俺にそんな気持ちがあるわけもない。俺は他のクラスメートたち同様に帰り支度を始める。
「あらあら圭一さん？　帰り支度とはあんまりですことよー？」
沙都子の口調があまりにいつも通りで……胸が痛んだ。
「あれ？　圭一くん、今日は都合悪いのかな？　…かな？　今日こそ二人で大勝利………はぅ…。」
レナの、せっかく楽しみにしていたのに…という表情が辛い。
なぁ圭一。……実は大石さんが大悪党で、俺をみんなから引き離すために嘘をついてるんじゃないだろうか…？

パシーンッ!!
軟弱な考えを追い払うため、自らの手で頬に平手打ちした。
「け、圭一くん…?」
「…………。」
あぁ…レナは本当に俺を殺そうとしているんだろうか…?? 誰か嘘だと言って欲しい。嘘でもいいから嘘と言って欲しい。……く、また甘えた考えを…!! 俺ってヤツは…どうしてこうまで甘いんだ⁉
「だ、大丈夫…? 頭痛いの?」
俺がひとり苦悩する様がレナにはそう映ったようだった。
「顔色悪いよ? ひとりで帰れる? …送ってった方がいいかな? …かな?」
「いや……いい。…ごめん。ひとりで帰れる。部活はみんなでやってくれよ。」
俺が部活に参加しないことを知ると魅音が不満そうに口を尖らせた。
「圭ちゃんがリベンジ熱望してたってんで、今日はせっかくこの間の推理ゲームにしたってのになぁ。」
「圭一さんにはリターンマッチに臨む熱いハートはありませんですの? なっさけないですわね~!」

低俗な挑発には乗らない。
特に買い言葉も返さず、俺はカバンを掴んで席を立とうとした。
そんな俺の頭に、すっと誰かが手を載せる。
「……………圭一、具合悪そうです。………かわいそかわいそですよ。」
梨花ちゃんだった。
小さな手で、精一杯の背伸びで俺の頭をよちよちと撫でてくれた…。とても気持ちよく、…それがかえって悔しかった。
「…ごめんな。みんな。………じゃ！」
それだけを言い残し、俺は足早に教室を後にした。
俺の背中を見ながら、何やら言っているようだったが、もう俺の耳には届かなかった。
そのまま昇降口へ向かい、靴を出し、履いて、前へ。前へ。
心を空っぽにしろ……前原圭一…！
あいつらは…どうしてか知らないけど…俺の命を狙ってる!!
怪しげな企みをしていて、俺の挙動を虎視眈々とうかがっている連中なんだ!!
でも…憎めないッ…!!　だって……仲間じゃないかッ！！！
自らの甘さを悔やむ自分と、それを悔やむこと自体、失ってはならないものを失ってしまっ

たのではないかと悔やむ自分。
自分という人格が体ごと引き裂(さ)かれてしまうような…そんな感覚だった。
もしもこれがオヤシロさまの祟りというものなら。…あまりに…辛いじゃないか。
なぁオヤシロさま…、あんたの祟りを信じなかったのは俺が悪かったよ…。
でももう信じる。絶対信じる。あんたの祟りは実在する…。
だから、もう本当に……勘弁(かんべん)してくれよ………。頼むよ………なぁ…。

■両親すら頼れない。

いつになく、夕食はおいしくなかった。
味はなく、匂いもなかった。…普段なら食欲をそそる味噌汁(みそしる)の湯気(ゆげ)ですら、ただの水蒸気(すいじょうき)としか感じられなかった。
今夜の食卓には親父も一緒だった。うちでは珍しい部類に入る。
仕事に熱が入れば、食う寝るはマイペース。時間などお構いなしの親父だ。
その親父が食卓に着く、ということは、ちょうど仕事のキリがいいのか、さもなければスランプで不調のどちらかということになる。

「とにかく、作家のモチベーションってものを理解してないんだよ、彼は。」

「タイアップの話だって口約束なんでしょ？　そんなにそりが合わないならきっぱりお断りしたら？」

「助け合いの世界だからお互い様だとは思うんだけど…。…これじゃ仕事になぁ…。」

親父とお袋の会話から察するに、あまりムードのいい会話ではない。……まずい食事がさらにまずくなるのも道理だった。

両親のそんなやり取りを見ながら、俺はぼんやりと今日一日続けてきた思考を続けてみた。

…身近な友人、いや、友人と思っていた人間たちが信用できなくなった今、俺には味方が圧倒的に不足している。

信頼に足りる人間、いざという時に頼れる人間がまったくいないのだ。

…ひとりでも味方がいれば、この絶望的な状況でどれほど心強いことか…。

箸を休め、仕事の話を続ける両親を見上げてみる。

全てを両親に打ち明ける、という選択肢は一番始めに考えた。

雛見沢の誰もが百パーセント信用できなくなった今、唯一信用できるのは自分の両親だけなのだから。

だが……、これまでのことを話したところで、理解してくれるだろうか？

例えばレナ。
転校以来、甲斐甲斐しく世話をしてくれ、毎朝迎えに来てくれ、たまにお裾分けまで持ってきてくれるご近所さんのレナ。
その彼女が俺の命を狙っていると、…どう説明する？　どう説明しても、それに理解を求めるのはとても難しいだろう…。
仮に理解してくれたとしても…どんなことができる？
真相を暴けるわけでもなければ、俺の命を守れるわけでもない。…いやむしろ……俺から〝余計なこと〟を知らされることによって、両親も危険にさらされるようになるわけだ…。
過去の事件の被害者が夫婦丸ごとのことが多かったことを思うと…とても笑えない。
この雛見沢から、前原一家という三人家族があっさりと事故で、もしくは蒸発して消えてしまうということもありうるのだ……。
ここで大事なことは〝余計なこと〟を知ると危険になる、という点だ。さらに気味が悪いのは……どうやってヤツらは自分が〝知ってしまった〟ことを知ったのか、という点だが…。
裏返せば、〝何も知らない限り〟両親に危害は及ばないのではないかという言い方もできるんじゃないか…？　少なくとも俺の場合がそうだ。〝知ってから〟おかしくなってしまった。
…つまりこういうことだ。何も知らない両親がいる限り、両親には何も起こらない。そんな

両親がこの家にいる限り、この家はヤツらからの安全地帯になるというわけだ。
……詭弁の上に詭弁を塗り固めた憶測なのはわかっている。
この家だけは安全地帯であって欲しいという、俺の弱気が求めたご都合主義だ。
…表よりは安全という程度で、…絶対安全ではないことをよく理解しなくてはならない。
両親が頼りない…、いや、両親を巻き込めないことはわかった。
なら俺に味方してくれるような人は……大石さんしかいないことになる。
大石さんは現在の俺の状況を理解している唯一の人間だ。俺の身の安全こそ軽んじているが、事件解決に情熱を燃やしているのだけは間違いない。
……ちょっと悔しかった。…こんな事態になった大元は大石さんなのに、この事態において一番頼れるのがその大石さんだけだなんて。
つまり……大石さんの目論見通りに進んでいるわけだ。
俺は海に撒かれた餌で、波間を美味しそうに漂うのが仕事。…そして、俺の周りに魚たちが群がってきたところで大石さんがそれを一網打尽！　少し悔しいが、……それがベストとしか思えない。
じゃあつまり……俺はどうすりゃいいんだ⁉
…釣りの鉄則は待ちだ。魚が食いつくまで、ひたすらじっと伏して待ち続ける…。

だが俺は大人しく食われるつもりなんかない。食われる直前にあらゆる努力をすることができる。

ヤツらが仕掛けてきた時、なんとかそれを紙一重でかわし、大石さんに引き継がなくてはならない。

無論、簡単ではない。…大石さんに継ぐタイミングが難しい。大石さんは雛見沢じゃなく、町にいる。だから緊急時に電話をしても、駆けつけてくれるまでに三十分はかかるだろう。この三十分間を何とか逃げ切らなくてはならない……。

例えば…予め緊急時の待ち合わせ場所を決めておくとか。…俺はそこで大石さんが来てくれるまで隠れていればいいわけだ。

…よし……少し…見えてきたぞ…。

疑心暗鬼の暗闇の中にいることに間違いはないが、自分がこれからどう進めばいいのかわかることが、これほど心強いとは思わなかった。

誰が敵で、誰が味方か。…それを知るだけで、自分が何をするのが最善かようやく見えてくる。

そうだ。いざというときの為に、何か携帯できる武器を用意した方がいいかもしれない。

……代表的なものは折り畳みナイフとかだろうか。だが戦うには心細い。また、社会的に武器

だと認知されている点もよくない。さりげなく携帯できる物の方が有利だ。

やはり、いざという時は…バットのような長い武器の方が有利だろう。

学校に金属バットがあったのを思い出す。…あれならいざという時、心強い。…素振りの真似でもしていれば、いつも持っていても不審に思われない。

…明日、早めに登校して確保しよう。武器の所持が、それだけで相手の行動を抑止する効果があるかもしれない。

あともうひとつ…保険だ。

メモでも書置きでもいい。これからの出来事を簡単に、日記風に書き記しておこう。

もしも、俺が〝蒸発〟してしまっても日記は残る。…大石さんは俺の日記を元にヤツらに復讐をしてくれるだろう。

…それはなかなかの妙案だった。これは今すぐ実行できるものだった。

どうせこれ以上食卓にいても、箸など進まない。俺は仕事の話に没頭している両親を尻目に、二階の自室へ戻る。

さっそくノートのページを破り取り、机に向かった。……日記なんて小学校の夏休みの宿題以来だ…。

万が一の時、警察は俺の日記を手がかりにするのだ。…だから事実のみを簡潔に書こう。

書き出しはどうしよう……。思いつくままにさらさらっと書き出してみる。
〝私、前原圭一は命を狙われています〟
ちょっと苦笑した。よく推理小説に出てきそうなこんな文章を、自らが書く羽目になるとは…夢にも思わなかった。
〝なぜ、誰に、命を狙われているのかはわかりません〟
レナたちを疑わしいと思っているが、確証はない。……だからこれ以上のことは書けないだろう。
あまりにミステリーめいた文章に、自嘲気味に苦笑いしてしまう。
この文字通り謎めいた文章を読んで、警察へのなんらかのヒントになるだろうか。
なることを祈るしかない。…一番祈りたいのはこの日記の出番が訪れないことなのだが…。
ここでやはり苦笑する。
あまりに簡素だったので、思いつくままにもう一行加えてみた。
〝ただひとつわかる事は、オヤシロさまの祟りと関係があるということです〟
これはさすがに…書き過ぎか…?
……これ以上は書かない方がいいかもしれない。……これ以上を書き連ねると妄想日記にな

ってしまう。
書き手の冷静さをアピールする意味ではこれ以上のことは、現時点では書くべきではない。
……新しい事実がわかった時、書き足せばいいだろう。
俺はそのメモを畳み、どこに隠したものか思案する。……簡単な場所に隠したのでは、万が一の時、ヤッらに見つけられて揉み消されてしまう恐れがある。逆に難解な場所では、誰にも見つけてもらえなくなる恐れがある…。
考えた末、俺は壁に掛けてある時計を外し、その裏に畳んだメモをセロテープで貼り付けることにした。その後、元通りに時計を掛け直す。…うん。とても裏に隠してあるようには見えない。
あとは、このメモを「俺に何かがあったとき」両親に見つけてもらえるよう、仕掛けるだけだ。
角度を変えて何度か見直し、納得したところで俺は階下へ戻る。
両親はまだ飽きもせず仕事の話をしていた。…しばらく待っても話は途切れそうになかったので、自分から切り出すことにする。
「あー、話し中ごめん!! ……ちょっと聞いてもらっていいかな。」
俺がこういう切り出し方で話すことはないので驚いたのか、両親はぴたっと話をやめて振り

向いてくれた。
「どうしたの圭一？」
「お願いがあるんだけど、聞いてほしいんだ。……その、もしもだよ？」
「圭一、急ぎの話じゃなきゃ後にしなさい。お父さんとお母さんはちょっと今、急ぎの話をしているんだ。」
こっちより急ぎの話だとは思えない。とにかく用件を伝える。
「もしもだよ？　俺が死んだらさ。」
両親が目を丸くする。…無理もない。
「その、俺が死んだらさ。……俺の部屋にある時計、あれを棺に入れてほしいんだ。」
そうすれば気付いてくれるだろう。あの日記のメモに。
両親は目を丸くしたまま微動だにしない。…突然、何を言い出すのかと呆然としているのは明白だった。
「あの時計、工作の授業で作ったお気に入りなんだ。頼むよ。」
「…ど、どうしたの。圭一。……何かあったの？」
お袋が怪訝な顔でようやく口を開いた。…突然息子がこんなことを言い出したら、普通こういう反応を返すだろうな。

心配をかけて申し訳ないが、今は俺の部屋の「時計」を意識さえしてくれればいい。
シンとして、すっかり居心地の悪い空気になってしまったので、自室へ戻ることにする。
「俺さ、明日は早くに学校に行きたいからもう寝るよ。お休み。」
それだけを言い残し、居間を出た。
明日は早い内に登校し、武器のバットを確保しよう。レナとの登校も今日限りにすべきだ。
階段を上る時、お袋が俺の名前を呼んだが聞こえないふりをした。
両親に相談できることなど何もない。相談すれば…その分、危険が増えるだけだ。
誰にも頼ることのできない、俺だけの、たったひとりの戦いが始まる。
俺は殺されない。…こんなわけもわからない内には…絶対に。

■元気ないね。

「最近、圭一くんの元気がないね。機嫌が悪いのかな。」
「さぁてどうしたんだろうね。生理でも来てんじゃないのー？」
「みみ、魅ぃちゃんそれ下品…！」
「うっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ‼」

「……どう思う？」
「さーね。」
「………。」
「圭ちゃん、ひょっとして…。………かな？」
「……わかんない。」
「あの日、圭ちゃんと車で話してたの、中年のでっぷりした男だったたんでしょ？」
「うん。間違いない。」
「大石のヤツ、圭ちゃんに何を吹き込んでるのかなぁ…。」

「真剣そうだったよ。圭一くんは顔面蒼白だった。」
「……あのねぇ、レナはよく知らないだろうけど、実はあいつ、オヤシロさまの使いなんだよ。」
「え？　何の話？」
「あいつが現れるとね、…必ず鬼隠しが起こるの。……本当だよ。」
「………あれ？　そうなの？」
「……一昨年、梨花ちゃんのお母さんが入水したでしょ？　その直前に大石が尋問してたんだよ。」
「……そう言えば、悟史くんが転校する前にもいたね。」
「転校〜？　あはははは、レナはいいヤツだよなぁ。」
「で、今度は圭一くんの前に現れたんだ。……じゃあ圭一くんも鬼隠しになっちゃう？」
「…………。」
「…………。」
沈黙の空白がじんわりと続く。そしてふと途切れた。
…哄笑だった。


6月24日(金)

これほどはっきりと意識が戻る目覚め方をしたのは初めてだった。
仕掛けた目覚ましが鳴る直前の五時五十九分。…自身の体内時計の正確さに驚く。
寝る前に登校の準備は全て済ませておいた。昨夜の就寝前から全ての準備は万端だったのだ。
手早く着替え、ひと気のない階下に降りていく。まだお袋も寝ているようだった。…朝食も弁当も用意がない。昨日、一方的に明日は早いと告げただけだから仕方ないのか。
食パンとジャムを並べ、あとインスタントのココアを付け、何とか朝食の体裁を整えた頃、もぞもぞとお袋が起き出して来た。
「…あら圭一、今日は早いのね。……学校の行事か何か？」
「別に。」
そっけなく返事をし、パンを二枚胃袋に収めると俺はカバンを掴み立ち上がった。
「もう行くの？　お弁当は？　もうちょっと待ってくれないとできないわよ。」
弁当ができるのを待っていると、いつもと変わらない時間になってしまう。そうすれば、途中でレナや魅音に出くわす率が高くなる…。

そう。今日からはひとりで登校するのだから。
「今日はいいよ。」
「じゃあお昼はどうするの？」
「抜け出して店で菓子パンでも買うよ。」
「そう？　…じゃあこれお昼代ね。ちゃんとレシート持ってくるのよ。」
お袋から千円札をもらい、それを無造作にポケットにねじり込む。
「ずいぶん早いけど、レナちゃんたちもこんなに早いの…？」
「いや。俺だけ。」
「…レナちゃんには早く出るって伝えてあるの？」
……そんなことまでいちいち聞かれる筋合いはないだろ…？　いちいち説明しにくい質問攻めに、俺はうんざりとした顔を返した。
「レナが来たら、俺は先に行ったたって伝えてよ。」
「ちょ、ちょっと圭一⁉　待ちなさい…！」
両親を信用しないわけじゃない。…だが頼りにもならないのも事実だ。
俺の助けにならないなら…せめて関わり合いにならないでいてくれ。その方が安全なんだから。

お袋の耳障りな声を、扉をぴしゃりと閉じて遮る。外はもうセミの声で満たされていて、今日という現実が再び始まったことをまざまざと教えてくれていた。

俺は転校してきてから初めて経験する、たったひとりの通学路に足を踏み出した。

今まではいつも同じ時間に同じ場所を歩いていた。だから、会う人もいつも同じところで会っていた。

だが今日は違う。会うはずの人に会わず、いるべきところにいるべき人がいない。

もちろん、いつもの待ち合わせ場所にレナはいなかったし、魅音との待ち合わせ場所にも誰もいなかった。

木々の影の長さも朝の空気も日差しの強さも、俺が良く知っている朝のそれとはまったく違う。

それは紛れもない違和感だった。

雛見沢という土地が用意したシナリオを俺が破ったため、俺を騙すために配置されている配役が間に合わなかった……、そんな印象を感じずにはいられなかった。

「…あぁら圭一くん。今朝は早いわねぇ。みんなで早朝から待ち合わせ？」

話しかけてきたのは、いつも畑のあぜを散歩していてすれ違う人だった。……名前は…えぇ

と……忘れた。…もちろん、すれ違う場所もいつもと違う。
「今朝は早くに目が覚めちゃったので…気分転換なんです。あまり気にしないで下さい。」
適当にはぐらかすことにする。
「レナちゃんや魅音ちゃんはどうしたんだい？　今日はひとりなの？」
「ええ、…まぁ。」
お袋にされたのと同じような問いかけをされる。だからお袋にしたように、曖昧に味気ない返事を返した。
…いちいち人に会うたびに、レナたちの同行を聞かれるのは面白くなかった。
もっとも、無理もないことなのかもしれない。…あれだけ長い時間、いつもいつも一緒に、仲良く過ごしていたのだから。
俺だって、気を許せば今でもみんなとは仲、………………。
…よせ圭一。それ以上は考えるな。
そんな甘さがどれほど危険か、昨日一日ずーっと考えたじゃないか…。
パッパッパーーッ！！！
突然の車のクラクションに驚く。
いくら考え事をしていたにしても、そのクラクションはあまりに俺の至近距離だった。背後

より高速で迫るその無機質な巨体の接近に、俺はあまりに無警戒だったのだ。
後ろを振り返ったときには、その大型のワゴン車の巨体はすぐそこにあった。
歩行者を避けるために逆の路肩に寄る車はいくらでも見かけるが、この車は逆だったのだ。
それはまるで、反対の路肩に誰かがいて、それを避けるためにこちら側にはみ出てきたような……そんな感じだった。
そんな平和ボケした思考の遅れはもっともっともっと大切なことに気付くのを遅れさせる。
眼前に迫ったその巨体。……俺は「轢かれる」ッ!?!?
瞬間的に頭の中に痛いくらい冷たい液体が満たされる…!! その瞬間、目の前の光景、いや、時間が凍り付いた。
その無音の凍った時間の中で、俺は避ける術もないくらい眼前にせまったワゴン車と、後ろに振り返るために半身をねじった無様な姿を見比べた。
こんな体勢では飛びのいて回避するなんて芸当はできるわけがない…。
気を許せば、すぐにでも凍った時間は動き出し、この間抜けな姿のまま俺を弾き飛ばすだろう。
上体を路肩の田んぼに反らすんだ。…うまく反らせば、サイドミラーに殴られるだけで済むかもしれない…! そう思った瞬間、凍った時間が車の爆音で打ち砕かれた。

サイドミラーが俺の肩を殴り飛ばし、俺のねじれた体勢をそのままぐるぐると、コマのように回転させて弾き飛ばす…ッ!!

ドッパーン!!!

きりもみ状態で吹き飛ばされた俺は、路肩の泥田に叩き込まれていた。

全身泥まみれのびしょ濡れ…!!　だが、あの瞬間に選べた選択の中では一番のものだったに違いない。

泥まみれだったが、車にはねられたことを思えば限りなく無傷に近い状態だった。

何しろ、田んぼから起き上がり停車しているワゴン車を睨み付けて馬鹿野郎と怒鳴りつけるだけの余裕があったのだから。

俺のその様子を見届けたのかどうなのか、ワゴン車は急発進し逃げ去っていった。

「待てよクソ!!　これって……轢き逃げって言うんじゃねえのかよッ!?」

悪態をつかずにはいられない。身体的ダメージよりも全身泥だらけによる精神ダメージの方がはるかに大きかったからだ。

俺は泥田の中をどっぷんどっぷんと歩き、道路に這い上がる。

「これって犯罪じゃねえのかよ畜生…!!　くっそう!!　絶対に見つけて訴えてやるからな!!　この狭い村の中で、ワゴン車なんて探せばきっと見つかるんだからな…!!」

今、俺がいた道は両側は田んぼで車一台がようやく通れるくらいの細いものだ。
歩行者を追い抜けるどころか、アクセル全開で走り抜けるような道では絶対にない。
しかも今の車は追い抜く時、ただでさえ狭いこの道で、さらに俺側に寄せて走ってきた…。
…悪態をつきながらも、心の奥で必死に黙殺(もくさつ)していた黒い影がもやもやと湧きあがってくる。
……その影は、俺の怒りをじわじわと冷まし、…気付けばまったく違う気持ちを心の中に湧き立てていた…。
今の、轢き逃げとかそういうのじゃなくて…、……俺を狙ってはねようとしてたんじゃないのか…?
思い出してみると…少し前から俺の後ろをずっと車が、徐行(じょこう)でついてきていたような気がする。
そう、さっき散歩中の人と別れてくらいから…ずっとのような気がした。
俺を追い抜きたいなら、いくらでもチャンスがあったはずだ。普段の俺なら不審に思って振り返っていただろう。
だが…考え事にうつつを抜かし、そんな気配に気付き損(そこ)ねたことを悔やむ。
そして…道が細くなり、ひと気がなくなったのを見計らって……アクセルを…。
一瞬判断が遅れていたら…笑い事では済まなかったはずなのだ。

はねられたことによる興奮が完全に冷めてくると……俺はようやく今起こったことがどれほど恐ろしいことか…理解できてきた。

あの車は間違いない。俺をはねようとしてはっきりと狙ってきたのだ…。

冷たいどろりとした液体が俺の脳からこぼれ、つつーと俺の背中を伝って滴り落ちていく。

……ある種の錯乱状態に陥りそうな自分を、ぎゅっと自制する。

本当にただの偶然の事故の可能性だってある。……落ち着け圭一!!　だけど甘えるな圭一!!

あんな弛んだザマじゃ次には殺されてるぞ!!

常に警戒するんだ。隙を見せちゃいけない!!　もしも敵に俺を殺すつもりがあるなら、次はもっともっと確実な方法で襲ってくるだろう。その時にも今のようなザマだったなら……!!

…俺はこの泥まみれを自らの甘さの代償として受け入れることにする。

泥まみれなだけでまったくの無傷。捻挫とかもしなかった。こればかりは不幸中の幸いと言えるだろう。

今度こそ用心深く、俺は歩き始める。もう微塵の油断もしない。

俺は今までレナたちだけを疑ってきた。…いや、レナたちを疑うことによって、レナたち以外に敵がいないと信じようとしてきた。

大石さんが言ってたじゃないか…。…犯人は村ぐるみの可能性があるって…!!

そんな状態に陥ってまで、俺は日常の生活をしなければならないのだろうか…？　自宅に閉じこもっているのが一番安全ではないのか…？
だが…俺が日常を放棄した途端に、周り中全てても日常を放棄してくるのではないだろうか…。
それは余りに恐ろしい想像だった。
大石さんがしてくれた雛見沢の、まだ鬼ヶ淵と呼ばれていた頃の昔話を思い出す。鬼たちは村中総出で獲物を追い回し、囲んで、食らい殺したという、恐ろしい話。
鬼の狩りは邪魔をしてはいけない。見て見ぬふりをしなくてはならない…。
敵は複数、村ぐるみ。…祟りを妄信する村人たちは俺を助けない。
急に強くなった日差しが俺に軽い眩暈を起こさせた。
……もう何が何だかわからないよ…。
人間の仕業を疑えばオヤシロさまの祟りの影がちらつき…、オヤシロさまの祟りを疑えば人間の影が見え隠れする。
何が偶然で何が恣意的なのか。…誰が敵で誰が傍観者なのか。
いやそんなことよりももっともっと知りたいのは……、なぜ自分が命を狙われるようになってしまったのかだ。
いつかきっと…俺にだってわかるような形で答えが出るに違いない…。

それがいつだって構わない。
……それまで…絶対に死んだりはしないからな……！
それだけが、俺の生き抜こうとする闘志だった。

■金属バット

武器となる金属バットは確か体育倉庫の中で見かけたが、扉には南京錠がかかっていて入れなかった。
せめてみんなが登校してくる前に何でもいいから護身用の武器を確保したい…。少し焦りながら校舎の周りをぐるっと回った。
だが見つかるのは角材のようなものばかりで、とても教室に持ち込めるとは思えない。
なら…逆転の発想だ。…教室で探せばいい。教室の中にあるものなら問題ないわけだ。
昇降口の下駄箱には、全員の上靴が入っているのがわかった。早く来た甲斐があった。まだ誰も来ていない。
教室の中に…何があるだろう？　バットのような強力な武器があるとは思えなかった。だが今は仕方がない。体育倉庫が開くまでの代用品が必要だ。

…これまでなら、学校にいる間は襲われないだろうというある種の甘えがあった。だが…そんな甘えた考えではもはや俺の身は守れないのだ。

ヤツらは少しずつ、俺の生活の不可侵だった部分に踏み込んできているように思う。

…やがては…自宅すらも安全ではなくなるかもしれない。……それはとても恐ろしい考えだ。

…だが、最悪の事態から目を逸らすことの方が、かえって恐ろしいことのように思える…。

とにかく生き残るんだ。…生きてさえいれば、この理不尽の迷宮から抜け出すことがきっとできるのだ。………きっと。

教室の探索はすぐに行き詰まった。当たり前だ。教室に武器になるものが転がっているわけがない。

有事の際には自らの椅子を振り回すくらいしかないのだろうか…。

そんな俺の目に、みんなの私物入れと化したロッカーが映った。魅音が部活の備品と称してゲームを大量にしまい込んでいるロッカーもそのひとつだ。

クラス全員の分がずらーっと並んでいる。もちろん、俺のロッカーもある。

そうだ、俺のロッカーの中にはジャージがあったっけ。…この泥だらけの様子ではさすがに変だ。あとで着替えておこう…。

…その前に武器だ。誰かクラスメートが来てしまったらロッカーが漁りにくい。

手早く、端のロッカーから順に開けていく。
中身はほとんどが体操服等の着替えや教材、傘などだった。……傘か。…もしも何も見つからなかったら武器にしよう。
「…………お。」
ろくな物が見つからず諦めかけた時、開けたロッカーの中に望みの物があった。
それは紛れもなく金属バットだった。もっとも期待していたものだ。使い込んだものらしくだいぶ汚れてはいたが、実用には申し分なかった。
かび臭いロッカーの中には他にも野球チームのユニフォームも吊るしてあった。きっとこのロッカーの生徒は少年野球のチームか何かに所属しているのだろう。
……だとしたら、そいつに返せと言われてしまうだろうか。
その時、廊下をぞろぞろと騒ぎながら歩いてくる子供たちの声が聞こえてきた。その中に混じって、沙都子と梨花ちゃんの姿もあった。
「……みー？　おはようございますです。」
「あらあらあら、今朝はお早いですわね圭一さん。」
握っているバットをさりげなく背中に隠す。
「な、何なんですのその身なりはー!?　泥だらけでしてよ!?」

「あ、あぁ、まぁちょっとあってな。すぐ着替えるから勘弁しろ。」
そう言って、さっそく脱ぎ始めると想像通り沙都子が赤面しだす。
「レ、レディーの前でお着替えなんて、躾がなってませんことよー!!」
「着替えをじーっと見てるレディーも躾がなってないと思うぞ。男子は更衣室がないんだから諦めろ。」
沙都子は呆れたふりをすると、赤面したまま廊下へ出て行った。
逆に梨花ちゃんは俺の着替えようとするところをじーっと見ている。
「…梨花ちゃんもレディーなら、着替えを見てるのはよくないと思うぞ。」
「ボクはレディーじゃないですからいいのです。」
わざと拗ねるような表情を浮かべて、俺を上目遣いにじっと見つめる。
「……じゃあ梨花ちゃんも今からレディーだ。」
「レディーなら仕方ありませんです。にぱー。」
梨花ちゃんは自分もレディーと認めてもらったことに満足すると、沙都子を追って廊下へ出て行った。
ほっと胸を撫で下ろした時、梨花ちゃんが足を止め、振り返った。
「……圭一は野球を始めますですか?」

梨花ちゃんが、背中に隠している金属バットに気付いたようだった。
「あぁ…ちょっとさ。…体がなまってさ。ちょっと素振りでも始めようかなってな…。」
「健康に気を遣うのはとても良いことだと思いますです。」
幼（おさな）そうな見かけによらずババくさいことを言う。
それだけを言って出て行こうとする梨花ちゃんは足を止め、再び振り返った。
「そのバット、なくさないで下さいね、なのです。」
人のロッカーから拝借（はいしゃく）したものだということはバレているようだった。でもロッカーの扉には名前は貼ってなかった。
誰のバットだかわからないが、文句を言われるまでは拝借させてもらおう。体育倉庫が開くまでの短い間なのだから。
俺は手早くジャージに着替えると、時計を確認した。早く来ただけあり、まだ始業までには余裕がある。
俺はバットを片手に校庭へ出ることにした。もちろん素振りのためだ。
俺がいつもバットを肌身（はだみ）離さず、素振りをしている、という既成事実を作らなければならない。

いつの間にか日差しは強くなっていた。
登校してくるクラスメートたちを尻目に、俺は校舎脇の日陰を陣取る。
別に俺は文系じゃないが、かといって体育系でもない。
いきなり素振りなんか始めたら筋肉痛でも起こすかもしれないな。…一応、準備体操から始めるか。
…その様子はとても健康的でさわやかそうに見えるに違いない。…俺の内心とは裏腹に。
金属バットを握り締め、軽く振る。…手ごたえは決して軽くない。だがその分、いざという時に頼もしい武器となるだけの重みがあった。
もちろん、武器として使う時が訪れないことを祈るしかない。
…これを持つことによって、俺への何らかの攻撃が躊躇されるかもしれない。その効果に期待したかった。
「あれぇ!?　圭ちゃん!?!?　あんた何やってんの!?」
素っ頓狂な声が浴びせられぎょっとした。登校してきた魅音とレナだった。
「わ、圭一くん、…野球部だよ？　野球部だよ??」
「先に行ったたって言われて驚いたけど……圭ちゃん、あんた何やってるわけぇ？」
「見てわからないかよ。素振りだよ甲子園だよ。別にダイエットでもいいぞ。」

「…ダイエットって圭ちゃん、そんなに太ってたっけぇ？」
「あぁ知らなかったろ。実は三段腹なんだ。モチモチでタプタプなんだぞ。」
「…モ、モチモチでタプタプ……。」
「……レナ。変な想像しなくていいぞ。」
レナの下品な想像をかき乱すため、ぐしゃぐしゃと乱暴にその頭を撫でてやる。……その頭は、日光を受けてとても温かかった…。
「じゃあまぁ、頑張って県大会を目指してちょうだいよ。おじさん、応援してるわ。」
「…県立大島が強いらしいよ。左腕の亀田くんがすごいんだって。…頑張ってね！」
なんだかいつの間にか球児にされてしまったが、まぁいい……。
確かに俺が本当に出場したら甲子園なんてオチャノコサイサイだろう。
何しろ、ピッチャーもキャッチャーも俺ひとりなのだ。自分で投げて、投げたボールを追い抜いてキャッチャーに早変わりし、それをキャッチできるだけの超々瞬発力があるのなら。
その光景のあまりのマヌケさにしばし苦笑する…。
それから我に返り、俺は持っていたバットで地面を強打した。
「………くそッ！！！　何笑ってんだよ、俺ッ！！！」
何度も何度も地面を殴りつける。…その度にがつんがつんと伝わる振動が痛かった。

あんな風に微笑まれたら…俺は………俺は…ッ‼　何であいつらといつものように親しげに会話を交わしちまってるんだよ⁉

誰にも気を許すなって、誰も信用できないって、そういくら自分に言い聞かせても……あんな風に微笑まれたら……俺はッ‼　くそくそ、くそくそくそッ‼

やさしく微笑む仲間たちに魔性が潜んでいることを俺はよく知っているじゃないか！

……でも……やっぱり信じられないよ。

あんな二重人格みたいなことって本当にあるのか…⁉

レナが医者で告白したように……オヤシロさまに取り憑かれてたんじゃないだろうか…？

つまり……オヤシロさまという超常存在が実在して、みんなに憑依して俺の命を狙っている…？

あぁ…そうだったらどんなにいいことだろう…。みんなは元からいい友人で、全てはオヤシロさまのせいなのだ…。

「前原圭一の馬鹿野郎ッ！！！！！　だからッ！」

そう腹の底から力の限り叫び、思い切りバットを振り上げる。

「…甘えるんじゃねぇぇぇぇぇぇッ！！！！」

渾身の叫びと共に、振り上げた金属バットで何度も大地を叩きのめす。

ひとつ殴る度に、自分の甘さを打ち消していく…。
殴る。忘れろ。殴る。甘えるな。殴る。敵を知れ。殴る。殺されてたまるか。
肩で息をしながらようやく冷静さを取り戻したころ、始業の振鈴が聞こえてきたのだった……。

■どうして同じなの？

何かをずっと考え続けているようで、…そしてずっと緊張を強いられているようで。……それは、放送の終わった砂嵐しか映らないテレビを一晩中見せ続けられているような苦行にも似ていた。
それは途中から苦にならなくなり、……気付けば、時計の短針が、目で追えるほどにぐるぐると高速で回り始め…、聞きなれたカランカラーンという音が聞こえてくる。
はっと気付けば、…………それは終業のチャイムだった。
ついさっき、始業を知らせるチャイムを聞いたばかりのように思う。……でも、今日の全ての授業は終わり、いつの間にかカーテン越しに入ってくる日光も、朝日とは違う彩りを添えていた。

全身の緊張が解け、俺は深く息を吐く。
一日中、気を張り詰めているような、眠っているような、どっちともつかない灰色の時間だった。それから解放されたことが心地よくもあり、また学校という神聖な日常が侵されずに済んだという安堵にも感じられた。
だが、だからといってこれからも何も起こらないという保証はないし、明日の学校の安全も保証されているわけじゃない。
おはぎの警告を受けた。今朝は車で襲ってさえきた。……あれさえも警告なら、……さらにその次は何が訪れるというのか…？　俺はそれに、永遠に怯え続けていかなくてはならない…。いつまでこんな気持ちで暮らさなければならないのだろう…。耐えるだけで、光明の見えない責め苦は、俺を少しずつ痛めつけている。
「圭一くん！　やろやろ！　部活の時間なんだよ。だよ！」
突然のレナの声に俺は我に返った。
「ほらほら圭ちゃん、ぼーっとしない！　机を寄せて寄せて！」
みんなはまたいつものように、机を向かい合わせている。そう、楽しい楽しい部活の時間なのだ。
だが俺はそれに加わるつもりはない。部活に加われば帰りは遅くなり、…寂しい道をレナや

魅音と帰らなければならなくなる。………そこで、……周りに誰もいなくなった時、どんなことを言われるのか、告げられるのか、警告されるのか、……それが恐ろしかった。
だから俺は机の中身を乱雑にカバンに詰め込み帰り支度を始める。
俺は先に帰るよ、という言葉を出すことができない、自分なりの女々しいジェスチャーだった。
「……なんだよ圭ちゃん。今日も直帰なわけぇ…？」
魅音の口調は露骨に不満げだった。
「…気分が乗らないんだ。しばらく放っといてくんないかな。」
俺の口から出た言葉は、魅音の不満げな様子に負けないくらい不満げな声色だった。
……空気が乾いた気がした。
沙都子が何か言おうとしたが、その空気を嫌ったのか、言葉を飲み込むと黙ってしまう。
誰も何も言わない。引き止めない。…だから俺は教室を出て行ってもいいはずだった。だが四人の眼差しはまるで昆虫標本の虫ピンのように、俺をこの場に縫い止めていた。
その乾いた空気を破ったのはレナだった。
「………圭一くん、…やっぱり女の子と一緒に遊ぶのなんか、…嫌だったかな。……かな。」

胸の内に痛みの走る嫌な声色だった。
この痛みで俺が死ねるなら、痛みを感じてしまう甘えた自分をいっそ殺してほしかった。
俺は胸元を掻きむしり、俺を縫い止めている虫ピンを乱暴に引き抜く。
「そういうわけじゃねえよ…！」
それ以上はどんな言葉を続けても、自分も傷つけてしまいそうだったのでぐっと飲み込んだ。
そこで区切り、俺は踵を返して教室を出て行く。
もう、その背中には何の言葉もかけられることはなかった。

学校から自宅までの短くない距離は、退屈なものだったが、俺は気を許すことはなかった。
ぎゅっと握り締めた金属バットの柄はすでに汗でぬめっている。それに気付き、俺はいざという時、汗で滑らないよう袖で拭い取った。
今朝の一件以来、俺は車の気配には敏感になっていた。
だから歩きながらもじっと耳を澄ませ、不穏な音・気配の接近を探っている…。
だからこそ気が付いた。

………ひたひた、……ひたひた。

それは紛れもない足音だった。その足音は少し前から俺をぴったりつけていた。
気配から察するに…………それはひとりだった。…だが油断する気はない。
今朝の車のように、俺を襲うのに都合のいい場所にたどり着くまでつけてくる気だろうか…？
だとしたらこのまま歩き続けるのは得策（とくさく）ではない。
俺は歩みを止めると、後ろを振り返った。
木々でうっそうとした林道は、まるで初めから誰もいなかったかのように静まりかえっている…。
だが俺は騙されない。確かに足音がずっとつけてきていたのだ。
そして俺が立ち止まると同時にその足音も止（や）んだ。…つまり、後続者は俺との距離を維持したいのだ。それは紛れもなく、俺を意識している証拠だった。
息を殺し、その気配が焦（じ）れて動き出すのを待つ…。
木々がそよ風にざわめく。ひぐらしも不愉快に合唱し、俺の集中力を乱そうとする。
五分は経ったのか。それとも三十分はこうしているのか…。
……窒息（ちっそく）しそうなくらい息がつまり、焦れたのは俺の方だった。
その木陰（こかげ）で息を殺してこちらをうかがっているのは間違いないのだ。…なら…こっちから仕

掛けてやる…！

俺はバットの柄を握り直す。…いつでも振り下ろせるよう、それを肩に担ぎ上げた。

「…おいッ！！！　いるんだろ、そこにッ！！！」

力の限り精一杯、木陰でやり過ごそうとするそいつに怒鳴りつけた。

だが…その木陰の気配は微動だにしない。

俺が見つけるその瞬間まで、自ら正体を明かすつもりはないのか……。くそ…！

「わかってんだよッ！！！　そこにいるのはよッ！！！！！」

もう一度怒鳴ったが、それでもそいつは動かなかった。ならこっちから近付いてやる!!

慎重に警戒しながら、一歩一歩近付いてゆく…。木陰を大きく回りこむと…そこには人影があった。その人影は……小動物のように縮こまっていた。

「………レ、……レナ…！」

…レナは俺に見つかったことに気付くと観念した表情を浮かべた。

だが申し訳なさそうにするだけで、決して口を開くことはなかった。

「……何か俺に用かよッ…！」

沈黙を許さない俺は、間髪入れずに怒鳴りつける。

「べ、別に……その………えっと…、」

レナは目に涙を浮かべながら狼狽する。だが俺をつけていたことは明白だった。
「部活はどうしたんだよ。」
「……け……圭一くんがお休みしたから…レナもお休み……。」
「関係ないだろ！　俺なんか気にしないで遊んでろよ！」
「…だ、…だって……圭一くんのこと…心配で……。」
ここ最近の自分の振る舞いを思えば、変に見えても不思議はあるまい。……だからレナが気を遣って……、という流れは一見自然なように思えた。
……だが、俺は安易に気を許さないよう気をつける。もう、騙されたりはしない。だったらこんな尾行するような真似はしなくていいはずなのだ。…下校する俺に声をかけ、堂々とついてくればいい。
だがレナはそうしなかった。
常に俺と一定の距離を保ち、歩速を合わせていた。あまつさえ足音まで合わせ、その気配を巧みに隠そうとしていた。
そして俺が気配に気付いたことを気取ると今度は息を殺し、こっそりと隠れてやり過ごそうとしたのだ。
慈悲を請うような表情を弱々しく浮かべているが、レナがしていたことは間違いなく………

尾行なのだ。
「もうついてくんなよ。」
「は、……はぅ…。」
俺はレナを睨み付けたまま、ゆっくり歩き出す。
少し歩いたところで、レナが俺の制止を無視して歩き出したので、もう一度怒鳴りつけた。
「ついてくるなって言ってるだろッ！！！」
「ひぅッ!! ……だ、だって！ …レナの家も同じ方向……！」
「じゃあレナが先を歩けよ!! レナが見えなくなったら俺も歩く。」
バットを乱暴に振り、レナに前を歩くよう促した。
「レ、…レナは…圭一くんと一緒に……、帰りたい…な……。」
哀れみの表情を浮かべながら、俺の胸の痛いところを知り尽くした声色で、レナは細く鳴いた。
……それが無性に腹立たしかった。嘘だからだ。一緒に帰りたいなら声をかければよかったのだ。今さらそんな出任せを…ッ!! 俺の心を掻き毟るような声色をわざわざ選んで!!
「ご、ごごご、ごめんなさいごめんなさい…ッ！！！」
俺の煮えくり返るような腹の底が、そのまま表情に出ていたようだ。……俺が何も口に出さ

ずとも、レナは勝手に謝り始める。
「わかったならほら、行けよ！」
バットを振り、先を歩くよう改めて促す。レナはバットと俺を何度か見比べてから、おずおずと歩き出そうとし、また歩みを止めた。
「…早く行けよ。早くッ!!」
「い、行くから！　そのバットをやめてよ…!!　こ、怖いの…ッ!!」
レナは自らを庇うようにしながら、俺とバットを交互に指し示した。このバットが野球に使うためのものでないことに気付いているのかもしれない。
俺はバットを下ろし、だけれど油断せず慎重に、レナに道を空ける。
「行けよ。…これなら文句ないだろ？」
「…………………………。」
レナにはもはや抗う術はないようだった。…俺を刺激しないように、おどおどしながら脇を抜けていく。
そのままその後ろ姿を眺めていると、大して歩かない内にぴたりと立ち止まった。俺に背中を向けたままで。
「おい、立ち止まるなよ……！」

その時、一際強い風がざぁっと吹き、砂粒が顔を激しく叩いた。
目にも砂粒が飛び込み、視界を涙でぐちゃぐちゃにしてしまう…！
俺は左手で目をごしごしとこすり、そのわずかな隙を補うため、右手では闇雲にバットを振り回した。
だが俺のわずかな隙に、レナが振り返って襲い掛かってくるということはなかった。
…いや、…襲い掛かってこないどころか、レナは身動きひとつしなかった。…それはまるで時間が凍ってしまったかのように錯覚すらさせる不思議な光景だった。……だが、通り過ぎた風の軌跡を、レナのスカートが優雅に描き、時間は決して止まっていないことを無言で教えてくれた…。
スカートの波がゆるりと落ち着き、静寂が戻る…。
その時、俺の中のもうひとりの俺が、何かの危機を鋭く警告した……。
……はっとする。…空気の匂いが……変わった…。
いつの間にか、どんな天変地異が起こっても不思議でないような、奇妙な空気で世界が満たされていた。
その空気はまるで透明なコンクリートで出来ていて、俺とレナの二人をこの空間に埋めて固めてしまったかのようだった。

微動だにしないレナ。……俺もその背中をじっと凝視し、動くことができない。しかし、だからといって時間が止まっているわけではない。…確かに時間は経過し、来るべき何かの瞬間までを埋めているだけなのだ。

その静寂を初めに破ったのはレナだった。

とっさに身構える。……目の前のレナが、レナによく似た別人に豹変したような気がしたからだ。

だが……その声は俺のよく知った声で、困惑に満ちた哀れなものだった。俺は不謹慎にも、その哀れな声に安堵する…。

「……あ、あの、そのごめんね！　……そのっ、聞いてもいい!?」

振り返るのすらためらって、レナは必死で声を絞り出していた。…震えながら。

「…なんだよ。」

「あ、…あのね、あのね！　ど、どうしてバットなんか持ってるのかな。…かなッ！」

…レナの質問は決して逸脱したものではなかった。…昨日までの俺はこんなもの持ち歩いていないのだから。

「俺が何を持ってたっていいだろ。」

「でも、でも…昨日まで持ってなかったし…！　……ど、どうして突然…ッ！」

「別に突然でもいいだろ。…俺がバットを持ってるとおかしいかよ。」
「だ、だって圭一くん、…野球とかしない人だったでしょ⁉　おかしいよ…！」
…野球なんかしないのは事実だが、それでも、ここまでおかしいと断言されるほどとは思わなかった。
「…突然、野球がしたくなったんだよ。それじゃおかしいか？」
レナの聞きたいことが今ひとつ見えないが、事細かに説明するのは面倒くさかった。
「おかしいよ…！」
即答され、ちょっとむっとする。
「突然野球がしたくなった。素振りがしたくなったから、バットを持ち歩いてる。それのどこが変なんだよ。」
「変。おかしい。絶対。なんで圭一くんまで…。」
「ぶつくさとうるせえ奴だなぁ。…俺がスポーツに目覚めるのがそんなに変かよ‼」
話を終わらせようと乱暴に凄む。レナへの疑惑が晴れない以上、説明の義務はまったくないのだ。……いや、レナのせいでバットを持ち歩くはめになったとすら言い切れるのだから！
「………ご、ごめんねごめんね…！　そんなに怒らないで…‼」
レナは振り返ることもできず、びくびくと謝罪の言葉を並べる。

「さ、最後に一個だけ!! 一個だけ教えて…!!」
「…これ以上、話す気も教える気もねぇよ。早く行けよ!!」
強く怒鳴りつけるとレナがびくっと弾かれたように震えだす。…そのあまりの痛々しい様子に胸がちりちりと痛む…。
怖がっているにもかかわらず、レナは強固に踏み止まっていた。
俺がもう一押し怒鳴りつけようとした矢先に、レナが最後の疑問を口にした。
「な、なんでバットまで同じなのッ!?!?」
「……お前、何言ってんだ…?」
レナの論点がよく見えない。
「だから…ッ、…なんでバットまで同じなのかなってッ！！！」
「何を言ってんだか全然わかんねぇよ！ もっとはっきり言えッ！！！」
それでもレナは振り返らない。背中を向けたまま、ぐっと息を飲み込んでから、叫んだ。
「だから………どうしてバットまで悟史くんと同じなのッ!?!?」
「悟史…って………え…？」
思わぬ名前が出、一瞬ぽかんとしてしまった。
悟史ってのは…確か去年転校した生徒だ。………いや、違う。レナは転校したと誤魔化した

が、大石さんははっきり失踪したと言った。
俺の席を去年まで使っていた生徒で、去年のオヤシロさまの祟りで「鬼隠し」にあったと思われる生徒だ。
失踪にいたる詳細は一切知らない。同居する叔母が綿流しの晩に麻薬常用者に殺され、そのしばらく後に忽然と失踪、行方不明になった………、
その悟史と俺が……何だって!?
俺は握り締めたバットに目線を移す。………ひょっとして…。
バットの柄の部分、はっきりと記されていた。
〝北条悟史〟

ぞっとする…。俺が自分の身を守る最後の砦と思って信頼して今日一日持ち歩いたバットが、……それすらも悟史のものだったなんて…。悟史の席に座り、悟史のバットを握り、………そして俺は、悟史と同じように「鬼隠し」にあって消されてしまうのか…?
「…ぁ、…ぁあ。これ、悟史のバットだったんだな。…誰も使ってなかったんでちょっと借りたんだよ。…いいだろそれくらい!」
「そ、…そんなことじゃないのッ！！！」

レナのその言い方はまるで、このバットが触れてはならないものであるかのような…そんな響きがあった。神棚へのお供え物とか、…死者への遺品だとか…、そんな感じの。
切り返せず戸惑うだけの俺を待たず、レナは続ける。
「…悟史くんの時と…どうして……どうしてそんなにまで同じなのッ!?」
レナが言っているのは、このバットが悟史の物だという以上の何かだ。
「…悟史くんもそうだった!! 野球チームには入ってたけど…本当は野球なんか好きじゃない人だったのに………!」
「それが俺とどう関係が……、」
「悟史くんも、…ある日突然バットを持ち歩き始めたのッ!!! チームに入ってただけで…スポーツなんかしない人だったのに…!!」
それがどうした…! そう言おうとして口をつぐむ。…よ、よく聞け圭一! レナは何か重要なことを告げようとしている…。
「悟史くんもね、…ある日突然、ひとりで登校するようになったの。圭一くんみたいに!!! そしてね、ある日突然、素振りの練習を始めたの。圭一くんみたいに!!! そしてね、ある日突然、バットを持ち歩くようになったの。圭一くんみたいにッ!!!! そしてね、ある日突然………ッ、」

そこでレナは言葉を飲み込んでしまう。……どうして⁉　その先が知りたいんだ！

「……そしてある日突然、…何だよ⁉　何なんだよッ⁉　おいッ！！！」

俺がいくら問い掛けようとも、もうレナは沈黙を守るだけ。…その無言の背中が無性に薄気味悪かった。

俺が騒ぐのをやめると辺りに静寂が戻る。…そしてようやく、話の全容が飲み込めた。

俺の一連の行為が…悟史のそれとまったく同じだと言っているのだ。

それは…どういうことだ⁉　俺は今の今まで悟史のことなんか忘れていた。

悟史を意識した覚えは一切ない。それどころか、悟史が何をしてたかなどまったく知らないのだ。

俺が今日取った一連の行動は、考えに考えた末に取った俺のオリジナルの行動のはずだ。

……それが…悟史とまったく同じだと言うのか…？？？

じゃあ悟史は……、いや…そんなことよりも…‼

俺と悟史の経過が同じ以上、その先も同じになる可能性は極めて高い…⁇

「レナ、言えよッ‼　…ある日突然、…悟史はどうしたんだよッ⁉」

レナは知っているのだ…！　悟史がどうなったのかを。…いや、過去の男のことなんかはどうでもいい！　レナは…これから俺がどうなるのかを…知っているッ！！！

「こ、答えろよレナ!! 悟史は…どうしたんだよッ！！！！」
そう言いながら、乱暴にレナの肩を摑み、無理やりこっちを向かせた。
強引にこちらを振り向かせた瞬間、俺の全身を電気が走り抜け、直前までの強気が電球が切れてしまうくらいあっさりと、引いて消えた…。

「言ったよね。圭一くん。」
それは、知らない誰かだった。少なくともたった今まで話していた竜宮レナでは断じてない。
レナにそっくりなのに、レナじゃない、……そう、あの日に会った、あの、誰か……。
その声には、ほんの数秒前まで宿していた怯えや激情は一切ない。…俺は安易に振り向かせたことをこれ以上ないくらいに後悔する…。自分で、開いてはならない扉を開けてしまったのだ……!?
あの……冷たく針のように突き刺さる眼差しに、鋭利な刃物の切れ込みを思わせる笑みを浮かべた口元……。背筋が凍りつき、思考すらも霜の中に閉ざしていく。
レナの両の眼に貫かれ、俺は目線すら逸らせない。……そしてあの日の恐怖を思い出させるように、レナはその息がかかるくらい間近に顔を寄せた。
俺の視界の全てがレナで埋まる。……そして…切れ込んだ口元をさらに鋭利に、孤月のよう

に切れ込ませ、にぃ…と笑った。

「言ったよね。圭一くん。」

ふた呼吸ほど置いて、レナがもう一度同じ言葉を繰り返す。

「悟史くんはね、…〝転校〟しちゃったの。」

「て、……転校って……なんだよ…。」

…俺の辞書の中に、レナの言うような意味の転校という単語はない…。レナの言う転校という言葉は、……俺が知るその言葉より、もっともっと不吉な何かを宿している…。

喉も唇もからからに乾き、相槌を打つこともできなかった。ただ、ごくりと唾を飲み込むことができるだけだ。……レナにはそれが頷いたように見えたようだった。

俺をその眼差しから解放し、すっと二、三歩下がった。

その途端、俺のひざがかくんと抜け、だらしなく両ひざを地面につける。

……感情のない笑みを浮かべたレナと、その前に呆然とひざまずく俺……。それはきっと異様な光景だったに違いない…。

レナはそんな無様な俺を、嘲笑いもしなければ手を差し伸べもしなかった。

だが、俺の眼をただ静かにじっと射抜き、立つことも逃げることも許さない。

金属バットは確かに俺の手にあった。

だが……、蛇に睨まれた蛙のような俺には何の役にも立たない。
脂汗が全身を伝い、ぽたぽたと零れ落ちるのがわかる…。
「…しないよね？　圭一くんは。」
…無限とも思える時間の檻から、ようやくレナは解放する。だがその問いかけは主語を欠いた、とても抽象的なものだった。
ごくりともう一度唾を飲み込み、その問いの意味を尋ねる。
「……な、…何をだよ…。…お、……俺が、何をしないって………？」
「〝転校〟」

■二重人格？

民放のバラエティ番組が不謹慎な事件を取り上げ、面白おかしく報道することは今も昔も変わらない。

「よく映画などに登場しますが、簡単に言うとどのようなものでしょうか。」

「複数の人格を持つことによる逃避と考えられています。」

「多重人格は逃避のひとつなのですか？」

「左様です。そのメカニズムは完全には解明されていませんが、精神を守るために脳が行なう防御作用のひとつではないかと考えられています。これはとても自然な現象で、健常者であっても日々無自覚に行なっているありふれたものなのです。」

「例えば、受験を間近に控えた学生が、受験をストレスに思うがあまりに受験を忘れて遊びながら過ごすという逃避は、わりとよくある、現実逃避のケースだと思うんですけど、これも多重人格に入るのですか？」

「そうですね。受験というストレスを持たないもう一人の自分を作り出しているわけです。例えば、家と職場で振る舞いの違う人っておられるでしょう。家では怖い奥さんの

尻に敷かれて従順だけれど、職場では部下を怒鳴り散らす鬼上司で通っているという方です。これは逃避とは違いますが、環境に応じて自分にもっともストレスの少ない人格を作り出し、それらを使い分けているケースと言えるでしょう。多重人格は言葉だけが独り歩きしていますが、非常にありふれた脳の防御作用であることを誤解しないでいただきたいのです。」

「なるほど。それの常軌が逸してしまうと、世間一般で言われる多重人格というケースになるわけですね？」

「…うーん、一概には言えませんが。…そう提唱する説もありますし、否定する説もあります。諸説紛々です。多重人格は脳の防御作用であるとする説。それから脳や心の障害であるとする説。ある種の欲求行動ではないかとする説。たくさんあります。」

「では精神医学の世界ではまだ、多重人格というのは解明されていない現象なんですか？」

「残念ながらそうなります。今後の研究が期待されます。」

「でもでも～、多重人格なんて何だかカッコイイですよね～！　どういう人が多重人格になれるんですかぁ？」

「なれると言いますか…、なりやすいと言いますか…。最近の研究では、遺伝と心因が

複雑に絡み合い…。中でも幼少期の虐待が大きく作用するのではないかと言われています。」
「そう言えば、このA君も幼児虐待を受けてるんですよね〜。カワイソ〜…。」
「七つの人格を持つ青年A。ではVTRの続きをどうぞ。…ですがその前にコマーシャル!!」


6月24日(金)
夕方

俺と悟史が…何だって？

俺が良かれと思ってしてきた今日一日の行為は、全て悟史の模倣に過ぎなかったのだ。

ならつまり、悟史も…俺と同じ境遇だったのだろうか……？

仲良く過ごしてきた仲間たちが豹変し…何の理由もなく、…いや、…あるいは俺が気付いていないだけなのだろうか…。とにかくとにかくとにかく！　身に覚えもなく、悟史もまた命を狙われるようになったのだろうか…？

そして俺と同じように悩みぬき、護身のためにバットを取り、素振りと偽って常に持ち歩いた…？

そしてある日、突然……、

〝転校しちゃったの。〟

全身の血流に冷たくて痺れるものが流れていく。それらは心臓から近い順に体内を巡り、頭のてっぺんから足のつま先まで…満遍なく凍えさせた。

転校ってなんだよ。転校ってなんだよ。転校した先には悟史がいるのか？　そいつだけは俺のことを理解してくれるのか？　なんでこんなことになってしまったのかを全て教えてくれるのか？　それより転校先ってどこだよ!?　…転校ってなんだよ。転校ってなんだよ……。

いつの間にか、自宅の扉の前だった。

ひんやりとしたノブは重い。……留守？　それほど珍しいことでもないので、俺はポケットをまさぐり、オットセイのキーホルダーの付いたカギを取り出す。

玄関に入り、靴を脱ごうとしたその瞬間ッ、背筋が凍りついた。

…………な、……なんだ、…………これ…………？

……俺の目の前にある光景に凍りついたんじゃない。俺の、背後の、…それに凍りついたのだ。

口でうまく説明できない。……だって、玄関の扉を、俺にぴったりくっついて入ってきたヤツがいるからだ…。

まるで学校のクラスメートがふざけてそうするかのように、…そいつはぴったりと俺の背後にくっついて立っている…。

嘘だろ…？　絶対に気のせいだ…。

こんな密着の距離で、玄関に入るまで俺に気配を悟られずについてくるなんて真似、常識で

考えてできるわけがない…。
だが、紛れもなく、後ろのそいつはそこにいた。
お、……おいおい圭一。…後ろにいるのに、何で「いる」ってわかるんだよ…!?
……だって……髪が流れる音がした。
そんな音、するわけない。そんなのは気配だ。
……だって……まばたきをする音がした。
そんな音、するわけないだろ。前原圭一！
もっとも野性に近い全ての知覚が背後の気配を警告し、もっとも理性的な一般常識が、俺の背後の気配を気のせいだと否定する。
こんなのは気のせいだ、後ろには誰もいないと頭の中の不気味なイメージをかき乱す。
だが同時に、「いない」なら、今後ろに「いる」のは何なんだよ……という不気味さも背筋を昇ってくる。
むしろ…誰かいてくれた方がいいんじゃないのか…?
もしも……振り向いて誰もいなかったら……お前はそれを受け入れられるのか…?
首を後ろに向けるだけで、俺の疑問は全て解決する。…だが、それが簡単にできるほど…俺は勇敢(ゆうかん)ではなかった…。

そうだ……声をかけてみよう…。後ろの人が…答えてくれるかもしれない…。
迷走した思考が、振り返らずに済むならなんでもいい…と提案した方法はそれだった。…冷静に考えれば…それによって何の解決にもならないことに気付けるのに……。でも、今の俺はそれ以外に背後の気配を確かめる方法が思いつかなかった…。
「ど、…………どなたですか……？」
とても自分のものと思えないかすれた声が、喉の奥から微かにこぼれる。
後ろのそいつは答えあぐねるかのように感じられた。
…感じられた、なんてことがわかるわけない！　落ち着け圭一、これは気のせいなんだよ…!!　後ろには誰もいない、だから誰も答えるわけなどッ！！！
その時、俺は確かに聞いた。
俺の問いかけに躊躇しながらも、答えようと。……すぅ、と息を飲み込む音を確かに聞いた。
聞いた。聞いた。はっきり聞いた。
女だった。若い女だった。
誰かは知らないけれど。とにかくとにかく…、
…い、た。

俺の中の一粒の勇気、蛮勇が、俺に叫びをあげさせるというもっとも原始的かつ、今のこの状況を解決するのに相応しい力を与えてくれた。
全身全霊の力を肺から、喉から解放し、脳内の全ての思考を切断する。
全ての思考と感情を殺し、俺は崩れ落ちるように倒れながら、だけれども体をひねりながら後ろを振り返った。
確かにいた。そこにはいた。誰かがいた。俺が振り返り、後方を視界で照らすまで確かにいた！
仰向けに倒れながら、虚空に残る気配を目でなぞる…。…まさか…こいつは透明なヤツで…いないように見えて…まだここに立ち続けている…？？？
叫びとともに堰止めていた感情の波が一気にあふれ出してくる。
だが俺はその感情というダムの決壊に極めて冷静だった。…濁流のように押し寄せる感情の波を上手に誘導し…攻撃性に転化する。今まさに眼前にある異常事態を打開するには…絶対に必要な感情だった。俺は極めて冷静に、激情に身を委ねる…。
金属バットは手に吸い付くように、ぴったりと右腕の中にあった。
「おおぉぉおおぉぉおおぉぉおッ！！！！！」

銀に輝く金属塊の残像が左から右へ玄関を薙ぐ！！！！

バットは右の壁に激突し、凄まじい反発力で先端を跳ね返した。…俺は極めて冷静にその跳ね返る力と方向を調整し、左方向への攻撃として切り返す。

靴箱の扉をぶち割った。今の二振りは空を切ったが、敵に与えた心理効果は大きいようだった。…空間に焦りが漏れ出しているのが感じられたからだ。

必要なのは攻撃だけではなかったのだ。…靴箱にめり込んだバットを引き抜き、そのまま体ごとの大回転を加え、咆哮する。

「うッおぉおおおぉおぉおおぉッッ！！！！」

叫びが空気を揺るがし、続けて繰り出される渾身の一撃にさらなる破壊力を上乗せする…!!

ひしゃげ、砕ける壮絶な禍々しき異音。

一打必殺の名に相応しい渾身の強打が、情け容赦なしに靴箱の天板を叩き潰した時に放つ断末魔の音だった。

いずれの攻撃も敵には当たらなかったが、俺の激情は確かにぶち当たったようだった。

俺が肩で息をし、全身を熱い汗でぬらす頃には、あの、いないけどいる見えない敵は霧散していた。

敵の退散を気配で確認すると俺は、俺は玄関にカギを下ろしチェーンもかける。

まさか退散と見せかけて、すでに俺の家の中に踏み込んだのでは⁉⁉
再び攻撃性をむき出しにし、家の中の気配を探る。……だがその気配はなかった。
撃退に、成功したのだ。
…ははは、ははははは‼　はっはははは‼　やったぞ、やった、撃退したッ‼
……その途端、全身の力が抜け、大きなため息がこぼれ出た。
たった今まで制限を加えていた脳内分泌物がぐちゃぐちゃと混ざり合い、恐怖感やら達成感やら不信感やらを混ぜこぜにして、俺に流れ込んできた。
それらの感情をひとつひとつ相手にせず、疲労感という最強の感情でねじ伏せる。
この瞬間においても、…俺は冷静だった。
家中の戸締りを再確認した後、俺は二階の自分の部屋に戻りカーテンを引いた。
それから直立して、少し頭を後ろへそらし、……雑念を全て消し去り、脳内をさらに冷静に冷却する…。

今の玄関の出来事は一体何なんだ……。
確かにいた。
こうして冷静になれば、実は錯乱状態の自分が見た幻だと思えるんじゃないかと思ったが

……やはりそうとは思えない。
落ち着け前原圭一……。もっともっとクールに……。
だがいくら冷静に考えても、…さっきの出来事は幻なんかじゃない。
さっきのは明らかに超常現象で、間違いなく俺の背後に何かがいた。俺が錯乱したとか混乱したとか幻影を見たとか、そんなのじゃない!!
証拠？　ひとつだけある。……俺が「どなたですか？」と聞いたとき、後ろのそいつは答えようとして息を吸った。その「音」ははっきりと俺の耳に聞こえたのだ!!
あぁ、自分で自分にこうして言い聞かせなきゃ、今の出来事がまるで俺が錯乱したみたいに思えちまう!!　違うんだ、自分でわかってるだろ!?　いたよ。いたんだよ!!　確かにいたじゃねぇか!!　しかもそれはほんの数秒前の出来事だぞ!?　それをもう俺自らが疑っちまうのかよ!?　いたいた、確かにいたんだ!!　そして、俺の攻撃は空を切ったけど、確かにその何ものかを追い払ったんだ!!　………くそ、くそくそくそ！！！
……俺が今おかれている状況は依然不透明だ。
オヤシロさまの祟りという超常現象に取り込まれているか、それを妄信する、あるいは模倣する村人たちに仕組まれているのか。

いずれにしろ動機は不明。その遠回しなやり口も謎のままだ。

人間が犯人なら…、………それはレナたちが犯人であることを認めることになるのだが……。とにかく、解決はまだ容易だ。大石さんたち警察は必ずや敵を検挙してくれる。日本の警察は世界一の検挙率なんだ。絶対に全てを暴いて捕らえてくれる！

だが。

……もしもオヤシロさまの祟りが実在するとしたら……どうだろう。

大石さんは祟りなど実在しない、とはっきり明言した。

あの時はその言葉をとても頼もしく思ったが……、今こうして、人間が犯人でない可能性が浮上してくると……急に頼りなくなる。さっきのあれは間違いなく人間ではなかった。人間以外の人知を超えた何かだった！

大石さんに一言、これはオヤシロさまの祟りなんです、と伝えたらどうなる？

……どういう反応を示すか想像できないが、大石さんとの距離が急激に開くのだけは間違いないだろう。

ただでさえ味方が少なく、また祟りか否かも断定できない今、そんな行為は何の得にもならない…。

ついさっき玄関であった「事実」は俺の胸だけにしまった方がいい。…時計の裏に隠してあ

るメモにも今の出来事は書かない方がいい。
自分が、実は冷静だと思っているこの状態がすでに錯乱状態で、つい玄関で暴れてしまった……という可能性だって、ほんのわずかに残されているのだから……。
そうだったらどんなにいいだろう。オヤシロさまの祟りを否定できる。
だがオヤシロさまの祟りを否定すれば、それはレナたちが犯人であることを認めることになる。
レナたちが犯人であることを否定すれば、それはオヤシロさまの祟りを認めることになり…。
両方とも否定すれば……、それは自分が異常であることを認めることになる。
三つの選びようもない選択肢が三すくみになり、それらはドロドロと渦を描きながら交じり合って、俺の目をぐるぐると回していく…。
もう一度、俺は直立し、頭を後ろへ軽く反らして頭を冷却した。
…落ち着け圭一。……起こったことだけが真実なんだ。…それ以上のことを考えるのはやめるんだ……。
だけど、……考えずにはいられない。
……実は俺は異常で、今までの出来事が幻だったとしたら…どんなにいいだろう。
オヤシロさまの祟りは実在しないし、レナたちも相変わらず最高の友人で……。

いっそ、狂ってしまいたい。
生まれて初めて、俺はそれを望んだ。

■ひとりぼっちの籠城

階下の電話がけたたましく鳴り出す。
基本的に俺にかかってくる電話はないから、俺が進んで電話を取ることは少なかった。
だが今は親は留守だから仕方がない。もそもそと寝床を抜け出し、階下へ降りていく。
「……もしもし、前原です。」
「圭一？　お母さんだけど。」
…直感的に嫌な予感がした。買い物を頼まれると思ったからだ。だから先に言ってやることにする。
「何？　別に俺、夕食はカップラーメンでもいいよ。まだ買い置きがいっぱいあったでしょ。」
先日、家族で買出しに行ったときカップラーメンを箱買いしてあるのだ。
本当はいろんな種類をいっぱい買いたかったが、高いからと断られ、好物のデカカップ豚骨(とんこつ)

ショウガ味を一ダースだけ買った。
だが両親はこってり系は苦手らしく手を出さない。なのでたっぷり在庫があるのだ。
「だからさ、買い物に行く必要はないんじゃないの？」
「圭一、買い物のお願いじゃないの。お父さんとお母さんね、お仕事の関係で急遽（きゅうきょ）、東京に行かなくちゃならなくなったの。」
「えぇッ…⁉　今から⁉」
それは本当に…唐突（とうとつ）だった。時計を見る。もう真っ暗の時間だった。
「うぅん、もう着いちゃってるの。お昼には出発してたからね。夕方に一度電話したんだけど、圭一、出なかったでしょ？」
……帰ってきてすぐ布団に飛び込んだ。…俺は電話の音にも気付かなかったのか。
しかし、東京は雛見沢からでは半端（はんぱ）な距離じゃない。車で高速をぶっ飛ばしたって六時間。
……新幹線（しんかんせん）ならもっと早いだろうが、とにかく、気軽に行けるような距離ではない。
「圭一もお父さんとお母さんの話を聞いてたからわかるかもしれないけど、お父さんのお仕事の契約がね、今ちょっとうまく行ってないの。」
言われてみれば昨夜、両親が仕事の不景気（ふけいき）な話をずっとしていたのを思い出す。
「お父さんはそういうのに繊細な人だから、このままだとお仕事にも影響が出ちゃうの。」

親父は芸術家特有のガラスのアイデンティティ、秋の空のような変わり易い感情の持ち主だ。

……俺が見る分には態度のでかい親父だと思うのだが、お袋が言うにはとても打たれ弱い人なのだそうだ。

「でも…そんなの電話でやり取りすればいいじゃないか！　わざわざ東京に行かなくったって……！」

「圭一、お父さんのお仕事なんだからもうちょっと応援してあげて、ね？　とにかく電話よりも直接会って話した方が早いの。誤解もないし。」

仕事の話を持ち出されては、息子の俺に何も言えることはない。

「だから帰るのは明日の晩になっちゃうの。圭一、ひとりで大丈夫よね？」

「別に死にゃしないよ。」

「………圭一、死んじゃうなんて軽々しく言っちゃやだめよ。…心配ごとがあったら相談してね。母さん、きっと相談に乗れると思うから。」

昨夜の俺が急に「俺が死んだら」なんて言い出したから、一応親として心配してくれてるのだろうか。……もっとも、相談したところで解決にならないとわかっているのが悲しかった。

だけど死ぬ気はない。…少なくとも、何もわからない内には絶対に。

「死なないよ。俺は。…足掻いてでも生き延びる。」

「そう。…じゃあね。明日の朝、ちゃんと起きるのよ。朝ごはんは食べてね。お風呂と歯磨きも忘れないのよ。」

「へいへい。……そんじゃ。」

電話はそれで終わった。

……たまに両親が仕事の打ち合わせで上京することはある。だが何しろ東京は遠いのだ。普通は電話で済ませてしまうはず。

仮に行くとしてもそれは事前に決まっていることで、こんなにも突然のことはない。

その辺に違和感というか…不自然な感覚がないとも言えなかった。

とにかく……事実だけを認識するなら。…今夜、この家は俺一人ということだ。

両親が仕事から帰ってきたら俺がいない、行方不明。蒸発。……過去五年間の一連の、オヤシロさまの祟りを思い返すと、あってもおかしくない。

そう言えば……そろそろ夜も更けてきた。

明かりが二階の俺の部屋にしか灯っていないのはまずいんじゃないだろうか？　敵に両親不在を、チャンスを教えてやってるようなものだ…。

それに気付くと、自分が今いるこの家が、今や安全地帯ではないかもしれないのに気付き始める…。

そうなのだ。この家が安全地帯なのは、両親と一緒にいるからという前提があるからだ。…それが崩れれば…、ここはただの袋小路（ふくろこうじ）と同じじゃないか……。
まず居間へ走り、明かりとテレビをつける。ボリュームは心持ち大きめに。
次に親父の書斎（しょさい）に走り、同じように明かりと音楽をつける。
これで、外からは両親が在宅しているように見えるはずだ。もう一度、家中を見回り、戸締りと隙がないかを確認する…。
……ベランダを見た時、洗濯物が出っ放しになっているのを見つけ青ざめた。これじゃバレバレだ！　早く取り込まないと…!!　乱雑に洗濯物を取り込み、お袋が不在である証拠を消す。
もう大丈夫だろうか…。………あ！　ガレージだ!!　両親は車で東京へは行かないが、興宮の駅までは車で行くだろう。
ガレージのシャッターが開けっ放しで車がないことが見え見えなのは…まずい!!
慌（あわ）てて表へ駆け出し、普段は閉めることのないガレージのシャッターを下ろす。
これで大丈夫…、あ、あとは新聞受けだ!!　新聞はいつもお袋が持ってきてる。昼に出発したということは…夕刊が入りっ放しだ!!
予感的中。郵便受けの中身を洗いざらい取り出し、玄関にぶちまけた。
……これで……今度こそ大丈夫なはず…。

そう言えば…さっき暴れて壊してしまった靴箱だが…このままはまずいだろうな。滑って転んで、持っていたバットで叩いてしまった…なんてことにしておくか…？にしても、このままで放置というのはまずい。…お袋に怒られる前に少しは片付けておいた方がいいだろう…。

納戸（なんど）にほうきとちりとりがあったのを思い出し、取りに行こうとしたところ、家の奥で再び電話が鳴った。

「もしもし、前原です。」

「あら、圭一くん？　お母さまはいらっしゃいますかしら。」

「あ、あの、今ちょっといないんですけど…。」

馬鹿か前原圭一!!　親の不在をわざわざ暴露（ばくろ）するな…!!　まだフォローできる、落ち着いて対処（たいしょ）するんだ…!

「あ、でも、すぐに戻ると思います…!!」

この切り返しも良くない…！　これじゃあ、また電話しますとか、戻ったらお電話を下さるようお願いしますとか、そんな風に続けられてしまう…!!

「なら結構です。大した話でもありませんから…。では、失礼しますわね。」

俺が恐れるような形にはならず、ほっとする。不幸中の幸いだった。

今の人は誰だろう。雰囲気からすればお袋の友達か何かだろうか。……だがもし、…ここに両親がいなくて、俺がひとりで留守番をしていることを知る何者かが、それをさらに確かめるために電話してきたのかもしれないじゃないか…。

今の電話は多分、雰囲気的にそうではないだろうが……、…いや、そんなの決め付けられない！　今の俺は、誰が敵かもわかってない状態なんだぞ!?　下手をすれば、村が丸ごと俺を狙っていることだってありえるのに…!!

……とにかく、今夜かかってくる両親への電話の対応もうまくやる必要がある。

今の電話はこれで済んだが……こんな甘いアドリブでは通用するはずもない。今のうちに、両親は在宅しているけど電話には出られないという、上手な嘘を考えておく必要があるだろう。天ぷらを揚げているので手が離せない。…ダメだな。病気で具合が悪く寝込んでいる。……無難か？

考えながら、部屋へ戻ろうとした時、電話がまたしても鳴り響いた。

それはまるで、俺がこれからつこうとする嘘を知っていてかけてきているかのようだった…。

本当は電話に出たくない。…だが出なければならない。不在を疑われる。

……受話器が外れているのに気付かなかった…ということにして受話器を外しておけば良かった…。

だが、今鳴り響いているこの電話だけは出なければならない。
覚悟を決め、受話器を取る……。
「も、もしもし……。」
前原と名乗るのもやめにする。素性の知れない相手に親切にする必要はない…。
だが、俺の無愛想な声に釣り合わないくらい、電話の相手はマヌケに陽気な声だった。
「どうも夜分遅くに申し訳ありません。私、興宮書房の大石と申しますが、」
「お、大石さんですか⁉」
「前原さんですか？　こんばんは。お元気そうで何よりです。」
「ちょ、ちょっと待ってくださいね！」
俺は子機に持ち替えると二階の自室へ駆け戻った。家族が誰もいない以上、どこで話しても同じなのだが……大石さんとの電話は少しでも安心なところでしたかった。

■興宮書房より再び

「お、お待たせしました。」
「いかがですか、その後お変わりは。」

その後、っていつからのその後だよ。……何となく白々しい言い方に少しかちんと来たのは間違いなかった。…とにかく、色々なことがありすぎてぐちゃぐちゃで、何から話したらいいのかそれすらも整理がつかない。

大石さんと最後に話したのは……一昨日か。学校を休んだ日、病院の帰り道に大石さんと出会って…昼食を取りに街へ行って、話をして…。

…そしてその後、お見舞いに来たレナと魅音に詰問された。

大石さんと話をすると…必ず看破されている。それは初めて会った時からそうだったのかもしれない。なら、……今日のこの電話もまた、彼女らに筒抜けなのだろうか…。

「もしもし…？　聞こえてますか前原さん？」

「え？　あ、すみません…。その…何て言いました？」

「その後、何か変わったことはありませんか、とお尋ねしたんです。…お返事がないんで焦りましたよ？」

「え、と………特には…、」

そう言いかけて口をつぐむ。

変わったことは山ほどあった。どれも不可解なことばかりだった。

何て言って話せばいいか…、わからないようなことばかりだが…聞いてみよう。今、聞かな

ければもうチャンスはないかもしれないのだ。
……両親不在という今夜を、…無事に越えられる保証などないのだから。
「その、大石さん、…やっぱり俺、……命を狙われているみたいです。」
「それは本当ですか⁉」
「……偶然の可能性もあるんですが…先日、俺が病気で休んだ日、夕方にあの二人がお見舞いに来たんです。」
「あの二人とは？」
「レナと魅音です。…そしてそこで、大石さんと一緒に昼飯を食ったことを質されました。」
「…ふむふむ…。………それで？」
「お見舞いってことでおはぎを置いていったんですが、……その中に針が入ってたんです。…偶然、飲み込まずに済みましたが……。これってやっぱり脅迫でしょうか…。」
「なんと…！　それで、その針は⁉」
「…えっと、よく見かけるような、普通の裁縫針のようでした。糸を通す穴が空いていて…。」
「違いますよ前原さん、針です！　証拠になります。脅迫だと立証できるかもしれません。その針はありますか？」
「……そ、そうか…そうだったッ‼」

俺は子機を放り出し、階下へ駆け出していく！
あのおはぎを投げつけた時、恐怖心でつい目を逸らしてしまったが…あの針は重要な証拠になったのだ！
確か…針はおはぎと一緒に壁に投げつけた。あるとすれば…やはり居間のあの壁！
だが、居間の壁は几帳面なお袋によって綺麗に掃除され、おはぎを投げつけた痕跡は完璧になくなっていた。
壁と絨毯の隙間とかに落ちてないだろうか⁉　乱暴に手の平で撫でて探すが手応えはない。
試しに机やソファーをどかし、絨毯を引っ張り出し、ばっさばっさと叩いてみる。だが針は見つからない…！
お袋が気付かずにおはぎごと片付けてしまったのだろうか⁉
せいぜい一昨日のことだ。燃えるゴミの日がいつだかは知らないが、まだ台所のゴミ袋の中に入ってるかもしれない‼
そのまま台所に駆け込み、ゴミバケツのふたを開け、その中身を広げてみた。
だが…一目見てこの複雑なゴミの山から針を見つけ出すのは至難であることを知る。文字通り、砂漠のビーズを探すような手間になるだろう…。
そうだ、手で叩いてみよう。ちょっと汚いが、探しているのは針だ。ちくりと手応えがあれ

ば見つけられる！　乱暴な方法かもしれないが手っ取り早い！
ぐっと息を止めてから、俺はゴミバケツの中身を台所に撒き散らした。
そして、そこに四つん這いになりながら、両手でゴミの山をベタンベタンと叩く！
汚物が飛び散り、汚らしいことこの上ないが、今はそんなことを言ってる場合じゃないんだ!!
……だが、しばらく繰り返しても手応えはなかった。
もっと丹念に調べたいが…今はまだ電話中だ。大石さんをあまり待たせるのも良くない…。
後でお袋が帰ってきたら、針がなかったか聞かなければならないだろう。
冷蔵庫に磁石で貼り付けてある覚書メモに赤ペンで乱暴に、〝針がなかった!?〟と書きなぐっておく。
それから、待たせすぎた大石さんの電話に戻るべく、階段を駆け上がった。
「もしもし？　どうでしたか？」
「……見つかりません…。あの時はつい気が動転していて……。」
「…そうですか。見つかればでいいんです。保管しておいて下さいね。」
そうだ、針の件だけじゃない。今朝の車の轢き逃げの件も話しておこう。
「あ、あと大石さん、それだけじゃないんです。…実は今朝、」

……あの車は絶対に俺を狙った。数々の状況証拠からそうだと断定できる。
「その車のナンバープレートは見ましたか？　こちらでも探してみます。」
「ぅ、……あ、……く…!!　あの時は怒りにまかせて怒鳴りつけただけで…ナンバーは見ませんでした…。」
針にせよナンバーにせよ何たる失態!!　俺は自分の身を守ることばかりに執心して、肝心なことが片手落ちだ…!　悔しさと不甲斐なさで、俺は枕を殴りつける。
「す、すみません……白いワゴン車ってこと以上は…わかりません…。」
「仕方ないことですよ前原さん。轢かれかければ気も動転します。」
「…やっぱりこれらって…偶然じゃないですよね。」
「………………………。」
大石さんは電話の向こうで唸り始めた。腕組みをしている様子が目に浮かぶ…。
「あと……レナの様子もやっぱり怪しいです。」
「…ほぅ。…それはどんな感じですか？」
今日の帰り、レナは俺に言った。……どうしてそんなにも悟史くんと同じなの？　と。
今ならはっきりと断言できる。レナは悟史がどうなったかを知っている。…ただ単に失踪した…という以上のことを知っている。

「…レナは……知っています。…去年の鬼隠しにあった悟史のことを…何か知っています。」
「それは具体的にどういうことですか…？」
「……レナが言うには…俺は悟史とそっくりらしいんです。このまま行くと…俺も悟史と同じ運命を辿る、と………そんな感じのことを言うんです。」
「運命、ですか。…具体的にどんな運命を辿るか言及しましたか？」
「…えっと……〝転校〟…と。」
「転校？」
「レナは、悟史は〝転校〟したって言ってるんです。…で、俺もこのままだと〝転校〟しちゃうぞ、って…。」
大石さんが一際厳ついため息をつき、大きく唸った。
「…………前原さん、それはおそらく…何かの脅迫…もしくは警告ですねぇ。」
「俺もそう思ってます…。」
ここで俺は…、もうひとつ思い出す。
今まで起こってきた出来事を人間の犯人の仕業と決めつけていいのかどうかだ。
レナたちが犯人であるという説の他に、オヤシロさまの祟りが実在する、という説も残されているのだ……。あの玄関での奇怪な出来事が、錯乱する俺が見た幻覚でないなら………。

だが、そんなことは大石さんに話せない。…話せば、大石さんは俺のことを頭がどうにかなってしまったのかと思うだろう。…もう二度と相談になど乗ってはくれまい…。

だが…レナが怪しいというのはどちらの説でも共通している。

オヤシロさまの祟りが実在するにせよ、村ぐるみの何らかの犯罪にせよ。…レナは関わっているのだ。

…レナは何を知っているんだろう。レナは怪しい。レナは何者？　過去の連続怪死事件との関わりだけは疑いようもない…！

大石さんは確か、レナのことを少し調べた…と言っていた。

少し、と言ったのは多分、大石さんの遠回しな言い方だろう。…つまり、実際にはかなり深く調べてるんじゃないだろうか。

……レナのことを聞きたい。前の学校でのことや…俺の知らないことを知りたい。

レナが…疑わしき人間なのかどうか、…いや…そんなことじゃない。

……俺は真実が知りたいのだ。

今夜、この広い家に俺ひとり。……頼りにならないとはいえ、在宅している限り安全を保証してくれると思っていた両親がいない。

別にこの家は砦でもお城でもないのだ。…悪意ある人間が、強硬的手段に訴えれば、たや

すぐ侵入を許すだろう。

前原家の周りには民家はない。どんな物音がしたって、誰にも聞こえない。

親父が芸術家気取りで、こんな辺鄙なところに家を建てたことを今ほど恨むことはなかった。

……はたして明日の朝、…俺はまだここにいるのだろうか……。

だから聞こう。今聞こう。次に聞けるチャンスが、訪れるかどうかもわからないから。

「あの、…大石さん、聞きたいことがあるんです。……隠さないで下さいね。」

「ええ。何でも聞いてください。」

電話の向こうという この上ないくらい遠くにいながら、これほど頼もしく感じることはなかった。

聞こう。レナのことを聞こう。…前の学校で何があったのか…！

「実は、……レナの、」

………うん？

その音はさっきから聞こえていた。

電話に夢中で、初めは気のせいだと思っていたが、……それはやがてチャイムだと気付く。

時間は…七時を過ぎている。郵便屋が来るような時間じゃないし、ご近所が訪ねてくるよう

な時間でもない。
居留守を決め込もうかと思ったが、それはまずい。せっかくの家族在宅の演出が台無しになってしまう。出なければならないのだ。
「……もしもし？　前原さん？」
「あ、すみません、誰か来たみたいですので、ちょっと玄関に行ってきます。」
「お客さんですか、すみませんすみません。今夜のお電話はこれくらいにしましょうか？」
それは困る！　本当に聞きたいことはこれからなのに…！
「あ、いえ、すぐ戻りますから！　電話はこのままでいいですか!?」
「…はいはい。構いませんよ。」
受話器を布団の上に投げ出し、玄関へ走っていく。うまいこと言いくるめて、追っ払ってしまわないと。
何となく、大石さんの電話の直前にかかってきた電話の女性のような気がした。…ならお袋の友達かご近所さんだろう。
お袋は具合が悪いと言って今日は早めに寝てしまいました…。…こんな言い訳が無難か。まさか具合が悪くて早寝したのを起こせとは普通言うまい。
相変わらず、さっきから等間隔でチャイムが鳴り続けている。

…これだけ鳴らしても出ないなら、普通は諦めて帰らないだろうか…？
チェーンを外さないまま、そうっと隙間を開け…来客の様子をうかがう。
……背筋にぞわりと悪寒が走り抜ける。
わかってる。…心のどこかで覚悟してた。……お袋の友人だろうと、一番無難な想像をして
〝逃げていた〟。
「…こんばんは。」
「レ、……レナ……………。」

豚骨ショウガ味

こんな時間にレナが来る様な用事はないはずだった。
そして何より、タイミングが気持ち悪かった。…大石さんに、今まさにレナのことを聞こう
とした矢先だったからだ。単なる偶然と片付けたい…。
だが、この玄関で先日、魅音に言われたあの薄気味悪い言葉が蘇る…。
〝……さぁてね。…おじさんにわからないことはないからね…。〟

「レ、…レナひとり…？」

「……うん。」

魅音は一緒ではないようだった。……だからといって何も事態は変わらない。

「な、何しに来たんだよ…。」

「………ねぇ圭一くん、ちゃんとドアを開けてお話ししたいな…。レナは玄関に入っちゃ、だめなのかな？　…かな？」

確かに、チェーン越しのやり取りはクラスメートへの対応ではない。……だが……、このチェーンがある限り、俺の安全はぎりぎり保証されているのだ…。

「うち、夜は必ずチェーンかけてるんだよ。気にすんなよ。」

「………………なら、…仕方ないかな。」

レナはとても悲しそうにうつむく。それでも、それを隠して笑顔を保とうとする努力が痛々しかった。

…だが、痛む胸を掻きむしりながらも、警戒は解かない。こうしている限り、心は痛んでも命だけは脅かされないのだから。

俺が真に恐れるのは…単にこのチェーンを外して、暴漢たちに踏み込まれ襲われることよりも、………信用してチェーンを外したレナに…襲われ、友情を裏切られることだった。

こうしてチェーンを外さない限り、心は痛んでも、…レナに裏切られずに済む。
無言で責めても俺にチェーンを外す様子がないので、レナは玄関への侵入を諦めたようだった。
「……あのさ、圭一くん、…ご飯食べた？」
いや、食べていない。お袋がいないから待っていても夕飯は出ない。
帰ってきてから横になり、電話で起こされ、ずーっと話をしていたのだから、食べる余裕なんてなかった。
…どうせカップラーメンだ。食いたければいつでも食える。お湯を沸かしてすぐさ…。
「…いや、…まだだよ。それがどうしたよ。」
「あ、あははは、じゃあ良かった☆　これ見て。お惣菜とか持ってきてあげたの。」
レナはそう言って、風呂敷で包んだ重箱を差し出してみせた。
「ね、お台所とか貸してくれればお味噌汁も温めてあげられるよ☆」
「いいよ、そこまでしてくれなくても…。」
「でもでも、お豆腐もお野菜もたっぷりなの！　圭一くん、そういうの嫌いかな？　…かな？」
嫌いなわけない。俺は具沢山な味噌汁は大好きだ。大根、にんじん、ごぼうにジャガイモ、

パワフルな食感とボリューム……あぁ…その味噌汁、最高だよ…。
「ご飯も持ってきてあげたから、レンジで温めればすぐ食べられるし。」
もちろん、味噌汁にご飯は欠かせない。ご飯をばくばくと喉にかきこみ、合間に味噌汁をすする…。あぁ、よくぞ日本人に生まれけり…!!
「それからね、またお漬物を作ってきたんだよ☆　今度は山菜のお漬物なの!」
雛見沢に引っ越してくるまで、俺は山菜という山の幸を侮っていた。だが…一度食してその魅力の虜になったのだ!　淡白な中にも深い味わい。これに比べたら、俗に言う八百屋野菜などは大味でダメだ!　あんなものは言ってみれば野菜初心者向け。俺くらいのエキスパートになって初めてわかるのが山菜というものなのだ。
さらに竜宮家直伝の漬物が素晴らしくうまいのは周知の事実!　……あぁどんな漬物だよ…。さぞかしふかふかの白米によく合うことだろう…!!
「…それからね、それからね!」
あぁ、まだ続くのかよ…!!　うまそうだ、実にうまそうだ!!　カップラーメンでいいやなどと言っていた不健康な自分よさらば!
レナはとても上機嫌な様子で、実にうまそうな夕飯を提案してくれた。…おなかが一気に緊張感をなくし、空腹を訴え始める…。それと同時にレナに対して持っていた警戒心も急に薄れ

ていった…。
レナひとりだと言ってるし……入れてやってもいいんじゃないだろうか…。
毒でも盛られるかもしれない…という疑念は確かに晴れないのだが……。
でも、このレナはレナだ。…あの、レナに似たレナじゃない誰かじゃないはず………。
………その時、俺の背中に再び、ぞわりとした悪寒が走った。

この瞬間の俺はなぜそのような感情が走ったのか理解できなかった。
だが…心の中のもうひとりの俺が、ガンガンと警鐘を鳴らす。
……レナの楽しそうな、魅力的な夕飯の話は……あるひとつの前提に基づいていたからだ。
それは………うちに今夜の夕飯がない、…つまり、作ってくれるお袋が不在である、という前提に基づいている。
普通の家なら七時頃は夕飯の最中だ。うちだってお袋がいればそのくらいの時間には夕飯にしている。
その時間帯に、夕食の材料を持って訪れるということ自体がすでに異常なのだ。
……知っている。
レナは………両親が不在であることを……知っている？

だが…はったりの可能性だってある。…両親が居るよう、部屋の明かり等でいろいろ偽装したのだ。……レナ自身、両親が不在だという確証を持っていない可能性だってある…。

……でも…どうだろう…。洗濯物やガレージ、夕刊。…慌てて始末した痕跡は多い。……レナには両親の不在を疑えるチャンスがなかったとは言い難い…。

だが…こちらからわざわざそれを白状することはないはずだ…。

ぎりぎりまで粘ってみよう…。第一、チェーンをかけているんだ。これを外さない限り、レナは俺に何をすることもできないのだ…。

「あ、……ありがたいんだけどさ…、もう少しで夕飯が出来るみたいなんだよ。」

「え…？　…そうなのかな、かな？」

「……せっかくで申し訳ないんだけどさ……その…、」

上手に断る言葉が思いつかず、語尾が弱々しくなってしまう…。……俺は元来、嘘をつくのは下手な部類に入るのだろう。

「でも……ちょっとはおかずになると思うかな、かな。」

「悪いけど…間に合ってるよ。…うちのお袋ってさ、結構おかずをいっぱい作るんだよ。だから…、」

「え…？　おかず、あるの？」

苦笑いしながら申し訳なさそうにレナをのらりくらりとかわす…。
だが…無視することで忘れようとしている感覚が……背筋をじわりじわりと昇ってくる。
……レナを、騙せていない。
俺はお袋が夕飯を今まさに並べてくれているように話しているのだが……レナと話が噛み合わないのだ。
レナは……ある当たり前な前提を元に話をしている。そしてそれは…俺も当然自覚していることを前提にしている。
「圭一くんもおかずとか作れるんだね。…何を作ったのかな？」
「…い。いやその……別に俺が………。」
レナは、そのおかずは俺が作ったものと最初から決め付けてかかる。
いや……俺が作った、というより、お袋は晩飯を作ってなどいない、と断言しているのだ。
「……本当に作ったの？　おかず。…圭一くんが？」
「だ、だから…俺が作ったんじゃないよ。…お袋が作った…いや、作ってるんだよ。今！」
「…………………………。」
「だからさ……悪いけど、レナの持ってきてくれたのは食べられないんだよ…。」
そこでレナは口を閉ざす。

……その時、瞳にすっ、と影が降りたような気がした。そのわずかな変化に、…俺は気付いてしまう。ぞわりと背中の毛が逆立つのが自分でわかった。

固い唾を飲み込んだ時、レナはとても静かに言った。

「……圭一くんのお夕飯、当ててみようか。」

「な、……なんだって…いいじゃないか…。」

「……いいから。……当てるね？　うーんと………。」

会話は一見自然だが、主導権がすでにレナに移っている。……しかも心なしか、俺が詰問されているかのような流れだ。

「…そのお夕飯、…お湯だけで作れるんじゃないかな…？」

「お、おいおい侮るなよ!?　うちのお袋のスペシャルなディナーを見くびるなってんだ…!!　そりゃあもー満漢全席状態で……すごいのなんの…、」

精一杯強がるが、奥歯が上手に噛み合わない。…かえって狼狽しているかのような印象を与えている…。くそくそくそ……!

だがレナは、そんな茶化しにも何の反応も示さなかった。

「……もう一度聞くよ？　……圭一くん、本当にお母さん、ご飯作ってってってくれたの…？」

「いやだから…、くれたんじゃなくて、…今作ってるんだよ！　もうすぐ晩飯に…！」

レナはお袋が在宅していて今、晩飯を作ってくれている…という俺の前提をことごとく無視する。俺が焦れば焦るほど…レナが冷めていくのがわかる。
「ね、圭一くん。」
……その時、扉の隙間からいやに冷え込んだ空気が滲み込んできた…。
「お母さん、お家にいるのかな？　…………………かな？」
もう…、惚けようもない…。
レナは。…両親が不在であることに絶対の確信をもって訪れているのだ。
だが…それを今さら認めることはできない。
とにかく……両親は在宅していて晩飯はもうすぐ…、そういうことになっているのだ…!!
だから俺は答える。お袋はいると、答える。
「い、いるよ…、もちろん…!」
今度は空気までも乾いていくのがわかる。……レナの瞳はますます冷え込み、俺を凍てつかせた視線で突き刺す…。
「………どうして？」
「え、なな、何のことかな……？」
ちょっと茶化した態度のつもりだったが…そんな薄皮の演技は、レナの瞳を見てしまった瞬

間に吹き飛ぶ。
その眼差しは……口を開くよりも早く、俺にレナの返事を教えてくれていた…。
「………どうしてさっきから、…嘘をつくのかな？　……かな。」
「…う、……嘘なんか………。」
「……嘘だよね？」
「…嘘なんかじゃ…。」
「嘘だよッ！！！！」

鋭い氷の刃のような言葉が、俺の全身を貫いた…。
チェーンに守られ、レナとの接点は扉の隙間のわずか十数センチ。……にもかかわらず、俺は追い詰められていた。
このチェーンを、俺は最後の砦のように思っていたが、そんな頼もしさはもはやない。…この家はすでに安全地帯ではなくなっている。………俺を追い詰め閉じ込める袋小路に成り下がっている………！
「………圭一くんのお夕飯、当てるよ？　えっとね。」
レナが今夜、両親が不在であることを知っていることはわかった。

……だが、ここまで来るとまた変だ…！　両親不在を何らかの方法で知ることができたとしても……、俺が今夜食べようとしているものまでを当てることは絶対にできないはずだ…!!

でもレナは…当てるという。……どうして当てられる!?　どうして俺がインスタントの、

「カップラーメン。……………………当たりでしょ。」

「………………は、……………………ぁぁ………ッ、」

心臓を握り潰された気がした。唾を自分の意志で飲み込むことすらできない…。

い、いや、……落ち着け前原圭一…。……家事のできない男が作れるメニューなんてどうせカップラーメンだ。…そんなのは統計的に見て一番確率が高いに決まってる。……当てた内には…入らないさ…!!!　て、適当だ。当て推量が偶然当たっただけだ…！

「………ラーメンだけじゃきっとお腹すくと思うな。ご飯とかも一緒の方がきっと、腹持ちいいと思うよ。」

落ち着け落ち着け！　落ち着け前原圭一！　…このところ俺はレナをある種、特別視している。…だからちょっとでも看破されると大きくうろたえてしまうのだ。

だが…別にレナに俺の心が読まれているわけじゃない。もしも本当に読めたら、それは妖怪だ。………………妖怪とかじゃなく……あるわけないのだ。そんなことは。

「…………好きなの？」
「な、何がだよ…？」
「うぅん、…＊＊＊＊＊＊。」
レナはまず、俺の返事が角度違いであることを告げた。
その否定があまりにも短かったので、俺は続くレナの言葉の意味するところがしばらく理解できずにいた。
「……ご、ごめんレナ。……今、なんて？」
「え？　何が？」
「今さ、………何が好き？　って聞いたんだよ？」
数瞬後、俺はあまりに無防備に先を促したことを後悔する。
あまりに呆気ない回答だからこそ、……俺はその意味するところが理解できずにいたのだ。
「……好きなの？　…豚骨ショウガ味。」
それは、…我が家に唯一あるカップラーメンの種類で、……それを俺はレナに話したことなど一度もない…!!
頭の中の真っ白な空白が回復するまで、俺はどんな様子だっただろう。視界がぐにゃりと歪

みながら…ゆっくりと反時計方向に渦を巻き…平衡感覚を混乱させる…。
「んなッ、なんでそこまでわかるんだよッ？！！」
もう俺は否定しなかった。これは一種の逆上だ。……どうしてレナは…こんなことまでわかるんだッ⁉
俺は扉に顔面を打ち付けるのも気にせず、レナに食い入る。…だがレナはそんな俺の様子にもまったく臆さなかった。
「確かに買った。まとめて買った。俺が箱買いしたさ！　それがどうしてわかるんだッ⁉　えぇぇッ⁉」
「……なんでかなぁ？　不思議だね。だね？　うふふうふふふふふ…！」
この期に及んでなぜはぐらかす⁉　今や扉のチェーンは俺だけを守るものではなくなっていた。
「どうしてわかる⁉　なぜ知ってる⁉　答えろッ！！！！」
「……買ったのはセブンスマート。…だよね？」
背中をぞっとするものが込み上げる…‼　それまでも看破されているというのだ…！　それを俺はうわべだけの怒りで誤魔化す。
「だから……なんでわかるんだよ⁉⁉」

「……圭一くんの後ろ、ずっとくっついてたから。」
「な、…何を言ってんだよ…!?」
くっつくという言葉の意味がわからない。
「だから。……レナが。圭一くんの。後ろに。………ずっとくっついてたの。…うふふ。」
あの晩のように…？　俺が大石さんとの電話に夢中だった時、その気配も感じさせず……ずっと扉の向こう、俺の背後で…立ち尽くしていたように…!?!?
「圭一くんがいろんなラーメン選んでるとこ、後ろからずっと見てたの。いろんな種類を選んでたんだよね。それでお母さんに怒られたの。高いラーメンばっかり選ぶから一種類にしなさいって。それで圭一くん、大好きな大きいカップの豚骨ショウガ味を選んだんだよね☆　レナも好きだよ。豚骨ラーメン。でも、大きいカップは全部食べきれないけどね。……うふふふ、……うふふふふふふふふふふ…！」
脳みそがひりひりと痺れ、感覚を鈍らせていく。
それは…恐怖を薄れさせ精神を守ろうという防衛本能なのかもしれない。恐怖を含めた一切の感情が薄れ、レナが今何を言っているのか。そして…それが何を意味するのかを…脳内から雲散霧消させていく……。
だからといって恐怖心が消えるわけではない。…それは言ってみれば…崖っぷちで、下を見

ずに目をつぶっているだけのような、何の根本解決にもならない、そんな感じだ。
よろりと、後ろに一歩下がる。……その下がった分、レナは入り込む。
「……………だから圭一くん。…………ここを開けて？　レナと一緒にご飯食べよ☆　きっとおいしいから、…………………ね…？」
レナの白すぎる細すぎる指が何本も、一本一本が生きているかのように、扉の隙間からするすると入り込み、チェーンをかちゃかちゃと言わせる…。
いっそチェーンを引き千切ってくれれば、俺も恐怖という感情を素直に爆発させられたのかもしれない。…だがレナはそうしない。あくまでも俺に、チェーンを開けさせようとするのだ。
俺の感情の中の…しけった火薬に必死になってライターで火をつける。何度も試す。かちゃかちゃと！　…だがつかない。…つかない…！
「………開けて？　………圭一くん…？」
「か……帰ってくれ…。……頼むから……帰ってくれ…!!」
「…………どうしてそんな意地悪を言うのかな…？　……かな？」
「帰ってくれ!!　帰れよぉッ！！！　帰れぇぇぇぇぇッ！！！！」
俺の中の火薬にようやく火が付く。それはくすぶらず、一気に爆発した。
扉に体当たりする。レナは扉越しの衝撃に少し体勢を崩したようだった。ここで躊躇しては

ならない……!!

ドアノブを両手で掴み、両足で踏ん張って一気に引っ張る!! だがバタンという軽快な音はしなかった。ぎりぎりと嫌な手応えが伝わり、扉が閉じることを拒むのだ。

それは……レナの指だった。

一本一本が蠢きながら、まるで食虫植物とかの触手のように扉の狭間で揺らめく……! 俺が扉を閉め切ってこの場を逃げ出そうとするのに食いついてくるかのように……!

「…………痛い……痛いよ圭一くん…………痛い………ぅ、」

それは悲鳴のような激しいものでなく、かみ殺したような、静かな呻きだった。

俺はいよいよきつく扉を引き絞る……!! 一度扉を緩めなければレナの指が抜けない、だから閉められない、なんてことは思いつかなかった。いやむしろ、扉で指を無理やり千切ってやるくらいの気持ちだった。

「帰れ……帰れ……帰れ……ッ!!!」

「………本当に痛いの圭一くん。………悪ふざけが過ぎたなら謝るよ……ぅぅ……。」

謝罪の言葉なんかどうでもよかった。レナがいくら謝罪したって、レナがしてきたことは何も変わらない。…何も変わらない! レナがどういう存在であるかは変わらない! 帰ってくれ、帰ってくれぇえええええぇ!!

「……痛いの……痛いの……、ごめんなさい……ごめんなさい…ごめんなさい…。」
「帰れ帰れ!!　帰れぇぇぇぇぇぇぇッ！！！！」
レナが帰りたくても帰れないのは、俺がレナの指を挟んでいるからなのに…。レナの白い指先は真っ赤になり、もはや蠢きもしなかった。
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…、」
「帰れ、帰れ、帰れ…！！！」
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、」
レナの謝罪は、時に苦痛に歪みながら……壊れたテープレコーダーのように…それだけをただひたすらと繰り返した…。
帰れ帰れ帰れ…やめろやめろやめろやめろ！！！　俺はさらに強く扉を引き絞る！！！
やがて、何かの拍子に一気にレナの指が扉の枷（かせ）から外れた。その途端、扉は威勢良く閉まり、その向こうでレナがしりもちをついた音がした。
間髪入れずに俺はカギをかける。それは大きなガチャリという音を立て、レナに拒絶（きょぜつ）を宣告した。
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、……圭一くん、ごめんなさい…、ここを開けて……圭一くん……。」

レナは扉にしな垂(だ)れかかって、ただひたすら謝罪の言葉を繰り返していた。

俺はレナと自分の空間を完全に遮断(しゃだん)できたことをゆっくりと確認しながら…そろりそろりと……扉から後退(あとずさ)る。

扉の向こうから、レナの謝罪の言葉が、…ごめんなさい、ごめんなさい、という哀れな言葉が…、俺の許しを得られるまで永遠に繰り返されていた。

気の毒に思ったりはしなかった。だが、冷酷な感情でそう思ったのではない。……ただ、レナから逃れることが出来たという、灰色の安堵感だけだった。

以前、俺はこの玄関で魅音に、知らないことは何もない…と脅された。

そして今再び同じ場所で、レナにもそれを教えられた。

…俺のささやかな両親不在の偽装は初めから何の役にも立たなかった。…ならばいっそ居留守を決め込み、玄関を開けない方がましだった！

俺のささやかな策略なんて…何の役にも立たない。ここ雛見沢で……ヤツらを出し抜くなんて……できやしないのだ……！！！

俺は扉越しとは言え、少しでもレナから離れたかった。

一歩、一歩、離れる度にすすり泣くようなレナの謝罪が遠ざかる…。

一気に階段を駆け上がり、部屋に飛び込む。…さすがにもう、レナの無限に繰り返される謝

罪は聞こえなかった。
布団に飛び込み、ごりっとした手応えにぎょっとする…。布団の中に…何かあるッ!?!?
……受話器だった。
ようやく思い出す。…大石さんとの電話中だったことを。
時計を見ると、玄関へ降りてから全然時間が経っていないことがわかる。…俺の時計、電池が切れ掛かっているんじゃ…??　あれだけレナと話をして…これしか時間が経ってないわけがない…!!　だが時計の秒針は、さも当たり前なように、俺が一秒と思う時間を一秒ずつ刻みながら、…動き続けていた。
まだ、自分の温もりがちょっと残った受話器を耳に当てなおすと、…凍っていた時間が…ゆっくり解け出す。
「…もしもし、…大石さん？　お待たせしてすみませんでした。」
「いえいえ。大してお待ちしていませんよ。」
大石さんと俺とで、時間の経ち方が異なるのは明白だ。
電話の向こうから漏れ聞こえる、スポーツ番組か何かの賑やかな声が、大石さんと俺のいる場所の遠さを教えてくれた…。

「……い、今、レナが来ました。」
「こんな時間にですか？」
「………………………。」
大石さんに今の状況を的確に説明できる自信はなかった。
だが今の俺に必要なのはそれを説明することでなく、レナのことだ。
そう、レナの訪問によって話が中断されてしまったが、……俺は大石さんにレナのことを聞こうとしていたのだ。
何が真実で何が偽りなのか……何もわからない。ひとつわかるのは、レナは怪しい、というたったひとつの厳然たる事実だ。
レナの正体を大石さんに聞くことで、何かわかることがあるかもしれない。
……これまで俺は、知らなくていいことを無理に聞き、何度も後悔してきた。
だが、もうその意味では底の底まで落ちてきたと言っていい。これ以上の後悔などあるわけもない。
いや……むしろ、これ以上があるなら今はそれを全て知りたい！
今や俺は、明日どころか今夜、何があってもおかしくない、そんな状況だ。

俺が知ることのできる全てを知りたい。知れる内に全て知りたい！　……絶対にこのままでは死ねないのだ。…こんな、何もわからないうちには絶対に…！

「…竜宮レナさんのことですか？　調べましたよ。…えぇまぁ…簡単には。」

大石さんの言い回しはわかっている。…〝簡単には〟は、友人であるあなたには話し難いくらい調べた、という意味だ。

「その簡単な全てを知りたいんです。」

「……あなたが聞いて面白いような話はありませんよ？」

「大石さん。」

俺は努めて冷静な声で、はぐらかし続ける大石さんに告げる。そして……断じた。

「竜宮レナは怪しいと思っています。過去の事件がたとえオヤシロさまの祟りによるものだったにせよ、…竜宮レナは関わっています。それは断言できます。絶対です！」

「レナさんが怪しいと思える、具体的な証拠があるのですか？」

大石さんの口調がぐっとシビアになる。…証拠はあるのか。それは刑事としての言葉だった。

「状況証拠だけです。ですが間違いありません!!」

「………そうですか。」

大石さんの落胆（らくたん）する様子が受話器越しにわかる。

釣竿に反応があって竿を引いてみたら、俺というエサに何の変化もなかったので……落胆してもう一度竿を振り上げる……そんな感じだった。
「…大石さん。…目に見える証拠がなければ…動けないんですか？」
言葉の裏には、証拠がなければ俺を助けられないんですか？　というトゲも含めた。
さすがに遠回しな言い方を好む大石さんは、俺の言いたいことが理解できたようだった。
「大丈夫ですよ前原さん。あなたは私が守ります。」
…ちっとも頼もしく聞こえなかった。大石さんは俺を利用して捜査しているだけだ。
俺が殺されたって、その死体は貴重な捜査資料になるくらいにしか思っていまい。
「大石さんの捜査は俺の生死と無関係でしょうが、俺は死ねば終わりなんです！」
電話先の大石さんは沈黙する。……直情的に言ってしまったが、構わない。…大石さんに、自分がいかに危機的状況にいるか伝わればそれでいい。
「だから、話してください。レナのこと。俺は隠さずにレナが怪しいと話している！　だから大石さんも、レナのことを隠さずに話してください!!」
「……………………。」
「悟史は〝転校〟しました。…多分、俺もそれほど遠くない将来、レナの言う〝転校〟をするでしょう。…ですが大石さんには俺の死体を見つけることもできないでしょうね。……現に悟

史の死体だってまだ見つけられてない!!」

「ま、前原さん、どうか落ち着いて……。」

大石さんに諭されるまでもなく、俺は興奮を抑える…。ここで警察に対する不信をわめいても何の解決にもならない。結局、身を守れるのは自分自身、そして悟史の遺した金属バットだけなのだ。

ならばせめて教えてほしい。レナに転校前、何があったのかを！

「…つまらない話になるのは覚悟の上ですね？」

俺の決意が揺るがないことを知った大石さんはついに折れる。

「今の俺にとって、つまらない話は何一つありません。…お願いします。」

「……まずいくつかお断りすることがあります。」

「はい。」

「他言無用でお願いします。また、内容には一部憶測も含まれているかもしれません。……全てが真実ではないかもしれないということです。……よろしいですね？」

「真実ではないかもしれない…？　言ってる意味がよくわかりません。」

「雛見沢の連続怪死事件は捜査本部がありません。毎年の事件は個々に扱われています。ですから竜宮レナが捜査線に浮上したことは一度もないのです。……つまりですね、」

「……レナの調査は警察としてでなく、個人として行なった、ということですか？」

「…ご理解いただけて助かります。…話のほとんどは電話、もしくは会って聞かせてもらったものばかりです。ですからウラが取れていません。鵜呑みにしないでほしい、…………ということなんですよ。ご理解いただけますね？」

大石さんの大人の都合などにいちいち興味はない。それに証拠なんかなくても充分だ。たとえ噂話だったとしても、火のないところに煙は立たないのだから。

「……話して下さい。大石さん。」

「わかりました…。」

大石さんは重い口をようやく開く。

レナは昔は雛見沢に住んでいたらしい。

それが小学校に上がる時に遠くの、茨城へ引っ越しした。

そして……やがて。…雛見沢へ帰ってくる直前。校内のガラスを割ってまわるという凶行に至る。

そしてカウンセリングでレナが告白するのだ。「オヤシロさまが、」と。

これだけが俺が知る全てだ。

「……私が知る話も前原さんと大きくは変わりません。」
「では、どこを詳しく調べたんですか…？」
聞くまでもない。…転校直前に引き起こした事件についてだ。
「レナが起こした事件と、…その後の医者での告白、…ですね？」
「…………はい。」
「大石さんはその内容を知っているからこそ、レナたちを疑っているんですね？」
「……えぇ。疑っています。」
「やはりレナたちが犯人…？」
「あ、いえ……疑うとはそう意味ではないんです。」
大石さんは割と自信たっぷりな言い方をする人だが、この言葉だけは非常に頼りなかった。
「じゃあ何を…、疑ってるんですか？」
「……オヤシロさま、……ですよ。」
「え？」
オヤシロさまという単語は、神さまの名前だったり祟りのことだったりするが、いずれにしろ非現実的なもののことで、警察という現実的な存在である大石さんが口にするとは非常に違和感があった…。

「いえね？　………オヤシロさまの祟りって、本当にあるのかな……なんて、まぁ…はっはっは…！　そんな風に思ったこともありましてねぇ。」

大石さんの笑いは乾いていて、とてもつられて笑い出せるようなものではなかった。

大石さんは少しずつ話し始めた。悟史の失踪の頃からの不審感。…レナの過去を調べ始めるまでの経緯。

その時、遠雷と共に突然強い雨が降り出した。本当に突然、それも叩きつけるような激しい雨だった。

部屋の熱気を逃がすため、隙間を空けておいた窓から狂った風が躍りこみ、カーテンを騒がしくはためかせている。

「どうしました？　うお、こりゃ急にすごい雷だ。」

「あ、こちらもです…。すみません、どうぞ続けてください…。窓を閉めます。」

電話を続けながら腰を上げ、窓に手をかける。大石さんは話を続けてくれた。

「始めに事件と申し上げましたが、学校側も被害者も告発してないので、正式には事件ではないのです。……で、ですね、この辺りがどうも関係者の皆さん、口が重いんですよ。……被害者のひとりは片目に後遺症を残すぐらい殴られてるのにもかかわらずです。学校側か、もしくは表沙汰になるのを望まない何者かがいろいろ根回しをしたのかもしれませんね。……また

カウンセリングを担当した神経科医も職業倫理に厳格な方で……。………もしもし？　前原さん？　聞こえてます？」

窓を閉めるため、俺は受話器を耳に当てたまま窓際に立っていた。……そして、外のそれを見ていた。

門の郵便受けのところにある外灯に、ずっとひとりの人影が立ち尽くしているのが見えた。

この土砂降りの中、傘もさしていなかった。もちろん全身はずぶ濡れ…。滝のような雨に、髪の毛からぼたぼたと水を滴らせているのがここからでもわかる…。

それは両手をだらりとさせ、ただ、立ち尽くしているという表現が似合っていた。

片手には……風呂敷で包まれた重箱。そこからも、ぼたぼたと滝のように水滴を零している。

…その中身はすっかり雨にやられてしまったに違いない。

瞳に映るのは……俺の部屋の灯り。……そして、窓を閉めようとカーテンを開け放った俺の、姿。

口元は…もごもごと…ずっと規則的に動き続けていた。まるで、何か噛み切りにくいものを口いっぱいに頬張っているかのようだった。

あいつは……あんなところで…何を食っているんだ…？

どうしてこのときの俺は……大石さんから明かされている衝撃的な内容よりも…レナの姿に

釘付けになってしまったのか…。
雨さえ降らなければ窓に近付くことはなかった。そうすればレナに気付くことも、レナの〝それ〟に気付くことも…なかったのだ。
レナの口の動きが、ずっと同じ形で反復している。
それは食っているのではなく……繰り返しているのだ。
何て？　しゃべっている？　俺に…？　何て……？
なぜ俺は…ガラスにぴったり貼り付き……それに目を凝らしてしまうのだろう。
「もしもし？　前原さん？　聞こえてますか？　もしもーし……。」
「ごめんなさい。」
「え？　前原さん？」
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…、」
「もしもし？　前原さん⁉　どうしましたか…⁉」
レナは……この土砂降りの中、…まだ謝り続けているのだ………。
俺の中のもうひとりの自分が、右腕を素早く振り、カーテンで外界を遮った。
だがそんなことでは、レナの繰り返す謝罪の言葉が俺の耳を離れることはない。窓ガラスと

カーテンを抜け、染み込んで、俺の耳にまで届くのだ。この突然の土砂降りの音ですらそれを掻き消せない。布団の中に逃げ込んでも、まだ追ってくるのだ…！

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…、

許してやったら、それを許してくれるのかよ!?

やめてくれ、やめてくれ、やめてくれ、やめてくれ…！

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…、

くそぉ…!! 何で俺が…許さなくちゃならないんだよ!! むしろ許してほしいのは俺の方だろ!? 俺の何が許されないんだよ!! 俺は絶対に殺されないからな!! 俺が許されないなら俺だって許さない。…許さない、許さない、許さない、許さない、許さない、許さない、許さない、許さない…!!

「前原さん？ 聞こえてるなら返事をして下さい。…もしもし、もしもーし!!」

■セブンスマートにて

セブンスマートは市内にある酒類食料品の安売量販店だ。
綺麗なデパートやスーパー等とは違い、外見はバラック小屋の寄せ集めにしか見えないし、店内もお世辞にも綺麗とは言えない。倉庫でそのまま小売も始めたとでも言うようなお店だった。
でも、そういうところで経費を削っているというのがアピールなのか、豊富な食料品や生活用品はどれも格安で、近隣の主婦たちに大好評だった。
品揃えの中には、怪しげなコピー品、包装が汚れたドロップアウト品もたくさんあり、質の面では少々胡散臭さもあったが、安くたくさん買いたいという主婦たちにはそれはどうでもいいことのようだった。それに、そこいらのスーパーではちょっと見かけられないこの胡散臭さが、むしろ面白く感じられた。
「なぁに、圭一。こんなにたくさん！　全部違う種類にすることはないでしょ!?」
だから、カップラーメンの種類もとにかく豊富。有名どころから聞いたこともない物、果ては日本語すら書かれていない海外の物までとにかく色々あるのだ。だからそれらを

片っ端から味わってみようと、色とりどりのカップ麺をどっさりとカートに載せたんだ。
「最近のカップ麺は凝ってて種類も多いんだよ。どれも一通りは食ってみたいし…！」
半ばわがままだとはわかっていたが、一応はと思っての抗議だった。
「圭一。箱売りしてるのにしなさい。安いから。」
親父が渋る。まぁこういう展開は読めていたし、親父にダメだと言われたらどうしようもない…。
「それじゃ一種類しか食えないじゃん！　飽きちゃうって！」
形式だけの抵抗だ。心の中では早々に諦め、どのラーメンの箱を買うか迷っていた。
「決められないならお母さんが決めちゃうわよ。」
そう急かされても困る…！　手早く目当てのラーメンの箱を探しに行く。そして選んだのがこれだった。
「豚骨ショウガ味、デカカップ？　ねぇ圭一、もう少し普通のにしない？　醤油味とか塩味とか…。」
「豚骨はうまいんだよ！　大盛りだけど大味ってわけじゃないし…‼　母さんが選ぶとつまんない種類ばかりで面白くないんだよ…！」
回想の世界の俺が、自らの選択したラーメンの正当性を主張している…。

この、すでにラミネートでパッキングされてしまった、終わってしまった時間の世界で後ろを振り返るなんてことができるわけがない…。

だから…俺にできるのは、この時間の俺の視覚と聴覚、気配をさらに鋭敏にすることだけだった。

どんなに視界内を探しても……店内にレナの姿は見つけられない。時間を遡らせて探す。だがもちろん見つけられない。

では…俺の視界外、死角から俺をうかがっていた…？　聴覚や気配を遡り、探りなおす。

他の買い物客の気配。どれも雑多で…好き勝手に動いている。じっとうかがう者もいなければ、俺の背後をつけ回す気配もない。

ない。ないはず。多分ない。いくら無警戒な当時の俺でも…ぴったり後ろをつけられれば絶対に気付くはず。多分という曖昧な表現を使いながら、絶対という矛盾した形容詞を使ってしまうことに苦笑する…。

その時、ぞくりとして時間の再生を止めた。

……確かに後ろに影の気配があったからだ。

それは…例えようもない恐怖だった。
本当の俺の後ろに現れた気配なら、振り返って確かめることもできる。だが、すでに終わってしまった時間の世界にいる俺には振り返ることはできない…。
そんな恐ろしい影を背負いながら…俺は嬉々として店内を走り回り、カップ麺の箱探しをしていた…?
お袋への悪態をつきながら、インスタントのコーナーを駆け回る俺…。
だが…その背後には常に気配がぴったりと。影のように付きまとっていたのだ。
それを……確かめようもない今になって自覚することが……これほど恐ろしく、おぞましいものなのか……。
終わった時間の世界を……俺が嬉々として走り抜けている。
段ボールを抱えて。パタパタと。……だが、その足音はよく聞きなおすと……ぺたぺたという、俺の足音以外の何かを確かに含んでいた。
パタパタパタ。ぺたぺたぺた。
パタパタ。ぺたぺた。
パタパタパタ。ぺたぺたぺた。
俺が走るのとまったく同じように、そのぺたぺたというまるで素足のような足音が、

俺の後ろをつけていた。
終わった時間の世界を……俺が嬉々として走り抜けている。
だがそれは……聞こえていないから。
いや。聞こえていたからこうして思い出せる。…聞こえていたが気にしなかった。だから振り返らなかった。だから、俺は振り返られない…！！！
終わった時間の世界を、俺はぺたぺたと付ける足音にずっと追われている。
もっと早く走って逃げることもできない。
終わった時間の俺は、すでに決められた速度でしか走れない。
振り返ることもできない。
終わった時間の俺は、一度も後ろなんか振り返らなかったから。
そして、両親の元にたどり着き、会話を始めるのだ。影のような気配を背負ったまま。
俺が動かないから、影も動かない。だから音がしない。それだけのこと。
………ぺたり。

その時、俺は一歩も歩かずに両親と会話をしていたはずだった。
立ち尽くしたままだった。間違いなく。

なのに、……ぺた。…と音がした。
そんなはずはない。俺が三歩駆けたら、三歩追う。それがルールのはずだろ…?
もうそれ以上は音はしなかった。
その時、世界中がブツンと停電になった。…突然の真っ暗闇だった。
もう回想の旅は終わりだ。今日はもう眠い。やめにしたい。誰か明かりを付けてくれ。
だが体は動かない。…終わった時間の世界に…縫い止められたように。
ぺた。

全身の毛が逆立つ。
こんなバカな…!? さっきからルール違反ばかりだ!! 俺は歩いてない! だからお前も歩いちゃだめなんだ!! 俺は動けない! だからお前も動けないんだぞ!! ルールを守れッ!!!!
ぺた。

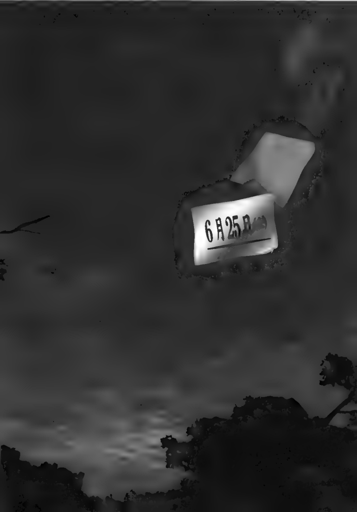
なのにもう一回、その音が暗闇に響き渡った。
後頭部の髪の毛がチリチリとざわめく。

髪の毛が触れるか触れないか、というくらいすぐ後ろに、……来ているのだ。
後ろの気配が動けるのに、どうして俺は動けないんだ⁉⁉
…すぐに気付いた。俺は動けるのだ。……怖くて振り返れないだけなのだ。
振り向けるのは今しかない。終わった時間の世界では絶対に許されぬ行為…。だが……今、振り返らなければ……‼
体中の全細胞が、許されざる行為を止めようと、毛穴という毛穴に針を突き立てたような痛みで訴え始める…。
振り向いてやる！　振り向いてやる！　怖くなんかないぞ‼　振り向いてやる！　振り向いてやる！　怖くなんかないぞ！！！！
声に出せぬ、胸の中での雄叫びだった。
ぉおぉおぉおおおおおぉおぉおぉおおぉ！！！！
後ろを振り向いた。……そこには、………始めそれの意味はわからなかった。
「……え、…………え？」
これって…………え？
自分の目の前の状況を、まるで人の口がリンゴをかじって汁を啜りその味を理解して

初めてリンゴであることを知るように……脳がリンゴを食べ始める。しゃりしゃりと咀嚼し始める……。汁を啜り……リンゴであることを知る。目の前の光景を、……理解する。

つまり……俺の目の前のそれは、

ぎゃあああぁあぁあぁあああぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁぁぁ……


6月25日



一睡もしなかった、というのは嘘になるのだろうか…。
一晩中起きていたつもりだったが、記憶は明らかに何箇所か欠落していた。
何度も眠りに落ちては、その度にあわてて顔を上げるということをずっと繰り返していたに違いない…。
俺は結局一晩中、バリケードのように布団で部屋への入り口を塞ぎ、その上で金属バットを抱きながら座り込んで、ただただじっと…窓から来るかもしれない侵入者を見張り続けていた。
俺がここを立ち上がれば、扉からの侵入者は布団を跳ね飛ばして襲い掛かり、俺が窓を見張るのを怠れば、窓からの侵入者はガラスを破って襲い掛かり…、
被害妄想に過ぎないと何度も自分をたしなめたが……眠れはしなかった。
眠るという無防備状態がただひたすらに怖かった。
そんな怖い思いをしてまで眠る必要なんかない。…それならずっと起きていた方がよっぽど気が楽だった。
そんな時間をずっと繰り返すうちに、いつの間にか表が明るくなった…、それだけの事だ。

だからこれは朝というよりは、日が昇っただけの夜と言えるのかもしれない。俺にとっての昨夜は、まだ終わることなく続いているのだから。
カーテンの隙間からこっそりと家の前を見る。
すでにレナの姿はなくなっていた。……周りをいくら見渡してもその姿は見つけられない。
そこで初めて、俺は深く息をつき、夜が終わったことを知ったのだった…。
レナの姿を夜中に何度も確かめようと思った。…でも、レナも俺が顔を覗かせるのを待ち構えているかもしれない。…そして、またあの鷹の目で射抜かれてしまうようなことがあったなら……。だから怖くて、…確かめられなかった。
眠くないと言えば嘘になるが、寝直したいとは思わなかった。
まだ時間はある。だが朝食の準備は自分でしなくてはならないのだから、早めに起き出した方がいいだろう。
…学校を休むという選択肢もあった。お袋がいない以上、ズル休みは簡単だ。
正直に言って…迷う。
家を出ることに対するリスクは計り知れない。ここに籠城（ろうじょう）しているのがおそらく、一番安全だろう。
だが。……このままいても何も解決しない。

大石さんは目に見える証拠がない限り、何も助けてはくれない。
でもそれは大石さんだけじゃない。…両親だって同じことだ。
つまり……目に見える何かが得られない限り、日が昇ろうとも、終わらない夜はずっと続くのだ。
…いつもそうするように、ぐっと伸びをしてから頭を後ろへ反らし、目を閉じる。
息を落ち着ける…。…冷静さを取り戻す…。クールになれ前原圭一…。

……登校しよう。
俺に対して何かが仕掛けられるのを待とう。
だがそれは手をこまねいているわけではない。…その魔手を紙一重でかわし、逆に動かぬ証拠として押さえるのだ。
車が近付いてきたらナンバーをチェック。不審者は服装や顔などをチェック。
自分の身を守る…というよりも、敵の攻撃を逆手に取る、反撃の心構えだ。
それは侍(さむらい)が刀を抜き合い互いに一撃必殺を狙い合う、そんな緊迫感に似ている。
俺だけに一方的に不利なんじゃない。俺にだって反撃のチャンスがあるんだ…！
胸の奥にようやく、ちょっぴりの勇気が戻ってくる。

…よし。登校しよう。

悟史のバットを握り直す。俺の心強い唯一の相棒だ。

……悟史、どうか俺に力を貸してくれ。

そして……、多分殺されたのだろう、お前の無念を俺に託してくれ。俺がきっと…それを晴らす。

決意を新たに時計を見上げる。まだ時間は早かった。

もちろん今日も一人で登校する。

レナや魅音と鉢合わせしたくないなら、もう出ないとまずいだろう。

俺は入念に戸締りを確認し、家を出た。

制服は昨日泥だらけにしてしまったので、洗濯機に突っ込んだまま。だから今日はジャージでの登校だ。

昨日までの朝と違う服装が、今朝という朝が昨日までと確実に異なることを認識させた。

だから本能的に悟る。俺は今日、殺されるかもしれない。

気を許すな前原圭一。今日が最期の一日になるかどうかは…他でもない、俺自身が決めることになるだろう…。

■宣戦布告

今日も一番に登校し、朝を当然の日課であるかのように素振りで過ごす。
やがてレナも登校してきた。目が合ったが挨拶はしない。
レナは昨夜のことを何も言わなかった。…まるで何事もなかったかのように。
だが、レナの十指には昨夜の出来事が確かにあったことを示す傷がざっくりと刻まれている。
そのバンドエイドだらけの両手を、台所で怪我をした…と沙都子たちに釈明しているのを、さっき聞いた。
…もうまるで胸は痛まない。
昨夜、大石さんに聞いた、レナが転校直前に起こした事件がまざまざと脳裏に蘇る。それを知った今、レナが可愛らしい理想的な女の子だなどと夢にも思わない。
「圭ちゃーん、相変わらず甲子園一直線だねぇ。」
魅音が声を掛けてくる。その接近は少し前から察して身構えていたので、特には驚かない。
「魅音か。…わかってるなら放っておいてくれよ。俺は甲子園で忙しいんだ。」
俺は茶化す様子もなく、素っ気なくそう返事をする。そしてさらに一際大きくスイングし、

魅音の接近をささやかに牽制した。
「圭ちゃんさ、ちょっと休憩ちょっと休憩。」
「ホームルームまであとちょっとだろ。…もう一汗かかせてくれよ。」
魅音を拒絶する意味を込めてさらに力強くスイングする。
「……圭ちゃんって野球、好きだったっけ？」
「最近好きになった。」
「最近って、昨日から？」
「…わかってんなら聞くなよ。」
「……あれまぁ。スポーツマンにしては爽やかじゃないお返事だことで。」
「気が散る。…放っておいてくれ。」
魅音を無視し、俺は素振りを続ける。
普通、これだけ素っ気無くされれば、怒るか呆れるかして行ってしまうものだが。魅音は立ち去らず、俺が素振りをやめるのをじっと待っていた。
……………今さら俺に何の話だってんだ。…レナに昨日の話を聞いて、その上で俺に何か「忠告」でもあるってのか…？
…特に殺気も感じない。場所も見通しのいい校庭だ。突然襲い掛かってくるようなこともな

いだろう。……甘いか？
だが少し疲れてもきた。…一休みし、魅音の話を聞いてやってもいいかもしれない。
「……何だよ。」
素振りをやめると汗がどっと溢れてきた。肩で息をしている自分に気付く。……普段の運動不足に呆れる。
これではいざと言うとき、自在に体が動かせるかどうか実に不安だ。……素振りはバットを携行するアリバイ作りだけでなく、体力作りの意味でも続けた方がいいだろう。
「用ってわけでもないけどさ。…お疲れのようなら後にするけど？」
「今でいい。」
今の状況が安全だと判断したから付き合うだけだ。二人きりでひと気のないところで相談…なんてのは危険だろう。
「……えっとさ。うーん……、」
魅音にしては言葉を選んでいる。だが大石さんのするような、先を聞くことを躊躇させるような話題ではないようだ。
うまい言い方が思いつかず、悩みこんでいる魅音は、……やがて行き詰ったのを打開するように豪快に笑い出す。

「あっはっはっは！　おじさんダメだわ、こーゆうの。ボキャ貧は辛いわぁ。」
「…何だよ突然。言いたいことがあるならはっきりと言えよ。」
「やめてよ。素振り。」
それはあまりに単刀直入だった。へらへらと笑った直後に、ここまで声色を変えられるものかと驚かずにはいられない。
だが、…その、あまりの率直さに、魅音の言っている意味がよくわからない。ちゃんと素振りをやめて話を聞いてるじゃないか。
「…ちゃんとやめてるだろ。」
「じゃなくて。今日で終わりにしてほしいの。悪いけど。」
言っている意味がわかるまでにしばらく時間がかかった。…素振りをするのがなぜいけない!?
「なんでだよ。余計なお世話だよ！　別に誰にも迷惑かけてないだろ!?」
「かけてる。」
魅音はきっぱりと言い放った。何がなにやらわからず、とても不愉快だ。
「俺がいつ誰に迷惑をかけたよ!!」

「…えっと……んー……。」

言いよどむ魅音。だがやがて意を決して口を開く。でもその口調は歯切れが悪い。

「だ、だってさ圭ちゃん、それ、人のバットだしさ。無断借用は悪いしー…。」

「転校した生徒の忘れ物だろ？　本人が取りに来るまで借りてるだけだよ。」

「え、あ！　……まぁね……転校したし……。」

魅音が柄にもなくうろたえる。転校が偽りであることがあまりに明白だ。

「でも変わってるよな。兄貴だけ転校なんだろ？　妹は転校しなかったんだろ？」

俺の揺さぶりに魅音は露骨に反応する。

「……け、圭ちゃん、…知ってたの…!?」

「北条悟史。…沙都子の兄貴、だろ？　去年、鬼隠しにあって消えた。」

魅音は切り返せず沈黙してしまう。

「レナにも言われた。何で素振りを始めたのかってな。」

「…………。」

「悟史もやってたんだってな。素振り。それも失踪の直前に。」

「…………。」

「これってさ、オヤシロさまの祟りに遭う前兆ってわけなのか？」

「シーーーー!!」
魅音が慌てて周りをきょろきょろうかがう。
「…頼むよ圭ちゃん。オヤシロさまの話は迂闊にしないでよ！　……私はそんなに信じてないからいいけどさ、他のみんなはすごく信じてる。レナなんかやばいくらいに！」
「やばいくらいに…？」
「とにかく！　みんな怖がってるんだよ!!　もしもこれが悪ふざけならやめな！　悟史の真似は絶対にやめて!!」
怖がらされてるのは俺の方だ。…誰のお陰で素振りをする羽目になったと思ってるんだ。
……だが自分の行為が悟史と重なる点だけは今でも腑に落ちない。誰かにそそのかされたのならともかく、自らの意思で選択した行為のはずなのに…。
「先に言っとく。俺は悟史のことは何も知らない。…みんなが隠してたからな。」
「…か、隠してたってわけじゃ……。」
「毎年起こる事件のこと、隠してたろ？」
「あ、それは…圭ちゃんを……、ん……。」
「怖がらせたくなかったってのか!?　それが理由で俺だけ除け者かよ!?」
「いや、そんなつもりじゃ…、」

「魅音に直に、ダム現場で事件がなかったかって聞いたよな。…魅音はないって言ったじゃないか！！！　バラバラ殺人があったのによ！！！　嘘吐き野郎ッ！！！」
「ご、ごめん…‼　嘘ってわけじゃ…、」
「仲間ってのは隠し事なんかなしだろ？　そうだろ⁉　じゃあお前らは仲間じゃない‼」
「け…圭ちゃん……そんなのって……、」
魅音は頼りなさげにおろおろする。心なしか涙まで溜めている。…いつもの魅音からはとても想像できない。
「あぁそれに、先日の見舞いのおはぎ、あれ、うまかったぜ。血が出るかと思った。……やったのはどっちだ？　お前か？　レナか⁉」
「…………………………私。」
あまりにあっさり認める。そのあっさりさに驚かずにはいられない。
針だぞ、裁縫針だぞ⁉　そんなものを混ぜれば大変なことになるって誰だってわかるはずだ。それをさも、ちょっとしたいたずらを認めるような感じでこうもあっさり認めてしまえるなんて……‼
「しッ、死ぬかもしれなかったんだぞ‼　仲間にあんな真似をするのかよ…⁉」
「……そ、そんな……ちょっとしたいたずらじゃん…。」

狼狽しながらもどこか苦笑いのような笑みを浮かべる魅音に、今さらながら怒りがこみ上げてくる。……………いや、それは正しい表現ではないかもしれない。…向こうが弱気なので、強気に出てもいいことがわかったから、というのが正しいかもしれない。
「あれがいたずらで済むかよッ、えぇぇおい⁉⁉」
俺はその胸倉を掴み、ねじりあげる‼　魅音はびくっとして小さく俯いた。
「おはぎにタバスコ混ぜるとか、そんなのとはレベルが違うんだぞ！　針だぞ裁縫針‼　飲み込んで…喉の奥とかに刺さったら…どうなると思ってんだよ⁉⁉」
魅音は表情を強張らせてかたかたと震えている。……もうそれは、俺のよく知っている園崎魅音ではなくなっていた。
「とにかく。お前は仲間じゃない。…仲間じゃないヤツの指図を受ける謂れはない。…俺のことは当分放っておいてもらうぜ。…いいな‼」
もう魅音は何も言い返せなかった。
「俺を消そうとしても簡単にはいかないからな。お前らは最初から警察に疑われてんだ。悟史を消せたように、簡単に消せると思うなよ‼」
はっきりと言い切る。これは…宣戦布告だ。
「俺も過去の事件はお前らが怪しいと思ってる。ダムの反対運動の時、お前が警察の世話にな

ってたこともよく知ってる！　隠しきれてると思うなよ…いいな!!」
「ど……どうして……そんな……ことまで………。」
魅音は表情を失い、呆然と立ち尽くすのみだった。
その時、向こうから校長先生の振る振鈴の音が聞こえてくる。
朝のホームルームの時間だ。
「…行こうぜ。委員長がいないとまずいだろ。………？」
その時、初めて、魅音が嗚咽混じりに涙をこぼしていることを知った。
「………う………ひどいよ………圭ちゃん………、」
「…………魅、………。」
思わず慰めようとしてしまうが、口を閉ざす。俺が罪の意識を感じる必要はないのだ。
「…俺、行くぜ。ホームルーム、遅れるなよ。」
俺は震える魅音を残し、昇降口へ向かうべく踵を返す。女に泣かれるのがこんなにも厄介だとは思わなかった。
その背後に、ぼそりと。…本当にぼそりと、その独り言が聞こえた。
「…………そっかぁ……。」
「え？」

俺に言ったものではない。…間違いなく魅音の独り言だ。

だが、嗚咽に混じりながらも、笑うような、呪（のろ）うような声。思わず俺は足を止め、魅音に振り返る。

「……圭ちゃんに…全部バラしたの……あの野郎かぁ……。」

両拳（りょうけん）をぐっと握り、ぼたぼたと涙を流しながら。…地面の一点を睨みつけ…恐ろしい顔で……でも笑顔で……呪っていた。

その鬼気迫る表情に、背筋が凍りつく…。レナの豹変とはまた違う、魅音の豹変。

「………あの時、殺しとくんだったなぁ……。今年で定年だからって…容赦（ようしゃ）してやった恩も忘れやがってぇ………。」

今年で定年…。……って、大石さんのことか…!?

「畜生…畜生…あのじじぃ……。…絶対に殺してやる…………ぅぅッ!!!」

大気がぐにゃりと歪んだ気がした。魅音を中心に、世界が掻き混ぜられたかのように…歪む。たわむ。渦を巻く。

……それは初めて知る、いや、体感する恐怖だった………。

「きりーつ！　きょーつけーー！」

魅音はコンタクトがどうしたとか言って、真っ赤になった目をごまかしていた。
その後一日、レナも魅音も、俺に話しかけたりはしなかった。
沙都子も梨花ちゃんも、俺に目も合わせない。
不思議と胸は痛まなかった。……元に戻っただけなのだ。
思えば、転校してきてからのこのひと月間が楽しすぎた。それだけのこと。
もともと、学校っていうのはこういうところだったじゃないか。
その感覚を、かつては嫌っていたはずなのに……今日はなぜか心地よかった。

笑う鉈

緊張したような、ぼーっとしたような、灰色の授業時間の終わりを告げる振鈴が聞こえてきた。
部活に誘われるとまたいろいろと不愉快な思いをしそうだったので、彼女らには目を合わせないようにしてさっさと帰り支度をする。
机の中身をカバンに詰め込み、すっかり手に馴染(なじ)んだ悟史のバットを持つと、昇降口へ向かった。

今日も何事もなくてよかったと思う気持ちと、何事もなかったなら明日も同じ一日を繰り返さなければならないのかという脱力感が交互に襲ってくる…。
だが……体のずっと奥の奥。……心の奥の奥の奥底が、…疼(うず)いて…教えてくれるのだ。
その繰り返しは今日で終わると。
その終わり方が、…俺の望む終わり方なのか。…望まない終わり方なのか…それはわからない。
だが…今の俺にとって、どのような終わり方になるのかよりも…もっと重要なことがある。
知りたいことがある。
なぜ俺が殺されなければならないのか。
どうして。なぜ。何のために。
あの平和で和やかだった雛見沢は、何でこんなにも歪んでしまったのか。
表の日差しは、まだ厳しい。太陽も熱気も、そして空気も。それを答えてはくれない。
…それとも……セミたちの声を借りて、俺に何かを伝えようと必死に叫んでいるのだろうか…？
きっと、セミたちに混じり、…富竹さんや悟史が必死に俺に訴えかけている…。
そして俺はそれにまだ気付けない…。

…それに気付いた時、俺もこうして…セミたちに混じり、次の犠牲者にそれを伝えようと哀れな努力を繰り返すのかもしれない…。

ふと足元を見ると、セミがひっくり返り、弱々しく体を震わせている…。

ジジ、ジ……。

本当の夏もまだなのに、もう力尽きようとしているセミが最後の声を振り絞っていた。

いくら耳をそばだてても、……何を言っているのかはわからない。

…でも……俺は努力しなくてはならない。……何かを伝えようと必死になっているこの声を、聞こうとする努力をしなくてはならないのだ……。

その時……セミたちが叫びをあげるのを一斉にやめた。

まるで…自分たちを恐ろしい目に遭わせた当の本人の登場に、一斉に縮こまるかのように…。

間違いなかった。……それは気配の接近。

足音は最小限だ。…セミたちが鳴き止むことによって教えてくれなければ…気付けなかった。

疲労感が一気に引き、代わりに五感を研ぎ澄ませる脳内物質が分泌され始める。

そして…そぅっと…込み上げてくる恐怖心を静かに抑えつけた。……そう長く抑えきれる感情ではないだろうが…。

……研ぎ澄まされなければならないこの一瞬に…冷静さがもたらされる。

今日は昨日のように怒鳴りつけたりしない。…冷静に木陰に身を隠し、尾行者の影を待ち受ける。
やり過ごせるだろうか…？　いや、俺に足音が聞き取れたように、相手も俺の足音を聞き取っているだろう。…俺が身を隠して息を潜めていることは見抜かれているかもしれない…。
尾行者は…やはり昨日と同じに、レナだろうか？
レナだったら容赦しない。怒鳴りつけて昨日と同じように先を歩かせればいい。
レナでなかったら…？　……相手の出方次第、だな…。
誰であろうと油断しない。…誰であろうと、……誰であろうと…！
足音がひたひたと近付いてくる。
唾を飲み直し、汗ばんだ手をズボンのすそでぬぐってバットを握り直す。
一度は抑えた恐怖心が、ぶり返そうと俺の隙をうかがっているのがわかる…。
一体…誰なんだ…？　木陰から尾行者を覗き込む…。

……それは想像を裏切らず、レナだった。
未知の相手でなかったことによる安堵感はあったが、それは一瞬で引いた。…レナの…様子が違ったからだ。

光を失った死者の瞳。…なのに唇は弧を描いて切れ込み、そう、…まるで薄く笑うかのように見えた。……そして、その右腕には……「鉈」。

再び木陰に身を隠し、今見た信じられない光景を思い出す。

今のは……なんだッ⁉　あまりにも露骨な……恐怖の具現‼

俺のバットにはまだ、野球とか素振りとか…ごまかしの利く大義名分がある。…だがあの鉈はなんだよッ⁉　ごまかしも何もない！！！　そのまんまの…鉈だッ⁉⁉

「……圭一くん。かくれんぼ、かな？　かな？」

心臓が大きく跳ねる。……呼吸が潰れるかと思うほどに。

辛うじて保っていた冷静さは粉々になって吹っ飛び、代わりに全身から噴出す冷たい汗が、自分が今どんな感情に支配されているかを教えてくれる…。

だめだだめだ…。隠れきれていない。バレている…！

「……レナを驚かせようとしたのかな？　…かな？」

レナにこれ以上の接近を許すくらいなら、間合いがあるうちに姿を現した方がましだと判断する。

もう一度バットを握りなおし、…覚悟を決め、隠れていた木陰から姿を現した。

「あはははははははははは。…圭一くん、見ーつけた。」

奇怪な笑い声をあげ、俺の姿を見つけたことを喜ぶレナ。……顔こそは笑っているが、俺が姿を隠していたことを不快に思っていることを目が語っていた。

その目の……あまりの深さに…足がすくみ始める……。あぁ……だめだ……。

お腹の底から…熱くて冷たくて、どろどろとしたものが滲み出てくる…。そのどろどろは…俺が気を許した途端に血流に乗って、臓器という臓器を麻痺させてしまうに違いないのだ…！

だめだ……だめだ…！ このままレナに飲み込まれてはいけない…！ 切り返すんだ！

負けるな!! 声を…搾り出せ…！

「な……何の用だよッ!!」

虚勢を隠すために大きな声を張り上げる。……だがレナはその程度で臆したりはしなかった。

「…圭一くんと同じ。…帰り道だよ。」

「じゃあその鉈は何だよッ!?」

「…じゃあ圭一くんのそのバットは何なのかな？」

「お、俺は素振りで…!!」

「じゃあレナは宝探しなの。」

「た、宝探しぃ…!?」

「ダム現場跡の宝の山にね、また新しいかぁいいのを見つけたの。だからね、それを発掘する

ために、必要なの。」
「し、……信じるかよそんなのッ！！！」
「信じないよね。あはははははははははははははは。」
レナの今日の笑いは明らかにおかしかった。…これまでにもレナの豹変は何度か見た。……だが今日のは明らかに違う。思わせぶりな、とか、眼光が鋭い、とか。…そんな遠回しなものじゃない。………何と言えばいいのか……露骨だ‼
「……待ってよ圭一くん。あははははははははははははははは。」
レナは奇怪に笑いながらも、決して足を止めたりはしない。
俺はそんなレナに追いつかれまいと、レナが近付く度に小走りに逃げては振り返る、を繰り返す。……それはどう見ても、レナに追われて逃げているようにしか見えなかった。
「つ……ついてくるなよ…ッ！！！」
「それはできない相談だよ。…レナの家もこっちだもん。あはははははははははは。」
昨日、この道で出会ったレナは俺に怯え、震えながら指示に従った。
だが今日は違う。レナには何の怯えもない。…いやむしろ…怯えているのは俺の方なのだ⁉
レナと帰宅路が同じというならいいさ、道を変えてやる！　それでいいだろ⁉
俺は曲がったこともない、よく知らない小道を入る。

だがレナは俺のその様子をけたけたと笑いながら、ついてくるのだ…！
どうして⁉　どうして⁉　レナは帰るんだろ⁉　じゃあいつも通りの道で帰ってくれよ‼
どうして…こんな変な脇道（わきみち）にまで…追って来るんだよ⁉
そんな俺の、叫びのような思考は…そのまま口からこぼれた。
「…ど、どど、どうして付いてくるんだよッ…⁉」
俺の声はすでに恐怖で染まりきっていた。
「…圭一くんとお話ししたいから。…圭一くんもレナとお話ししたいんじゃないかな？　かな？」
「お、俺は何も話したいことなんかない…‼」
「嘘だよね…？　相談したいこと、きっとあるはずだよ？」
「ない！　レナと話すことなんか何もないよ‼」
「嘘だよね？」
「嘘じゃないよ…！」
「嘘だッ‼‼‼」
レナの叫びがこだまし、驚かせた鳥たちが羽ばたいていく。俺はすくみあがり、歩みをさらに速めることしかできない。

「お話ししようよ圭一くん。………お話お話。……あはははははははははははは。」
何で俺はこんなひと気のない、知らない道を走っているんだろう⁉
こんな、来た事もない林道を、なぜ鉈を閃かす少女に追われて駆けているというのか⁉
「圭一くんには悩んでることがあるんじゃないかな？」
「な、ないよ！　何にも悩んでない‼」
「嘘だッ！！！！　あはははははははははは。」
俺は走ってるのに。レナは歩いてるのに。どうして距離が開かない⁉
「わかるよわかる。レナはわかるよ。怖いんだよね圭一くん？」
「こ、怖くなんかない！　何も怖いことなんか、」
「嘘だッ！！！！　あはははははははははは。」
俺の息は乱れ、足はもつれつつあった。だがレナの息は少しも乱れない。
「レナだけは相談に乗ってあげられるよ。今度こそ乗ってあげられる。」
レナが何の話をしているのか、何をしたいのかわからない…！
「今度こそ相談に乗ってあげられる。悟史くんのときとは違うもの！」
悟史の名が出、一瞬振り返る。だが、そうしている間にもレナは歩みを進めてくる。俺には立ち止まる余裕もない…！

「悟史くんも悩んでた。辛そうだった。でもレナは相談に乗ってあげられなかった。とても悲しかった。」
この道はどこに続いているんだろう⁉　曲がりくねり、上ったり下ったり！
本当に…自分の家に向かっているのかも怪しい。すでに方向感覚は失われていた。
「悟史くんが〝転校〟しちゃった時ね、本当に後悔したんだよ。レナが相談に乗ってあげれば…悟史くんは〝転校〟せずに済んだかもしれないって。すごく後悔した。」
道はますます深く、俺を森の中に誘い込む。…走れば走るほどに、俺は人里から遠ざかっているんじゃないだろうか…⁉
そう思えば思うほど、冷静さが失われていく…。その冷静さが失われていくことを理解する、内なる自分だけがいやに冷静だった。
「だからね、誓ったの。もしも悟史くんみたいに、苦しんでいる人にもう一度会えたなら、レナが助けてあげようって！　もう人が〝転校〟するところは見たくないの。あはははははははははは。」
くっそぉおぉお‼　転校って何だよ‼　転校させられてたまるか‼　悟史と同じ目に遭ってたまるかよ！！！
「さぁ圭一くん、レナに話して。レナはきっと圭一くんを理解してあげられるよ。レナだけは

圭一くんの味方。」

ぜえぜえと息が乱れる。肺は爆発しそうに熱くなり、心臓はこれ以上ないくらいにバクバク言っている。…素振りよりランニングの方が必要だったのかもな…。馬鹿な現実逃避に苦笑いする余裕もない…！

「悩みがなくなればきっと圭一くんも元通り。みんなとも仲良しに戻れて、また楽しく部活ができるよ。今度は一緒に組んで魅ぃちゃんをやっつけようね。あはははははははははははははは。」

あぁそうだったらどんなに楽しいだろうな…。この何日間か、どれほど時間を巻き戻したいと願ったか、レナには想像も付くまい…。

「レナともきっと仲良しに戻れるよ。また一緒に宝探しに行きたいね。今度はお弁当も作っていくよ。何なら今から宝探しでもいいよ。行こうよ一緒にダム現場跡。見つけたばかりのかぁいいの、圭一くんにも見せてあげるね。きっと圭一くんも気に入るよ。あはははははははははははは。」

俺の足がガくガくと揺れながら、ぺたぺたと情けない足音をたてる。必死で逃げているつもりだが、俺が少しでも気を抜いたらすぐにでも崩れてしまいそうなほど情けない足取りだった。

それを追うレナの足音は鋭い。小枝をバリバリと踏み割りながらその音で俺を威圧(いあつ)する。

もう俺は認めるしかない。……俺はレナに追われ……逃げているのだ！

捕まったら、終わる。…本能がそう告げていた。…何がどう終わるのかは…具体的には思いつかない。だが捕まったら終わる。それだけはわかる。

だが……どんな終わり方にせよ……まだ終われない。…こんな…わけもわからない内には絶対に…ッ！！！

そんな一瞬の心の隙だった。あろうことか、膝が笑うようにかくんと抜け、その場に崩れて転んでしまう…！

慌てて立ち上がろうと、バテて言うことを聞かない足を鞭打つ！

バットを杖に何とか立ち上がる俺の眼前に、もうレナはいた。

疲労困憊で息も絶え絶えの俺に比べ…レナは凍えるくらいに冷え込んでいて、息が乱れないどころか、心臓の鼓動さえ感じられなかった。

「何がこわいのかな…？　怯えるなんて圭一くんらしくないよ？　あはははははははははははははははははははは。」

それは慈愛の表情にも見えた。…瞳に生気の宿らない、仮面のような慈愛だった。

怯えるなと諭しながら、レナの両手はすぅーっと、頭上に差し上げられる。

その両手は幾重もの残像を残しながら…まるで千手観音のような神々しさを見せた。

…そして頭上で両手が組まれた時、そこには鉈が握られていた。
それを呆然と見ていることしか出来ない……自分。
「お………教えてくれ………。悟史は…どうなったんだよッ！！！」
レナは鉈を振り上げたまま、厳かに口を開いた…。それはまるで、二度と会うことのない友人に告げる別れのような……そんな残酷さが宿っていた…。
「言ったよ。…悟史くんは〝転校〟したの。」
「その〝転校〟ってのをやめろよッ！！！」
「……………………。」
「鬼隠し、ってことなんだろ？　そうだろ⁉」
「……………………。」
「もう教えてくれたっていいだろ…⁉　悟史を消したのは誰だよ⁉　レナか⁉　魅音か⁉　それとも村の誰かかッ⁉⁉　答えろよッ！！！」
俺が必死になって叫べば叫ぶほど、レナは凍った笑顔を浮かべるだけだった。
「……圭一くんが何を言ってるか、わからないな。」
「じゃあわかるように言ってやる‼　連続怪死事件の…犯人は誰だ！！！」
「…………圭一くんは勘違いしてるよ。」

「……え。」
いつの間にか、狂ったような笑いは収まり、…レナは冷たい表情になっていた。
「……ニンゲンの犯人なんかいない。…全てはオヤシロさまが決めることだもの。」
「オヤシロさまの祟りなんて……迷信だろッ!?!? レナは信じてるってのか!?」
「信じるとか信じないとかじゃない。…オヤシロさまは〝いる〟の。」
レナの眼差しがさらに冷え込む。…有無を言わせない、そんな威圧感がひしひしと伝わってきた…。
「…オヤシロさまなんて……、そんなものいるわけが…!」
「圭一くんは信じないの…？ オヤシロさま。」
「…し、信じられるはずないだろッ!? そんなのいるわけがない!!」
「〝いる〟よ。オヤシロさま。……圭一くんだって身近に感じてるはずだよ？」
「そ、そんなもの…感じたことないよ!!!」
「…圭一くんさ、誰かに謝られたことない？ それもずっと、ずっと。」
世界から音が消え、レナの声だけがいやに大きく響いた。
……誰かに、謝られたこと…？ それも、……ずっと、…ずっと…？
「それはね、許してもらえるまで……ずっとついてくるの。学校へも。お家へも。…枕元へも。」

……レナが何を言っているのか、わからない。
「レナのところへも、来たんだよ。オヤシロさま。……だからレナは〝転校〟して雛見沢に帰って来たの。」
わからない。わからない。〝転校〟って何だよ。レナは何を言ってるんだよ…！
「圭一くんのところにも……オヤシロさま、来てるんじゃない？　きっと相談に乗れるのは私だけ。……圭一くんを〝転校〟なんかさせないから。…ね？」
あはははははははははははははははははははははは。
レナの狂った笑い声が頭の中をがんがんとこだまする…。
…レナのところへも、オヤシロさまが来たというのか…？
そうだ。…昨夜、大石さんに聞いたレナの話でも出てきた…！

「他言無用でお願いします。また、内容には一部憶測も含まれているかもしれません。……全てが真実ではないかもしれないということです。……よろしいですね？」
大石さんは語り始める…。
「被害者も学校も告訴していないので、調書がないのです。つまり…警察が関与してないわけなんですよ。…ですから詳細は関係者からの聞き取りのみなのです。…つまり信憑性が高く

ない。」

「被害者って言いましたか？　レナはガラスを割っただけじゃないんですか？」

「いえ、男子生徒が三人ほど竜宮レナに殴られています。金属バットでです。……二人はアザで済みましたが、一人は片目に後遺症を残すほどの大怪我をしたそうです。」

「そ、それって傷害事件じゃないんですか⁉　警察は逮捕とかしないんですか⁉」

「どういうわけか、被害者が告発しないんですよ。警察に届出がないので……。」

金属バットで殴られて…大怪我したんだぞ⁉　普通なら警察沙汰だ。…それがなんで…告発しない⁉

「被害者の男子生徒三人にもそれぞれ話を聞こうとしましたが、全員、口が重いんです。こう言っては何ですが……怯えてるんですよ。彼女が転校した今でも。」

「……大石さん。…話を最初から整理して話してくれませんか…？」

レナはガラスのついでに人も殴った？　それとも…人を殴って、それでも飽き足らずガラスを割って回った⁇　似ていてその意味は大きく異なる…。

「その日、…竜宮レナは親しい男子生徒三人と一緒にプール倉庫の辺りで話をしていました。」

「……その三人って何者ですか？」

「個人名は伏せますが、三人とも竜宮レナととても親しい、仲良しグループだったそうです。

彼女は紅一点だったんですな。」
…なら四人で一緒にいてもおかしくはないのか…。
「それで、どうなったんです？」
「理由はわかりません。竜宮レナはプール倉庫脇にあった野球部のバットを手に取り、三人を次々に殴り倒しました。」
「えぇ…ッ⁉」
目撃者はいない。以下は事件当時を記憶する人間たちからの情報を組み合わせて再現したものだ。
ある日の放課後。レナは男子生徒三人と一緒にプール倉庫脇で話をしていた。それは何かの相談でなく、いつもそうするようにたむろして、話に花を咲かせていただけらしい。
その時、レナに〝変化〟が起きた。
その変化はあまりに突然で、三人は何が起こったのか理解できなかったらしい。
そして金属バットを手に、仲間たちを次々に殴り倒した。
額を割られ、血まみれになって倒れる仲間たちを残し、レナは校舎へ向かった。
そして教室の窓ガラスを次々に割っていったのだ。
何分もしないうちに教師たちがやってきて…レナを取り押さえた。

「レナに起こった〝変化〟って、何ですか。」
「三人の証言で一致するのは……突然人が変わった。豹変した、という点です。」
「……豹変…。」
俺も…レナの豹変には覚えがある。
…いつものレナとはあまりに違う、レナによく似た別人としか思えない、…そんなレナに変わる瞬間を何度か見ている。
「……その豹変って言うのは……度々(たびたび)あったことなんですか？」
「いえ、そういうのはまったくなかったそうです。…私も調べられる限り、彼女の過去や病歴等を追ってみましたが、見つけることはできませんでした。」
「……その、レナみたいに、突然人が変わる現象って…結構あるんですか…？」
「もちろんありますよ。精神的なものから性格的なものまでたくさんあります。」
「では……レナには潜在(せんざい)的に豹変する要素があったってことですか？」
「…断言はできません。ですが、竜宮レナをよく知る友人たちからの証言では、とても彼女にそういう要素があるようには思えません。」
……やさしく親切で可愛らしい。きっと転校前の学校でも、今のレナと同様に誰からも好かれる理想的な女の子だったのだろう。

…そんな子が、突如豹変して、金属バットで殴りかかってくるなんて…誰が想像できる？
……想像できるわけがない！　俺自身、今でもあのレナは見間違いではなかったか…と思わずにはいられない時があるのだから…。
「そして……どうなったんですか…？」
「学校の正面が病院でしたので、三人はすぐに病院に担ぎ込まれ手当てを受けました。」
「レナは…？　警察は…!?　どうして警察沙汰にならなかったんですか!?」
「警察は呼ばれなければ関与できませんからねぇ…。」
「ひとりは後遺症を残すくらい大怪我したんじゃないんですか!?　どうして訴えないんです!?」
「…私もそこは引っ掛かりました。何かの圧力、もしくは脅迫があったのか。それとも訴えたくても訴えられない理由があったのか……。」
「もちろん大石さんのことですから……調べたんですよね？」
「えぇ…まぁ。……ですが、始めに言いましたよね？　被害者たちの口がとにかく重いのです。触れたがらないと言うか、関わりたくないと言うか…。」
口が重い。触れたくない。関わりたくない。……それはどこか、この村の人々とオヤシロさまの祟りの関係に似ていた。

「学校の先生とかからは何も聞けなかったんですか？」
「学校は聖域なんですよ。隠蔽体質とでも言いますか。…私も捜査令状を取ってませんから弱いんですよねぇ…。」
「じゃあ…学校側はノーコメント？」
「いえ。事件の存在自体を否定しました。」
「…………。」
「ですが、その日。間違いなく病院に三人の男子生徒が打撲で担ぎ込まれたのは事実なんです。…病院にその記録が残ってますので。」
「……被害者は語らず、学校は否定する。……何もわからないじゃないですか！」
「ええ。その事件があったという事実以上のことは何もわかりません。……被害者たちもこの事件が公になることを望んでいませんので…私と前原さん、私たち二人が忘れれば、事件はそのまま闇に消えるでしょうな……。」
……しばらくの間、二人して沈黙する。
一見するとただの暴行事件だ。…だが重要な何かが深く隠蔽されている。それはさらに幾重ものベールに包まれ、そっと……まるで初めからなかったかのように、闇に溶け込もうとしているのだ……。

「その後、学校を謹慎で休学します。そしてその間、神経科医のカウンセリングを受けました。」
「その医者からは何か聞けたんですか？」
「…これがまた…職業倫理のしっかりした尊敬すべき方でしてねぇ。…口が堅いんですよ。も～とにかく！」
「警察手帳を見せてもダメなんですか？」
「書面で申請しろと言われました。手帳自体に法的拘束力は何もありませんからねぇ…。」
「じゃあ、大石さんはどうやって…レナがオヤシロさまのことを告白したことを知ったんですか？」
「一部を聞いてた看護婦さんがいましてね。この方は手帳を見せただけで協力してくださいました。」
「……それで…なんと？」
その看護婦も意識して会話を全て聞いていたわけではないらしい。…漏れ聞こえてきたことを少し覚えていたという…その程度らしい。
「看護婦さんが言うには、その時の竜宮レナはとても淡々としていて落ち着いていたそうです。」

それは、カウンセリングというよりは教会の懺悔のような感じだったという。
親と一緒にしばらく話していたが、途中からは退出してもらって、医師とレナの二人でのカウンセリングとなった。
「例の、オヤシロさまの話はどこで出てきたんですか…？」
「途中です。その名前を、突然叫んだのです。だから看護婦さんもびっくりして聞き耳を立てたのです。」
「……オヤシロさまですッ！！！！」
突然、レナはそう叫んだ。…直前の会話はわからないので、どういう意味でそう言ったのかはわからない…。
医師は落ち着いた様子で、レナに着席を促したという。
「そのオヤシロさまというのは何ですか？」
やさしく、やさしく。…カウンセリングの基本は聞きに徹することだ。
「雛見沢を捨てた人は…必ずオヤシロさまに追われるんです‼　そして…とうとう私のところにも来たんです！！！」
「竜宮さんが今のお家に引っ越される前に住んでいたところですね？」

「私は引っ越したくなかったけど…お母さんとお父さんの都合で…仕方なく引っ越しました。…でも……オヤシロさまは許してくれなかったんです!!」
「竜宮さんはきっと雛見沢にもお友達がたくさんいたんでしょうね。今でも懐かしいんじゃないですか?」
「…帰りたい…。……雛見沢に帰りたい…。うぅん、帰りたいんじゃない、帰らなきゃいけない! 本当はもっと早くに帰らなきゃいけなかった!! でももうだめ……!!! オヤシロさまが来てしまった!!!」
「オヤシロさまというのは、その雛見沢の神さまなんですね?」
「誰でも知ってる…雛見沢の守り神さまなんです…。それで、雛見沢を捨てて出て行こうとすると……祟りがあるんです。」
「竜宮さんが引っ越しをされたのは…もうずいぶん前ですよね? では…今になってその神さまがやってきた、ということですか?」
「……信じないでしょうけど……オヤシロさまはいるんです!」
看護婦はここで別の看護婦に用事を頼まれ退室。…ここまでしか覚えていないらしい。
「オヤシロさまが…か……。」

「確かに雛見沢にはそういう迷信があります。里を捨てて出て行くとオヤシロさまの祟りがある、という。…この辺りは前原さんもすでにご存知ですよね？」

…村に仇なす者に祟りがある、ってのはよく知ってる。

ダム建設を妨害するために、建設現場の監督を祟り殺した。そしてその翌年にはダムを誘致、推進した沙都子の両親を祟り殺した。

でも、村を捨てて出て行くと祟られる…というのは初耳だ。

「初耳です。村の外敵が祟られるのはわかりますが……、どうして出て行く村人まで？　普通、出て行く者は祟られないものじゃないんですか？」

踏み込む者を祟るのが、こう言っては変だが……祟りのルールだと思う。触らぬ神に祟りなし。…去る者を追わないのが祟りじゃないのか…？

大石さんは受話器の向こうで軽く、うーんとうなると、再び口を開いた。

「えー……雛見沢が大昔、鬼ヶ淵村と呼ばれていたという話はしましたよね？」

そんな話も聞いたような…。

大昔、雛見沢は鬼が住まう里として恐れられながらも崇められていたという。

「ふもとの村人たちは鬼たちを崇めていました。で、鬼ヶ淵村は神聖な土地なので絶対に不可侵。むやみに立ち入るとオヤシロさまの祟りがある、とされてきたんです。」

鬼ヶ淵村、つまり雛見沢に土足で踏み込む輩を祟る。…それは理解できる。
「それはわかります。…でも、出て行くのまでだめってのは……。」
「鬼たちもまたですね。俗世に出て行かないよう、オヤシロさまに厳しく見張られていたんだとか。……つまり、オヤシロさまってのは、俗世と鬼ヶ淵村の交流を禁じていたんでしょうなぁ。」
「つまり……オヤシロさまってのは、守り神ってよりも…監視者なんですね？　この地を外界から隔離しようとする。」
「そんな感じになるんでしょうなぁ。………すみません、私も詳しくないんです。この辺りは婆さまの受け売りでして…。」
そういう話なら少しはわかる。雛見沢に来るよそ者も祟るし、出て行こうとするものもまた祟る。つまり、村境を侵せば、それが入る者であっても出る者でも同じということなのだ。
レナは元は雛見沢に住んでいて、引っ越しで出て行ったのだから、祟られる条件は満たしているいる…ということなのか。
「……つまり、レナは望まない引っ越しをしたため、オヤシロさまの祟りに遭ったと、そう話しているわけですか？」

「要約すると…そういう意味なんでしょうなぁ。…実際、この後しばらくして雛見沢に引っ越していますから。」

……雛見沢を捨てて出て行こうとする者を祟る。

だが…どうしてレナだけ？　祟られるなら一緒に引っ越した両親だって同罪じゃないのか？

それにこの現代日本、人の出入りなんていくらでもあるはずだ。…それらの人間を全員祟ってまわってたらとんでもないことになってるだろう。だが実際にはささやかなものだ。……せいぜい、綿流しのお祭りの日に一人が死んで一人が消えるくらいだ。…このせいぜいというのも実に嫌な言い方だが…。

「…まぁとにかく。わからないことだらけなんですよ。…オヤシロさまの祟りがどうだったにせよ、クラスメートを金属バットで殴った理由にはなりませんし、被害者が訴えない理由にもなりません。………まさか前原さんも、恐ろしい祟りが起こって、被害者たちがすくみあがった…なんてこと、信じるわけないですよね？」

もちろん信じたくない。

だが…俺はそれよりも……今、あるひとつのことが気になっていた…。

それは…レナもまた、「オヤシロさまの祟り」と「金属バット」という奇妙な共通点を持っていたことだ。

悟史はオヤシロさまの祟りに遭い、失踪した。失踪の直前、金属バットに執心していたことは俺も最近になって知った。

そしてレナも。自身がオヤシロさまの祟りに遭ったと医師に告白した。…そして事件時に凶行に及んだ武器はやはり金属バットだった。

そして…俺だ。

自身も様々な不可解な出来事を体験し、今こうして金属バットを握っている…。

悟史と同じことだったことを知った時にも衝撃を受けたが……まさか…レナも同じだったというのか…⁉

だがレナと悟史には決定的に違う点がひとつある。

それは、悟史は祟りに遭って失踪し、レナは現にこうして生活している点だ。二人は共にオヤシロさまの祟りに遭いながら違う結末を迎えた。

……そして…俺。

もう偶然だなどと言っていられない…。レナ・悟史。…そして…俺なのだ。

やはり…俺はオヤシロさまの祟りに…取り込まれているのか⁉ …いや、そんなことよりも……俺はこれからどうなるんだ……？

悟史は鬼隠しに遭い失踪。レナは無事だった。……無事？

そしてレナは変わった。レナでないレナを内に宿したとしか思えない。
そして………今こうして……俺を追い立てている！！！
「レナ……教えてくれ……。俺は……どうなるんだよ…⁉」
レナは仁王立ち(におうだ)のまま、答えてはくれない。
「悟史は消えた。だけどレナは消えなかった。…じゃあ俺は…どうなるんだよ⁉」
「……あははははははははははははははは。」
これほど恐ろしい笑い声は聞いたことがなかった。…それはまさに連続する威圧音。
「……大丈夫だよ。レナが助けてあげるから。」
レナは鉈を大きく振り上げたまま……さらに一歩踏み込んでくる。
「………さぁ。」
さらに一歩。レナの顔が俺の眼前いっぱいに広がる。
「………話して。」
さらに一歩。レナの鼻が俺の鼻にかするぐらい…間近に迫る。
「………話したいことがあるんだよね？ ………レナが聞いてあげる。助けてあげるから
………ね？ 話してね？ 話してね？」

俺はぺたんとしりもちを付いてへたり込む。……それは情けないことじゃない。…少しでもレナから離れるための、精一杯の逃げだった…。

「あはははははははははははははははははははははははははははははははははは……」

その笑いを終わらせてはならないと直感する。…その笑いが終わった時、……!!

それを感じ取った瞬間に体が反射的に動いた。

自分でも信じられないくらいの素早さで跳ぶように起き上がり、レナを両手で弾き飛ばす！

レナはまるで羽で出来ているかのような軽さだった。不釣合いな鉈の重さに大きく振られ、まるで風に乗るかのように軽々と飛ばされる。それを視界の隅に確認すると、あとは一目散だった。

脱兎のごとくという言葉がこれ以上似合うことはないだろう。…レナから離れよう。逃げよう。生き延びよう！！！　それ以上のことは何も思いつかなかった。

走りながら、俺はずっとバットを握り締めていたことを思い出す。……なんて役に立たない武器なんだ。…肝心な時に武器であることすら忘れているなんて…!!

曲がりくねった道をさらにさらに駆け抜ける!!

息苦しさも足の重さも一切感じなかった。…俺の体も理解しているのだ。…ここで走らなか

ったら…命がないことにッ!!
後ろからあの、あははははは…という笑い声を模したレナの威嚇が聞こえてくる。
それは木々と俺の頭の中にこだまし、少しでも俺の正気を失わせようと作用していた。

木立がまばらになり視界が一気に開ける。
ここは…!? 知っていそうで覚えのない光景に一瞬混乱する…。
すぐに気付く。ダム現場跡だった。普段と違う側から来たので、戸惑ってしまったのだ。
あんなにめちゃくちゃに疾走して、このような場所にたどり着くこと自体、何だか誰かの筋書きに従わされているような薄気味悪さがあった。
見通しはいいが、ひと気のまったくないところだ。逃げる者にはあまりに辛く、追う者にとってはこれほど都合のいい場所もない。
心臓はすでに爆発寸前だった。足の筋肉も悲鳴を上げている。だが構わなかった。
ここで休んだら、もう悲鳴をあげることさえできなくなってしまうかもしれないのだから。
それでも、一休みする口実が欲しくて後ろを振り返った。………レナの姿はない。
かわりに、村人が二人ほど歩いてくるのが見えた。
レナでなく、かつ、第三者が登場したことに、ほっと胸を撫で下ろそうとする…。

だが、俺の中のもうひとりの俺が再び警鐘を鳴らした…。

村人が歩いていることに不審はない。だが、何かが気になった。

服装は二人ともラフ。手ぶらで、いかにも散歩のような感じ……。

だが……時間帯と、大人が二人して意味もなく、というところに何か不審な印象を受けなくもなかった。

……それよりも……目だった。二人で談笑しながら散歩…ではなく、二人とも押し黙り、…まっすぐ…こっちを見据えて歩いてくるのだ。

神経が高ぶっていて、ついついそう見えてしまうのか…⁉

……走って逃げよう。多分最善の選択だ。

無関係な人間なら、走れば簡単に振り切れる。……もしも俺を狙う連中なら…同じように走って追って来るはず。

どちらにせよ、もたもたしていればレナが追いつく。

そうだ……走ろうッ！！！

そう思い、踵を返そうとした瞬間、そんな俺の考えを見透かしたかのように…その二人が駆け出した‼

ど、どうしてッ⁉　何で俺を追ってくるんだよ⁉

俺は心のどこかでレナに怯えながらも、怖いのはレナひとりだと決め付けてきた。レナだけが怖いから、それ以外は怖くないと…そう思い込もうとしてきた。

だが……今こうして赤裸々に…これ以上ないくらい明白な形で思い知らされる!!

…鬼たちは村総出で獲物を追い回した、という大石さんに聞かされた鬼ヶ淵村の昔話がふっと脳裏をよぎった……。

後ろを振り返らないでも、二人が俺に追いついてくるのが、その荒々しい足音でよくわかった。

レナのように、振り切れず追いつかれずの間合いで、真綿に締められるように追われるのも恐ろしかったが…、そんなのは比にならない。あまりにも暴力的に迫る、この直接的恐怖に勝るものなどあるわけもない…ッ!!!

追跡者の腕が、一度肩をかすった。…荒々しい足音だけでなく、すでにその呼吸音まではっきりと聞こえる。…いや、…その吐息をうなじに直接感じるくらいに!! 俺のすぐ後ろまで迫ってきている…ッ!!!

…クールになれ前原圭一。

俺は全力疾走のまま、空中に静止するかのような……、いや、時間が静止するかのような感覚を味わっていた。

その全てが凍りついた世界で…俺は少しだけ後ろを振り返り…追跡者がいかに俺の間近に迫っているかを改めて知った。

…大人の足には勝てない。凍った時間が解け出せば、瞬きをふたつもしない内に…俺は組み伏せられるだろう。組み伏せられて……それから…？

考えるな圭一。…このままでは振り切れないことをまず認識しろ。逃げ切れないことが確定したなら…あとは俺が決断するだけでいい…。次の右足でそれをやるか、それとも左足でやるか…決めるだけでいい…!!

…左足で行こう。やるぞ、…やるぞやるぞやるぞ…、武器なら持ってるんだ!!

そう決心した瞬間、凍った時間が木っ端微塵に砕け散るッ！！！

右、左！！！　右腕のバットを大きく振り、その遠心力を使って、急停止、急旋回！

二人は俺の突然の攻撃に明らかに驚いた。…一瞬体勢を崩し、俺を組み伏せようとして繰り出した両の腕が空を切る！

もう一人の男が俺が反撃に転じたことに気付き、慌てて対応しようとするが、もう遅いッ！！！！！

俺はバットを振る必要もなかった。ただ、遠心力のままにその軌道を延長するだけでいい!!

軽い当たりだったが、バランスを崩させ転倒させるだけの威力はあったようだ。だが転倒し

たくらいで怯むことはなかった。すぐに起き上がってくる！
二人は腰を低く落としたような姿勢で身構えると、絶対に逃がさないという強い意志を見せながら対峙してきた。
これにより、単なる散歩の二人連れでなく、俺を対象にした追跡者であることが確認される!!
レナよりも気楽だった。顔も知らない村人が、知らないがゆえにこれだけ気楽だとは…夢にも思わなかった。…心の中で苦笑する。あぁ、俺の命を狙っているヤツらが、どこの馬の骨ともわからぬヤツらならどれほど気楽なことか！　親しい仲間たちと同じ顔をしてないことがこれほどに気楽なのか!!
「俺に何か用かよッ!?!?　次は眉間にお見舞いするぞこの野郎ッ！！！！」
強がりでもいい！　吠えることにより、自らの内に眠る起爆力を呼び覚ます。
男たちはそれに答えたりはしなかった。信じられないくらい、冷静な表情で俺の左右に散る。
一人はバットに組み付き、もう一人は俺を組み伏せる、そういう算段か！　…一対二では…どうにもならない!!　体中から熱い汗がどっと吹き出る。
ならば先手必勝だ!!　先に踏み込み、一人を打ち崩すッ！！！
右の男に的を絞り、渾身の踏み込みによる強打を振るう。素手の人間にとって、金属バット

の渾身の一撃はどのような防ぎ方をしても、致命的なダメージになる!! 腕で防げば骨ごとへし折り、背中でかばえば内臓の奥にまでダメージを送り込むことが可能!!

相手もそれを理解しているようだった。俺の必殺の間合いのさらに内側に飛び込み、その拳(こぶし)で俺の腹部を狙う!!! まずい…、この間合い、この姿勢、この状態では…回避する術は何もない!!

世界がでんぐり返り、自分の体がまるで木の葉のように…軽々と吹っ飛んでいくのがわかった。

音もなく、柔(やわ)らかに地面に打ち付けられ、顔面でがりがりとした砂利の感触を味わう。…痛みはなかった。……と思ったのもつかの間、すぐに皮膚(ひふ)が擦(す)り剝(む)けるあの嫌な痛みと、胃の内容物がこみ上げてくる時にする、あの苦い感覚が口中を満たす。

そんな痛みを堪能(たんのう)する時間もないことを、今の俺はよく理解していた。

すぐに立ち上がるが、その時にはすでに次の男が眼前に迫ってきていた。…回避できないと冷静に理解できることが、かえって悔しい。

もう一度、腹に渾身の一撃を入れると、そいつはぐるっと俺の背後にまわり、ぶっとい腕で俺の首をがっちりと絞め上げた。

…ぐぅ、…ぐえぇぇ………、凄まじい腕力に、喉がつぶされるッ!!

窒息するとか昏倒するとか、そんな理屈は思いつかなかった。…ただ、視界が真っ暗になり、頭の奥でじーーんという音が聞こえるだけ。意識を途切れないように保つのだけが精一杯だった。

こうしてもがいてる間にも、もう一人の男は無防備になった俺の真正面に立っているに違いない。目を開けることはできなかったが、気配でそれを感じることができる。

俺になす術はない。腕も振り解けず、逃げることも反撃することもできない。

絶体絶命…という単語を、脳裏に過ぎらせる時間すらも、もう与えられてはいなかった。

フィナーレ

………………見慣れた天井だった。

…まくらや布団の匂いも…とても馴染んだもの。……ここは……俺の部屋だ？

普段なら俺以外がいることもないはずの室内に、俺以外の気配を感じたので、ぱっと飛び起きる！　……その途端、全身に痛みが走った。

俺は、…いつからここで横になってるんだ……？

「……大丈夫かな？　横になってた方がいいと思うよ…。」

そこに、…レナがいた。
なぜ俺がここにいてレナがここにいる!? 全身の血管と筋肉が収縮する!!!
……だが…レナの微笑みは俺のよく知るレナのものだった。…気を許してはいけない…と知りつつも、今のレナは大丈夫だ、と勝手に安心してしまう…。
「……俺は……どうして……。」
「…覚えてないの?」
「……意識がなくなってからのことは……全然……。」
体は自分で想像する以上に鈍重になっていた。…あの一瞬で俺自身の持つ限界を出し切ったのだから、ガタが来ても当然かもしれない…。
せめて意識だけでも鮮明にしようと足掻くが、…頭の中にもやがかかったような鈍さはなかなか抜けなかった。
「一応、お医者さんにも電話したから。もうすぐ来ると思うよ。…それまで横になってた方がいいと思うな。」
医者を呼ばれるほど大袈裟な怪我じゃない。……だが医者という公正な立場の人間に来てもらえるのは少し心強い…。

「……俺、どうしてここにいるんだ…？　確か…ダム現場跡で……。」
「それはレナが聞きたいな。…何があったのかな？　レナが来た時には圭一くん、倒れてて……。」
「…だから聞きたいのは俺の方だよ。…変な二人組に襲われて……。」
口に出し、ようやく意識を失う直前の記憶が蘇ってくる。その記憶が、恐怖として蘇るにつれ、頭の中のもやもやも少しずつ晴れていった。
あの二人のことはともかく。…レナが俺を介抱してくれたのが…意外だった。俺はレナに命を狙われていると思っていた。…だったら、俺が意識を失っていたときは絶好のチャンスだったはずだ。
にもかかわらず、俺は殺されず、どころかこうして介抱されている……。
「……よく、俺を引きずってここまでこれたな。…重かったろ。」
レナの華奢な体つきを見れば、俺を自宅の、それも二階まで引きずってきたのは尋常じゃない。
……………他に仲間がいるのか…？
「………圭一くん、本当に覚えてないの？」
レナはきょとんとしながらも笑顔で応える。
「いや、……………ごめん。全然覚えてない。」

「…レナは圭一くんに肩を貸しただけだよ？　大丈夫、自分で歩けるって圭一くんが……。
……本当に覚えてない？」
…覚えていない。意識が途切れた後の記憶は不鮮明だ。
「……二人組はどうした？」
「え？」
「……レナが来た時、俺と一緒に…あるいはすぐ近くに、二人組の男が…、」
「いなかったよ。」

ぴしゃりと言い切られた。
その言い切り方はどこか不快な色があった。
この時の俺はあまりに弱気だった…。……レナに詰め寄ることもできたかもしれない。だが、そうするときっと…、やさしいレナは、俺の知らない怖いレナに変わってしまうかもしれない…。それが怖くて……それ以上踏み込むことを避けた。
考えてみれば…当然だ。…もしもあの二人がいたら、いくらレナでもかなわないだろう。…俺を連れて行くにはあの二人がいなかったと考えないと説明できない。
レナは笑顔のままだった。瞳の輝きも暖かだった。

……なのに……顔の影が少しずつ暗くなっていくような…奇妙な錯覚を感じる…。
…そのわずかな予兆に…背筋がぞくりとした……。
まだレナがレナでいる内に………連絡しなければ。……大石さんに連絡しなければ。
俺が寝床を抜け出そうとすると、レナがそれを制した。傷に障るから寝ていろ、と言う。
「………トイレに行きたいんだけどな。」
「…あ、……ごご、…ごめん。」
それ以上はレナも何も言わなかった。
レナを部屋に残し、足早に階下へ降りて居間の電話機を目指す。
玄関の前にさしかかったとき、ピンポーンというチャイムの音がなった。
レナが呼んだ医者だろう。
患者自らが医者を迎えるというのも変な話だが……大石さんが駆けつけるまでの数十分間、いてくれるだけでこれほど心強いことはない。
そう安直に思い、無警戒に玄関を開けたことを…数瞬後に悔やむ。
「み、…………魅音……!?」
「あれ、元気そうだね。倒れてたって言うから、様子見に来たんだけど？」

「…な……なんで俺が倒れてたって知ってるんだよ。」
「レナが電話してきたから。……他に理由が必要？」
医者に電話するならわかる。だが……どうして魅音にまで!?!?
俺の背後の階段をレナが降りてきた。
「レナ、圭ちゃん大丈夫そうだよ？　ったく心配して損したー。」
「そうだね。レナも心配して損したかな？　あははあはははははは。」
二人は勝手に笑い出す。…陽気に笑っているように見えたが…やはりどこか影のあるような感じは拭えない…。
「さー、ほら圭ちゃん。重病人なんだからちゃんと寝てないとだめだよ。さーさー、お布団に戻った戻った！」
二人に促され、階段を登らされる。……大石さんに電話をかける隙は、ない。
俺は布団の中に押し込められてしまった。魅音は初めて入る俺の部屋を興味深そうに物色している。あれやこれやをいじっては、レナにたしなめられる…そんな光景だった。
部屋を物色されることは落ち着かないが、会話は至って平凡、微笑ましいものだ。
そんな平凡な会話の中で、さも当たり前のことのように魅音が言った。
「…レナ。監督には電話した？」

「うん。魅ぃちゃんに電話した後、すぐにね。…すぐ来るって言ってたよ。」

監督？　場違いな単語に違和感を覚えた。

レナは医者を呼ぶために電話をし、魅音を呼ぶために電話をし、そして…監督に電話をした？？

レナと魅音の会話があまりにも安穏としているので、その違和感は些細だ。……だが、無視することができない。俺が怪我をしたら医者に電話をして、魅音に電話をして、……さらに「監督」ってヤツにも電話しなくちゃならないのか…？？

「……二人とも何の話をしてるんだよ？　監督ってなんだよ。」

「あははは、圭ちゃん知んないの？　監督ってったら監督だよ。」

「映画の監督とか。工事現場の監督とか。あははははははははははは。」

俺に関係のある監督という単語を全記憶の中から洗い出す。……該当は一件しかない。

…それはレナが最後に言った、「工事現場の監督」。

一番最初の事件、バラバラ殺人で被害者になった、ダム工事の…現場監督？

でもおかしい。その監督は死んだはずだ。電話などできるはずもない。

「…お前らが何の話をしてるのかわからないよ。……その監督が俺と何か関係あるのか？……来るって言ったけど…うちに来るのか？」

当たり前な疑問を次々とぶつける。だが…二人は至って涼しそうに笑い合うだけだ。
そんな二人の様子と、怪訝に思う俺の温度差には明らかに開きがあった。…徐々に、不愉快さと焦りが湧き上がってくる…。……レナと魅音が、何を言っているのか理解できない。
「…圭ちゃん、最近は野球に凝ってるんだよね？　監督、それ聞いたら喜ぶと思うなぁ。」
「……だから監督って誰だよ。」
「あははははは。監督は監督さんだよ。あはははははははははははははは。」
「…だから、監督って誰だよッ!?」
「あははははははははははははははははははははははははははははははは。」
レナと魅音は二人して顔を見合わせると…けたけたと笑い出す。それはこの上なく不快な…嫌な笑いの合唱だった。
「「あはははははははははははははははははははははははははは、は。」」
気味が悪いくらいに長かった笑いは、その長さとは逆に、あっさりと途切れた。
あれほど気味が悪いと思ったのに、…途切れたら、今度はそれはそれで不気味だった。何なんだ、一体……！
「そうだ。監督が来る前に済ませとくかな。……圭ちゃん、覚えてるかい？」
魅音の表情からいつの間にか笑いが消えていた。

「……覚えてるって、…何をだよ。」
「あはははははははははは。圭一くん、忘れちゃったのかな？　罰ゲームなんだよ。罰ゲームなんだよ！」
「…忘れちゃったのかなぁ？　……おはぎの宿題。どれがレナの作ったおはぎかを当てる宿題。……あれ、確か宿題忘れだったよねぇ？」
そんな宿題も確かあった。
でも裁縫針が出てきたので残りのおはぎは全部を投げてしまった。だからどれがレナの作ったものかは回答していない…。それの…罰ゲームだって…？　なぜ今そんな話が出てくるんだ⁉
「あはははははははははははははははは。」
俺の疑問は表情に出ていたに違いない。その疑問に対する答えが、二人のこの乾いた笑いだった。
何が何やら……わからなくなってくる。
今日一日…、思えば初めから…何かが狂っている！　おかしい。理解できない！
レナに追われ、怪しい男たちに襲われ、魅音とレナがやってきて罰ゲーム。
「「あははははははははははははははははは。」」

こいつらは…何が可笑しいんだ……⁉
すでに異常な空間に引きずりこまれていることを気付くのに、そんなに時間はかからなかった。
……そうだよ、こいつらは…一体誰なんだ⁉
レナや魅音によく似た……誰なんだよッ⁉⁉
いつの間にかレナが俺の後ろにいた。なぜと思う間もなく、後ろから羽交い締めにされる‼
「な、何の真似だよッ⁉ は、離せ……ッ！」
「動かないでね。罰ゲームだから。あははははははははははははははははは。」
自分の体が鈍重とは言え…、レナの羽交い締めはがっちりと極まり身動きができない。
そのあまりの力強さに…俺もほんのちょっと本気になって抵抗したが…それでもぴくともしないのだ。焦りが噴出し、冗談の領域を超えたことを悟る。
こんな尋常でない万力のような力を…俺のよく知っているレナが出せるわけがない…！
じゃあ…俺をがっちりと締め上げているこの細くて華奢そうな腕は…誰の腕なんだよ⁉⁉
「……圭ちゃん、抵抗しちゃだめだよ〜。会則第……何条でもいいや。罰ゲームに抵抗しちゃだめなんだからさ〜！」
魅音、いや、魅音によく似たそいつは、まるで魅音のように、俺に語りかける。

だが…間違いなく、魅音じゃない。……魅音じゃない何者かが…魅音のフリをしているッ!!!

「くっくっく…。監督が来る前に済まさないとねぇ。」

魅音がポケットをまさぐると…そこから奇妙な物を取り出した。……それが何か、視覚的には理解できたが、なぜ魅音のポケットから出てくるのかを…常識的に理解できなかった。

「……何だよ………それ……。」

それは……小さな…注射器だった。

とてもとてもシンプルな、誰もが注射器だと聞いた時、真っ先に想像するあの形状をまったく裏切らない、まさにそのものの注射器だった。……そんなことはわかってる。わからないのは、なぜそれがここにあって、魅音のポケットから出てくるのかということだった…。

レナはさらに俺を強く押さえつける。そして耳元で、げてげてげて、ともはや笑い声にも聞こえないような声で大笑いした。

その奇怪な笑い声は…絶対に、俺の知っているレナの喉から出せるものではない。…レナのふりをする…こいつの本当の笑い声なのだ…!?

抵抗することもできない俺に…魅音が注射器を構えながら…迫ってくる!! そしてその針先

を、俺の目の前で何度もちらつかせた。その閃く針の先端に、先端恐怖症でなくても目を背けたくなってしまう恐ろしさがある…！

「大丈夫大丈夫。痛くないから痛くないから…。くっくっくっく…!!」

「な……何をする気だよ……。これは一体何の真似だよッ!?!?」

「…圭ちゃん、何言ってんだか。……わかってんでしょ？」

「何が！　俺には何が何やらさっぱりわからねえよ…!!」

「……知ってるくせにー。今さらカマトトぶられてもなぁ。」

「わけのわからないことを言って俺を煙に巻くのはやめろッ！！！」

「………富竹さんと同じ目に遭ってもらう。」

「…え、………え!?」

富竹さんと…同じ目…!?　よく意味がわからない。それとこの注射器に…どんな関係があるんだ…!?

「……圭一くん、とぼけてるね。薄々は気付いてたくせにぃ☆」

レナが耳元に口を寄せて、諭すように笑いかける。……だがその口調にも、喩えようもないおぞましさが含まれていた。

とぼけてるって？　俺が？　何を!!　富竹さんと同じ目…だって!?
……富竹さんが遭わされた目………………！

「みんな始めは轢き逃げされたものだと思っていました。ですが、意識を確かめるために近付いた警官はすぐに異常に気付きました。…喉がね、引き裂かれていたんですよ。」
「ナ、…ナイフとか……!?」
「いいえ。爪でした。」
爪!?　爪って、指についてる…この爪か!?　それで…ガリガリと!?!?
そうだ。
……富竹さんは…自らの爪で喉を引き裂いての絶命だった。そんな死に方あるわけがない!!
もしも考えられるとしたら……！！！
「薬物を疑いましたが、そういう類のものは検出できませんでした。」
そうだよ。警察は富竹さんの遺体からは薬物は検出できなかったはず………！
「け、警察は……富竹さんの遺体からは…薬物は検出できなかったって言ったぞ!?」
「はぁ？　げてげてげてげてげて…！！！！！」
二人は笑い声ともつかない、奇怪な声で笑い合う…。

笑うのは当然だ。……警察にわからなかったから、そんな薬物は存在しないなんて決め付けが…いかに愚かしいことか…！

つまり……富竹さんにあんな異常な死に方を遂げさせる薬物は…実在するのだ!?　このまま魅音に、それを注射されれば否応なくそれを実証することになるだろう…。

それはつまり…富竹さんと同じ末路。……錯乱し、最後には自ら喉を引き裂いて…死！

こんな奇怪や薬物が実在すること、そしてそれを魅音たちが所持していること、そしてそれが自分に注射されようとしていること。……今この瞬間、それらを疑問に思う必要は、一切ない。自分の顔面目がけて飛んでくるボールをかわす時、飛んできた理由を考える阿呆がどこにいる？　…あぁあぁ、そんなわけのわからないことを考えている間に、もう魅音はすぐ目の前に迫っていて、その注射器を…ッ!!

「……観念しなって。んじゃ、」

魅音の仕草があまりにも呆気なくて、それが恐ろしい。

死刑を執行する時の厳かさなどなく。…まるで日常風景のありふれた行為であるかのように、躊躇がなかったからだ。

だから、魅音がもう片方の手を伸ばし、俺の胸元を摑んだ瞬間。

後頭部に電気が走り、世界中が停電になったような錯覚を感じた。

立ちくらみ？　それとも…誰かに後頭部を思い切り殴られた？
平衡感覚が失われ、めまいに襲われる……。
……床に吸い込まれるようにしゃがみ込み、…朦朧とする頭に必死に血液を送り込もうとした。
そして、次第に頭の中のジーンとした痺れが取れ、…ゆっくりと…全身に血の通いが戻ってくるのがわかる。
俺は…どの位の時間、ここにうずくまっていたのか…？　何分？　それとも何十分なのか…。
………見上げた時計の針は、まるで俺が目を閉じていた間分だけ、きっちりと止まっていたのではないかと思うくらい、進んでいなかった。
…本当に？　今、室内を覆う空気は、さっきまでの狂気に満ちたものでなく、……灰色の静寂だけになっている。
羽交い締めにしていたはずのレナもいなかったし、今まさに注射しようと迫っていた魅音もいなかった。
……まさか…全部……何かの……幻？
部屋には俺以外の気配はまったくなくなっているのだ…。

かつてない異常な体験。…………俺は確かに……レナと魅音に………。
自分の正気を一瞬疑うが、同時にある種の安堵感も感じていた。
ははは、……やっぱり……あの恐ろしい出来事は…幻だったんだ。レナも魅音も…あんな恐ろしいことをするわけが……ないんだ…。
なのに、目頭(めがしら)が…熱くなる。感情がこみ上げてくるのがわかった…。
どうして…？　それは涙がこみ上げる理由にではない。
どうして…？　……それは……悲しみだった。
……どうして悲しくなるんだろう…？　わからない。……わからない……。
男女とか、年齢とか…分け隔(へだ)てなく、親しくしてくれた。…魅音。
……その魅音は、窓際に不自然な格好で横たわっていた。
頭から胸元が血でべっとりと赤黒くなっている。壁一面に飛び散った真っ赤なものは……魅音が撒き散らしたものに違いなかった。
いつも明るい笑顔を絶やさず、転校してきた初日から親切にしてくれた。…レナ。
…そのレナは俺の足元でうずくまり、魅音と同じように血溜(ちだ)まりを作っていた。
……………………。
何があったのか理解できない。……誰かが俺を助けに来てくれたのか？　そしてこの二人を

打ち倒したのか？　…この、金属バットで…？
右腕の重さにようやく気付いた。
いつ握ったのか。……それは悟史の金属バットだった。
べっとりと赤黒い血が貼り付き、…二人を叩きのめした凶器であることを疑わせようともしなかった。
その、明らかに凶器の金属バットを俺が持っている。そして家の中には俺以外に誰もいない。
「え、………………俺、」
客観的に見て、俺がやった以外に考えられない…。

「俺が……やったのか……？」
…そうだよ。前原圭一。俺がやったんじゃないか。俺は…まるで自分自身を諭すように…やさしく告げた。
なぁ俺。…無理に思い出さなくていいし、後悔する必要もない。……やらなきゃやられてた。
それはわかってるだろ…？
「でも……血が、血が、……こんなに………！」
レナも魅音もぴくりとも動かなかった。

額（ひたい）が割れて血が一筋…なんて甘いものじゃない。…辺り一面に真っ赤な飛沫が飛び散り、二度三度では済まない打撃が加えられたことを教えてくれた。
べっとりと血糊（ちのり）の化粧で覆（おお）われた顔面は歪（いびつ）に打ち砕かれ、手当てをすればどうにかなるという領域をすでに逸脱しているのは明白だった…。

「……し、死んじまったのか…？　二人とも……。」
心の奥底は冷静なのに、心の表層だけが焦り、動揺する。
落ち着け前原圭一。いつものクールな俺はどうしたんだ⁉　さぁほら。…いつもやるみたいに、頭を後ろに反らして大きく深呼吸をするんだ。…ほら。
…………一度。……二度。……大きく深呼吸する。
冷静になれ。冷静になれ…。心の中で何度も唱え、気を落ち着ける…。
ようやく景色が色を取り戻し、空気にも匂いが戻った。それと一緒に…あの空白の時間に何が起こったのかを思い出す…。
レナと魅音が襲ってきた。俺に「富竹さんと同じ症状を起こさせる」注射をしようとした。
そしてその直前、俺は反撃したんだ…。
羽交（はが）い締めにするレナを全身をひねって投げ飛ばした。

そのままさらに回転し、踵で思い切り魅音の腹部を蹴り抜いた。…柔らかかった。
レナが俺にとびかかろうとしたので、思い切りの体当たりで、壁に打ちつけた。
二人が共に体勢を崩し、一瞬の隙が生じたことをその時の俺は見逃さない。
机の脇に無造作に置かれた悟史のバット。
……………ぷつん。と、…ここで真っ暗になる。
俺というビデオが、ここから先を録画していないとでも言いたげだった。
いや…違う。………録画してないんじゃない。ちゃんと録画されている。
ただ………俺の中のもう一人が……見るなと言ってテレビを消しただけなのだ。
画面が真っ暗になって見えなくなっただけで……俺の中のビデオテープには間違いなく録画されている。
テレビを切っただけで……ビデオの再生はまだ続いている。俺の中のビデオが……カラカラと…再生を続けている。真っ暗になったブラウン管の向こうで………恐ろしい映像を流し続けている…。
そして、……その過程を経たのが、……この室内の惨状だった。
…敷かれた布団が踏み荒らされてぐちゃぐちゃになり、それらに混じって不自然な格好で倒れる二人。

部屋中の壁という壁に血が飛び散っていて、それらはさらに下に垂れておぞましい狂気の絵画を描いていた。そして、気付いてしまったら吐き気を催さずにはいられない、むせ返るような血の臭い……。

どんな経緯があったにせよ……俺は、女の子を、仲間を、……殴ってしまった。

殴ってしまった？　何という場違いな言葉なのか！　殴るじゃない。これは殺した、あるいは壊したとすら言える行為だ。彼女らの顔面と思われる部分は、おぞましく歪み破壊されていて、…鼻は潰され、眼球は潰れ、歯茎は砕かれてた。

だが……こうしなければ俺がやられていた！　過剰だったにせよ、…これは正当防衛なんだ。

そうさ、ここには全てがある。倒れた二人と魅音の注射器。

魅音の注射器に詰まっている未知の薬物が、富竹さんの事件の謎を解き明かすだろう。そしてこの二人の関与の事実から、犯人たちを芋づる式に検挙できるだろう。

それでも俺は罪に問われるかもしれない。抵抗の度合いを超えているのは明白なのだから。

……だが、それでもいい。

とにかく、これでちゃんとした警察沙汰になる。レナの過去の事件のように、うやむやにはならない。とにかく警察が関与すれば……すべて決着が着くはずなのだ。

警察は過去の一連の事件を再び捜査するだろう。……大石さんがきっと…全てを暴いてくれ

る。

つまり……俺の望み。…死にたくない、全ての真相を知りたい……は、最低限の形、あるいは最悪の方であっても達せられるのだ。

そして、それはもうじき叶うだろう。

レナが呼んだという医者が直にここにやってくる。全てを告白しよう。その前に大石さんにも連絡を……。

その時、思い出す。

ここには、医者の他に、「監督」という人物が呼ばれていることを……。レナと魅音の会話から、事件に深く関与のある人物であることは想像に容易だ。

……凄惨な出来事に心を痛める余裕すらも、急速に失われていく。

まだ…終わっていない。ここは…もはや安全ではなくなった。

クールになれ前原圭一。…まだ終わっちゃいない。終わっちゃいない終わっちゃいない！

警察に事件の全てを伝えるまで……俺は生き延びなければならない…!!

…その時、表から人の声が聞こえた気がした。

人の会話ということは、二人以上の人間がいるということだ。

カーテンをほんの少しずらし、表をうかがう。

……それは異様な光景だった。四、五人の大人の男性たちが、門の前に群がっているのだ。
彼らの雰囲気は、今日、ダム現場跡で襲い掛かってきたあの二人の雰囲気にもよく似ていた。
……いや、…似ているどころか、…あの男はまさに俺を追ってきたあいつじゃないのか…！
そうさ、俺はわずかの時間とは言え、対峙し戦っている！　顔を見間違えたりするもんか!!
その中のひとりは医者を思わせる白衣を着ていた。……でもその雰囲気はとても医者には見えない。医者のふりをした変装だと直感する。
多分、あいつはチャイムを鳴らして、俺に玄関を開けさせる役なのだろう。
医者だと偽って扉を開けさせて……他のやつらが一気に踏み込むつもりなのだ…！
その時、男たちの後ろに止まっていた車を見て、心臓が飛び出しそうになった。
……白い……ワゴン車ッ！！！！！
間違いない。…俺を轢こうとした…あの車だ…！！！
白衣の男が門を入り玄関に近付いてくる。他の男たちは茂み(しげ)の陰に隠れながら、それを息を殺してうかがっている…。
居留守を使っても恐らく無駄だ。…ヤッらならあっさりと窓を破って侵入するに違いないい…！　あれだけどうどうと襲い掛かってきた連中なのだから！

…なんとかここを脱出。そして…公衆電話で大石さんに連絡。どこかで落ち合おう。
まず必要なのは武器！　あと靴ッ!!
だがその前に…ひとつだけやらなければならないことがある…。
…俺に死ぬつもりはない。絶対に生き延びて……この理不尽な「オヤシロさまの呪い」の真相を究明する。
だが…これから起こることによっては、…俺のそんな決意とは無関係に……俺は終焉を迎えるかもしれない。……だからこそ。…今すぐここを逃げ出すよりも、大切なことがある。
壁掛け時計を素早く外し、裏に隠したメモを剥がす。
…畜生…！　こんなにも丁寧にがっちりとセロテープで貼り付けやがって…!!
多少破れてもいい。少し破き気味にメモを広げ、サインペンで新たな一文を書き加える。
……俺が大石さんに伝えることが叶わなかったら。……頼みになるのはこのメモだけ！　これほど、破けた大学ノートの一ページが頼もしいことはなかった。
時間はない。今知りうる真実だけを。…真相究明に役立てる、何かの情報を!!
〝レナと魅音は犯人の一味。〟
これは疑いようのない事実。…今でも信じたくない。…だが事実なのだ！
とにかく…犯人の手掛かりになりそうな情報は全て残そう。

〝他にも大人が四～五人以上。白いワゴン車を所有。〟
…さっき窓から見た限りではそのくらいだった。…もっといるのかもしれない。
そして…「監督」という未知の存在。
…そもそも…監督なんてこの雛見沢に似つかわしくない単語だ。……もしも……過去の事件で唯一監督という単語が絡むとしたら……一番初めのバラバラ殺人の被害者の現場監督だけ。
一連の連続事件の一番最初の被害者だ。リンチで殺され、遺体は六つに切り刻まれた。
見つかっていないのは右腕だけ。……その死は警察が確認しているはずでは…？
でもレナと魅音は確かに、監督を呼んだと言った。監督と言った。
死んだ人間を呼べるわけがない。…警察だって、死んだはずの人間が関わっているなどとは思うまい。
……それが…何かの盲点なのか?? わからない。だが…俺にはわからなくても…大石さんには重要なヒントになるかもしれない！
…そう。……一番最初の事件から洗うべきなのだ。
あれがただのバラバラ殺人でなく、その後に続く、連続怪死事件の始まりなら………絶対に……何かが隠されているはずなのだ！
〝バラバラ殺人の被害者をもう一度よく調べてください。生きています。〟

人の死ってのは検死とか経て、しっかりと調べられるはずだ。……理屈ではそう思ってる。…だが、本当にそうなのか？　警察を巧みに欺く…狡猾な仕掛けがあるのではないか…⁇　断定はできない。……だが、…生きているかもしれない…。

だが、それを想像するには、今はあまりに時間がない。

……そうだ。それよりももっと書かねばならないことがある…！

〝富竹さんの死は未知の薬物によるもの。〟

そう。この注射器の中の薬物が…唯一無二の証拠だ！　これさえあれば…全てを解明できるに違いない…！！！

床に転がる、そんな重要な証拠をここに放置するわけにはいかない。

〝証拠の注射器はこれです。〟

そう書き、転がっている証拠の注射器をセロテープで時計の裏に厳重に貼り付ける。

絶対に転がり落ちたりしないように…厳重に……厳重に!!　俺が、命を危険に晒してついに握った敵の証拠なのだから！

ピンポーン……。

チャイムが鳴った。……来たッ！！！

もうこれ以上を書くことはできない。……それでも！　俺は最後に……これを書かずにはい

られなかった。

〝どうしてこんなことになったのか、私にはわかりません。〟

……………………俺がこのメモに記した中で、一番の真実はこれだけかもしれない。

〝これをあなたが読んだなら、その時、私は死んでいるでしょう。…死体があるか、ないかの違いはあるでしょうが。〟

………………………これも全て筋書きなら。…俺は祟りで死ぬのか。鬼隠しで消えるのか……。

〝これを読んだあなた。どうか真相を暴いてください。それだけが私の望みです。〟

これで……俺の遺言はすべてだ。

別に俺が死ぬと決まったわけじゃない。…だが…万が一の時のための……遺言だった。

メモを畳み、時計の裏に貼り付け、それを元の位置に戻す。

祈らずにはいられない。……大石さん。…俺にもしものことがあったら…全部、頼むからな…!!

それから、横たわるレナと魅音にもう一度だけ振り返った。

…多分、これが今生（こんじょう）の別れだな。レナ。魅音。

「俺、……みんなのこと……本当に友達だと思ってたんだぜ……。」

なのに……どうしてこんなことになってしまったんだよ……？

前の学校では楽しいことなんか何もなかった。…偏差値の上下に一喜一憂（いっきいちゆう）し、志望校が合格圏か安全圏かとか…そんな話しかしなかった。…灰色の生活だった。つまらなかった。

友達ってのはクラスの勉強のライバルのことで、内申書と校内偏差値を競（きそ）い合う敵だと思ってた。

それが、如何（いか）に馬鹿な勘違いなのかを教えてくれたのがみんなだった。

この一ヵ月間、本当に楽しかった…。弁当で大騒ぎをし、部活で大騒ぎをし、お祭りで大騒ぎをし……。

目から熱いものがボタボタとあふれ出る。……不覚（ふかく）にも…涙だった。

こいつらのために涙を流す義理なんかないはずだ。…でも止められない…!!

たとえ命を狙われたとしても。殺されそうになったとしても。…この一ヵ月間の思い出は……忘れられないのだ…。

それとも……あの楽しかった日々は…虚偽（きょぎ）だったのだろうか…？

俺を謀（たばか）るために…今日まで周到に続けられた……罠（わな）だったのだろうか？

俺だけが一方的に仲間だと思い込んでいただけなのでは………？

そんなはずは……ないッ！！！！

レナも魅音も……本当に俺の仲間だったッ！！！

あの楽しかった日々に……わずかの曇りも虚偽もあるものか…！！！

きっとレナたちは……俺を殺すよう、何者かに強要されたに違いないのだ。あるいは…オヤシロさまという超常存在が取り憑き、意識を乗っ取られていたに違いないのだ！

とにかく…レナも魅音も…最高の友人だった!! そして…俺に襲い掛かってきたのは……二人の意志とは異なるものに違いないのだッ！！！！！

だが…どんな強要があったにせよ、仲間を売るような二人じゃなかった。

オヤシロさまなんてものに乗っ取られるような、非現実的なことがあるわけもなかった。

じゃあ…やっぱり……本物のレナと魅音が…襲い掛かってきたんだ…⁉⁉

俺は…何を考えてるんだろう………。この期に及んで、滑稽（こっけい）な馬鹿な話だった。

…レナと魅音を殴り殺しておきながら。…あのレナは本物だったかとか偽者だったかとか、今頃論議しているのだ。

本物も偽者もあるわけがない。…結果だけが真実なのだ。

足元にレナと魅音が横たわる、それだけが真実…!!

仲間を殴り殺シタ事実を……都合よく捻じ曲げようとしているだけ……!!
どう捻じ曲げたって……レナと魅音が……死ンデシマッタコトには何も変わりはないというのに……！！！！
抑えていた異常な感情のダムに亀裂が入るのを感じた。……虚勢という、平常心が退き、その隙間に…狂気が漏れ出してくるのをひしひしと感じる…。
俺が殺したんだ。俺が殺したんだ。…レナを魅音を…。殺したんだ…!!

再びチャイムが鳴り響く。
その容赦ない響きが、俺にもう一度だけ冷静さを取り戻させてくれた。
もう一刻の猶予もない！　早く…逃げなければ！！！
とにかく…死にたくなかった。それから全てを暴きたいと思った。俺をここまで追い込んだ何かの正体を……！！！
もう何もない。何もかもが滅茶苦茶。…あんなにも楽しかった日々はもう完全に砕け散って粉々だ。……だから、知りたい!!　何でこんなことになってしまったのかを知りたい!!　泥を啜ってでも、草を食んででも…!!　生き残る生き残る絶対に生き残る!!
そのためにレナを殺した！　魅音も殺した！　そこまでして生き延びた!!

だから死ねない。俺が生き残るために殺されたレナと魅音のためにも…絶対生き延びなければならないのだ!!

玄関へ走り、靴を鷲づかみにした時、急かすように再びチャイムが鳴った。……この一枚の扉の向こうに……いるッ!!!

足音を殺しながら…台所へ。…勝手口へ向かう。…昨夜、針を探すために撒き散らしたゴミはそのままで、小さい汚らしい羽虫が舞っていてとても不潔だった。だが今はそんなことはどうでもいい。……あの、おはぎの中の針よりも、もっともっと直接的な証拠を手に入れた今、もうあの針の有無などどうでもいいことなのだから。

勝手口を開け放つ前に、耳を当て表の気配をうかがう……。気配はない…?

靴を履き…音をさせないようにゆっくりと扉を開く…。

うまく連中の裏をかけた…。そう思った時、鋭い声に叫ばれた。

「いたぞ!!　裏口だ!!」

その声が体を突きぬけ……戦慄が駆け抜けるッ!!!!

走るしかない!!!!!　逃げろ圭一ッ!!!!!!!

頭から知性とか理性とか、そういうゆとりあるものが次々こぼれていった…。

そのまま俺は、家の裏の林の中へ飛び込んでいく。…少しでも妙なところに逃げ込めば追っ

手を撤けるのではないかと思う本能だった。
梢で腕や頬に擦り傷が出来ても、何も痛みは感じない。ばくばくと機械的に収縮する心臓にも何の痛みも、疲労も感じなかった。
体中の全細胞が、ただ生きたいと…。それ以外の何も望まなかったから。今さら何も不平を言わなかったに違いない。ここで足を止めれば、そもそも殺されてしまうのだから、疲れを感じるわけもない…！
ただただ…走った。自分が前だと思う方向に、がむしゃらに走り続けた。
…たとえ誰も俺を追っていなかったにせよ、俺は疾走をやめないに違いない…。
どこを目指して走っているかなど、もう頭にない。
振り向けば、すぐそこに気配がいる気がした。
その気配は間違いなくぴったりと、影のように俺を追い立てる。
一瞬でも足を違えれば……食われる。そう思った。
だから振り返らなかった。止まらなかった。走り抜けた。全力で…！！！

カナカナカナカナ……。
それは夕暮れを教えるひぐらしの鳴き声。

…俺に何かを教えようとし、そしてついにかなわなかった犠牲者たちの、泣き声。
俺も…それに加わるのか。
カナカナカナカナカナ……。
ひぐらしだけが知っている。……全部知ってる。きっと知ってる。
だから、…たくさんひぐらしの鳴く声の聞こえる方へ走った。
だが鳴き声は…走った分だけ遠のく。…近づけない。
どうして逃げるんだよ、みんな…！！！
俺が悪いのかよ。悪かったのかよ!?　なら謝るさ!!
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……。
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……。
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……。
ひぐらしだけが、全てを知っている気がした。

遺言

喫煙スペースには紫煙が立ち込めていた。

高額備品扱いの分煙機も、チリチリという何だか電気のはぜるみたいな音がうるさいだけで、ちっとも役に立っているようには見えない。

どうしてこんな日当たりの悪い廊下の奥に、我々愛煙家が押し込まれなければならないのか？

…タバコの税収ってのは確か、自治体の税収の一割くらいはあるって聞いたことがあるような…。私たちは地方自治体を支える高額納税者なんですから、もう少しいい待遇にはならんもんですかねぇ…。

「……うーん、どうしてこれが五萬切りなんすか？　待ちが狭くなっちゃうっすよ？」

後輩の熊ちゃんが麻雀雑誌の「次の一手」のコーナーとにらめっこをしている。まだまだ初心者の彼に、勉強になる問題を見つけたので出題してやったのだ。

「んっふっふっふ！　だって五萬切ってもテンパイ崩れませんから。」

「ハイテーに賭けるなら、両面で受けた方がチャンスあるんじゃないすか？」

「熊ちゃん、河を見て下さい。五萬は全員切ってますから安牌なんですよ。終盤で形テンに走った誰かがダマで待ってたら嫌でしょ。」
熊ちゃんはうーんと唸りながら、タバコを捻り、もう一本を取り出す。
「…納得いかないっすねぇ…。わざわざ自分で当たり牌減らすなんて。」
「ちなみに、ハイテーで当たり牌出てもロンしちゃダメですよ。」
「え⁉　どうしてっすか⁉」
その時、廊下の向こうから声が聞こえてきた。
「大石さん、いますかー？　一般の方から外線でーす。」
「ありゃ、こりゃどうも。それじゃ、ちょいと失礼！」
「ど、どうしてロンしちゃダメなんすかぁ⁉　あ、待ってくださいよ大石さぁん！」
大石の向かいの席の男が受話器を振っている。
「外線です。公衆から。」
「あーどうもすみません！　……お待たせしました、大石です。もしもし？」
「お、大石さんですか⁉　もしもし⁉」
「前原さんじゃありませんか。どうもどうもこんにちは…！」

…前原くんからこちらに電話をかけてくるのは初めて。そしてかけてきたのは公衆電話。そして明らかに落ち着きを失ったその口調から、大石は何かの緊急事態をすぐに悟った。

「落ち着いて下さい！　何がありました？」

「えっと、その、……ぅおぇぇ……。」

声は混乱し、ろれつも回っていないようだった。息も絶え絶えで、まるで何者かから逃げ延びて、ようやく電話をしてきたような感じ…！

「何があったんです⁉　もしもし⁉」

大石のその口調に、周りの刑事たちも緊急事態を悟る。皆、私語を止め、大石の電話を見守った。

「あぁぁあぁあの…お、…ぉぉ……俺……、」

「…落ち着いて前原さん！　今そこに近場の警官を行かせます。私もすぐそっちに行きますよ！」

「………あ、その……多分……無理です。……間に合わ……。」

声に怯えと達観…。

……まさか、電話をかけながら、すでに何者かに囲まれている⁉

「前原さんは今、公衆電話からかけてますよね？　どこの公衆電話ですか⁉」

前原くんの声以外の環境音がまったくない。電話ボックスからか。
メモに殴り書きをし、対面の同僚に突きつける。
(ヒナミザワ、デンワボックス!!)
同僚がすぐに事態を飲み込み、慌しく内線を回す。
「…落ち着いて前原さん！　今はどういう状況なんです…!?」
混乱した相手に余計あおるような言い方はよくないのだが…、今回はそういうケースじゃない。
…前原くんは危機に襲われ、逃げ切ってから電話をかけてるんじゃない。……今この瞬間も何らかの危機にさらされている…!?
だが…こっちがまくしたてたって、前原くんは余計に焦るだけなのだ。
前原くんは助けを求めるためだけに電話をしてきたんじゃない。…それ以上の何かを伝えたくて電話をしてきているのだ。
そしてその何かは、……この電話の機会を逃すと、もう二度と伝えられないという確信に基づいている…！
同僚がメモを回してきた。
(雛見沢にボックスは二箇所。パトを向かわせました。五分で到着します。)

「掛かり過ぎです！　警邏には何人乗ってます⁉」
「二人です。」
「足りませんねぇ！　もしも私の想像通りなら…前原くんは多人数に囲まれている。それに五分じゃ遅すぎる！　雛見沢の駐在さんには電話しました⁉」
「しましたが、定時巡回の時間です。家人は留守で連絡不能！」
「くそッ‼　熊ちゃん、車を回して下さい。私たちも出ますよ‼」
「了解っす！！！」
「…もしもし？　大石さん…？　ごほっごぼッ‼」
「もしもし！　大丈夫です。ちゃんと聞こえてますよ！」
前原くんの様子がおかしい…。今の咳の音は普通じゃない。……嘔吐？　それともまさか…血⁉　すでに襲われ負傷している⁉
「前原さん、今そこに警官が向かってます。二、三分で到着しますから何とか持ちこたえて下さい！　もしもし⁉　聞こえてますか⁉　前原さん⁉」
受話器の向こうで咳き込むのが聞こえた。……脳裏に最悪の予感が過ぎる。
「前原さん‼　犯人は誰です⁉　敵は何人なんですッ⁉」
「……お、…俺も……最初はニンゲンが犯人なんだと思いまし……げぼッ‼」

咳とも嘔吐ともつかない呻き。
「大丈夫ですか!!　前原さん!!」
「犯人はニンゲンなんだって、オヤシロさまの祟りなんかないんだって、そう思ってました…。ついさっきまで。……だけど……やっぱり…、げほげほ…ッ!!」
激しい咳。それに続いて嘔吐。
「……でも…やっぱり…オヤシロさまってのは……いるんだと思います……。いや、います。今。」
「前原さん、どうか、どうか落ち着いて…、」
「なんかさっきからおかしいと思ってたんです…。ずーっとつけてくるんですよ…!!　走っても走っても、走っても走っても…!!　影みたいにぴったりくっついて!!　だけども少しずつ…少しずつ…。俺の背中ににじり寄ってくるんです……。」
「……前原さん、…そいつは……今、ひょっとして…、……前原さんの…後ろに？」
「………後ろに。……すぐ、……後ろに……。」
「お願いです前原さん。……怖いのはわかります。ですがお願いです!!　……あなたの後ろに……誰がいるんですッ!?!?」
「振り向けるわけ…ないじゃないですか…。振り向いたら……俺……俺…、」

「怖いのはわかります!! でも教えて欲しい!! ちょっと振り返るだけでいいんです!! 前原さんの後ろに……誰がいるんですッ!?!?」
直後に激しく嘔吐する音が聞こえる。それから何か嫌な音。それは、……異音。絹を掻くような耳障りな異音。
「…前原さん、……あんたまさか、…喉を引っ掻いてたりは…しないでしょうね…!?」
返事はない。…ばりばりと…掻きむしるような音……。それはまさに、富竹ジロウの最期の再現なのか。
ガタンガシャン! とぶつかり合う音がした。…前原くんが受話器を落としたのだろう。
電話の向こうからは唸りと嘔吐、そして繰り返される……喉を掻き毟る異音。
「もしもし! もしもし!? 前原さん!? もしもーしッ!?!?」
離された受話器の声がどんなに遠いかよくわかってる。でも…叫ばずにはいられないのだ。
その時、受話器の向こうから…つぶやきが聞こえた。何を言っているのかはわからない。
……口調からして…独り言? それとも…そこにいる誰かに言っているのか?
「もしもし…? ………………前原…さん…?」
それはつぶやきというより……お経みたいな、単調な何かの繰り返しだった。
その何かを聞き取ろうと…神経を研ぎ澄ます…。

何を繰り返してるんだ彼は……。一体……何を…………！！

ぶつん！

あまりに唐突に切れた。……十円が切れたのか⁉　公衆電話だったから…‼

「…………あ。」

唐突に切られたから。…むしろ最後の一言は鮮明に脳裏に戻った。

「大石さん、車はＯＫっす！！！　大石さん…⁉」

「……ごめんなさい、だ。」

「大石さん……⁇」

「前原さんはずっと繰り返してたんだ。…ごめんなさい、って………。」

その時、直感した。…………もう、そんなに急ぐ必要がないかもしれないことを。

……前原圭一は、今、……「オヤシロさまの祟り」に、飲み込まれたのである…。

その時、開け放たれた窓の向こうから…ひぐらしの声が聞こえてきた。

カナカナカナカナカナ……。

ずっと聞こえていたはずだった。…特に気にも留めず。

どうして今になって急に気になったのか。

カナカナカナカナカナ……。
何か、伝えようとしている？　…何を…？
でも、いくら耳を傾けようとも、その意味を理解することはできなかった…。
それでも、ひぐらしはなく。
カナカナカナカナカナ。カナカナカナカナ。
ひぐらしだけが知っている。……そんな気がした。

■祭りの終わり

昭和五十八年六月二十五日（土）
某県鹿骨市の寒村、雛見沢で女子生徒殺人事件が発生した。
容疑者は、前原圭一（十Ｘ歳）
容疑者は自宅にクラスメートの女子二名（竜宮礼奈・園崎魅音）を呼び寄せ、金属バットで撲殺した疑い。
犯行現場は自宅二階の容疑者の自室だった。
室内は凄まじい血飛沫に染まり、被害者ともみ合った形跡が認められた。
また、犯行現場とは別に、玄関、居間、台所でも荒らされた形跡が認められた。
玄関では、靴箱と壁に激しい打撃の痕跡。
凶器のバットによるものと断定。痕跡に血液反応が出なかったことから、犯行以前に破壊したものと推定。被害者の逃走を阻止するため、容疑者が威圧行為を行なった可能性がある。
居間では絨毯が剝がされ、投げ捨てられていた。
これは被害者ともみ合った際のものとは考え難く、その真意は不明。

台所ではゴミ袋が破かれ、その中身が床にばらまかれていた。
さらに、そのゴミは容疑者が手の平で叩いて潰したとしか思えない痕跡が残されていた。その目的は不明。
また、冷蔵庫に貼り付けられていたメモには〝針がなかった？〟と記されていた。
これも意味不明。念のためゴミを徹底的に探すが、針のようなものは発見できなかった。
他に特筆すべきこととしては、引っ越し以来、開放したままになっているガレージのシャッターがわざわざ閉じられていた。
シャッターからは容疑者の指紋を検出。目的は不明。

容疑者は犯行現場から逃走したが、警邏中の警察官（雛見沢駐在所）が村内の電話ボックス内で倒れているのを発見する。
発見時、容疑者は意識不明の重体。直ちに村内の診療所に搬送し手当てをしたが、意識は戻らず二十四時間後に死亡した。
検死の結果、直接の死因は出血性ショック死。自らの爪で喉を引き裂き、その結果の失血で死に至ったと断定した。
先週に発生した富竹ジロウ事件の異常な死に方との酷似に、警察は関連性があるものとして

捜査を行なっている。(ただし、地元からの強い要望により非公開捜査)

異常な死因に、富竹事件同様何らかの薬物の使用を疑うが、これまた一切の薬物反応が検出されてない。

当初はあまりの不可解さに、衝動的な突発的犯行と断定していた。

だが、容疑者の犯行直前までの奇行が次々と露呈するに従い、捜査方針は変更されることとなる。

親しかったグループとの離別。孤立。意味不明の言動。犯行の数日前からは金属バットを持ち歩くようになっていた。

攻撃的な言動、独り言は学校でもしばしば見られ、クラスメートが実際にその一部を聞いている。

犯行の前々日には、両親に自らの死をほのめかす発言もしていた。

警察は、これらの状況から、この事件が突発的なものでなく、数日前から予定された計画的犯行の可能性があるとして捜査を開始する。

その後、容疑者の自室から直筆のメモが発見された。

メモはB５の大学ノートを半分に裂いたもの二枚で構成され、まるで隠蔽するかのように、壁時計の裏に貼りつけられていた。

メモの内容は別添の通り。

その内容から警察は、容疑者が何らかの事件に巻き込まれていた可能性があるとして再び捜査方針を転換した。

だが、その後なんの手がかりも掴めず、メモそのものの内容の異常さから信憑性を疑われるようになる。

この事件は衝動的なものなのか、計画的なものなのか。

真相もわからず進展もなく、事件は文字通り迷宮入りの様相となった。

だが……後年。

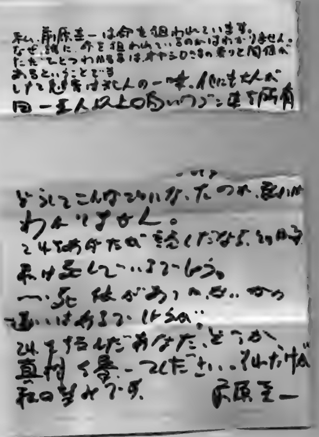
このメモにひとつの不審点が浮上した。

二枚のメモは、B５のページを半分にしたものが一枚ずつではなく…。

元はB５の一ページに書かれたものを…何者かが、〝真ん中の数行を削除するために〟破り捨てたのではないか…というのだ。

文字の大きさと、破かれた部分から推定して、削除されたのは二、三行。

削除した人物は容疑者以外である可能性が高い。
また、時計裏に付着していた大量のセロテープ跡から、〝メモ以外にも何かが貼り付けられていたのではないか〟との憶測が出た。
第一発見者は、かねてから事件との関係を噂される疑惑の刑事。大石蔵人。
任意で事情聴取をしたが、メモの破損については否定する……。
以下が、そのメモの内容である。


私、前原圭一は命を狙われています。
なぜ、誰に、命を狙われているのかはわかりません。
ただひとつわかる事は、オヤシロさまの祟りと関係があるということです
レナと魅音は犯人の一味。他にも犯人が
同一五人以上の白いワゴン車5両有

―いつ？
どうしてこんなになったのか、私には
わかりません。
これをあなたが読んだなら、その時
私は死んでいるでしょう。
…死体があるか、ないかの
違いはあるでしょうが。
これを読んだあなた、どうか
真相を暴いてください。それだけが
私の望みです。　前原圭一

前原圭一の遺書（全文）

〈ひぐらしのなく頃に　第一話〜鬼隠し編〜　了〉

あとがき

こんにちは、竜騎士07です。

この度は『ひぐらしのなく頃に』の第一話、「鬼隠し編」にお付き合いくださりまして、誠にありがとうございます。そして、このような文章力の至らぬ物語を、ここまで読み進めてくださった皆さんに、心よりお礼申し上げます。

本来、物書きをされる方は、同時に読むことも好む読書家でもあられると思います。たくさんの文学に触れる内に、自然と文章力を身につけていくのでしょう。…ところが私、竜騎士07は、ほとんど本を読みません。ですので、物書きを自称する人間なら誰もが身につけているだろう、文章力の初歩すらも身につけているか怪しいです。

にもかかわらず、このような物語の執筆に踏み切ったことは、今にして思えば、蛮勇の極みであり、そのような粗雑な作品にもかかわらず、内容を汲み取ってくださり、講談社BOXの末席に加えていただく機会を賜られた、講談社、太田編集長の寛大さには、ただただ申し訳なく思うばかりです。

ただ、文章力では小学生並みであることを認めざるを得ない自分ではありますが、物語の中で描きたいことや伝えたいことなどの本質的な部分では、決して恥ずかしがるものではないと思っ

ています。

私はいわゆる文庫本こそ読みませんが、新聞やニュースを見ますし、映画やテレビも見ます。ゲームやアニメだって大好きです。平凡ではありながらも刺激的な学生時代を送りましたし、短からぬ社会人経験の期間を経て、様々なものを学ぶ機会は十分にあったと信じています。

『ひぐらしのなく頃に』という物語は、この「鬼隠し編」の段階ではまったく全貌が摑めないと思いますが、単なる殺人エンターテイメントではなく、社会的に伝えたいメッセージが内包された作品です。臆することなく胸を張って伝えたい作品なのですが、それを加工する文章力がまったくない！　…なので、あまりの拙い文章力にあきれ果て、本作を途中で放り出してしまった方がいたとしても、それはまったく不思議なことではないわけです。だからこそ、少なくとも「鬼隠し編」を読破し、あの拙さに耐え切って、今、このあとがきまでお越しになっている皆さんの寛大さには、いくらお礼を言っても言い切れません。ここまでお読みくださいまして、本当にありがとうございます。

しかし、私のような浅学な身にも表現を許してくれる「小説」世界の、何と懐の広いことか…。おそらく、地上に存在するあらゆるエンターテイメントの中で、これほど垣根が低く、誰もが挑戦できるジャンルは稀に違いありません。頭の中に素晴らしい世界をお持ちにもかかわらず、私同様に執筆に躊躇されている全ての皆さんに、心の底より応援のエールを送りたいと思います。

この素敵な創作の世界で、あなたに出会えた幸運を、最後にもう一度感謝させてください。本当にありがとうございました。もしお会いできるなら、第二話の「綿流(わたなが)し編」のあとがきでお会いしましょう。

それでは本日はこの辺で…。

竜騎士07

本書は、２００２年発表の同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に　鬼隠し編』のシナリオをもとに著者である竜騎士07氏自らが全面改稿し、小説化したものです。

ILLUSTRATION　ともひ
BOX&BOOK DESIGN　Veia
FONT DIRECTION　紺野慎一(Toppan Printing Co., Ltd)

本文使用書体
本文：FOT-筑紫明朝 Pro L　A-OTF フォーク Pro R
見出し：FOT-筑紫ゴシック Pro D

著者紹介

竜騎士07

1973年生まれ。同人ゲーム作家、小説家。2002年夏、コミックマーケットで同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編』を発表。以来、夏と冬に1作ずつ『ひぐらしのなく頃に』シリーズ新作を精力的に発表し続け、まんが、アニメ、コンシューマー・ゲームなど、様々な他メディアを席捲する一大ムーブメントを作り出す。2007年8月、最新シリーズの『うみねこのなく頃に』を満を持して送り出す。小説の単行本化は、本作が初となる。

Illustration

ともひ

1983年生まれ。まんが家、イラストレーター。魅力的なキャラクターのみならず、奥行きのある妖しくも美しい背景を描く。竜騎士07たっての強い希望で、新人ながら、本作『ひぐらしのなく頃に』シリーズのイラストを担当することになる。ウェブサイト「古街」(http://furumati.com/)を運営。

講談社BOX KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に　第一話～鬼隠し編～(下)　定価はケースに表示してあります

2007年9月3日 第1刷発行

著者 ── 竜騎士07

発行者 ─ 野間佐和子

発行所 ─ 株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号 112-8001
編集部 03-5395-4114
販売部 03-5395-5817
業務部 03-5395-3615

本文データ制作 ─ KODANSHA BOX DTP Team

印刷所 ─ 凸版印刷株式会社

製本所 ─ 株式会社若林製本工場

製函所 ─ 株式会社ナルシマ

ISBN978-4-06-283641-8　N.D.C.913　306p　19cm

KODANSHA BOX

講談社BOX新人賞 "流水大賞" 原稿募集

登場することによって一瞬で時代を変えてしまう――、
そんな破格の小説、破格のイラスト、破格の批評・ノンフィクション作品を講談社BOX編集部は求めています。
優秀作品は「講談社BOX」として書籍化をいたします。

Everything is Boxed,
KODANSHA BOX.

募集と発表／募集は随時行います。また、発表は講談社BOOK倶楽部内の講談社BOXウェブサイトなどにて4カ月おきに行います。

応募要項

原稿送付先:〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-2 講談社　講談社BOX「講談社BOX新人賞"流水大賞"」募集係

【小説部門】書き下ろし未発表作品に限る。原稿枚数:ワープロで400字詰め原稿用紙換算350枚以上。A4サイズ、1行30字×20～30行。縦組で作成して下さい。初めに20字前後のキャッチコピーと800字前後のあらすじを添えて、ダブルクリップでとじること。別紙に氏名、年齢、性別、職業、略歴、住所、電話番号、そして原稿枚数を明記してください。優秀作品の書籍化に際しては規定の印税を支払います。応募原稿は返却いたしません。

【イラスト部門】書き下ろし未発表の作品に限る。B4サイズのカラーイラスト 5点とモノクロイラスト 3点の計 8点を1セットにしてご応募ください。別紙に氏名、年齢、性別、職業、略歴、住所、電話番号、使用ソフト(バージョンも)とファイル形式を明記のうえ、データ記録された CD-ROMや MO等のメディアと、プリントアウトしたものを同封してください。(手書き原稿の場合は、スキャンしたデータをお送りください)優秀作品のイラストレーターとしての起用に際しては規定の原稿料を支払います。応募原稿は返却いたしません。

【批評・ノンフィクション部門】書き下ろし未発表作品に限る。原稿枚数:ワープロで400字詰め原稿用紙換算100枚以上。A4サイズ、1行30字×20～30行。縦組で作成して下さい。初めに20字前後のキャッチコピーと800字前後のあらすじを添えて、ダブルクリップでとじること。別紙に氏名、年齢、性別、職業、略歴、住所、電話番号、そして原稿枚数を明記して下さい。優秀作品の書籍化に際しては規定の印税を支払います。応募原稿は返却いたしません。

KODANSHA BOX 8月刊

東浩紀がヴィヴィッドに描く情報環境の輪郭——。



東浩紀

情報環境論集 東浩紀コレクションS

迫り来る"環境管理型社会"を生き抜くヒントを提示する「情報自由論」他、「サイバースペースはなぜそう呼ばれるか」と「情報社会を理解するためのキーワード20」を収録した必読書!

これぞ小説!



竜騎士07

ひぐらしのなく頃に 第一話～鬼隠し編～(上)

あらゆるメディアを席捲したゼロ年代の記念碑的一大ムーブメント、『ひぐらしのなく頃に』の最終形態は、今ここに「小説」として結晶する——。

衝撃の"新伝綺"最新章第二幕!



奈須きのこ

DDD2

加速する稀代の才能、奈須きのこが描き出す、石杖所在と迦遼海江の一度目の"悪魔払い"——! 物語は境界の"向こう側"へ!!

"世界最強"を目指す講談社BOX! ご声援、本当にありがとうございます!

売り切れの際には、お近くの書店にてご注文ください。



ひぐらしのなく頃に

07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa.
"WHEN THEY CRY."

KODANSHA BOX

竜騎士07

Illustration／ともひ

ひぐらしのなく頃に

第一話～鬼隠し編～(下)

「仲間ってのは隠し事なんかなしだろ？　そうだろ!?」